

# 岳 山

年 三 十 二 第

號 二 第



# 山 岳

第二十二年第二號

昭和四年三月發行

## 目 次

### 本 欄

遠山川西澤より西澤岳へ登る  
 日 本 の 高 山 蝶  
 白萩川池の谷溯行記  
 十二月の鹿島槍ヶ岳  
 御前岳、釋迦岳及酒吞童子山

黒 田 正 夫 . . . 一  
 渡 正 監 . . . 二六  
 長 谷 川 孝 一 . . . 五二  
 小 池 文 雄 . . . 六〇  
 竹 内 亮 . . . 七〇

### 圖 版

○天龍川下り(其一)○同上(其二)	. . . . .	對頁
○下粟にて兎岳を望む○西澤二又瀧	. . . . .	一八
○聖澤せりより惠那山を望む	. . . . .	一六
○ミヤマモンキテフ雄雌・タカネヒカゲ雄雌・クモマベニヒカゲ	. . . . .	二四
○ヒロイチモンヂ・イチモンヂ	. . . . .	三二
○ウラジロシジミ雄雌・フジミドリシジミ雌・ウスイロオナガシジミ・オナガシジミ雄雌・ムモンアカシジミ	. . . . .	三六
○ダイセンシジミ・ミドリシジミ雄雌・ウラキンシジミ・アイノミドリシジミ・メスアカミドリ	. . . . .	四〇

シジミ雄雌	四四
○同上裏面	四四
○スギタニルリシジミ・ルーミスシジミ・ウラグロシジミ・オホルリシジミ・ゴマシジミ・オホ	四八
ゴマシジミ	四八
○毛勝山上より劔・立山・龍王・浄土の諸山を望む	五六
○北より見たる冬の鹿島槍ヶ岳	六八
○止り岩の手前にて	六八

地 圖

○遠山川西澤見取圖(對四頁)	○白萩川池の谷見取圖(對五二頁)	○鹿島槍ヶ岳附近略圖(對六四頁)
○Salzburg附近略圖(對一〇〇頁)	○Upper Bavaria及Salzburg附近略圖(對一〇四頁)	

雜 錄

○春の乗鞍(黒田初子)○葛野川小金澤(吉田喜久治)○雪の早池峯(上關光三)○車上談山(八代進)○房總半島の山(高畑棟材)

自一八二  
至一三七

雜 報

○阿蘇山の爆發○靜商生徒愛鷹山中で凍死○舊象の齒牙發掘○雪の乗鞍岳遭難

自一二八  
至一三五

○會 員 通 信

會 報

○第四十一回小集會記事○會務報告○本會規則拔萃○投稿規定

自一三六  
至一三七

附 錄

○山岳第二十二年總目錄

○山岳自第一一年至第二十年總目錄

遠山川西澤より西澤岳へ登る

黒 田 正 夫

一、伊那の時又に来る（八月十二日）

秋葉街道が、伊那の野から遠州に越えやうとする奥まつた谷に、和田といふ町がある。この邊は、東海道にも、中央線にも遠く、飛驒や越中よりも却つて文明の交通には恵まれてゐない。この和田といふ町は街道筋であるだけ相當な繁榮をもつてはゐるものの、飯田よりはゐるには、小川路越をこさなくてはならず、或は天龍川を下つて平岡といふ村から遠山川を遡るか、それとも、東海道の濱松か豊橋から水窪に出て、七里の秋葉街道を歩まなければならぬ。

それだけ、又文明の風もしみにくい。天龍川にそつた時又では、帯の結び方、髪のかみ方まで、東京あたりの流行がそのまゝにみえたが、和田では盃蘭盆に、御詠歌の聲が町を満たして、二十世紀といふ考へさへ浮ばない。天龍川筋は言葉まで、遠州、三州の訛りに、その追従の風が感じられるが、遠山の谷にはいれば、信州の地の香がたゞよひ、安曇の山家と少しも異らない。

さういふ山の中に不便な交通をたよつてゆくために、夕方天龍川のほとりにつくやうにと、朝まだき、露のしつとりと武藏野に置いてゐる頃、東京をはなれた。長い雨で、今年は確な天気はないかと氣をくさしてゐた後なので、久振りの白い空に緑の野はどんなにうれしかつたらう。秩父の山は、いつも山に向つて旅するときと同じやうに、水々しい色彩をもつて行手に迎へてくれる。遠く桑畑や

緑林の彼方にみえる大山や富士さへ、時々した朝の氣持をうきたゝしてくれる。長いトンネルにすつかり山にはいつたやうに思はれて、隣に座つた若い姉弟の二人づれと山の話をしたり、笹子の餅をいつしよにたべたりしてゐるうちに、初鹿野に出て、なつかしい、甲州の盆地が、眼下に開けた。白峯は蒸す雲に見えかくれしてはゐるが、いつにかはらない姿を飽かず望むことが出来た。八ヶ岳の頭は雲に包まれてゐるが、夏草の美しい紅や紫の色は長坂あたりを上る頃著しく眼を惹いた。

諏訪を過ぎて、線路の傍を天龍が流れるやうになつてから、たゞ、その水と共に心は遠く遠山の奥に走る。餘りの長さに小川路越を捨て、天龍を下ることにして、この夜は時又に泊つた。一月おくれの盆が來るので町の若い男女は著物さかへて、三々五々と街に立話をし、宵の更るころ、盆踊の稽古にと觀音の前庭に集つていつた。うす暗い光に百人餘の輪はつくられて、單調な伊那節の下に靜かに輪は廻つていつた。いつ、つくるとも知らず。

## 二、和田に入る（八月十三日）

二業か三業か兼業のこゝの宿は舟がたたうといふに起き出でず、果物を朝飯にと、舟へかつぎこんだ。狭霧のうちを、もやひをといて、みよしは川下をむく。四挺の槳は、水面をたゝいて舟は滑り出す。暫くして兩岸には花崗岩が出て、川は淵をたゝへたり激流を奔らしたり、陽のまだ、ささない川の面は、すぐく動く。岩に激するやうな所では、へさきの船頭の筋肉は隆々として凝り、槳は水を壓して、舟は巧みに流れてゆく。淵になれば、四挺の槳はそろつて叱々といふ掛聲と共に、水をうつて進む。そんなこととしてものゝ一時間とはたないうちに、大島といふ村につく。櫓の瀧とかいふ瀬に今年の大水のため岩が出たとかいって、舟が通はない。すぐ、つぎ舟があると思つて乗つて來たが、こゝで聞けば夕方まで出ないといふ。仕方なく重い荷を背負つて川沿ひの道を歩き出す。小一里程下

つたとき岸に藤づるを積んでゐる一艘の舟を見つけて、頼んで乗せてもらふ。平岡の満島まではゆかず爲栗といふ、川の大きく彎曲した瀬で下ろされる。その部落の道端にある茶店でやつと朝飯にありつける。それから益々照りつける夏の陽の下にあへぎながら八貫に餘る背囊をかついで栗生瀬から遠山川について上る。たつた五里しかない和田までの道に日一杯かゝつてとても上村の大野の部落へはゆけず、その町の紺屋といふに泊ることにした。

早速案内の人夫を頼む。やつて來たのは六伊とかいふ男、先年兄の鶴平といつしよに一高の今村君についていったとかいつて、仲々山に詳しうなことをいふ。しかし、數日前、赤石の百間洞で暴れにあつて、いのちからく逃げて來たてなので、今はゆけないといつて、上村の順一、熊吉を推薦した。その上、西澤が悪い澤であることもしらず、雑作もないやうなことをいふので、こんなの案内されたらと斷はられてほつとした。

しかし、今日の荷で、少々閉口したので、下栗までの荷かつぎを宿に世話をたのんだところ、お盆で、翌日の午後まではどうしても得られず、半日はとう／＼お念佛と稱する御詠歌の合唱を、宿の二階から聞かされることになつた。

### 三、上村下栗に着く（八月十五日）

青空に陽は高い。山をこえて、こゝまでやつて來ながら、土俗のために、近づき得ないで、半日を宿に費やすとは情けないことだ。遂に我慢できなくなつて、荷をしょつて、自分たちだけで、下栗までゆかうと立ち上り、玄關に下りれば、男も丁度やつて來て、共にゆかうといふ。三人——こんどの旅は妻初子との二人旅である。——は陽盛りの秋葉街道を進んでいつた。街道は七年ほど前に新道が出来て、合戸峠を通らずに川沿ひに、平島、大島などの部落をぬけて、木澤の村にはいる。

加加森の頭も見えるであらう大島の部落をぬける頃は夕立雲が、陽をおほつて、遠山川の広い荒れた河原をわたる風と共に荷をかつぐ我々を喜ばしてくれた。漸く山がひの村にはいつて来た感じは深く、桑畑にたつ白壁の莊家とも見える家は歴へつけるやうな雨もよひの空の下に、鼠色の光をはなつてをつた。

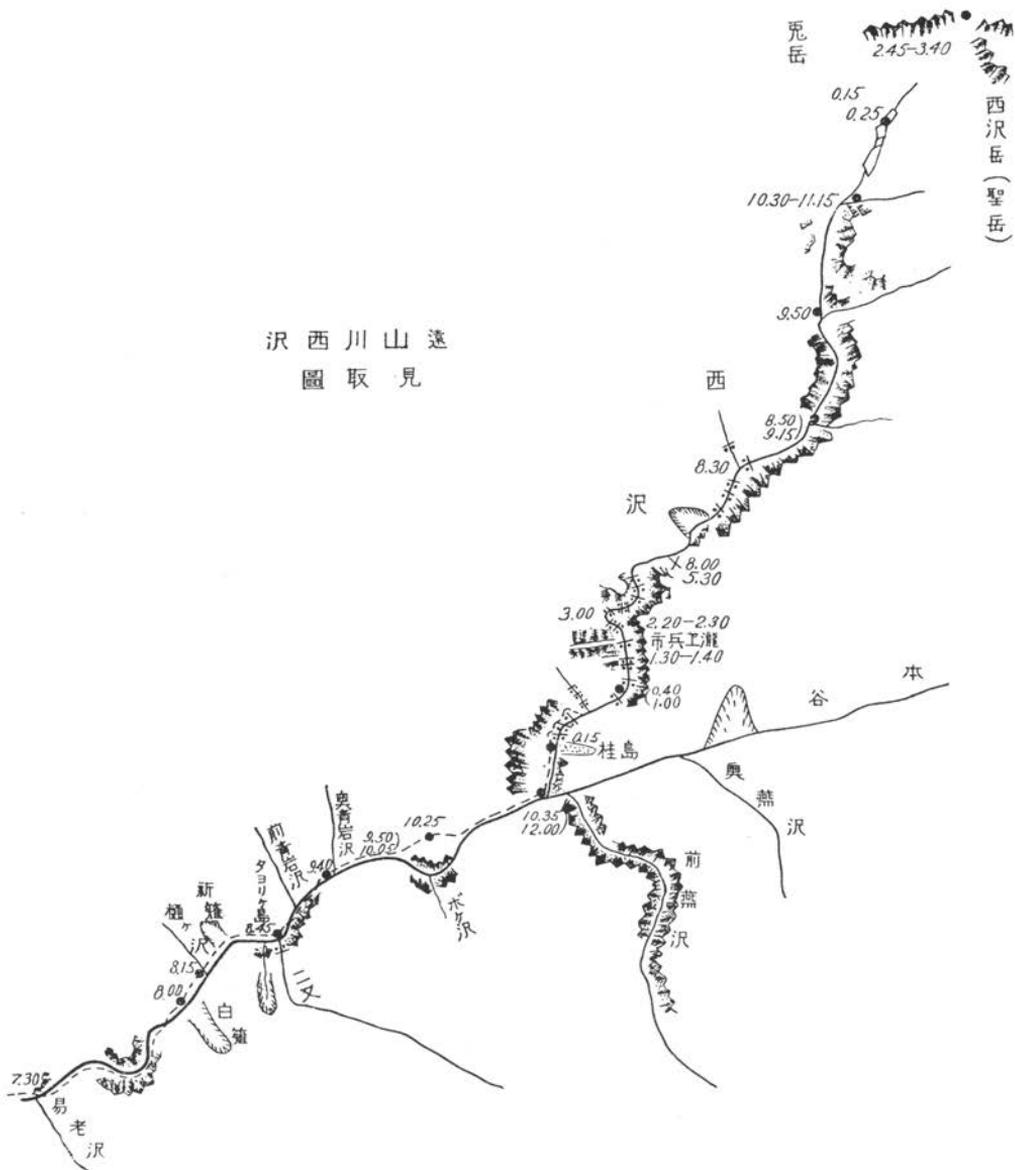
木澤の部落で街道をはなれてからは、桑、菖蒲などの畑をもつ尾根を、曲折して上つてゆく。中段の中根といふ部落にも、新盆のうちと見えて、山家らしく、はでな色どりの盆提灯をさげ、お供へを飾つた佛壇の前に多勢の人たちが集まつてゐた。盆と正月とのさゝやかな集まりが彼等のもつ唯一つの楽しみであると思ふと華やかな銀座の夜毎の有様など、遠く、遠くの國のやうな氣がする。

古生代の地層の特徴として、谷は深く侵蝕し、尾根から谷底に到る傾斜は拋物線状をなしてゐる。圓らかな尾根の頭から、次第に谷に向つて、傾斜を増し、遂に水際では絶壁にも近い急さとなつて、太陽は夏でもなか／＼水面までとゞきさうにもない。それだけ谷は幽邃となり、谷底を澤わたりするものにとつては喜ばしい氣持になる。之に反して、傾斜のあまりつかない拋物線の肩にあたるところには陽はまぶしいばかりに輝きわたつて、よく肥えた谷の森林と共にいかにもおっとりした氣持を起させる。そこらには、古くから人間はいりこんで、谷の奥のよく望めるところに、あちこちに家をかまへる。さうした古生代の谷を最よく偲ばすものに秩父の荒川がある。自分の山らしい山にはいつた最初の旅のせい、柄本は未だに非常な懐しさを以つて思出される。

あの深い眞の澤の谷や百合の光る尾根、夫から水々しい森林をたちこむる紫の山氣、その奥に紫紺に望まれる甲武信あたりの嶺は、いつ思つてもうれしい氣がする。そして、夫は古生代の地層のお蔭だと思ふ。そのためか、古生代の谷を旅しやうと思つたときは特に懐しさを感ずる。

野呂川の旅、安倍川、井川の旅、そこらには、尾根近くに人家はないが、いづれも北アルプスあた

遠山川西沢  
見取圖





りのかさ／＼した火山の中をうろつくのとは違つて、うつとりとなるまでに自分の故郷に歸つた氣がある。

この遠山の谷も同じやうな雰圍氣をもつてゐる。谷から三四百米も上つたところに點々として家がつたてをる。木澤の村から川に離れて急な尾根を登つて、初めてゆるやかにつたところに蕎麥や大豆などを植ゑて、その間に、居を卜してゐるのが、中根の部落で、之から横にからんで、いくつかの尾根や窪をまはつて、谷の奥へと進んでゆく。中根の部落を離れて、小さな尾根を一つまはれば、遠山川の谷は眼の前に開けて、その奥には蒸す白雲の間に三角に尖つた頂が、望めるではないか。雲は消えては生じ、一つ頭をかくすかとすれば他の頂をあらはしてゐた。夫等が兎や西澤岳の頂であり、陽の陰には黒くそ／＼りたつてゐる絶壁に雲が湧き出てゐると知つたとき、自分たちの胸はどんなにときめいたことであらう。遙々とやつて來たのも、唯あの頂に立たむがため、あの絶壁を攀ぢむがためである。夫が思ひがけもなく、夏草茂る尾根を巡ぐつてゐる道に突然とあらはれたではないか。

この尾根をまはつた裏に、一軒離れて家がたつてゐた。深い谷を下手にひかへながら、陽の光はまぶしいばかりにその前庭を照らしてゐた。母家の後ろには厩があつて、一頭の牛が、小さな犢と共に草をくつてゐた。そのまだ角も生えない犢の可愛さ、都よりの者とも思はず、無心に草の中に頭をつつこんで、まんまるい眼で、こちらをみてゐた。一人の娘は、甲斐々々しく世話をしてゐたが、自分たちの近づくのを知つて振り向いたその貌は、更に美しいものであつた。そのつや／＼した額や頬は、夏の陽の輝いた厩や、遠く谷の奥の山と共によく調和した對照を作り出してゐた。うす紫の山、褐色にくすんだ厩、白と黒との斑の牛、犢、まつさをな草、黄色い肌、一切は、夏の光のうちに生々と輝やいてゐた。しかも、その貌は自然と調和してゐるばかりでなく、貌自身としても、よくと、のつて、ポチチエリの女の如くひきしまり、ゴヤの如く生々としてゐた。

之を名残りとして陽は既に春さ始め、うね／＼と谷をからんで下粟にはいつたときには、暮色遠く兎のがれにたちこめてゐた。

下粟には此の邊での素封家、井戸端の家が有名で、そこに厄介になつて、案内のことから、泊りのことまで頼めときいてゐた。

案内の丸山熊吉の來たのは、まつくらになつてからのことであつた。西澤にはいつて兎か聖にとつきたいといへば、自分だけではどうすることもできない。屈強の大澤順一を頼んで二人ならいつてもみようといふ。熊吉は既に五十五の老人で、岩藪とりに岩壁はへずつてゐたが、年には勝てないといふ。晩くやつて來た順一は男盛りの獵師で、大柄な磊落な男であつた。この二人は遠山五ヶ村にひびいた強の者、西澤に向ふことに話をきめて、半道もある自分達の家にひきとつていつた。

### 遠山川を遡り、易老渡に泊る (八月十六日)

陽は、既に、古い井戸端の家の土間に影を抛げて、そこには、年老ひた主婦がまめ／＼しく、箒をもつてせつせとはいてゐた。庭先はすぐ谷へおろこむ傾斜となつて、向ひの加加森山との間には、朝靄が深い谷を埋めてゐた。

遙々と、長い日数をかけてやつとつけたこの山間のさ／＼やかな村は、今更でもなく懐しい氣がした。遠くバン、セックだなんて瑞西の山國の村の話がされて、氷河、岩峯、牧場、なぞと、憧憬の心に得難い夢の國のやうなものを描いてはみるが、この下粟の部落よりどれほどのことがあらう。それに旅行者で埋められてゐる現在のアルプスに、果して、こんな氣持のよい、山國の部落を發見し得るだらうか。藁さへ得がたい、こゝでは僅かに青草を刈つて、馬や牛に與へてゐる。今しも、朝草刈に出た子供が、自分の體の何倍かの草を、地の中はひきづらせながら歸つてくる。死んだ大島君が好きだつ

た神津牧場は、セガンチニ風な、バタ臭さが漂よつてゐるが、この遠山の村には微塵も、ヨーロッパの風は吹いてゐない。たゞ静かな日本の山國の朝があげてゆく。聖や兎の頂は、透きとほる朝空に水らしい玲瓏さを以つて聳え、夫より流れ落ちる遠山川の谷には陽の光がさしこまず、深く刻りこんでゐるため深洞たるその流の聲もこゝまでは響いてこず、唯牛の草をかみさる齒の音と、地を拂ふ箒の音のみが、のどかにきこえてゐるばかりであつた。

家の後にわづかに、にじみ出る泉に、口を嗽ぎ、うづ高く盛られた、のつべいに朝飯をすまして、順一、熊吉を待つてゐた。あさつては、西澤岳を越えさせるといふ約束の下に、悠々たる彼等の行動を急ぐこともなく、下粟を出たのは九時をまはつてゐた。そして、大野との間にある熊吉の家によつて、再び休み、その娘夫婦や孫たちに別れを告げて、たち出たのは十一時頃であつた。更に大野でも一軒の家に立寄つて盆に祀つてある佛壇の前で、お茶をもらつた。八町坂を下り、薙戸ナギドの澤を横ぎつて、一時間餘にして北股の落合につき出てゐる、細い鼻にたつことが出来た。愈々、人と別れて、遠山川には入れたのだ。北股にかけてある一本の丸木橋で、熊吉は、すべつて、荷を濡らして了つた。次の本澤を渡るところには、以前に伐木がはいつてゐた唯一の名残である、鐵索を用ゐた釣橋が朽ち果て、残つてゐたが、通るべくもなく、その下にわたした二本の丸木によつて、南岸に越えた。そこに開けてゐる河原には、雑草が生ひ茂つてゐたが、少しの空地をみつめて、小屋が組んであつた。こゝで、午飯をつかひ、その間に、さつき濡らした荷を乾かして、出掛けたのは二時であつた。直ぐ南岸をからむ道に上つた。

川は悪くなつて、ざれや、岩壁で、岸は歩けさうにもなく。泡だちさはぐ瀬や、岩壁に激する流れを下に瞰て、五十米程の處をからんでいつた。ざれの頭を過ぎるあたりには、處々崩れ落ちた跡はあつたが大體、伐木の時の徑が満足に残つてゐた。一時間程して、河原に下り、暫しゆけば、向ひ側に

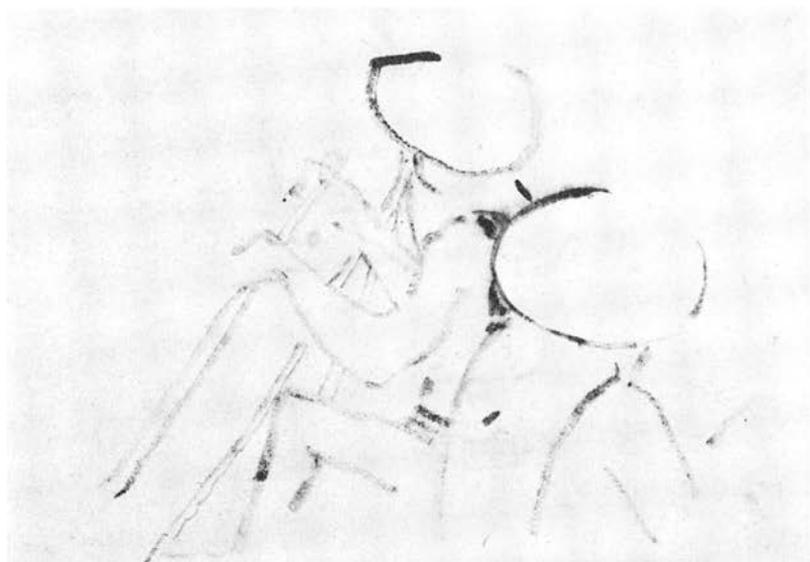
つき出た岩が流を押へ、その上には四五本の針葉樹が、目立つてゐた。地圖に出てゐる兎洞出合の獨立樹である。

川原あざみ（フジアザミ）が偉大な葉を礫河原に横たへてゐるのが目についた。そのとげのあるかたい葉は歩く足には痛い、見る眼には快よい。三尺にも達するやうな葉は南國の草木を偲ばすに充分である。ひきしまつたうす紅のさした蕾も刺をもつて、さぼてんを思はせる。朝の露はまだ乾ききらぬやうに、青空をうけて水々しい。谷間を歩くと太陽がどこにゐるか氣がつかない。既に時計は三時をまはつてゐた。

河原も狭まつて、地圖には橋によつてまはつてゐる岩も、水岸をからんで通りぬけられ、再びちよつと河原が出たが、直に、テラスに生えた藪にはいる。之は加加森山から出てゐる岩の多いシヨガツチ（所河内と宛字しておく）の澤の押出であつて、土地では、所河内の島といつてゐる。遠山川には押出に草木の茂つたテラスが多い。かういふところを「シマ」と呼んでゐる。この所河内の島も平らで、横断するのに數町はあらうと思はれる。澤は島の東端を流れてゐる。

その澤で石に腰かけて、後れた順一を待つてゐると淀んだ石の蔭の水溜に輪がぼつと一つ浮いた。つゞいて一つ、二つ、谷の奥から湧いてゐた夕立雲は、鼠色に空を覆つて、この澤の上にもしきりとゆきししてゐた。遂に夕立が来たのかと案じながら島をぬけると、河原に小屋がふいてあつた。木曾のお百草に賣るために採集した黄蘗の皮をしまつてある。夕立が本物ならこゝで寝やうとしばらく様子を見てゐると、河原の砂もぬらし切らないで青空が見え出した。

小屋から少し上つて、南岸に壁が出たために、北岸にうつつた。水は膝を越した。壁をこえて再び南岸に移り、易老渡の下で三度目に北岸にわたつた。既に五時半、その河原で寝ることにした。焚火の光が、あたりの林を照らし出したのも間もなくであつた。



(一 其) リ下川龍天



リよチッケス氏夫正田黒 (二 其) リ下川龍天



西澤を登る (八月十七日)

澤の旅をする人達が常にするやうに、川の水で顔を洗ひ、口を嗽いで、焚火をかこんで朝飯をたべた。太陽の光は、空に輝やき、尾根の背にある樹々を照し始めた。今日こそ西澤にはいるのだといふ望みが、それとは意識には上らないが、飯をくふ間にも、天幕たゝむ間にも、何となく動いて、することは生々としてゐた。

そして、枕した川原の石を見捨て、出かけたのは既に七時半であつた。

この易老渡でねたのも、實は易老澤の出合に、又徒渉しなくてはならない淵があつた爲であつた。それで、朝露をふんで出かけるといひたいところを、股をもぬらすやうな瀬を涉らなければならなかつた。

この邊では、易老渡、西澤渡などと、地圖によく渡といふ字を見てゐたが、順一のいふには、之は「どあひ」の略で、「どあひ」とは出合のことであるといふ。尤な解釋と思つたから、つけたしておく。つまり、渡とは現代語でいへば合流點、普通にいへば落合ひのことである。渡は假名と見る外ないやうだ。

さて、そんな講釋さゝながら、若木ののしかゝつた狭い川原を少しとんでゆくと、ぢきに川原は、岩につきて、北岸に移り、直に南岸に移り再び北岸にと、岩から岩に飛んでもどつた。そんなこととして十分も歩くと對岸に、薙が押し出してゐるのを見た。地圖にもあるもので白薙といつてゐる。

この邊、川原は廣くなり、川も穏やかに流れてゐる。朝日は漸く水の面にも落ちて來て、川原に生えてゐる桃、胡桃などの果樹にふさはしいのびやかな朝となつた。昔中學で習つた桃源の記が、思ひ浮んだ。狭い島國に、あんなのびやかな天地はとても求められない。澤は音をたて、岩をかみ、山

は峻しく迫つて谷を歴してゐる。この遠山川の流れとて、その例には、もれないが、少しの平らな川原や、桃といふ言葉の響が、何とはなしに、あの文章を思ひ起させたものであらう。黒木になれてゐる自分には、まだあをく、枝にかたくついてゐる胡桃の果が珍らしかつた。熊吉爺さんは、この邊は黒文字の木が多いから歸りには杖に切つて土産にやらうと何遍も繰返してゐた。

小さな小澤(樋ヶ澤)をわたると、又薙が出てゐた。新薙といふのださうだ。再び谷は迫つて来て、對岸から澤が落ち込んでゐた。それと二三十間離れて、三四十米の崖を瀑が落ちてゐた。二又の瀑といひ、前の澤と同じものが、二つ分れて落ちてゐるのだといつてゐたが、前のは地圖にある薙から出てゐるものであらう。

二又の瀑は、前燕澤はいつてみないから知らないが、遠山川のうちでは、一番立派なものではないかと思ふ。黒部の新越澤の瀑を思はせるものがある。あちらは、泡立つ碧潭に、赤い岩壁を飛び下りて落ちこんでゐるが、この瀑は、黒い崖の割目を、落下して、波たちさはぐ本流に合して、流れてゆく、あの華やかな、色彩に對してこゝには目につくものがない。しかしその地味な調子は、わざわざ南を慕つてやつて來た自分たちには、あの下廊下よりもしつくりさせるものがあつた。

それから川は急に一つうねつて、本流が瀧つ瀬をなして流れてゐた。その兩岸は勿論岩、夫を南岸を水に沿つて上つていつた。北岸にもどると、岸の岩から流れの中の石に順々に順一、初子、自分と飛び移つていつたところ、最後の熊吉爺さん、飛んだ拍子に煙草入れを腰からコツンと岩に落したか、そのまま激流はさらつて、かの瀧の方へと流していつた。熊吉爺さん夢中になつて叫ぶ。かはいさうにと、自分もおつかけてやつたが、何しろ、激流に洗はれてゐる岩壁をはつての仕事、桃太郎の桃にもあらで、ぼかり、ぼかりと浮さつ沈みつ流れていつて、追ひつく隙もなく、瀧の中にするりと吞まれて了つた。

「悲しいことだ。去年飛驒からわざわざとりよせたものなのに。」と順一が岩に腰かけてぶかり、ぶかりとよかす毎に、同じ愚痴を何遍こぼしたことか。

前奥の二つのアヲイヲ澤（順一は青石のなまりかといふ）をこえて、一つの鼻の下に來た。この鼻を出してゐる尾根を北コボケといひ、一八七五米の頭を南コボケといひ、夫から出てゐる澤をコボケ澤といふのださうだ。

その出合には、とても通れない、のんどがあつてそれをからむために、北コボケの鼻にのぼる。そこらに出てゐた白い藁をむしつて、熊吉はちゆう／＼と汁を吸つてゐた。鼻の上には御料林局の三角點の石があつた。

之をからみながら川に下りると、小石まじりに押出しの跡のやうに、川原が埋つてゐた。そこに左から澤が切りこんでゐた。西澤なのだ。

十時半ではあつたが、銳氣を養はうと、飯にした。お茶を沸し悠々と落ちついて、愈々西澤に足をいれたのは十二時であつた。

本澤に離れて、西澤にはいるやうに、澤の石は大きくなり、右岸には、崖が出て來た。もう徒渉は數へることは出來ない。膝にも近い深さを右にわたり左にわたり、澤の中を歩くともいへるやうに、よい足場をみつけては、進む。之からは四人とも未知な世界だ。たゞいけるところまでゆかう。最後になつてひつかへさなければならぬかもしれない。しかし、四人とも、登れさうな豫感もち、此所を空しく戻らうなどとは思ふものがない。

右の崖をまはつたところに、小さく礫や砂のたまつた平地があつて、桂の丸い葉が、きれいに覆つてゐた。「之が桂島だ。」と岩魚釣どもが、いひならはしてゐる場所なのであらう。地圖に示す崩れの押出であるらしいが、崩れは見えない。

つゞいて左側にも崖が出て来て、澤はしぼられて瀑となつて落ちてゐた。十米もあらうか。左にか  
らんで落口に出れば、つゞいてもう一つ。

谷は愈々迫つて、陽の光も通さない。左から、三つほど下から見える瀑をなして、小澤が落ちてゐ  
た。そこで右に曲ると、少しよくなつたが、正面の絶壁につきあたつて左に曲りなほしてからは、  
澤は瀑をつらねて落ちてゐた。

瀑のある澤では、笛吹川の西澤を思ひ出す。しかし、この西澤は、あんな、滑めはなく、あんな、  
静はなく、その美しさはあんな精練された感じはない。しかもあそこの、魚止、鎌倉淵などのやうな瀑  
は上つてゆくにつれ数へ切れなくなつたほど次から次へと出て来る。上には、すばらしい絶壁がつら  
なつてゐるのであらう。餘り水に洗はれてゐないやうな、大きな岩の塊が、澤を埋めてゐる。土のつ  
いたものもある。後の落石をはぢいて、火を散らした跡もある。今朝飛んだと思はれる角のかけたて  
で、くだけた粉の残つてゐるものもある。この春、カラコロムの氷河の本を讀んだ中に、「こゝに来て、  
始めて自然は生きてゐるのだと感じた。岩峯は絶え間なく火花を散らして活動してゐる。」といふやう  
なことが書いてあつた。段々上るにつれ夫をかすかながら想像し得る機會にあふ。勿論こゝらの山を  
氷河をもつた二萬尺以上の山と比較しやうとはしないが、自分が今までに歩いたいくらかの日本の谷  
や尾根では想像も許されなかつた。自然の活動の有様がみえる。

五つほどの瀑をへざり上つたところ前に、空を摩する岩壁がそりたつてゐた。内藏助澤の入口か  
ら望まれるものに匹敵される高さだ。二百米は超えていやう。文字通り直立して、全くの平面に横に  
も切りたてられてゐる。その右の縁も亦垂直に切り下げられて、その裏からまはつて、西澤は滄々と  
飛び下りてゐる。

「之が市兵衛瀑といふのであらう。上村の人間でも之より奥へは、はいったものがないのだ。昔市兵

衛といふ魚釣りが落ちて死んでからは、碌にこゝまではいつたものはない。春先きに、大蛇をこの瀑で見たものもある。」などと、順一は説明する。

「いや、この邊は一面に瀧だから、一面瀑といふのだ。どれがどれか知つてゐるものもないのだ。それで、何處といふことなくこゝらを一面瀑といふのだ」と熊吉爺さん、かけた齒をもぐぐさせながら抗議する。そして、歸るまで、何かにつけては一面瀑を主張してゐた。

瀑の左に、岩壁から剝がれた二十米ほどの岩塊が見える。夫れにとりついて、落口からんだらゆけさうだと、ざれ落ちてゐる急なざれをやつと登つて、岩にとつついて這ひ上ると、裏側は五米程ふぐれて、荷をもつてはとても下れない。前の地點まで戻つて、右側をからむ。藪にしがみつかながらやつとぬけられる。

岩壁の裏には、對ひ側にも岩壁が、切つたつてゐて、廊下をなしてゐる。その中を澤は二段の瀑となつて落ちて来る。からむべくもない。一つは、流木をみつつけて、やつと足がかりをつけて、へいずり上つた。次を上りきると、この荒れた澤には珍らしく淵が蒼く淀んでゐて、そこへ瀑が落ちこんでゐた。

ほんとに、一枚の岩でかこはれた四角な箱の一方が開いて、水が流れ出てゐるやうだ。どうしても澤のまゝは通れない。五米なり、十米なり、或はもつと高くからまなくてはならない。それでも自分は、どうかしてと、とつつき場を考へて夢中になつてゐると、右手の上から順一の聲で、「さあ、こつちへ来るだ。」と呼びかけられて、彼等が既にからむ道をさがしだしたのを知つた。いはれるまゝ、瀑をかこむ岩の上まで、小石を落しながら上つてゆくと、黒く朽ちてはゐるが、なたの痕が、一つ二つみえた。之が、以前順一が通つた跡なのさうだ。導かれるまゝ、五米程の高さをからんでゆく。午後の太陽は市兵衛瀑の絶壁にさへぎられて、澤は、まだ三時といふのに、薄暗い。蛇紋岩の青黴い

肌は苔や菌朶などに包まれて、すごい迄に暗い。深く切りこんだ、底には、泡立つ瀑や、蒼い淵が、ちら／＼と殴える。さまで高くはからんではゐないのに、垂直よりもゑぐりこんでゐるといひたいこの谷では、水を見ることが難かしい。曲りくねつて、幾千萬年かかつてやつと、刻り開いた自分の通路に激しい水は姿をかくして、自分だけの爲めに、力のあらん限り踊り狂つてゐる。少しからんでゐる間だけにも七つのつゞいた釜——笛吹川西澤の七釜などのやさしさではない。絶えず、落ちて来る落石と戦つて、造次にも、自分の道を作りつゝある——その上に三つの獨立した瀑が數へられた。

再び澤に戻つたのは既に四時。一休みして、石ころの亂雑とした谷を上つてゆく。大きな石英粉岩のまつかな塊りや、黒いグレイワックや、緑の蛇紋岩の破片をふみつゝ、急な傾斜を上つてゆく。兩側は少しひらけて、遠くの尾根がちよい／＼見えるやうになつた。夫でも時には新たに崩れて、岩の地盤があらはれ、大きな樹木がさかさにひつかかつてゐる跡などがあつた。落石は相變らず、心配なので、そろ／＼定めなくてはならない泊りの場所も仲々にみつからない。

空はいつの間にか夕ぐれの白さに變つて、ゆきさしてゐた少しの白雲もいつかおさまつてゐた。ふと行手に高い頭がみえる。よくみれば兎ではないか。「もうあんなに近づけたのだ。」といふ喜は一日の疲れを忘れさせた、そして、一步でも夫に近づきたい欲望のみが残る。

しかし、時は容赦なく進み五時もまはりかけたので、林に覆はれたひらの下の小さな砂地をみつけて泊ることにした。小さな天幕と、焚火とは別々に離れて用意された。

兎に角、西澤を半近く上つて來たのだと思へば、焚火の光も、喜びに満ち、さ／＼やかな夕食も、うれしく食べられた。

### 西澤岳をきはめる (八月十八日)

昨夕、日も暮れやうとする頃、峽に限られた狭い空に一抹の卷雲が夕陽に輝やいてゐるのを見た。今朝起きてみれば、その量は少し増したやうに感じられ、「天氣も長いことはないな。」といふ不吉な豫想が口をついて出た。しかし、重苦しい谷間にあつて、岩壁や急な尾根にばかり抑へつけられてゐる眼には、あの軽らかな、尾をひいた卷雲の姿は快よい。間もなく、朝日が昇つたらしく、かすかに黄色味を帯びて來た。そのうちに飯も出來て、八時には再び石をとんで上り出した。

ちよつとした鼻をまはると、崩れが左から出てをり、夫を越せば直ちに瀑。グレイワックの磐岩を破つて流れてゐるので、足懸があつて割に樂だ。三十分で三つの瀑を超えれば、左より小さな澤が流れこんでゐた。瀑をなして、一枚岩をすべり落ちて來る。谷が開けて、朝日が底までさしこみ、行手に再び兎の頭が望まれた。

もう少し行けば、澤のせりの具合もわかるだらう。夫を見て了ふまでは安心はならない。尙行手には、通りぬけられるか否かの不安が横たはつてゐる。こんな小さな澤を通るにさへ、最後の足場を見極はめるまでは、のんきにはなれないものを、地圖もない未知の大山脈に分け入つた人々のことを想像すれば心は徒にときめく。

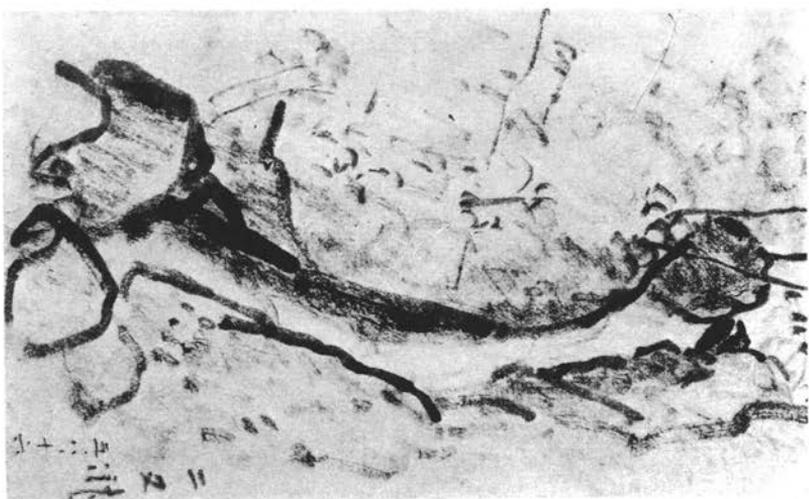
遂に出つくはした。急な澤が右からはいつたと思ふとすぐその上は兩岸共に百米を超す一枚の大岩壁、澤はその間に幅數米の道をつくつて、岩塊と共に押し出してゐる。底は既に九時といふのに、薄暗い。岩壁は青黴い蛇紋岩で、垂直に切り立つて、一枚の壁はどこまでつゞくのか見當もつかない。赤い硅岩の大きな岩は上に絶壁のあるのを想像させる。もしこの間に瀑があれば、どんなに小さくとも通れまい。下で寫生して、遅れていつた。二人の案内は荷を置いて、様子を見にいつたと、初子獨り、石に腰かけて、大岩壁を見上げてゐた。仲々に歸つてこない。澤は急になつてゐるので、振向けば、光、加加森の尾根が、黒く空を限つてゐるのが、低く望まれた。太陽に照らされて、黒木の梢

は、光り輝やいてゐる。しかし、鞍部には、井川の谷から雲が上つて来て、遠山の谷に越さうとして消えてゆく。遠く南の地平線近くにも、雲は層をなして押し寄せる準備をしてゐるやうだ。

永く待つてゐることは、悪場のあるのを示すかのやうに、二人の會話は、次第に不安の豫想を語り出す。乾果を一つ二つ口にして、雲行をぼかんと眺めては、今迄に出合つた悪場のことなどを話し合つてゐた。三十分もたつた頃、人夫の聲が、狭い岩壁の割目に反響して近づいて來た。吉か凶か。走つて近づいて一番に聞くことは、通れさうかの一言。よい返事を得て、直に荷を擔ぐ。不安だから岩壁が終つて上まで見極めのつくところまでいつてみたのだと順一は答へる。まだくあるぜと熊吉が和す。

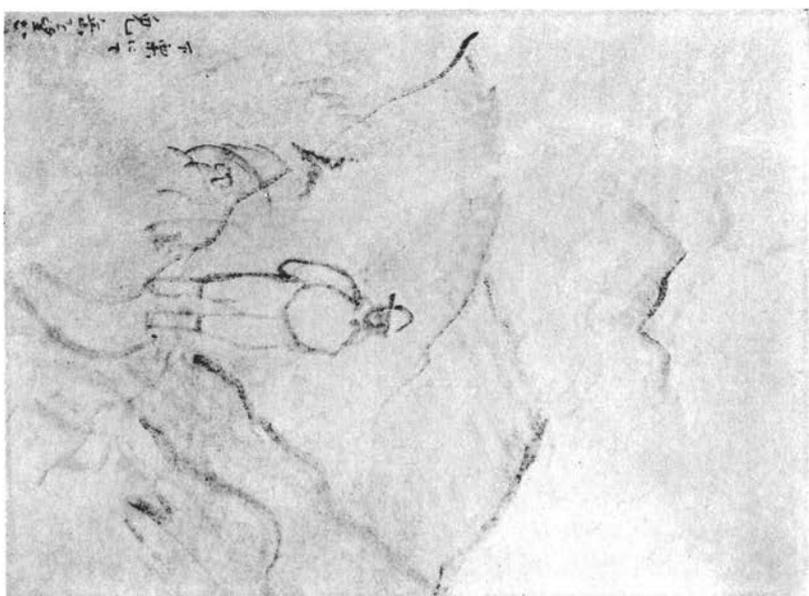
岩壁はうねりうねつて、三四町つゝいてゐたが瀑もなく、案じたよりも、易々と通りぬけることが出來た。之を出れば、正面には、西澤岳と兎岳との岩壁が、まともに望まれ、鞍部からは、それが急に澤に向つてなだれこんでゐる。之なら鞍部にぢかにとつつけさうぢやないかといへば、わしもさう思ふ、と順一が答へる。瀑こそないが、傾斜は益々急になつてゆく。地圖にある西澤岳の岩巢より出てゐる澤も落ち合つて來た。寫生で遅れたのをわざと待つてゐてくれたのでどうしたと問へば、この澤を上つてみるかね。と問ふ。まあ、鞍部にまつすぐにとつつかうではないか。と先づすゝむ。再び右より澤がはいつて來たところから、雪が谷を埋めてゐた。水も雪を出たらなくなりさうだといふので、飯をくふ。時に十時半。

落合を少し枝澤にはいつて水際に四人小さくかたまつて飯をくふ。落石の痕はまざく々と新らしい。そこにひつかかつてゐた徑四、五米もあらう岩をつき落さうと熊吉足をつっぱつて、ゆり始める。始は動きはしまいと見てをつたが、終にゆらぎ出したので、夫に伴ふ、周圍の落石を懼れて、つき落すのを止めるが、爺さん面白がつて仲々にやめやうともしない。ゆらくと岩角にのつてゆらく。しかし、この大きな岩に落ちられてはどんな反響が起るかしないと、遂に無理やりによさせた。もう



西澤二又 繪

黒田正夫氏スケッチより



下栗にて 兎岳を望む



少し安全なところなら、つき落したらさぞ面白いことであつたらう。

標悍な順一も、雪には慣れてゐないとみえて、下に大きくうつろがあいた雪溪に登らうとしない。少しは、北アルプスで雪溪を歩いてゐる自分は先にたつて、杖で一步一步確めながら進む。しかし、夫も石橋をたたく方かもしれない。自分達より重いやうな落石が、殆ど一面に雪の面を覆つてゐた。越中あたりのやうにまつ白であつたら、かんじきもない自分たちには、上ることが出来なかつたかもしれない。夫もいくつかのひゞ割に出遭つては、足がかりを切りつゝのりこえていったが、遂に下りることも出来ない大きな割目に到達して了つた。

右側も岩との間は既に深く融け去つて、とりつくことも出来ないもので、かなり峻しく、且行先の見極めもついてゐない左側の岩鼻に移るより仕方なかつた。グレイツツクの岩壁は、小さな鼻と凹みとをもつて、凹みは風化によつて崩れたざれに埋まつてはゐたが、上れないこともない。鼻をからむと裏側はどうなつてゐるのか、さつぱりわからず、それでも一つ二つをこしはこしたが三つ目によつて、遂に上れなく、その前の凹みをか雪の割目に下りることにした。ゑぐられた岩角から下の段まで、手をかり肩をかりて下れば、上には大きく口をあいた雪溪が、ひかへてゐる。そこで順一の脚下に雪が崩れてのつてをつた大きな石が轉がつて来るなど、この旅行で一番の大騒をしたことであつた。

上の雪溪は大したこともなく終つたが、その後はたゞかの崩壊した岩片のざれである。急峻な傾斜に、雪によつてのみ何年となく静かに置かれた石片は、不意の闯入者によつて、驚き騒ぎ、一步は必ず石なだれを起し、少し大きな石が、轉り出せば、土煙は濛々と起つて、かの雪路もみえなくなるばかりであつた。登るにつれ、傾斜は益々増し、急と思つてゐた雪も、手前の急坂にさえぎられて見えず、深い下の方の谷がその向ふにみえるのみであつた。

仰げば青空には、卷雲の繊細なる羽毛南より東に向つて飛び、周圍の岩峯は吹き上げられて來る霧

にかくれては出で、出でてはかくれ、いつ雲と岩との争闘は果つるともみえなかつた。一時はわれらが目ざす鞍部からさへ、向ふの谷の青空が見えなくなつた。しかし、遂に雲は戦ひに倦んだか。青空は擴がり、岩峯の嚴そかに屹立してゐるのが見えて來た。自分たちも、ざれに崩れ易ひ足場を求めつ、二時間も惡戦苦闘したあげく、向ふ側の樺の梢がみえ、遠くの尾根がみえ、遂に鞍部に立つことが出來た。

「うれしいな。うれしいな。」と子供のやうに喜び叫んだのは、初子獨りではあつたが、各々の胸も、同じやうな嬉しさに充たされたのであつた。老いた熊吉爺さんも、重い荷をしょつて、この惡場を上りつめた喜びは、同じく無邪氣なものだつた。後にも語つたが、彼の一生のうちでの記念すべき事件の一つであつたに違ひない。疲れをやすめる暇もなく、荷を置いて、すぐのこのこと歩き出して、そこから轉がつてゐた赤い石を積み上げて記念碑をつくりにかかつた。他の三人も一つづつその上に石を置いて、下の隅の方に名前をかきつけたのも、彼等二人の努力に對する感謝の言葉に外ならなかつた。金の文字をもつて、倫敦に刻りつけてやるといつたエヴレスの英國探險隊は果して約を守つたか否か知らないが、自分たちに對する彼等二人の誠は、二萬七千尺までテントをもちあげた西藏人の努力と感謝の意味に於て何の遜色をも感じない。

既に二時半を過ぎて、愈々出かけたのは三時をまわつてゐた。かの卷雲は天氣の心配をさせたが、現在の餘りの晴れ方に、明日一日位は大丈夫だらうと、今夜不要の米などを置いて西澤岳の向ふの水のあるところまでいつて泊ることにした。

十年振りとはいへ會遊の地である。北アルプスとちがつて、道もよくはならず、昔のまゝの面影をのこしてゐるのに喜んだ。赤石、大澤、兔の頭は春さかけた陽に輝やいて、靜かである。五時やつと頂上につけた。そこで望まれた富士。暮色に浮み出して、偉大である。見れば見る程、美しさが増す。

始めは餘りありふれた形に何の好奇心も惹かれなかつたが、鳳凰で見、間岳で望み、小河内で眺めたのなど、殊更の美しさであつた。

去年の暮、藤島君と三人で安倍峠を越したときの富士、いつか「麓」の村近くで月夜に見た姿など。皆西側の富士が印象に深い。或は富士は西面が一番きれいなものかもしれない。それとも、よい物見臺のあるせいか。順一、熊吉は先に泊りの用意に下ろし、後に二人残つて飽かず眺めてゐた。

安倍峠と同じ旅であつた。井川の田代から梅ヶ島のいでゆにゆかうと、三尺峠をこすときのこと、冬の午後の陽が黄色く斜めにさした頃、峠をこえやうとして振りかへると、近くの冬枯した尾根の上になまつしろく光つた聖の姿を望んだ。その思出は二人の胸に新らしく湧きかへつてゐた。木暮さんに、とつつけさうにもないといはれた西澤を通つて、あんなに神々しく見えた聖の頂にやつて来たんだといふ喜びは足下に擴つて来る雲の海の如く、自分たちの氣持の中に靜かに浸みわたつていつた。南のざれの斜面を下りきつて尾根の始まらうとする水の出でゐるそばに、石をつみかさねて寢床をつくつて、四人安心と疲れとにくつすり寝こんで了つた。たゞ夜中に餘りに天幕をはためく風に索をしめなほさうと起き出づれば、半月中空に懸つて、雲のゆきさ、しきりと速かつた。

### 聖平の小屋に逃げこむ (八月十九日)

三千米近くの野營の寒さに、早く眼覚める。偃松の焚火も、烈風にあほられて、仲々に燃え上らな。煙は渦をまいて小さな窪みをふきまはす。寒さは尙殿しい。赤々と燃え上るのを、眼に涙ためて待つ。やつと上つた焰は、曉の光に尙輝やかしく、懐しい。

白らんで來た四方の地平線に近い空には、層積雲重苦しく沈滞してゐる。濁つた白鼠色の幾重とな。く重なり合つてゐる雲は、暴れの近いのを示してゐる。尾根を越す陣風は陽が出やうとするのに仲々

おさまらない。

どうしても暴れは避け難い。百間洞でなやまされるより——そこまでゆかないうちに、びしよぬれになるかもしれない——聖平の小屋まで一旦下らうといふことにして、昨夕の残りの飯を順一に食はして、米を取りにやり、三人は後かたづけして下ることにした。陽は雲の中に上つたのであらう、すつかり明るくなつて来た。重苦しかった雲は崩れ始め、大無間の頭をかすめて、易老の尾根に鈍重な姿をして押し寄せて来る。西方の空には、色々の無氣味な形の雲が刻々に變化してゆく。光の頭の上に虹がかゝつた。太陽に對する角度が、ふにおちない。

熊吉さん相手に、かすかな清水で朝餉をつくり、天幕をたゝみなどしてゐると、時計は九時をまはつて了つた。富士にはまだ笠がかゝつてゐないといひあつてゐるうちに、富士川を覆つてゐた雲の中に没し去つた。太陽は高く上り、小さな暈がかゝつた。しかも歪んでゐる。全く天氣は駄目だ。

昨日の愉快な緊張にひさかへて天氣にせかれる氣はしながら、遅々として運ばない。遠くの山は僅かに惠那が望めるのみだつた。西澤にも雲がいりこんで、その頭も遂につゝまれて了つた。順一が歸つてこやしなやかと幾度となく顧みつゝ下つていつた。聖澤の中にはいつた時には、遂にぼつりと雨滴が澤の石に痕をつけ始めた。何年前か前、八月の輝やかしい夕方この澤に下りて来たことがあつた。樺の白い幹や淺緑の梢、甘草の黄、なでしこの赤、烏甲の柴など色鮮やかだつた記憶は、雨もよひの今朝全く裏切られた。その後荒れたのであらうか、亂雑にさへみえるこの澤は、たゞ望みもなく、どんな小屋かといふ、好奇心に近い心をもつて、下つてゆくのみであつた。上河内岳の方の落合に近い平らに、枯木、伐木の痕の中に立つてゐた。唐檜の皮をもつて葺いた片屋根の小さなものであつた。北アルプスのみを旅してゐた人なら、泊らうとは思へないであらう。その下に腰を下ろし、焚火の材料が集つた頃には、本降りとなつた。順一も間もなく歸りついて、焚火は燃え上り、飯のむれたのは

十二時であつた。

屋根は漏るので、小屋の中に天幕を張り、明日を待つことにした。半日は、井川の奥、野呂川の周圍の山々の話をしてやつたり、狩の話、岩蕈取りの話をして過ぎて過した。山雨は黒木の林の上を過ぎてゆく。夜中には風に倒さるゝ木の響が物すごく聞えて居た。

遠山川へ下る (八月二十日)

楽しみにした夜明も雨の音に伴はれた。上河内の黒い尾根には縞をなして、雨が注いでゐる。北股をと思つた歸途も、この雨では思ひ切るより仕方がなかつた。出掛けるまで毎日々々氣にしては天氣圖を見てゐたが、此の夏になつてからといふもの、南洋から勢よく押し寄せて來た颯風は、いつも、金華山沖に根づよく坐つてゐる高氣壓に押しもどされて、地降りとなつてゐた。今度のも夫に違ひない。三日前にあらはれた卷雲では暴風雨と思つたのに、大した暴れ方もしないで、いつやむともなく降り出したのは、きつと又長雨になるに違ひない。こゝに閉ぢこめられるより、澤に出水のある前に歸つて了はうと、雨の中を下ることにきめた。

さうやつて、天氣の様子を話し合つたり、最後の決断をつけるまでに、相當の時間をとつて、四人の姿が、黒木の林の中にはいつていつたのは九時半、雨は風をまぢへて木立の梢をたゞいてゐた。遠山の谷へ向つて尾根をこせば、がれの上邊とおぼしく、木立もなく、下から吹き上げられる雲に谷は白く埋つて、何も見えない。たゞ足下の草原は、今を盛りと花をつけてゐる。雨に打たれて、色はさえ、水々しい葉の間に爛漫と咲き誇つてゐる。そこを通り過ぎる霧のために、少し離れればかすみ去り、ほのかに薄紅や紫の色がたゞよつてゐた。

本谷と西澤との間に出た尾根を下らうとしてゐるのだ。そのつけ根は「ひら」で急なため、慎重に

下りてゆく。順一は前に測量隊を案内し、その後も一度獵に來たとき、つけておいたなたの痕を漸く見あて、進む。地圖の通り急になり、緩やかになり、二三四米の三角點の切明けもあり、窪みもあり、雲の中とはいへ、安心して下りられた。大きな黒木の幹は、臺々として雲の中に消え去るが如く、軟かき苔は雨をふくんで快よい足あたりをする。

一時十五分に西澤渡に下りる。澤の音を高くからさいたり、まつしろにたぎりたつてゐる前燕澤の瀑を眺めて心配して來た谷の水も、思つた程でもなかつたが、上つたときに比しては恐ろしいまでに増し、濁つて岩をかむでゐた。

岩蔭に雨をよけて飯をいそいですませば、順一決然として、下れるところまで下つてみようと熊吉の出水を恐れるのもかまはず、下流に向つた。數日前の陽の光はなく、たゞ水と競争する如く、先を急いで河原を下る。

二ノ又の徒涉を避けて一つの鼻をからめば、タヨリガ島といふ押出に出る。その縁起の昔話を聞くひまもなく、新薙、樋ヶ澤を過ぎて第一回の徒涉をする。滔々と流れる水は腰を没し、脚を拂はうとする。初子はたゞ順一を信頼して、その雄々しい體格と力強い腕に一身の安全を托して、手をひかれながら渡る。休む暇もなく易老渡の徒涉に向ふ。登りですら、股に達したので、能否を案じてゐたが、危険もなく越せた。先日の夜營地に残された山の神を祀つた紙の御幣も雨にうたれて見る影もなく、四人は一言の言葉もなく、力を盡して下つた。

所河内の上の徒涉は、順一の最案じて來たものだけあつて、川幅も前日に倍加し、先に瀬ぶみした順一を見れば、胸までぬらしてゐる。つゞいて熊吉も渡り、順一は空身で迎へ戻り、熊吉は、五間にも達する若木を切つて、川中に流して支へてくれた。初子は乳も沈ませて、順一と、木とに漸く支へられて渡る。自分も、危く流されかけて越す。こゝは、鍋割りといつて遠山川での有名な徒涉地なの

である。

雨衣をもつてゐない順一は、唇を青くしてふるへてゐる。しかし所河内の小屋は近くである。天井や壁に積み重ねられた黄色いキハダの皮の束の間に漸やく、休めるだけの場所を都合して作り出した。濡れ通つた衣服をぬいで、束の上にかけてたり、天井——といつても、頭のつかへるばかりの葺き上げだが——につるしたりして一通り乾かす用意をしてふとやつとのことで一日の緊張から解放されて、焚火の暖みは各々の體の中に浸みこんでいつた。

木立の中を下る間も、たゞ澤の水量を案じ、休むこともなく、一氣に西澤渡に急ぎ、西澤渡からは、いつも呑氣な順一も眞劍の色をみせて、つゞく初子との間を常に一町も離して進んだ。夫に心せかるゝ初子は破れた足袋の間からはみ出した小指を幾度となく石にあてゝ、白足袋に血もにぢみ出し、時に水の中を歩いては冷やしていつた位であつた。話し好きの熊吉も今日は話しかけることもなく、まばらな齒をもぐぐさせてついでくるばかりであつた。夫でもゆきの約束のやうに、いそがしいうちを黒文字切つて杖にとくれたが、夜、暗いうちに焚火にくべられたのはその好意に對して氣の毒であつた。

さうした緊張に、幾度かの胸をも越す徒渉に、今は解放されて、火を圍んで、その思出を語るのみであつた。最後の泊りといふので持つてゐる總ての菜を食へ盡して、五日の旅にあつた色々な出来事を互に喜に満ちて語り合ひ、夜の更けてゆくのも知らなかつた。

### 上村へ歸る (八月二十一日)

起き出でも尙雨は河原の石をたゞいてをつた。村に歸れると思へば、天氣の心配などもなく、九時に小屋をいで、前の日の徑を下つた。しかし、こんな所もあつたかと思へるほど、記憶の不確かさ

に驚いた。上りのやうに輝やかしい太陽の光もなく、雨のそぼ降る景色は、富士あざみの雄大な形をも却つて痛々しく見せてゐた。兎洞の出合から、高くからみ出した道を歩いてゐれば、下の方に跳り狂ふ川の水は、連日の雨に増水もしたのであらう、白い泡をたて、咆哮してをつた。

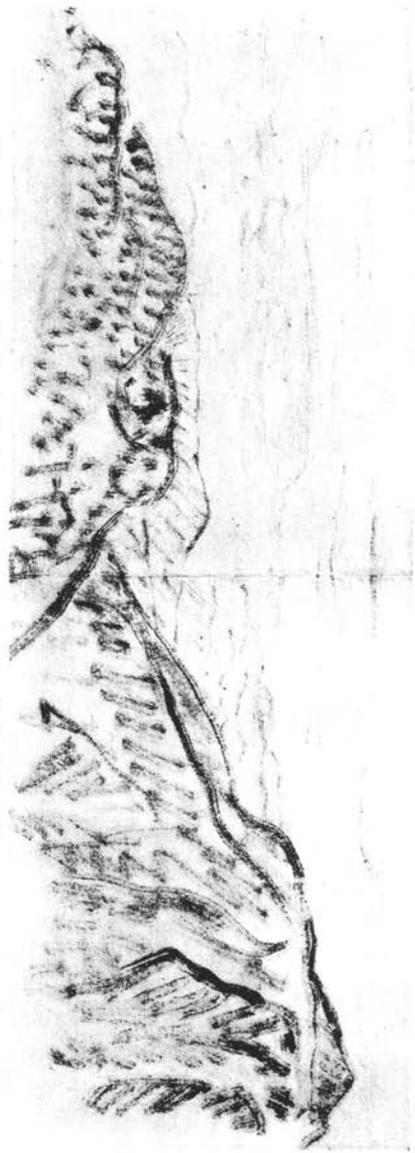
十一時頃北又渡の上の小屋で辨當をつかひ、出合にゆけば、最初の失敗の跡である丸木橋も流されずに架かつてはをつたが、徒渉して越し八町坂にかゝる。

「蛭に吸はれた」と、ふくれ上つた暗紫色の太いぬら／＼した生物をみせられて、自分の脚をさがすと、甲掛の上にもぶらさがつてゐた。半分ほどふくれて、出来そこなひの瓜のやうな形したものが強く吸ひついて、離れない。その後も數匹もぎとつた。

この頃から雨は上り出し、大野の村では、家々から珍らしさうに、四人の姿を眺めてゐた。

途中の熊吉の家につく、請ぜらるゝまゝ、爐端にあがつて、唐黍を御馳走になれば、いつのまにか仕度をとつて、浴衣がけのぢいさん、四つになる孫娘を膝にのせて坐つてゐた、あまへるがまゝにあまへさし、山でやつた羊羹の一切れを二つにさいて、姉とその娘とに土産に分けてゐる。姉の方は六つで、獨りで、杏をちぎつて来て食べてゐる。壘もない一間の家には、先月亡くなつた熊吉の父親の位牌に盃蘭盆の供が、飾つてある。十何年の間、老いた父親と、獨娘と三人でこの家に暮して來た熊吉、今は養子をして、二人の孫娘を相手にうれしさうである。衣食は不自由であつても野心のない彼等には、この遠山の谷も離れるには及ばないのであらう。

尙日暮には時間があつたので、上町まで下りることにして分れる。僅か五日の旅ではあるが、その間には互に生命までを托しあつた間柄、別れるに感慨のないことがあらうか。殊に老いた熊吉と再び無事にあふことがあらうか。純朴な彼等も、悲しいことだと繰返して、下粟まで送つて來てくれた。そこで二人つきりとなり、小さな峠を越して上町へと下る。



黒田正夫氏ケツチヨリ

池澤ヨリ那志山を望む



夕暮の水々しい光は、遠山の谷に充ちて、兎のがれも今は白雲につままれて見え、夕焼した西の雲には二羽の鳥の影が、黒々と浮んで見えてゐた。峠を越えれば、上村の谷をこして、小川路越連脈が、金色に輝やいた西の空をかぎつてをる。激しい山の旅を終えて、静かな山村の谷に下つてゆくのはほんとにうれしいことである。

上町の宿、油屋も氣持よく、小川路越の朝の上りも、久振の青空の下にすが／＼して苦にもならずに重い荷をかつき上げた。千馬澤の茶店は峠に似つかはしく、旅の人たちと広い土間に腰かけて、芝居に見らるゝやうな情景の下に、辨當をつかつた。

知久で乗合自動車を待つに餘りの時間があるので、知久平から毛賀にと電車まで歩いた。知久平の天龍にかゝる水神橋こそ、この旅の最後を飾るうれしい記憶であつた。

夏の陽は廣い河原に溢れるまでに輝やき渡つて、そよとの風さへない。黒く塗つた木橋は、中ノ島を足溜りとして兩岸にかけ渡されてある。その知久平寄の岸には、岩が出て、流れは橋杭をまわつて淀んでをる。二十人ばかりの男の子、女の子が、まつ裸で、水に戯れてをる。無邪氣に、泳ぐものは泳ぎ、岩をはねまわるものは、はね、嬉々として、永久の夏の國の子の如く遊んでをつた。太陽はあまねく、岩、水、空と同じく、子供達をも照してをつた。ドニはたゞフランスで、夢みたのみではなく、東の國日本にも彼の夢は永久につゞくであらう。

# 日本の高山蝶

渡 正 監

高山植物に關する研究は殆ど極點に達したと云はれるまでに進んだ。然し高山蝶について今まで纏つた記事を見た事がない。私は四五年前迄は毎年夏になるとアルプスの峯を歩いた。私が山岳を跋渉したのは一つには幽谷に飛び交ふ蝶類の可憐の姿に憧憬をたためてあるとも云へる。その山に旅をする間私はいつも捕蟲網と三角紙を離した事がなかつた。そしてその目標はいつも峯の雪が解けて谷の桂が緑の裝をつける頃に現はれる高山蝶であつた。暫く「山岳」の紙上を借りて山岳に附物の高山蝶の話をする事を許されたい。

## 一、序 説

登山は近年の流行の一となつた。此の山登りは始めは唯峯ばかり漁つてゐた所謂ビークハンティングの時代であつたが、だんぐに人はビークハンターでは満足しなくなつて來た。「私はあの山に登つた」と云ふ誇りだけでは純眞なマウンテニアの心を満足しないやうになつた。反つて荒怪で幽玄な峽谷を漁る傾向が起つて來たのである。

山は唯高いと云ふだけでは之に親しみを持つ崇高な氣持にはなれない。其處に森林あり、峽谷あり、岩あり、水あつて山岳の美しさは愈々増して來る。溪谷美を賞揚する人の現れたのは此の爲である。しかし私は其れに加へて生物界の美しさを其處に見たいのである。滴るやうな森林美を背景として仙女のやうなアサギマダラが彷徨ふ態は山に旅する誰しもが恍惚とする所である。げにや蝶類中の最美の南米産 *Morpho menelaus* に付ては探險家の心を感動せしめた所は深いものである。瑞西の昆

蟲學者 H. Fruhstorfer はその目の覺めるやうな金屬光澤のある大形青藍色の様姿に痛く感動して、Seitz's Microlepidoptera of the World 中に記載してゐる。

The author of this lines had the pleasure of himself observing morpho in the woods of St. Catharina, but especially lonely side valley of Capivary River, which at that time was still little explored by white men. A crystal waterfall sprinkled at the root of forest giants, providing a point of attraction for butterflies of all kinds. Just as wild animals tread down regular tracks in order to reach water, so the Morphids assembled here daily, following up any chance clearing to get to the cascade, as if they came to see cooling refreshment among the softly rustling arches of the tall bamboos, which are shaden and bedewed by the foaming water. They did not come crowd but singly, floating along quietly, and how patiently one wated, until after some minutes of silent expectation a second iridescent form appeared, to be captured with the almost unfailing certainty of long practise as soon as it ventured within reach of net. The magic impression which the morphids make on the European traveller seems to be shared by the natives.

人跡未到のアマゾン流域地方の、原始林中の瀑布に集る絶美のモルフオ蝶が如何に詩的な美しさを持つてゐることであるか、又その採集家が森林と溪谷の自然とそれと離す事の出来ない生物とを如何に其の心の伴侶としてゐるかゞわかる。

私は此の意味で、山に登る人に純な、生き生きした自然の最も美しい一面を見て頂き度いと思ふ。世故と理性と功名心の激しい都會の渦巻の中に、本當の人間らしい生き方をする者は、唯だ純で清新な自然と親しむ事の出来る人であると思ふ。此の趣味は今でこそ我國の人々から餘りに持てはやされないが、私は近い將來に必ず相當の普及を見るものと考へる。それは英米の諸國で我國の講談雜誌風

に市内に賣捌かれる程度の小冊子で蝶蛾の説明本が相當に澤山ある事で解る。文化の向上は趣味の高尙なるを促す。我國でも將來斯る程度の趣味の深い高いものが普及する事を期待せざるを得ぬ。

## 二、高山蝶の意義

高山蝶の觀念は其土地に從て一様ではない。又一定する筈がない。日本の代表的高山蝶であるクモマツマキテフも、オホイチモンデも、さてはタカネキマダラセセリも、歐洲へ行けば平地に普通に産するものと同様である。尤も亞種の關係があつて全然同一性を有するものと見られない。甚しい例はミヤマモンキテフであつて、北極地方に於ては極めて普通に且皮肉にも海岸地方に産する。

これは必ずしも高山蝶に限つたわけではなく、高山植物に付てチシマギキヤウ其他、千島方面の海濱に産する植物と、日本アルプスの海拔一萬尺附近の植物とが一致する事と符節を合せる事である。吾々が北アルプス乃至南アルプスの所謂尾根傳ひの天幕旅行をする時、巔の岩間に最も惱まざるる偃松は同地方では海拔八千尺以上の高地にのみ産するが、千島方面では海濱に多く産する所である。臺灣の阿里山、新高山方面の海拔八千尺附近の檜林は本島吉野方面の平地に多い所である。

斯くの如く高山蝶の觀念は相對的であるが、少くも日本に於ける高山蝶とは何であるかの觀念は一定することが出来る。自分が茲に高山蝶と觀念する處のものとは之である。此の意味に於ける高山蝶の中には所謂高山に限つて産するものと、平地を好まないで山地を好む蝶と、高山にも産するが平地にも普通に居るものとの三様に分けることが出来る。

## 三、高山地方に現れる蝶類

此の群に屬するものは本島中部及北海道の高山に限つて産するものである。山岳の植物相が喬木帯

から灌木帯に入らんとする海拔八千尺から以上、草本帯高地即ち荒怪無人の岩石と奔流と萬年雪との境域に於ける唯一の女性的存在として、可憐な姿を見せるものである。

一、アカボシウスバシロテフ (*Parnassius bremeri hakutozana.*)

朝鮮白頭山に産するもの。既に五六年前仁禮景雄氏に依て動物學雜誌に掲載されてゐたが(大正八年八月號動物學雜誌三七〇號)最近松村博士の發表もある(*Insecta Matsumurana Vol. I. pp. 162.*)。高山蝶の一として見る事が出来るであらう。尤も私は其生態を知らない。

二、オホアカボシウスバシロテフ (*Parnassius nomion chosonis Mats.*)

之れも前種同様後翅に紅色の大形紋があつて黒の輪劃の付いてゐる所は美麗な種であるが、産地は矢張り朝鮮白頭山。前掲の記事に併せて發表されてある。

三、ウスバキテフ (*Parnassius eversmanni daisetsuana Mats.*)

北海道の大雪山に産するもので、極く最近即ち大正十五年夏始めて採集された所である(*Insecta Matsumurana Vol. I. No. 2 Oct. 1926* 所載)。北海道の高山蝶として興味深いものである。松村博士は次の如く記載してゐる。

「本種は大正十五年七月十八日大雪山中の烏帽子岳、小泉岳、白雲岳(約千九百米の高さ)にて七頭の雄を、同じく八月八日雌を一頭捕獲せり。

本種は從來アムール及トランスバイカル地方にのみ知られたる所にして北海道に於て採集せられたるは興味ある所とす。恐らく此の生活力弱き種類は中間の朝鮮、支那、樺太に於ては絶滅し唯北海道の最高山に於てのみ其種族を存続したるものと觀察さる。本種は暴風の目を除いては容易に捕獲し得るが故に採集者に依て絶滅せしめらるるの虞あり。高山蝶は單に北海道に止らず、我國各地に於て之を保護する必要あるを痛感するなり(原文英文)。」

四、*ミヤマシロテフ* (*Aporia hippia japonica Mats.*)  
 尙ほ本年夏札幌にて松村博士と會見した節、最近本種の採集禁止せられた旨を聞いた。

日本の高山蝶の一として有名な種類である。唯北海道には産しないので、本州の高山に限つて産する所は前のウスバキテフと正反對で面白い。一番多く産するのは何と云つても上高地である。徳本峠を下りて梓川の清流を見る邊りに仙女のやうにフワリ〜と飛ぶ姿は全く獨特である。同じシロテフ科ではありながら、モンシロテフ、スデグロテフ等とは全く違ふ飛ひ方をするから一見して區別する事が出来る。翅も大きく稍々透明で、殊に雌は半ば透明である。又同じアボリアの屬であつてもエゾシロテフよりは小さく中室先端が黒く、裏面に黄緑色の斑紋があつて明に區別される。

最初にミヤマシロテフの採れたのは確か本會會員の高野應藏氏が八ヶ岳で捕獲した時であらう。其後上高地に多數産する事が知れ、今では主たる産地は上高地である。

この蝶を自分は全く變つた所で採集してゐる。それは秩父山彙中の信州梓山の高原である。大正五年の夏、秩父の十文字峠を越えて信州梓山に一夜を送つた。梓山は海拔五千尺、高さに於て上高地と變りなく郭公の鳴く落葉松の大木の森に一面の草原を靜かに歩く心地は他のどこにも味へない所であつた。上高地のやうな嚴肅な氣分ではなく日光湯本のやうに山湖の趣でもない。翌朝その高原に飛翔する數頭のミヤマシロテフを見て容易く網にする事が出来た。

五、*クモマツマキテフ* (*Euchloe cardamines L.*)

ツマキテフに似て前翅の鉤形になつたものがなく、且つ橙色の部分が廣いので一見區別が出来る。歐洲には平地に普通の種類で其他小アジャ、北部アジャ及支那の一部にも産するが、日本では本州中部の一萬尺級の高山地帯でなければ見る事が出来ぬ。樺太、北海道、朝鮮に全く見ない所に高山蝶たるの特色が現れてゐる。

本州では南北アルプスに産する。最初は中村清太郎氏が針ノ木の棒小屋乗越に採集されてから、赤石山にも採集され、現在では矢張り上高地殊に槍ヶ岳に多く見る。五六月乃至七八月常に数は極く少ないが發見される、所は丁度雪溪近く八月頃山櫻の満開を見るのと同様である。

六、ミヤマモンキテフ (*Colias palaeno asias* Fruhs.)

此蝶はロシア及シベリヤの平原、殊に北極地方に最も普通に産するが、我國では前二種と同様樺太、北海道、朝鮮に全く見ずして唯日本アルプス及淺間山に産する。

一般にコリアス・パレノは黒帯が狭い形が多いのであるが、我國の殊に淺間山に産するものは北極地方のものと極めて類似して黒帯が甚しく廣く全翅の三分の一以上に達する。唯自分が北アルプスの薬師岳附近太郎兵衛平(海拔七千五百尺)で採集したものは翅も圓味を帯び帯も狭く稍々露西亞地方のものと型を近くしてゐる。よつか兩者の比較研究を發表し度いと思つてゐる譯である。

七、クモマベニヒカゲ (*Erebia ligea takanonis* Mats.)

殆ど日本アルプス特有のものである。新領土樺太及朝鮮に變種が居るが、内地では本州中部の高山地方にのみ産する所である。

此蝶の高山蝶としての存在は獨り日本にのみ止らない、世界的の高山蝶である。即ちその裏面にある純白色の所謂アルプスの斑紋は、歐洲に於ける高山蝶として有名になつた所である。私は穂高岳の麓、唐澤の附近で多數の本種の標本を集めた。喬木帯が終つて草深い荒涼たる河原に美麗な赤褐色の小蝶を認めた。そしてネットの中に暗赤褐の裏面に目の覺めるやうな純白色の斑紋を見て雀躍した事がある。

八、タカネヒカゲ (*Oeneis jutta*.)

凡そ日本に於ける高山蝶の名のある數多くの蝶の内、タカネヒカゲ程高山蝶の名に背かぬものは

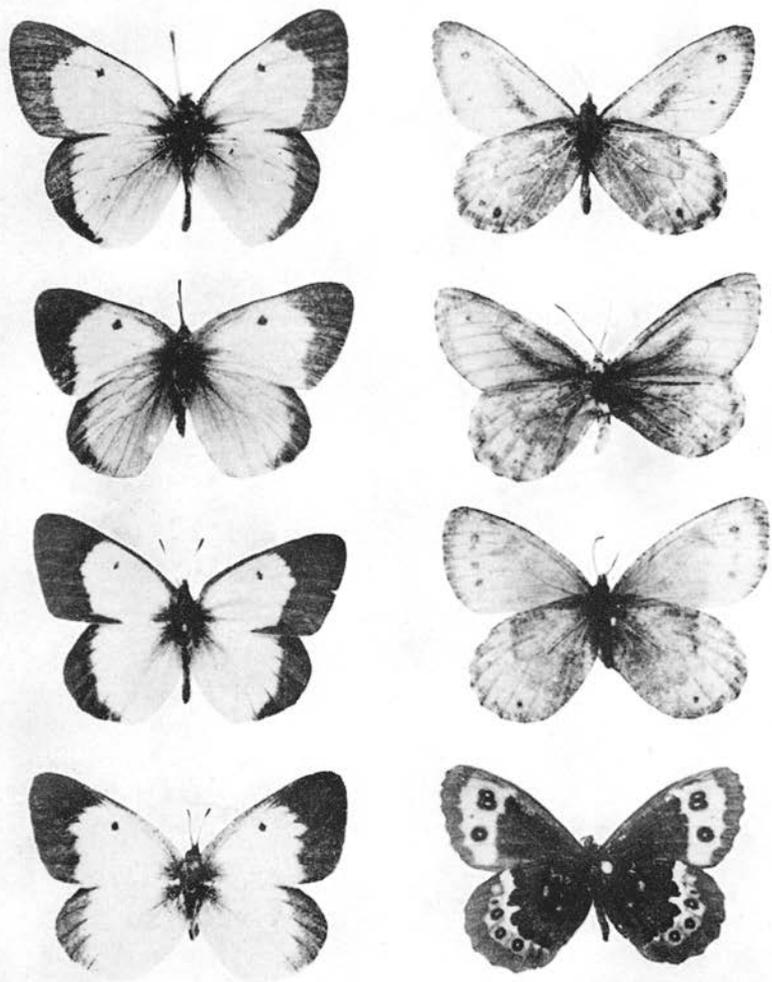
無い。内地では本州中部の日本アルプス山彙中に限り、其以外に八ヶ岳のみがその産地である。且つその出現する地域は必ず高距八千五百尺以上であつて、喬木帯は勿論その出現なく、灌木帯を終る邊の偃松帯の上部に多く、磊々たる岩石の起伏する草本帯の間に、高山に特有の烈風に虐まれつつ、彼方の岩蔭、此方の偃松の邊りを靜かに棲む生物である。その飛ぶ状は餘りに陰鬱な感じがあつて、初めて見る人は誰しも蛾が何物かに驚かされて忙しく他の隱所かくれがに逃れゆくものとしか思はない。

私が大正六七年の夏、大町から葛ノ湯に入り烏帽子岳から黒部を廻る連嶺を、約二週間の間天幕旅行に送つた時、雪と岩石と、偃松と高山植物の間を常に旅情を慰めたものは此のタカネヒカゲであつた。それ程に又タカネヒカゲは高山の縦走をやる人々に多く接する所のものである。その前年私が劔岳を劔澤に下つて祖母谷から白馬岳の裏に出た時、前夜迄暗澹と陰蔚と一殊に大雨の爲谷全體が瀧のやうになつて恐怖と絶望の一夜を明した後、晴天に輝くならかな白馬の裏山が喜ばしく平和に私達を迎へた時、又此のタカネヒカゲが足許に戯れてゐた。

### 九、オホイチモンチ (*Limnitis populi* L.)

斑紋はイチモンチに似て極めて大形で形などは寧ろ *Apatura* (コムラサキ) 屬に近い。高山の林に悠然と飛ぶ態は何とも云へぬ美しい所である。

極く最近まで、此の種は日本では唯北海道に産するのみであると云はれてゐた。それは蝶類の採集家が活動した範圍が當時の一般社會人の活動範圍と一致して都會の附近又は遊覽地に限られた爲であつた。然るに最近登山熱が盛になつて來るとともに、上高地の蝶類フアウナが注目されて來た。そして次に述べらるヒメヒロドシと共に、從來北海道以外に産せぬものと知られてゐた本種が上高地の峽谷で捕へられた。高山蝶の注目されて來たのは此の頃からであつて、又登山と蝶の研究と



〔左上より〕ミヤマモンキeta雄・雌(薬師岳太郎兵衛平産)、同雄・雌(浅间山産)  
 〔右上より〕タカネヒカゲ雄・雌・雌(檜ヶ岳産)、クモマベニヒカゲ(穂高岳産)



が關聯して行はれるやうになつたのも茲に始る。

此の蝶は上高地の峡谷に數多く産する。海拔五千尺の高さにある峡谷に生ふる白樺ツガの深林が開けて河原に聳え立つ一萬尺の穂高連山が頭上を壓する邊り、その清い雪解の水のせせらぐ附近を、大形の男性的なオホイチモンチが舞つてゐる、さながら大空に舞ふ鷹のやうに。此蝶について私は反て全く世間から知られぬ新産地を知つてゐる。それは前にも述べた奥秩父の十文字峠を越えた彼方の武陵桃源郷梓山である。梓山の森林は今は亂伐されたと聞く。其の頃の梓山は、甲武信、國師、金峰の連峯、それから秩父の最高峯三寶山から十文字峠に連る山々に圍まれたならかな原に、唐松の大樹の疎らに生へた神祕的な高原であつた。山の麓の眞黒な森からは絶へず郭公の聲がさこへた。原には菖蒲の花が淋しく咲いてゐた。その村端れの林に美しいオホイチモンチを見た。それは今でも自分のキャビネットの中に見る事が出来る。

尙ほ上高地と奥秩父の外に此の種は尾高朝雄氏により奥日光の湯本で捕られた。

十、ヒメヒラドシ (*Vanessa urticae connexa* Butl.)

裏面に黄赤色の部分が多くある所から一見して、ヒラドシテフや其他のものと區別される。此の變種は翅の中央部にある黒紋が連絡して一列をなしてゐる點で *connexa* の名を持つてゐる歐洲産の原種 *urticae* と區別される外、一體に濕氣の多い島國産である事を示すやうに黒味が勝つてゐる。前種と同じく日本アルプスに限つて産するが、前種のやうに産地が狭くなく日本アルプス到る所に産する。天候の悪い尾根傳ひの縦走をやつて、霧深い北アルプスの岩峯の上で時々風のやうに谷底から尾根を越えてゆくのを見た。そして殊に穂高岳に多く居る。

十一、タカネキマダラセセリ (*Pamphila palaemon* Pall.)

近年高山蝶として有名になつた種類である。極めて小形であつて、斑紋も明かに他のセセリ蝶と

區別が出来る。之れは先づ内地では上高地の特産と見ていい。歐洲の蝶類圖説に其の地の平地産として知られたものが、北海道、朝鮮に見出されないで反て日本アルプスの一地域に産するのが、如何に日本アルプスのファウナが特異の點を持ち、そこに産する純粹の意味の高山蝶が如何に動物分布學上有意義な存在であるかを知り得るのである。

上高地では温泉場から穂高岳へ行く道々此の蝶は登山家の多數の者の眼に止るさうである。

#### 四、山地産の蝶類

純粹なる高山蝶は大要以上に述べた所に盡さる。然し吾人が登山に際して見る蝶類は其他に多く存する。之を蝶類の食草習性等から考へて平地にはどうしても見ることの出来ないものがある。而も一度足を山地に踏み入るれば、灌木の間に又溪流の側に、又山頂の樹梢に、全く平地で見ることの出来ない多くの蝶を見る。その或ものは特殊の山岳の領域にのみ限られた産地を持ち、殊に日本アルプスとか中國の山中とか、又は近畿の或山とかに限つてその姿を見せる。

歩き疲れて、フト見る溪畔の山榛の木に珍稀の蝶を見るとき、かくも私達蝶類愛好者に對しては乙女のような胸騒ぎを感じしめる。殊に私達同人の知り得た産地——某山のどの谷に何月の何日頃の午後何時頃に何と云ふ稀種の蝶が居ると云ふことになれば、吾々は時間と費用の多くの犠牲を拂ひ時を見計らつて出掛ける事がある。勿論登山のシーズンと、深山に於ける蝶の發生期とは略々一致するものであるからそんな時は登山も一つの目的に違ひないが——其或時は前年の秋から心懸けてゐたものが雨のために絶望となる事がある。その時には丁度大切な休暇を山に來て天候の爲に臺無しにし涙を忍び下山する恨と同様である。然し反對に高山の御花畑に絢爛の春に似た麗しさを味はつて舞ひ來る蝶の生態に接したり、隱慘で暗黒な山の雨が晴れて美しい日光に輝く溪間に多種類の蝶類の群棲を見る

時は吾ながら恍惚とさせられる。

まことに山に登る人は神代ながらの赤裸々の自然に接する——高い處へ登ると云ふよりは、とても人力の及びもつかない偉大な感じ、森嚴な氣分と併せて森林と溪流とに抱擁された自然の兒にならうと云ふ處に意味があるのである。私は此の意味から云ふて是非山に登る人にあの人間の社會から離れた天地に棲む可憐な生物と接する氣持になつて貰ひ度い。と、かう思つて併せて山地蝶の御紹介をして見るのである。

一、ミヤマカラスアゲハ (*Papilio Maacki men.*)

平地でよく見るカラスアゲハ (*Papilio bianor*) の後翅裏面が一面に黒褐色であるのに對して、その後翅裏面中央に灰白色の細長い線があることで明に區別される、信州の各山地に夏日迅い速力で飛んでゐるのをよく見る蝶で、相當分布が廣い。東京附近の山では高尾山で採集される。自分は奈良の春日山で採集したものも保存してゐる。春五月頃高尾山の山頂で待ち合せてゐると美麗な春型變種 (*Papilio maacki japonicus*) が採れる。

二、ギフテフ (*Unedaria japonica* Leech.)

此蝶は必ず山地に限る種類であるが、どこの山にも居る蝶ではない。又山であれば相當な都會地に接した山にも産する所がある。

早春桃の花の咲く里を眺めながら武州の高尾、京都の鞍馬などの山に登ると暗い杉の森の下草を非常に飛翔力の弱い黄色の蝶が飛ぶのが眼に着く。地面に接して匍ふように飛ぶ所は一體にアゲハ蝶科 (*Papilionidae*) の一亞科 *Thaidinae* の特徴とする所であらう。殊に朝鮮に産するホンヲテフ (*Sericinus telamon*) も全く同じやうな飛び方をする所を見ると、恐らく希臘産の *Thais* などと共に此奇異な蝶の一群は特殊の習性を有するものと云へるであらう。

三、ヒメギフテフ (*Luehdorffia puzioi* Ersch.)

此蝶は幼蟲が著しくギフテフと異なる外、黒帯の細い事、翅の圓い事、肛角の斑紋の粗い事等が綜合されて直觀的に全く別種であると云ふ事がわかるが、さてどこが區別の要點かと云ふと一寸それを指摘し難い。丁度スデグロテフ (*Pieris melele*) とエゾスデグロテフ (*Pieris napi*) のやうな工合の違ひさである。自分の知る限り此蝶の産地は信州太郎山の外にはない。

四、ウスバシロテフ (*Parnassius citrinarius* Motsch.)

山に登る人が時々溪流の側に靜に飛ぶ殆ど翅を擴げたまゝ風に乘つたやうにフワ／＼頭上を掠める此蝶を見る。それ程ウスバシロテフは弱い優しい蝶である。いつか尾瀬沼を會津の檜枝岐に下りて、谷間に群る此の蝶を見た。その時は山雨が時々降る中を柔かに灌木から灌木へ移つて行くのが見えた。東京附近の多摩川の上流に時々見る。勿論上高地にも居る。

五、ヤマキテフ (*Gonopteryx rhamni maxima* Burt.)

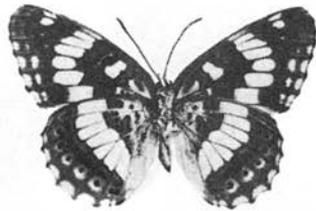
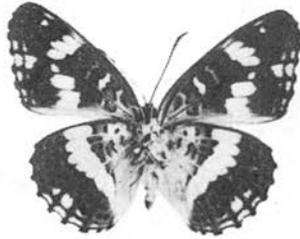
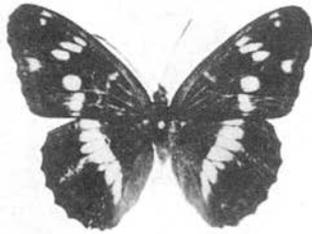
此蝶と次のスデボンヤマキテフとは日本の山地を二分してその各に棲むものである。日本アルプスの様に「スデボン」の居る所では此蝶は全く見ない。又此の蝶の多く産する淺間の高原には「スデボン」は居ない。

夏八月追分や輕井澤の淺間高原に濃黄色の雄とクリーム色の雌とが交互飛翔するさまは月見草が風にゆらぐ様である。

六、スチボソヤマキテフ (*Gonopteryx aspasia* Mén.)

前種に比して體が小さく後翅裏面の紋が前種は黄色で黒輪があるに比して黒色である事によつて區別される、一體に前種の厚ぼつたい感じが之にはなく清楚である。

白馬岳に入る前の高原、針ノ木峠の喬木帯、それから南に下つて御岳附近迄日本アルプス前山に



[上より]ヒロイチモンサ、イチモンサ、  
同裏、ヒロイチモンサ裏  
(孰れも浅間高原産)



極めて多く見る。

七、ヒメシロテフ (*Lepididia amurensis* Mén.)

數年前猪苗代の湖畔を歩いた時、湖の邊りに此の可憐な蝶を多數見た事がある。本州では全く此のヒメシロテフは山地にのみ産する。小形の鮮明な白色が山地の水邊には殊の外鮮明に見えて美し  
5。

八、アサギマダラ (*Danaus tytia nipponica* Moore.)

自分は明治四十三年の夏東京市内の麴町永田町の自宅庭前で此の蝶を捕へた事がある。それは今もなほ保存してゐるが、普通アサギマダラは山地に限つて産する。四五年前河内の金剛山に上つた時多數山上に認め、東京近傍では高尾山で捕へた。又九州の英彦山では山上で多數捕り、日光の湯本に長く滞在した時は森林中の緑のトンネルを悠悠々翅を水平にして飛んでゐるのを見た。

九、オホヒカゲ (*Lethe schrenkii* Mén.)

日本アルプス方面には見ないが、信州でも東部の淺間高原に居る。追分附近の雜木林を歩いて、此の巨大なヒカゲテフを見て逐ひ行くと直ぐに混み合つた枝と枝の間に入つて仕舞ふ。オホヒカゲは實に山地蝶の中で捕獲し難いものである。

十、キマダラモドキ (*Lethe epimenides* Mén.)

矢張り淺間高原に多い。夏草の繁る山地の平原に黄褐色の蝶を見るが多くは之である。九州の彦山でも山頂の神社の傍で此蝶を捕へた。九州産のものは非常に大形である。

十一、クロヒカゲモドキ (*Lethe marginalis* Motsch.)

自分は木曾御岳で之れを捕つた外は割合に遭遇しない。オホヒカゲの様に悠長な飛び方をする蝶で、クロヒカゲとは全く違ふ感じがある。上州四萬温泉の附近でも捕れるが兎に角稀種の山地蝶で

ある。

十二、ウラナミジヤノメ (*Ypthima motschulskyi* Brem. & Grey.)

數年前滿洲に旅行した時、平地の草原で多數捕へた事を覚えてゐるが、日本内地では山地に限る。例へば箱根の仙石原のやうな所とか、紀州高野山などに居る。後翅裏面の紋の三個である事が著し  
5。

十三、ベニヒカゲ (*Erebia sedakovii nipponica* Jans.)

古くから高山蝶として知られた蝶である。今日ではかへつて所謂高山地帯には見られぬ。然し勿論之を産するのは山地で、淺間高原の如き上高地附近の如きは相當に此の鮮明な紅色日蔭蝶を見る。此蝶は雌の後翅裏面に灰白帯があるので雄と區別されるが、此の灰白帯は時に黄色のものもあり又青色粉鱗を具ふるものもあり變化が多いので興味がある。

十四、ツマジロウラジヤノメ (*Pararge deidamia erebia* Butl.)

山地に特有の夏時雨に濕つた森林の中を、此蝶の鮮明で緩慢な姿を認める時は實に優美なものである。日光の中禪寺に上る途中の森林、木曾御岳の山麓、上州四萬温泉等は産地として知られてゐる。

十五、ウラジヤノメ (*Pararge achine achinoides* Butl.)

裏面外縁に蛇目紋が多數あるので注目を惹く蝶であるが、一般に比較的少ない。信州梓山の草原に之を見た。又野尻湖畔にも居る。運動が弱く隠氣な蝶である。

十六、ヒメヒカゲ (*Coenonympha oedippus annulifer* Butl.)

餘り山地には多くない種で、自分の接觸した經驗は信州淺間の高原のみである。ナラやハンノキの生ひ繁つた濕原は深い夏草の原になつてゐる。朝早く露を踏みながら草原を歩く足下に非常に弱

い飛び方の褐色蝶が居る。一見シジミ蝶の様である。これがヒメヒカゲの生態であつた。  
**十七、スミナガシ** (*Dichorragia nesimachus nesiotus* Fruhs.)

山登りの途中、殊に景色のいい山間、峡谷、また特に暗い迄に生ひ茂つた闊葉樹林の中に斜めに日の射し込むあたりに、飛鳥の様に邊りを掠めて飛ぶ黒い蝶が之である。唯だ上高地の島々谷あたりを朝の九時頃に歩く人は、足下にうづ高く積み上つた牛糞に集る此蝶を見るであらう、稀にスミナガシは東京附近の荻窪で捕れる。自分も一匹それを持つてゐるが、其後捕れたのを聞かない。

**十八、ヒロイチモンチ** (*Limnitis sydyi* Fcl.)

イチモンチと一見すると似てゐるがその中央白帯は著しく太い事と前翅第四間室の白紋が特に大きく、外縁第三第四間室共に白紋を具ふる事、中室内の大白紋は中央部が膨脹せずして反て凹み前後端が擴大してゐる事によつて明に區別されるものである。信州淺間の高原殊に追分では八月半過ぎ頃から現れる。丁度七月頃から出てゐたイチモンチと代つて出現する譯である。八月中旬以後であれば十和田湖附近でも捕れた。

從來本種が本州中部に産する事は記録のない事で、大體自分は本種であるとは知りながら尙ほ多少の疑問があつた。幸ひ本夏北海道に公務で出張する事になり、札幌の北大で斯界の大家松村松年博士に會見するの機を得、親しくその日本産ヒロイチモンチのタイプを拜見して、全く自分の疑ひが解けたのである。

**十九、ホシミスチ** (*Nepis pryoti* Butl.)

ホシミスチは全く平地には産せぬ。今でこそ上高地や日光の奥で普通に見られるものであるが、十數年前蝶類採集に人の注意が餘り向けられなかつた頃は之れを捕る事は中々望まれなかつた。或夏大阪に滞在して武田尾の山中を歩いて、峠の頂で此の蝶の雌を初めて捕つた時本當に嬉しかつた

事を思出される。

二十、オホミスヂ (*Nepis alwina kaempferi* d'Orza.)

矢張り十數年前の事であるが東京附近の中野郊外を六月中頃採集してゐると、高い樹梢に大形のミスヂ蝶が現れたので其頃未だ少年であつた自分へ飛び上つて之を採集してオホミスヂの雌である事を知つた。其後東京附近で本種の捕れる事を聞かない。が信州の山地では到る所の村落に、溪流に、森村に本種は現れる。

廿一、クジャクテフ (*Vanessa io exocula* Mey.)

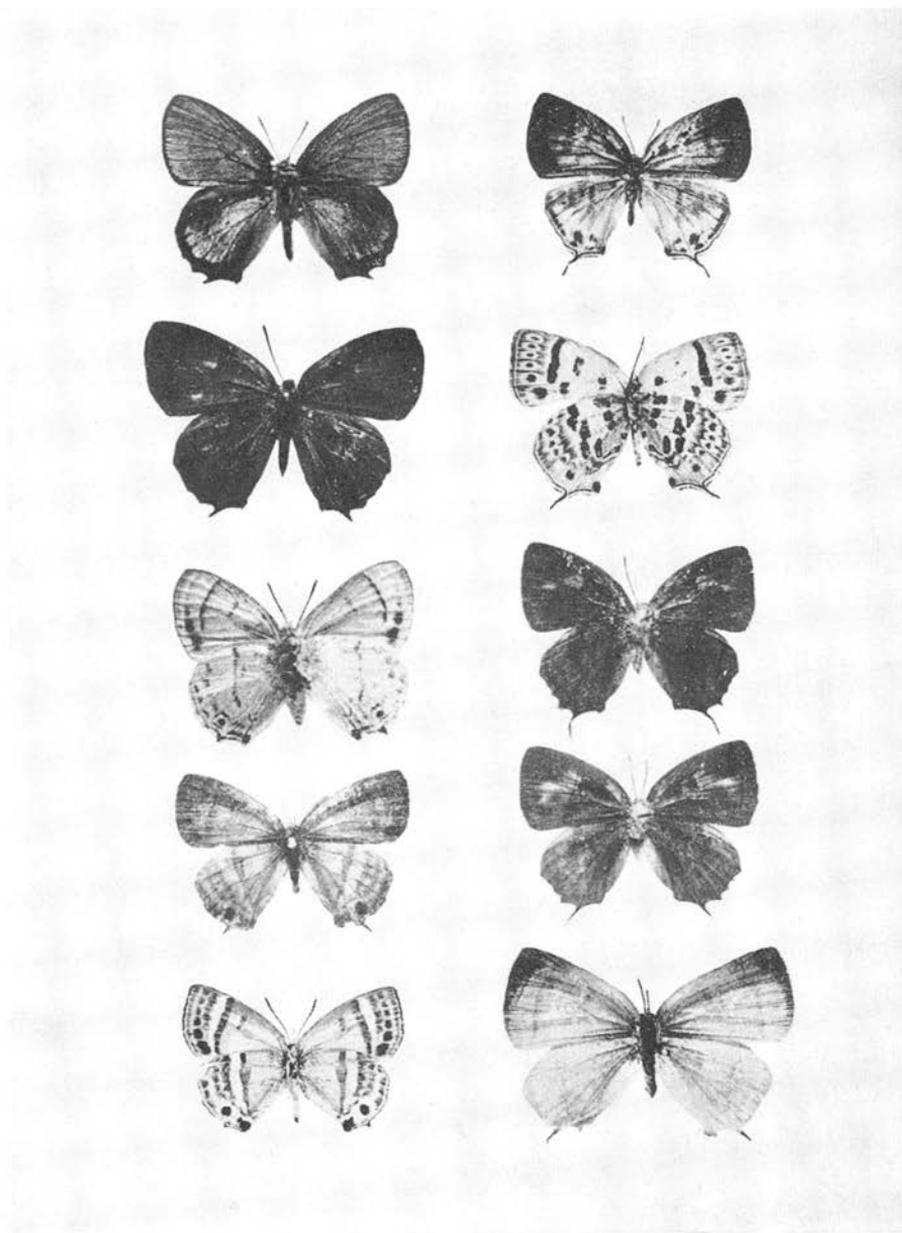
鎌倉の奥住愛三氏と松村壤夫氏に依て極樂寺の附近で本種が捕へられた事が稀有な事として驚かれる程本種は全く山地棲である。上州、信州の山中では溪流の側、高山植物の間などに屢々見られる。人跡絶へた一萬尺の高嶺の尾根傳ひに歩く時、片方の谷から迅しこく飛び立つ本種を見る事がある。それ程クジャクテフは本邦ではアルビニストの友である。

廿二、キペリタテハ (*Vanessa antiopa* L.)

本州平地では絶對に見る事のない所である。深山深く分け入ると時々見る。日光湯本の宿ではよく室の中に入つて来る。同じやうな事が信州發埔の宿でもあつて室内で捕へた事がある。島々谷では牛糞に群る蝶の一つである。北海道の定山溪の溪畔では非常に澤山見た。上州伊香保の湖畔に馬を馳る途中森林中に現れた鮮明な本種は今も尙ほ眼に残つてゐる。

廿三、エルタテハ (*Polygonia lalburn samurai* Fruls.)

相當高い所に登らなうと見られない様である。飛翔力は強く中々捕へ難い。木曾御岳の山中で多數高原の檜林に群るのを捕へた事がある。それは夕景歩き疲れて王瀧口田ノ原の濕原を横切る時であつた。



〔左上より〕ウラジロシジミ雄・雌・裏(妙見山産)、フジミドリシジミ雌(妙高高原産)、同裏(徳本峠産)  
 〔右上より〕ウスイロオナガシジミ(伯耆大山産)、同(信州發埴産)、オナガシジミ雄・雌(浅間高原産)、ムモンアカシジミ(野尻湖畔産)



廿四、シータテハ (*Polygonia calbunn fentoni* Butl.)

本州中部の山地に特に多い。雄雌により又氣候により種々の變化があるが、後翅裏面のC字が銀色である事によつて容易く平地産のキタテハと區別される。よく暑熱の激しい日中には濕つた崖下の暗い蔭の土の間などに居るのが見受けられる。雄と雌とが著しく形状のみならず色調を異にしてゐるのが目立つ。

廿五、サカハチテフ (*Araschnia purejana* Brem.)

本州、九州を通じて山地には常に見受ける。自分には山登りと離す事の出来ない印象を伴つてゐる。日本アルプスの登山には勿論の事、リュックサックに鳶口を携へて日盛りの針ノ木峠にかゝる時、雪溪から流れる溪流に足を休ませてゐると上から垂れ下つた闊葉に可憐なサカハチテフを見かける。

また耶馬溪の上流の英彦山の山頂では森林に美しい夏型 *fallax* を認めた。春五月身延から七面山に登つて静岡縣下へ抜けた時、林中は美しい春型 *stictosa* の赤黄色の翅に點綴された。サカハチテフは登山者の道伴れである。

廿六、ヘウモンモドキ (*Melitica phoebe scotosia* Butl.)

淺間の高原に行く人は夏草生ひ茂る廢寺の裏や、草叢の蔭に見なれぬ帯赤黄色蝶を見る。此のヘウモンモドキは其の様に生態が稍々他の蝶と違ふ感じを與へる。而も多くの登山客を迎へる日本アルプスは何處へ行つても此蝶を見ない。

廿七、コヘウモンモドキ (*Melitaea athalia nippona* Butl.)

日本アルプスの山麓には最も多い種類である。灌木が生ひ茂る夏草の中に、緩かな飛び方をした赤黄色の小形の蝶を見る、それは蛺蝶とは見えぬ靜かな飛び方である。此蝶は濕氣の如何によつて

非常に翅の色が違ふ。中には殆ど黒色のものもあつて興味が深い。

廿八、コヘウモン (*Argynnis ino amurensis* Fruhs.)

深山の雑草にはよく見受ける。内地では小形のヘウモンで前翅表面中室内のヨ字が明瞭に次の種と區別される。針ノ木峠あたりに屢々見る。

廿九、ヘウモンテフ (*Argynnis daphne rabdia* Butl.)

前種の圓味あるのに比して稍々角ばつた感じのする翅を持つてゐるのと、多少の變化はあるが前翅表面の中室のヨ字の一半が不相應に狭い事で前種と區別される。此の種の方が本邦山地には多い。

三十、ギンボシヘウモン (*Argynnis aglaia fortuna* Jans.)

裏面に銀色斑紋を有するヘウモン屬中、本邦で山地特有のものは之れのみである。クサベリウラギンヘウモンの名もあつて裏面が緑色であるが、通常平地に産するウラギンヘウモンと區別すべき要點は後翅裏面銀色紋列が後者の五列あるものに反し四列である事と、その各斑紋が極めて大形で顯著である點に存する。

三十一、オホウラギンスチヘウモン (*Argynnis rustana lysippe* Jans.)

大體翅の形が長く殊に前角が突出してゐるので平地産のウラギンスチヘウモンと區別される。信州其他の山地で採集されるが割合に少い様である。

三十二、ミドリヘウモン (*Argynnis paphia paphioides* Fruhs.)

時々平地でも捕れる事があるが、先づ山地蝶と云つて間違ひなからう。登山者の暑がつて通る山麓の高原斜面に無数の此蝶がゐる。そして夏草の繁る草原に殊に多い。雌の黒紋は大形で一寸變つてゐる。

三十三、テンゲテフ (*Libythea lepita* Moore.)

山間の峽谷に多い。必ずしも深山に限らず京都の嵐山あたりの峽間に五六月頃多數飛んでゐる。生態はアカタテハに似た感じがするが、形の小さいので明瞭に判明する。關西では箕面公園などで牛糞に群り集る。關東では東京附近の高尾山にも居るが餘り多くない。

三十四、**カラスシジミ** (*Thecla w-album fentoni* Butl.)

カラスシジミが本州山地で捕れ始めたのは極く最近の事である。今までは次に出るミヤマカラスシジミが内地に居て本種は北海道にのみ産するものとされてゐた。それが上高地で既に數頭捕獲されるに至つて内地にも産する事が知れたのである。

三十五、**ミヤマカラスシジミ** (*Thecla nera* Jans.)

信州淺間の高原に多く産する。高原と云つても暑い眞晝の太陽が西に傾きかけてから落ちやうとする午後三時から五時の頃、高原の窪地に彼處、此處と生ひ茂つた關葉樹の梢を、小さい威勢の良い蝶が飛び廻る。それは此處にも彼方にも、其時刻になると一時に木々の梢を飛ぶ。それが直きに梢の葉上に止つて捕へ易い。尤もその邊りは足下は濕地であつて此蝶を採りに行くとズブ濡れになるのは止むを得ない。

三十六、**トラフシジミ** (*Rapala arata* Brem.)

恐らく内地産の蝶で此蝶程均衡のとれた形を持つ蝶は少いだらう。トラフシジミは溪谷に多い。岩に激する谷川の水が白い泡を立て、せうらぐ上を蓋ひ冠さるやうな樹々に日光が光る山の溪流。その梢に素敵に迅く飛ぶ。後翅尾狀突起の邊りを動かして葉上を歩行するさまは美觀の一つである。

三十七、**ヲナガシジミ** (*Zephyrus onthea* Jans.)

此蝶は平地に殆ど見ない。極く古く武藏荻窪で捕つた標本を持つてゐるが、勿論今日は到底捕獲し得ない處である。此蝶は高原に居る。信州輕井澤や追分のあのなだらかな高原へ行くと、深い溝

を作つて流れる峡谷の縁の廣い葉の上を銀色に大形の黒紋を配した此蝶が、小さい白い足で歩いてゐるのが見られる。後翅を上下に動かしながら此の可憐な小蝶の葉上を歩く態は何とも云へぬ平和なものである。

三十八、ウスイロテナガシジミ (*Zephyrus bulteri* Fent.)

宮島學士が「日本蝶類圖説」で「極めて稀なる種」であると云つてゐる通り、此蝶は中々入手しない。而も捕へる所は狭い範圍の峡谷である。一般に北海道の圓山で捕れると云はれるが、自分の持つてゐるものは伯耆の大山と信州の發埔温泉と上州の四萬温泉のみの産である。關西の産は非常に小形で斑紋も細く翅形も細長である。其他大島永明氏の採集により日本アルプス烏帽子岳がその産地として知られてゐる。

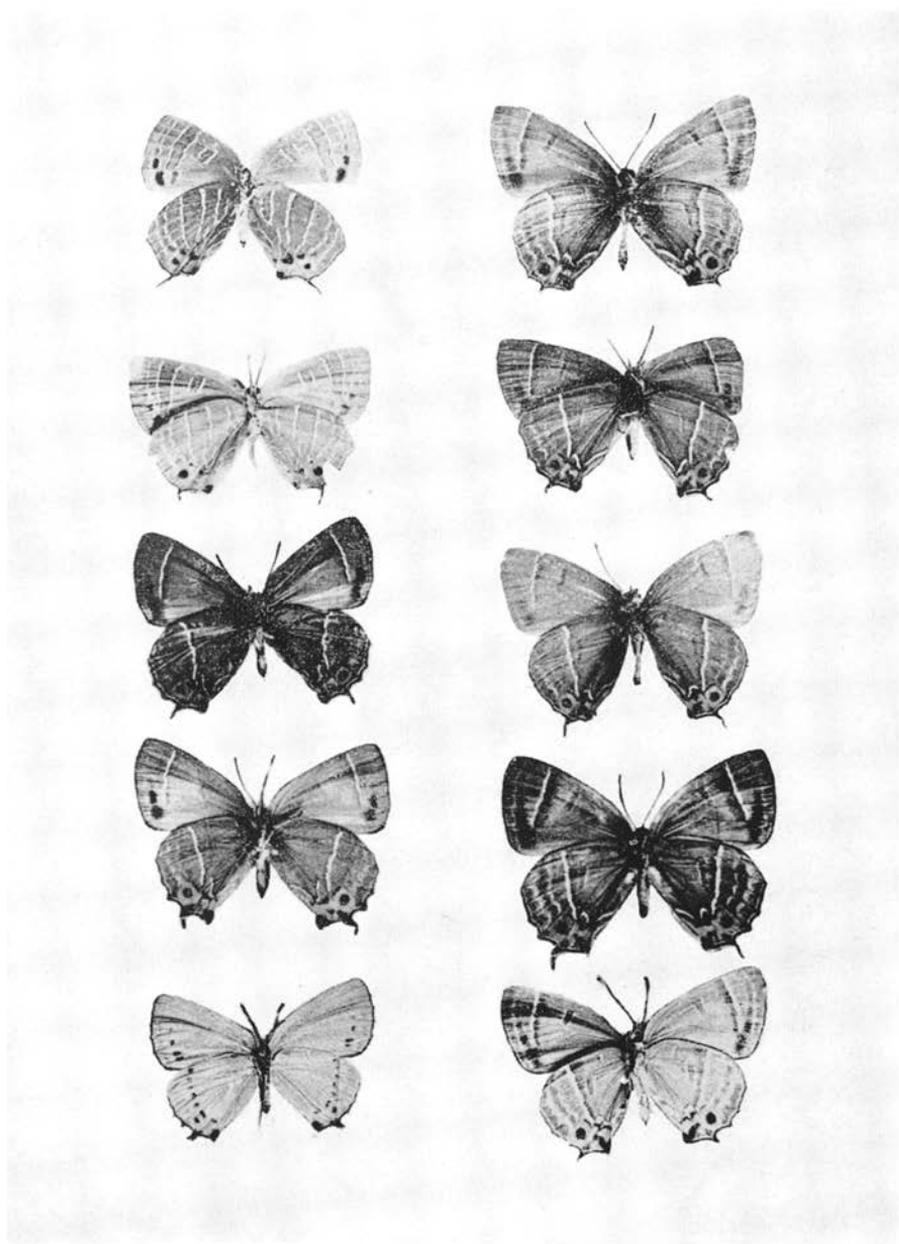
三十九、ウラジロシジミ (*Zephyrus sapirina*.)

*Zephyrus* 屬中特異な感じを興へる蝶である。形は圓く、色は柔い感じの蝶で、外のゼフィルスが皆角張つた男性的であるに比して著しく女性的である。

多數群生して居るが、産地は極く限られてゐる。自分も二三年前、此蝶を捕る爲めに京都の松谷岩彦氏と尾高朝雄氏と三人で、態々妙見の山腹の溪流迄出かけた。松谷氏の話ではすでに電車に乗つてゐる間に、溪谷に飛び交ふ銀色の小さい姿を多數見ることがあると云ふ。相憎自分の行つた時は未だ氣候が早かつた。普通種のオホミドリシジミのみ二三見たのみで將に失敗の歩みを家路に辿る時であつた。確かに一風變つたミドリシジミが谷間の梢を飛んでゐる。漸く三人掛りで捕へたのが圖に示す所である。自分は大阪府兵庫縣境の妙見山以外に此の稀種の産地を知らない。

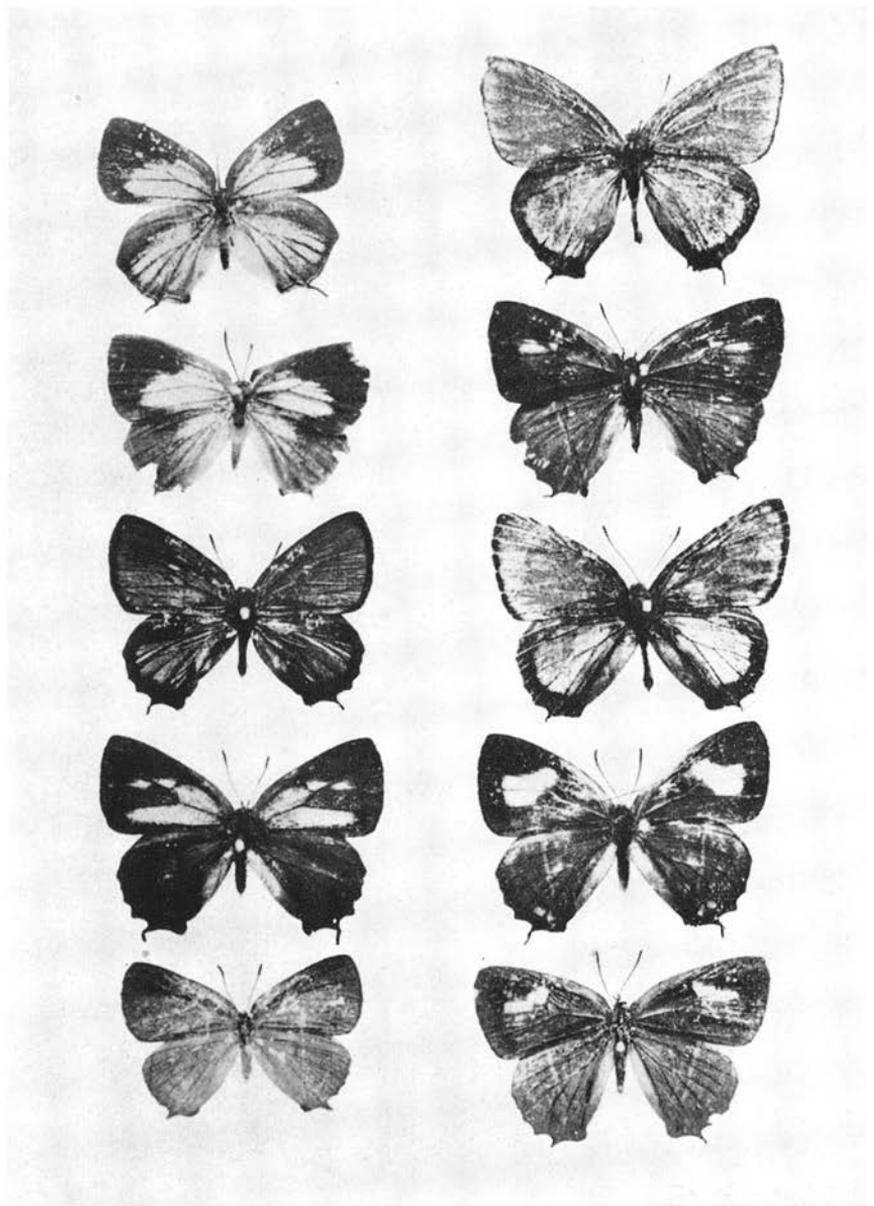
四十、フジンドリンジミ (*Zephyrus fujisanus* Mats.)

極く最近に発見された種類であるが既に其の産地は相當に擴まつたやうである。野平安藝雄氏が



[左上より]ダイセンシジミ(伊香保産)、同(大山産)、ミドリシジミ雌・雄、ウラキシジミ  
 [右上より]メスアカミドリシジミ雄、アイノミドリシジミ雌・雄、メスアカミドリシジミ  
 (上高地産)、同(大山産) 以上裏面





[左上より]ダイセンシジミ(伊香保産)、同(大山産)、ミドリシジミ雄・雌(上高地産)、  
 ウラケンシジミ  
 [右上より]アイノミドリシジミ雄・雌、メスアカミドリシジミ雄・雌(上高地産)、  
 同(伯耆大山産) 以上表面



始めて此の雄について記載した頃の大正六年夏、自分は日本アルプス葛温泉から烏帽子岳へ入る様の木の疎林の中で此蝶の雌を捕へた。オホミドリシジミに似た小型の蝶であると思つて採て後に氣がついた所である。

實際此蝶は表も裏もオホミドリシジミに似てゐる。然し雌は實にミズイロオナガシジミに近い。小形で形も特殊である。富士八湖の附近で始めて雄が捕獲されて命名された所である。自分の有する標本は赤倉温泉と上高地である。近頃武州高尾山で二頭の雌が採集されたやうである。日光湯本の刈込池附近でも採れた事を聞いた。

四十一、**ジヨウサンミドリシジミ** (*Zephyrus jozanus* Mats.) 及 **エゾミドリシジミ** (*Z. jezoensis* Mats.)

共にオホミドリシジミに似た蝶であつて、雄の表面黒色緑帯の幅と裏面の前翅中室端の黒紋、後翅肚角の橙黄紋の大きさや雌の裏面の色彩、白色帯によつて松村博士は此の二種を區別し、翅の形と尾状突起の長さによつて磐瀬太郎氏が別の區別方法をしてゐる様であるが、稀に捕獲さるる雌に關する以外には雄については色々な中間型もあつて結局「種」としての區別は明確でない。何れにしても此蝶は山地の谷間に多く産する。

四十二、**メスアカミドリシジミ** (*Zephyrus brilliantina* Stgr.)

典型的な山地蝶と云ふ言葉は此のメスアカミドリシジミに付て始めて云へることと思ふ。他の *Zephyrus* 屬の蝶に比して雄の表面の綠色は金色に輝いて一段と美しい。雌の表面の赤色紋の如きもミドリシジミの内に其型もあるが大形であつて其上翅の形も大きい。名の通り最もブリリアンとな蝶である。

針の木峠の「平の小屋」附近に多く採集された事を覺へてゐる。上高地では相當に集められる。

雌が殊に大形で美しい。尾高尚忠氏によつて上高地や上州四萬温泉で獲られたものは前翅表面中央部に三個の大形赤色紋ある外、後翅表面中室横脈附近に一個及後角に二個の赤色紋を具へる。然るに伯耆大山で採集されたものは後翅表面に赤色紋なく且前翅表面に二個の赤色紋がある。私は變種の關係あるものと考へる。

雄は何れも表面の黒縁部廣く且後翅裏面前縁部に黒線があるので他の種と區別される。

#### 四十三、アイノミドリジミ (*Zephyrus aino Mats.*)

翅の表面の緑色は前種に似てゐるが、翅が細長く圖の外縁の黒色帯も狭く、又後翅裏面第七室に黒紋を缺くので區別される。上高地や發埔のやうな山間の溪谷でよく採集される。信州野尻湖の如きも一産地たるを失はない。上州伊香保でも採れる雌は前翅表面に赤色紋がある。

#### 四十四、キリシマミドリジミ (*Zephyrus ataxus.*)

九州霧島山で採集されたので有名である。ウラジロジミに似て尾狀突起が長く翅の四角張つてゐるので區別されるが、ザイツに據れば雌に至つては全く異形のゼフィルスである事が知れる。尤も本邦では雌は採集されて居ないから之を知る由もない。

#### 四十五、ダイセンジミ (*Zephyrus quercivora.*)

ドイツのザイツ其他の著書には圖を示して此の蝶とウラスデシジミ (*N. signata*) の區別を明にしてゐるが、日本では極く近くまで此の蝶は區別されなかつた。ウラスデシジミは北海道に産する。ダイセンジミは本州のみである。而も自分の知る限りでは山陰道の大山と關東も人の多く行く伊香保の温泉場附近の山であつて中々手に入らない。實に稀な蝶である。

翅の表面は麗はしい青藍色である。そして外縁部は紫が、つた黒色で圍んでゐる。裏面は暗赤黄色であるも實に色彩の對照が珍らしい。山陰の大山で採れるのでダイセンジミと云はれるが、昨

年尾高邦雄君が伊香保の山で捕へた。青藍色の部分が多くて面白いと思ふ。

四十六、**ムモンアカシジミ** (*Zephyrus jonasi* Jans.)

信州の高原に多く産する。例へば野尻湖附近の如きは其である。他の二種のアカシジミが平地に産するのと相對照して山地のみの産である。

四十七、**ミドリシジミ** (*Zephyrus taxila japonica*.)

此の變種は山地にのみ産する。何れも雌の型であつて雄は平地のものと變りはない。即ち平地では紫藍色の斑紋のあるものと黑色のみの雌を産するが、山地では赤斑あるものと赤色斑と紫藍色の斑紋を有するものがとれる。赤色斑のあるものは余は木曾御嶽と淺間山で採集し、赤色紫藍色のもの上高地産のものを有する。

四十八、**ウラゲロシジミ** (*Zephyrus orsedice*.)

山地でも相當高度の高い地域ととれるもので決して低地には見ない。先づ越後魚沼駒ヶ岳あたりは非常に多數見る所である。それから日光湯本、白馬岳の麓、上州四萬温泉の如きは其産地である。白馬岳では雨模様の際で余は雌を獲た。魚沼駒ヶ岳に登つて山腹の小屋に一夜を送つた時は丁度夕方五時頃、丁度日が西の峯に没さうとする頃の事である。無數の此蝶が銀粉のやうに薄暗の林中を飛び交してゐた。非常に速度が速いのでとても完全なものが手に入らなかつた。他のどの蝶にも見ぬ表面銀白色に黒縁の翅は實に見る眼にも美しいものと思つた。裏面の黒色の紋の工合などは蛇ノ目蝶を想像する色調である。

五十九、**ルーミスジミ** (*Arhopala ganesa loomisi* Fryer.)

ブライヤー氏が此蝶を房州鹿野山で捕獲して以來數十年の間、此蝶は全く採集者の眼を逃れてゐた。然るに最近に至つて奈良の春日山で採れる事が發見され、續々採集さるるに至つた。

自分が春日山に此蝶を探る爲に出かけたのは大正十四年の秋九月であつた。路傍に二三のルミスシジミを見ながら或谷川の側に立つと、谷川の附近一帯には百餘頭の本種が居る。谷川の石、木の葉、枝、土の上に到る所此の小形の蝶で埋まる程であつた。由來春日山は特殊の植物に著名の地であつたが、其等の關係が又此の蝶の産出を見る様にさせたものであらう。

五十、**コツバメ** (*Satsuma ferrea* Brem. & Grey.)

春四五月の頃山を訪れる者は、此蝶を多く見受ける。寧ろ黒味の勝つた極めて小形の蝶として又その形の一種特別なものとして印象に残るものである。

五十一、**シジミテフ** (*Lycæna argus* L.)

山地の原野に多く見る。

五十二、**オホコマシジミ** (*Lycæna arionides takamukui* Mats.)

稍々高山蝶に近い所である。勿論宮島學士が著書を公にした頃は知られてゐなかつた。大形で表裏共青藍色である事が著しい。上高地に行く途上、島々谷の奥で屢々採集される。又上高地と相對する東信濃の連山の奥、發埔温泉で採集される。近頃は又鹽原で一變種が採集された。

五十三、**コマシジミ** (*Lycæna cleobis* Brem.)

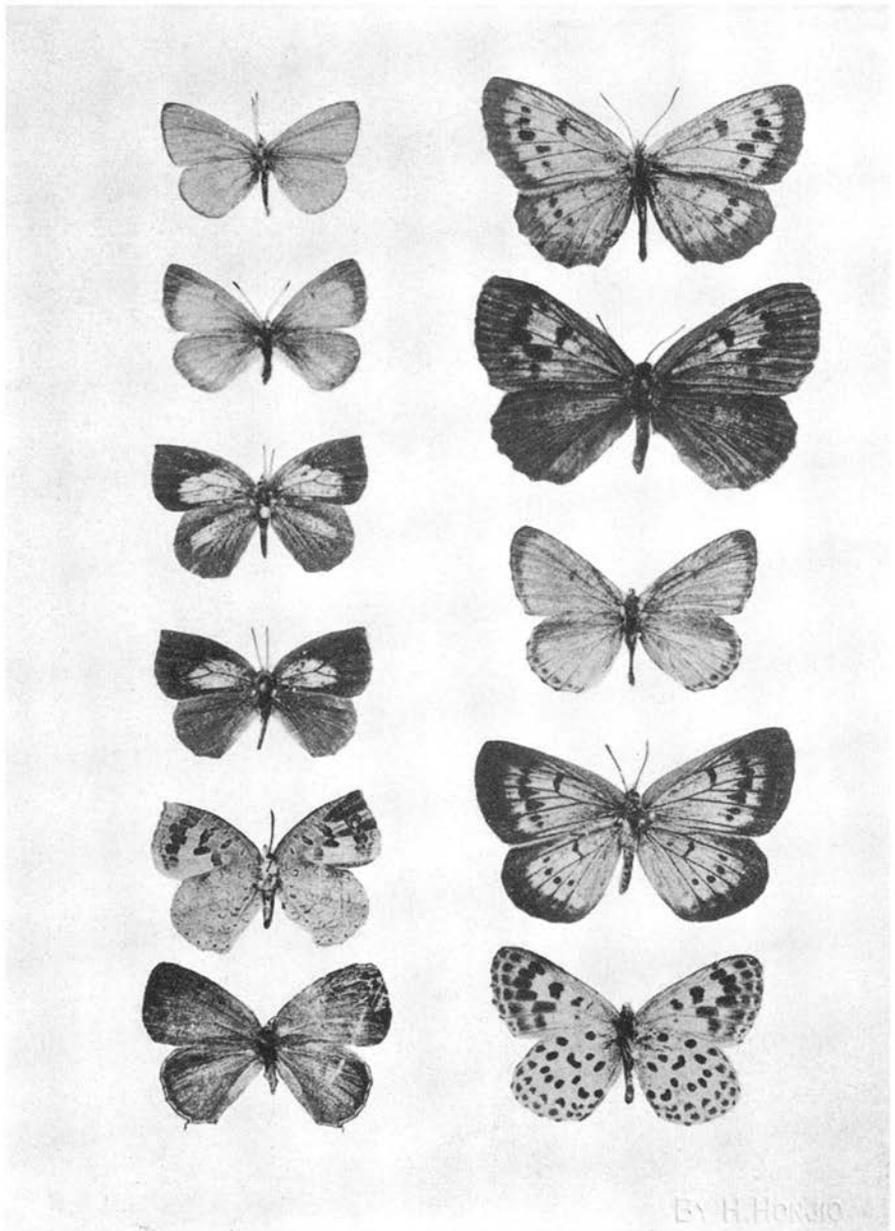
山棲の蝶として大形のシジミ蝶である。淺間の麓、信州追分の高原で時々採集される。

五十四、**オホルリシジミ** (*Lycæna barine* Leech.)

信州太郎山の特産である。其生態は自分は知らない。珍奇の種として知られてゐる。

五十五、**コマシジミ** (*Lycæna euphemus* Hb.)

山地産の蝶として思出の深いものである。淺間の高原では黒褐色に青鱗を混じたものが、宛もヒメウラナミシジメの様な有様で飛んでゐる。然し伯耆の大山に行くと灰青色のものが採集される。



〔左上より〕スギタニルリシジミ雄・雌（鞍馬山産）、ルーミスシジミ雄・雌・裏（奈良春日山産）、ウラゲロシジミ雌（白馬岳産）  
 〔右上より〕オホゴマシジミ（上高地産）、同（鹽原産）、オホルリシジミ、ゴマシジミ（伯耆大山産）、オホゴマシジミ裏



又北海道の平原では小形の灰青色のものが手に入る。何れも變種である。

五十六、**スギタニルリジミ** (*Celastina sugitanii* Mats.)

春早く溪流の側に採集される。京都の鞍馬山の溪澗に始めて杉谷岩彦氏によつて採集された。ルリジミと違て濃青色で且つ裏面が濃灰色、形も小さく角張つてゐるので明に區別される。

本年六月上高地島々谷で多數採集された。新産地とすべきものであらう。

五十七、**チャマタラセセリ** (*Hesperia maculata* Brem. & Grey.) 及**シヤマチャマタラセセリ** (*H. m.*

*Zona* Mab.)

自分は木曾御嶽の王瀧口で採つた。小形の可憐な蝶である。

五十八、**アヲバセセリ** (*Rhopalocampa benjamini* Guér.)

山地を好んで、殊に山頂又は原野を飛び、圓周を描きつゝ五分間位の間飛び續けては静止する。

東京附近では武州高尾山頂に五月頃現れる。

五十九、**キバネセセリ** (*Isone aquilina* Stgr.)

日本アルプス地方を歩くと林の中に屢々見る。夏など人體の汗を慕つて集る。其他牛糞に多く集る。

六十、**ホシチャバネセセリ** (*Aeromachus inachus* Mén.)

上高地、追分等の草間に産する。

六十一、**ギンイチモシセセリ** (*Lepaluna unicolor* Brem. & Grey.)

稀に多摩川、井ノ頭公園に見るが、多く山間の溪畔に群生する。殊に會津の奥、檜枝岐の溪流の附近で自分は本種を多く採集した。河原の草の間に靜に飛ぶ蝶である。

六十二、**コキマタラセセリ** (*Augiades sylvanus amurensis* Mab.)

淺間高原等で盛夏草原の間に出るもので平地で見ると類似種と比較して非常に大きいから一見して識別される。

六十三、ヘリグロチャバネセセリ (*Adopaea sylvatica* Bren.) 及スチグロチャバネセセリ (*Alecinna* Butl.)

殆ど到る所の山地の草原に居る。

六十四、アカセセリ (*Erynnis florinda* Butl.)

セセリ蝶の中比較的色彩の異つたもので信州方面に多数採集される。登山の折など夏草の咲き亂れた邊りに多く見かけるものである。

六十五、ミヤマチャバネセセリ (*Parnara jansonis* Butl.)

*Parnara* 屬中山地に限るものである。裏面の大銀白紋が明に種を區別させる。日本アルプス山麓地方に多く採集されるが、高尾山にも居る。

#### 四、高山に現れる平地蝶

吾々は山に登る時常時見かける蝶があつて、山岳の旅行中深い興味を惹く場合が少くない。そして其の中には蝶の中のコスモポリタンがあつて東西兩大陸を通じて産するもの、其の土地の高度如何に拘らず産するものがある。此等の蝶は其の生活力が強く勇敢に一萬尺の高空を飛翔し、所謂高山蝶と共に吾々の來るのを迎へて呉れる。自分は此の一群の蝶に一瞥を與へて本稿を終り度いと思ふ。

一、キアゲハ (*Papilio machaon hypocrates* Feld.)

日本アルプスの一萬尺級の峯を歩く時、屢々此蝶が峯を渡り谷を越へて飛ぶのを見る。山頂で見ると時は頗る雄壯な感じを與へるもので又飛翔する速力も迅い。

二、**スチゲロテフ** (*Pieris melete aglaope* Mots.)

白馬岳の頂上等で普通に見るものは矢張り平地に普通のスチゲロテフである。

三、**モンキテフ** (*Colias hyale polio-graphus* Mots.)

自分は越中薬師岳の海拔一萬尺近い山巔に立つてミヤマモンキテフ變種と本種の混合飛翔するのを見た。ミヤマモンキテフよりは翅の運動が活潑である。且つ形も大きいので一見區別される。

四、**キマタラヒカゲ** (*Neope gaschkewitschii* Mén.)

矢張り一萬尺近くの山頂で屢々見るものである。尾根傳ひに假松の海を行く時など、突然現れるので驚いて見ると此蝶である事が多々。

五、**ジャンメテフ** (*Satyrus dryas bipunctatus* Mats.)

信州槍ヶ岳邊で時々出會ふ。

六、**ヒヲドシテフ** (*Vanessa xanthomelas japonica* Stich.)

甲州と信州の境の仙丈岳の一萬尺位の所で本種を得た。破損してゐるが歐洲産の原種に近い様である。殊に翅表面の黒紋が小さい所などからかう考へられる所がある。

七、**ルリシジミ** (*Celastrina argiolus ladonides* Orz.)

極めて高い山岳に現れる。

八、**イチモンチセリ** (*Parnara guttata* Broom.)

高地の草間、殊に高山植物の間に多々。

# 白萩川池の谷溯行記

長谷川孝一

上市——伊折——小又川發電所——ブナクラ谷落口——タカノスワリ——池の谷落口——池の谷大瀑まで——小窓尾根  
乗越——池の谷大瀑上野營——池の谷雪溪——三窓——三窓雪溪——劔の小舎——室堂

昭和三年七月二十五日—七月二十八日

一行 林邦彦、吉田喜久治、長谷川孝一(途中参加 白萩小學校教員藤田氏、土木課員井上氏)

案内 丸田丈太郎

## 序言

私は劔の小窓、三窓間の山稜を縦走して、劔の頭に、未だ行つてないので、前から一度はこのコースを行つて見やうと思つてゐた。其れで昨年このコースを決行しやうと思つてゐたところ、同じ希望者の都合で中止となつた。ところで今年はいよゝゝ同行の希望者の人々も都合がよいと云ふので決行することになつたが、此の山行に今度新にコースが一つ加つた。其れが今度行つた池の谷である。丁度「山岳」二十一年一號に渡邊漸氏によつて劔岳新登路に就ての中に池の谷のことが書れてあつた爲、若し劔の裏から未だ誰にも登られてゐないと言はれてゐる池の谷から三窓或は小窓の尾根に達せたら面白いだらうといふ話が同行者の中から持ち上つた。この面白いだらうがほんものになつて、とうゝ其れならどんな谷だか、最善の注意をして決行して見やうといふことに話が纏まつたのである。

## 一、伊折まで

一行は七月十四日に上野を立つ筈であつたが、近年にない不規則な悪天候の爲、同月下旬迄延ばさ

れ、漸く二十四日に青空が現れたので、漸次良くなるといふ氣象臺の豫報に一行は意を決し、其夜に上野を出發した。翌朝午前十時四十分上市着。上市に下車した頃には素晴らしい青空となつてしまひ、一行は元氣で伊折に向ふ。

伊折は上市から五里餘、釋泉寺からいよ／＼山路に這入り、遠く早乙女岳や大熊山等の尾根が延びて來た五六百米の丘陵の末端を越して行くのであるが、暑いと夜行の疲れとで一行幾度か休み／＼行く。午後三時半伊折着。早速酒井氏宅を訪れ、案内人のことに就いて、一時間餘も費したが、幸に丸田といふ逢澤村の男が今小又川發電所に居て、これが一番劔の白萩川側を知つてゐるからと紹介され、わざわざ電話を發電所にかける手配までしてくれ、一行厚く禮を述べて更に上流に向ふ。小又川發電所着午後七時。伊折を五時近い頃出發して、約二時間を費してぶら／＼やつて來た。途中大熊澤向ひの一一三四米の頭より出てゐるガレが、數日前の雨に押し出して、大熊澤落口の側までのし上げてゐる。随分ひどい。これを大ぬけと言つてゐる。

## 二、池の谷落口まで

昨夜は白萩村助役の紹介があつたので、所員の宿所に泊ることを得、且つ所長の手配でたやすく案内者丸田丈太郎も得られ、其夜は池の谷の話に花が咲いた。そして吾々は谷の様子に就いても充分なる資料が得られた。二十六日快晴。今日は發電所からも池の谷に興味を持つて二人の參加者があり、一人は麓の白萩村小學校教員の藤田氏、一人は土木課の井上氏である。藤田氏は静でいゝと言つて殆ど毎年の夏發電所に避暑に來てゐるとの事であつた。一行六名となり、打ち續く快晴で氣持のよい朝の谷間に、流れの音と鶯の谷渡りを聴きつゝ白萩川に沿うて進む(午前六時四十分)。發電所から馬場島(立山川合流點)までは約三十分位。此處に發電所の取入口がある。此處で始めて前方に物凄いで

岩峰の連続せる劍の豪壯なる姿に接した。丸田の話に據ると來年度(昭和四年)には此の方面より立山或は劍に向ふ人々の爲に小屋が建てられることであつた。それで丸田達は毎日立山川に這入り、登山路の作成を急いでゐると語つた。馬場島より池の谷落口迄は主として右岸に沿うて進むやうになり、川幅の廣い内は、水に洗はれた跡の綺麗な砂の上を行く。ブナクラ谷の落口で初めて徒涉が始まり、再び右岸に沿うて進む。暫くして地圖に記入されたブナクラ谷合流上の岩壁のある邊で徒涉し、再び右岸にうつり、間もなく流れが、著しく左へ曲る邊で左岸に徒涉する。もはや雪溪に近いか水の冷たさは又格別で、いそいで岸へ飛び上る。この邊から右岸は通れなくなつてゐる。こゝらはタカノスワリの名があり、馬場島からこゝまでの徒涉の多い邊をキワダワラなど、丸田達は呼んでゐる。左岸にキワダワラ澤など云ふ空澤が落込んでゐる。徒涉の時リュックサックの受渡などやつたので、池の谷落口前の平地に着いたのは九時二十五分。天候は申分ない。丸田はこれが池の谷だと前を指さして教へる。見ると落口は二三十間も開けてゐて一寸よささうな谷に見える。しかし丸田は二三丁這入つて行くと廊下だと笑つてゐた。

### 三、池の谷大瀑まで

一行は此處から空身となり、寫真機と二十米のロボと手帖などのみを持つて、落口に下りて行つた。白萩川を左岸に徒涉して、小窓に續く尾根の端を少し白萩川に沿うて下り氣味に廻り、池の谷の右岸に出る。落口は廣い瀬をなし、一同は河原の上を歩いて谷に入つて行く。一丁位の間は兩岸共に通れるが、半丁餘の所で初めての小瀑に會ひ、之を過ぎて更に右岸に沿うて行くと、果然奥の方が兩岸とも見上げるやうな見事な立壁となつてゐる。成程悪い谷だなと感心する。丸田はもう一二丁しか進めぬといつたが其通りで、二丁も進んだころ谷が急に右に折れ、正面に壯大な壁が現れた。なんで

も見上げたところ尾根上から眞壁にぬけてしまつてゐるやうである。上部は砂瀧をなし、中程から下は堅固な立壁になつてゐる。こんな壁は黒部川の下廊下にもさう多くはあるまいと自分は思つた。其處に第二の瀑が落ちてゐる。高さは一丈餘、同じく右岸を廻つて上に登つた。すると谷は復た右に折れてゐる、其の曲り角の奥を望める場所に来て前面を見渡すと、眞白な三四丈位の瀑が正面にかゝつてゐる。丸田はこれが行きづまりの瀑ですよといふ。兩岸とも河原はなくなり、透き徹るやうに眞青な流れが岸を洗ひて矢のやうに駛り、立壁は勿論廊下をなしてゐる。尾根の方は陽があたつてゐるが、自分達の眼前にある瀑には陽はさし込んで來ない。瀑のしぶきを浴びてゐると寒くなつて來る。此の瀧迄は丸田も數度來てゐるのでよく知つてゐた。成程丸田が昨夜話した通り、瀑の上の奥（谷が又左へ急に折れてゐるその正面）には更に素晴らしい大きな瀑があるらしいことがわかる。靜かに耳を澄すと、前面の瀑の音の他にゴウといふ音が奥の岩壁から響き互つて來る。林さんと吉田君等が丸田をかこんで何か相談してゐるらしい。どうにかして大瀑を見たいと思つても、正面の瀑の兩側の急壁は取付けさうもない。それにしぶきを浴びてツル／＼光つてゐる。皆河原の平地に集つて、この奥に大きい奴があるらしいねといふだけで、誰も取付く算段に就ては口に出さなかつた。

この行きどまりになつてゐる瀑の兩側は云ふ迄もなく、最初にこゝに溯つて來る時に、右岸は全く手がかりがないのみならず、ともするとかぶさつてゐるので、先づ登攀不可能と思つたが、左岸の早月尾根の方には樹木が、可なり壁の下まで生へてゐる場所がある。それに取付くには二十米ばかりは壁を攀ちなければならぬ、困難ではあるがロープがあるから、何んとかしてその樹迄登れさうに思はれた。それで私は丸田に、其處しか取り付く場所は無いよと言つて見た。丸田も上の樹にロープを取付けてしまへば、あとはいくら急でもつかまつて登れやうと言ふので、一行いよ／＼この左岸の壁に蜘蛛のやうにへばり付いたのであつた。一步步と根氣よくやることにして、丸田が先に立つて丁

度壁の中間に一ヶ所棚のやうになつてゐる所に登つた。僅か一尺あるかなしの幅であるが、續く五人も一人づゝ登つて、六人が横に一列に並んだ。そして其上の樹迄また丸田一人奮闘を續け、終にしつかり木にロープを結び付けて下げて呉れたのであつた。こゝは歸りにはとても降りられず、一人々々文字通り綱にぶら下つて降りた。樹のある部分からは、不安定な場所を幾度かロープをジクザクに木から木へ取付けて登つた。一行が初めて谷の奥に大瀑を望んだのは、百米位登つた地點からで、谷が急に第三瀑の上で左に折れ、半丁とも隔たらぬ正面に一大岩壁が聳え立ち、其處に百五十米程の池の谷の大瀑は落下してゐるのであつた。瀑は第一第二第三と三段をなし、第三のものが最も大きい。一行が大きいと喜びながら有頂天になつて木の俣にしつかり取付けてゐる姿も面白いものであつたらう。丸田は冬季この谷が白萩川に合する迄全く雪に埋つてゐる時、カモシカを撃ち捕ると急な雪溪の上をひきずり／＼飛ぶやうにして下りて來るのであるが、知らぬ中は兎も角、こんな大瀑を目のあたり見てはいくら冬でも今年からあの瀑の上を通るのは無氣味になつたと笑つてゐた。彼の話によると、冬季の池の谷は雪崩の爲に埋められ、輪カンジキで通過が出来ることであつた。かくて一行は再び壁に取り付いた所へ下つたが、この往復に三時間半（壁の登り一時間十分で、下りは一時間二十分）を費し、白萩川との合流點へ戻つたのは午後一時であつた。今日の中に三窓或は劍の直下まで行ける望はなくなつたから、都合の好い處でキャンプと決し、中食をとる。それでも夕方迄に再び池の谷の大瀑上の地點に下り込みたいと云ふので、丸田が前に通つた覺えがあると云ふ、小窓から來る尾根を乗越すべく池の谷の落口を出發した。

#### 四、小窓尾根乗越

池の谷を落口より溯行して大瀑を望み、更に大瀑上で再び池の谷に這入り、之を溯るコースを行ふ

とすれば、どうしても避け難いのはこの小窓尾根の乗越しである。大瀑は早月屋根から望むことも不可能だし、又そこから谷へも降れない。ところでこの小窓の尾根が非常に悪い乗越しで、終日藪と、實に急なザレとを上下しなければならぬ。午後一時五十分池の谷落口を出發し、二三十分餘り白萩川右岸を高廻りの小徑に沿うて進み、雷岩と稱する巨岩の側から積に下りて對岸に徒渉し、少し河下に下ると狭い急な涸澤に出る、それについて密叢を押し分け尾根へと上つて行くのである。この登りが二時間餘、展望絶無で、霧或は降雨中には無理と思はれる。尾根に出ると展望は相變らず無いが、池の谷の深谷が樹林の間よりチラ／＼瞰まれ大瀑上流の惡場が初めて眼に入る。尾根上に達したのが午後四時。丸田が木登りをして池の谷側を見通してゐる。もう少し尾根通し行かないと下る途がないと言ふのでリニツクサツクの重みを感じながら進む。池の谷側は藪の中に斷崖があるらしく、急で下が見えない。その内尾根は次第に狭くなり、白萩川側も悪くなる。尾根は鬱蒼と茂つた山毛櫸や黒木の暗い密林で、僅に熊の通過する跡を認むるに過ぎない。巨大な倒木も多く従つて歩きにくい。その内に池の谷大瀑上の様子が稍々指點されるやうな場所に來て、木立の間から大瀑上に、更に第五瀑を見ることが得た、目測五六丈位であらう、眞白に落ちて其の音が谷間にこだましてゐる。見下ろすと大瀑の上で谷は再び右折し又左折してゐることがわかる。尙少しく内に先頭の丸田が劍が見えるといふ。一同丸田の所へ集つて初めて仰いだ劍の姿。自分は未だ曾てこんな豪壯な劍を見たことがない。いかにも、劍の眞裏を思はせるその岩壁の急さ、それに三窓から絶巔に至る池の谷側の岩峰の連續、全く岩の大聖壇といふ外に形容の辭を知らない。そして明日溯らうとする池の谷の雪溪が矢のやうに三窓あたりのピークの間へ突き上つてゐる。一行はこの眺めにすつかり満足してしまつた。丸田が此處から谷へ下れさうだと云ふので、五時頃藪を分けはじめた。二三間先へ行く者の姿が見えない程密生した陣竹で、降りると云ふよりか滑べり落ちる方だ。それでもしつかり根につかまり緊張しながら

雪溪へ出た時にはホツとした。谷はもう薄暗い。雪溪に下りてから少し上ると右岸に段丘がある、其處が野營地と決められた。池の平附近で鑛石が發掘された時、二十幾つかの丸田は此處を根據として池の谷で發掘に従事したとのことで、當時の記憶を辿りてすぐ其位置を探し出したのであつた。各自分擔して急ぎキャンプの用意に取かゝる。私はキャンプ場が、雪溪に沿うただら／＼な傾斜地であるから地均しをしようとして掘ると、茶椀七八個と鐵鍋一個を掘出した。丸田はそれを見て發掘當時に埋めた物だと云つた。随分古い物である。なんでもこの谷は往復の困難に加へて餘り鑛石も出ないので直ぐ中止したとのことである。

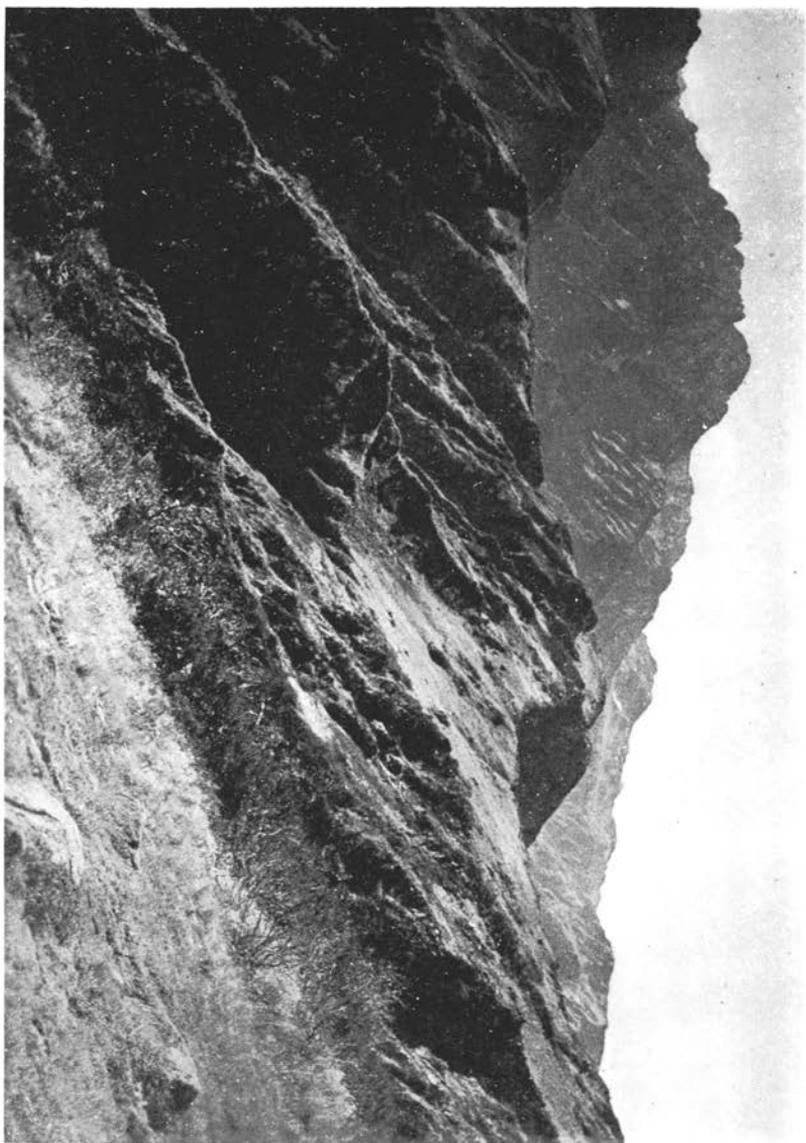
### 五、三窓へ

七月二十七日、快晴。昨夜は實に寒かつた。私は幾度か夜半に目がさめる。それで今朝は未だ夜の明けきらぬ間に、丸田と共に先に起きてしまつた。午前三時半頃であつたらう。谷は太古の如く靜まり返つて、今日もよき日を思はせ、そよとの風もない。眞暗闇の谷底で焚火が眞赤に燃上る。時々パンと火がはねるので、その音に目を覺してか、一人二人と天幕から這ひ出して來る。三窓あたりの空がどうやら白らみはじめると、未だ暗い谷間ではもう名も知らぬ小鳥の啼聲が耳に入つて來る。

野營地の位置は五萬分一圖の池の谷と記入してある谷の字あたりの右岸にあつてゐる。私は大瀑の頭迄行けるものと思つて、吉田君と二人で空身でビッケルのみ持つて朝の内に出かけて見た。ところが野營地から二三丁行くと廊下になつて、廣い雪溪も次第に狭く、大きなクレヴァスなどがあり、到底進めない。小窓續きの尾根から見た第五瀑迄も行くことを得なかつた。これから推察すると池の谷の通過不可能の個所は、五萬の圖の谷の字あたりから早月尾根側に記入されてある一四〇〇の數字あたり迄で、その間は雪溪もクレヴァスが多く兩岸は壁らしい。

影撮氏耶次松冠

む梁々山諸の土浄・玉龍・山立・劔に南りよ上山勝毛





二人は七時頃野營地に戻つた。朝食を濟して七時四十五分に一行は雪溪を登り始める。想像してゐたより幅もある大きな雪溪で、尾根の間を深く、三窓へと喰込んでゐる。野營地附近からは、三窓の頭や小窓の頭邊がすぐ上に仰がれて、まるで巨大な鐵門の中へと這入つて行くやうな氣がした。約一時間餘にして八時五十分に地圖の池の字の上で雪溪が大きく二分してゐる處に來た。向つて右に喰入つてゐる雪溪は、劍の頂上とそれから出てゐる早月尾根の第一の鞍部邊にのし上つてゐる。この邊から遙に池の谷の入口の眞上に伊折方面が望まれる。快晴なので一行元氣で湖る。心配だつたクレヴァスも現れず、もう雪溪の上のみ行けるらしい。十一時近く地圖の最後の壁の部分の登攀を續けてゐたが、幾度か休み／＼二時間餘り登つたけれどもなか／＼窓に達しなかつた。雪溪もかなり急になつたので、吉田君の外は皆アイゼンを付けた。一行は大きにへばつて十二時近く最後の窓下のガレにかゝつた。先頭の丸田がゴトンゴロンと墜石の起る毎に、谷中に響き互るやうな大聲を張上げて後から續く者に注意する、夫が次から次へとひつがれる。少しの間であるが急なザレで墜石が多いから警戒を要する。然し大部分は一行の登路には關係の無い方面に落下するので割合に危険は少ない。午後十二時五分三窓着。悪天候の後の快晴、それは洗ひ清められたやうに爽やかな空である。尖銳を誇る鹿島槍の巔に一抹の浮雪があつたが間もなくそれも消えて、後立山山脈の空容を望み得る壯觀には、晝食をも忘れて、残雪の上にならんだまゝ飽かず眺め入つた。私は三窓へ來たのは初めてであるが好い所である。山の窓とは大自然が作り上げた、それはほんとに窓のやうな處だと聞いてゐた通り、全く物凄い巨大な壁が兩方から迫つてゐる、風通しのよささうな所であると思つた。一同中食をとつてゐると何時の間にか白萩側に霧が湧いて、見る／＼中に池の谷を埋め、三窓から劍の頂に續く鋭いピークに向つて盛に突貫を試みてゐるが、劍澤の方は未だ陽が一杯にあたつてゐた。然し一行が中食を濟まして、立ち上つた時には三窓の頭も既に霧の中であつた。丸田が荷も重いし、それにこの霧では山

稜傳ひは困難であるといふので、皆おとなしく三窓の雪溪を下ることになった。

## 六、劔の小屋へ

三窓の雪溪は未だ七月なので、窓上まで雪溪が来てゐた。午後二時劔澤北俣の落合に着く。此處で三日目に初めて、池の平から劔の小屋へ、劔から池の平へ向ふ登山者の幾組かに會つた。劔澤の岩小屋附近まで來ると、二十人許りの人足の飯場があつて、今年新らしく増築するといふ劔の小屋の材料を切出し、それを運搬する鮮人が劔澤の雪溪を上下してゐるのを見た。午後六時劔の小屋着。

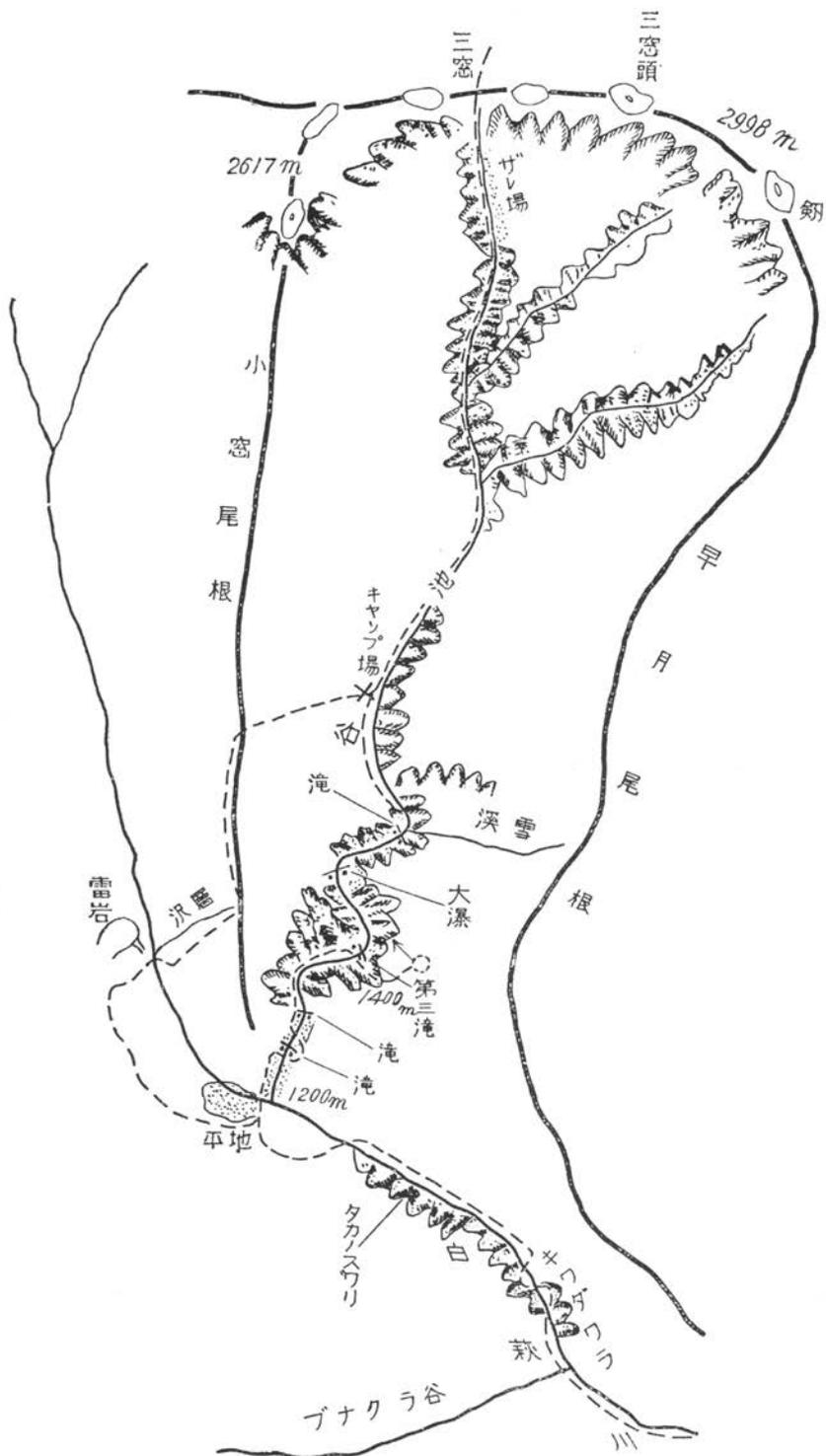
七月二十八日、晴。今日は午前中に劔を往復し、午後藤田、井上の兩氏及び丸田と雷鳥澤で別れることに昨夜相談が一決してゐたので午前七時に別山尾根から劔行の幾組かに交つて出て行つた。私だけ一人残つて晝食の用意をする。そして小屋の老人と二人きりで皆の歸るのを待つてゐた。それで午後一時に一行は小屋を出發し、雷鳥澤の乗越上で今日中に立山川を降つて發電所に歸ると云ふ井上、藤田兩氏と丸田とに別れを告げ、私達は室堂を通過して更に弘法茶屋をさして急いだ。

## 十二月の鹿島槍ヶ岳

小池 文雄

嚴冬の雪に磨かれ、幾多の急峻なるルンゼを追ひ落として、霸王の如く北アルプスの中部に蟠居する鹿島槍ヶ岳。其の主峰と、東北に連なる、背較べの鋭峰とは相待つて肩を怒らした、鹿島の雄姿。其れは吾が幼き頃より、西の空を劃る一つの限界であり、其の山の彼方を想ふ時の、無限への第一階

白萩川池の谷見取圖





梯であつた。吾が故里の町より望み得る北アルプスの連嶺中、最短の距離にあり、又最も雄偉に見える山の一つにてありし。而かも東方遙かに之を望むときは、其の主峰と、肩較べの尖峰とは何れ兄たり難く、弟たり難く、東西南北面のあらゆる方面より、望み得るものの中、最も急峻に、最も近より難く見ゆるは東面の姿である。併し殊更に我が心を、強く惹き付けたのは、昨春五月初旬、雪の針の木登攀の際、蓮華の尾根より北望した時の、肩怒らした其の姿であつた。それで望むらくは、雪の境にある、原始の姿に、其儘置かれし、鹿島槍を訪れんとの念慮を抱きしは昨夏以來、殊に強烈なるものがあつた。最初は新雪に掩はれし十一月の鹿島を試みんとしたが、種々なる事情のために果たすを得ず、遂ひに昭和二年も暮れんとする十二月に到つた。

### 一、考 察

スキー登山としての、鹿島槍ヶ岳は、積雪の状況、山膚の相を、親しく觀察する迄は、其の對照とすべく、あまりに恵まれざるものと思つて居た。少くとも滑降本位、享樂本位からは遠ざかつて居たものの如く思はれた。其の形相から云つても、人界を、遠く誇示して立つと、云つた格好であつた。そして此の山を、やる計畫の上から、次の事柄を考へた。

登路。雪崩と登山時期。天候。根據地。

一日の垂直登高度と、體力、時間と、危険地通過の、時間的相互關係。

今迄鹿島槍ヶ岳の、スキー登山としての言葉にあてはまるべき、冬期登山は、記録無きものの如く、只陽春三月かの頃、某々等の人鹿島區を出發して、矢澤の尾根より、祖父岳に出で、尾根傳ひに、鹿島槍まで日歸り往復せられた事を聞いてゐたが、該登山には殆んど、行程の全部を、輪カンジキを以て終始せられた様に記憶する。此の尾根の往復は、時間的にも、勞力的にも餘程大なる犠牲を覺悟

しなければならなかつたであらう。日の短い、十二月、一月としては望めない事であらう。自分としては未だ夏の鹿島槍も知らなかつたが、家から毎日見得る關係上、全くの未知からは稍々、遠ざかつた親しみを持つてゐた。昨年十月頃より該登山の計畫を進めるに就て、地圖を開いたとき直感的に冷の澤を頭に浮べた。勿論鹿島東南側の冷の澤に向つては、十數個の狭谷が落下して居て、彼の附近での最も雪崩の多量に出る個所であつた。危険率多き近路と、避け得らるるならば、之れに代るべき、勞力多き迂廻路とがあるとき、後者を探るのが登山家の常道であり、又最上の策なるものであらう。併し其處には、矢張り目に視えない誘惑があつた。雪崩に對する觀察と、考慮とが、其れを避け得らるるならば、あの冷の澤にシュプールを印して見たいと云ふ、欲望が腦裏を無意識に占有して居たのかも知れぬ。それで兎に角、冷の澤を登路と決め、其のどん詰りから、何れか一つの、狭谷を登り詰めて、布引岳の附近に出で、其の尾根を、スキーデポットとして、鹿島槍に行かうと云ふ腹案を立てた。雪崩に關しては、乾燥新雪雪崩は、鹿島の東側の様な、急な部分では、嚴冬の候でも可成頻繁に出るものと思はれた。表層濕潤雪崩は、二三月の候底雪が引締り、幾回もの降雪に因て、山膚の凹凸が少くなつた後は、尙更危険は大なるものと、思はざるを得なかつた。十二月は晩秋以來の雪が山を張り包んで間も無きため、雪は比較的少く、又寒氣嚴しきため、降雪後數日を経、クラストを形成せし後ならば、或る程度迄は危険を避け得るものと思つて、登山期を十二月下旬から一月に取つた。勿論、休業の都合もあつた。併しスキーの操作に充分なる雪量、スキーの運動に對する身體のアクリマチゼーション (acclimatization) を考へるときには、三月を考へぬでも無かつたが、雪崩の危険を顧慮するときは、尙後者の不便を忍んでも前者を探らざるを得なかつた。又天候は勿論一月より、三月の方優れりと思つたのであつたが、時に依つては十二月、一月の「雪ナギ」の時は、却つて絶好の天氣に恵まれる事を空頼みもした。只鹿島槍の頭痛の種は、根據地即ち小屋の無き事であつた。若し

天候險惡な時は、折角プログレスキャンプを山懐に設定しても徒らに幾回も鹿島區に逃げ歸らねばならぬと思つた。雪の中に、二泊以上野營する事は、到底小人數のパーティーの、能くする所では無く、又各人の體力、保健の上からも大なる苦痛を、忍ばねばならぬ事である。それで若し野營するとすれば、丸山を廻つて一五〇〇——一六〇〇米附近か。或ひは全然野營せずに鹿島から往復するとすれば、長時間の連續的勞作と、歸りの夜に入るを覺悟せねばならなかつた。鹿島槍の標高は二八八九米、部落の高度は九七〇米、一日大約一九〇〇米の昇降は、夏山にしても勞力多きものであらう。又雪崩の最危険地帯なる冷の澤のどん詰りから、尾根筋の二四〇〇米に出づる數時間の登高は、少くとも午前中に終らねばならぬと考へた。野營か、又は早朝の出發かは、其の場に當つて決する事にした。

携帶品目

スキー一足。兩杖。フィットフェルト縫具二足。アザランの皮。アイセン。スキー靴。

ビッケル。ノールエヤンゲートル。輪襪一足(各自)。豚油一罐。アルミ塗蠟コテ。パラフィン。ワックス、レコード。

スキー帽一。防水上衣一。紺サージズボン一。

毛シャツ三。セーター一。毛猿股二。毛靴下三足。毛ツホン下二。毛ワイシャツ一。下手袋一。毛外手袋二。寢袋一。普通ゲートル一卷。

三人用天幕一。飯盆一。リュックサック大型一。リュックサック小型一。磁石一。時計一。寫真機一。黄色スクリーン一。手斧一。コ

ツヘル一。アルコール一立。メター一〇〇個。寒暖計一個。パッドメーター一。ランタン一。蠟燭二打。懐爐二。同上用灰一打。

針金五尺(B. S. # 20)

地圖五萬分一、大町、立山、白馬、槍ヶ岳、同二十萬分一、長野、高山。

豫備食料品として

ビスケット三〇〇瓦。葡萄パン四斤。パイナップル罐詰三個。牛罐三個。氷砂糖百匁。白砂糖一斤。バター一包。キャラメル三個。

鹽切り一。鹽二〇匁。ココア一罐。マッチ。

大體以上の様なものであつた。

紀 行

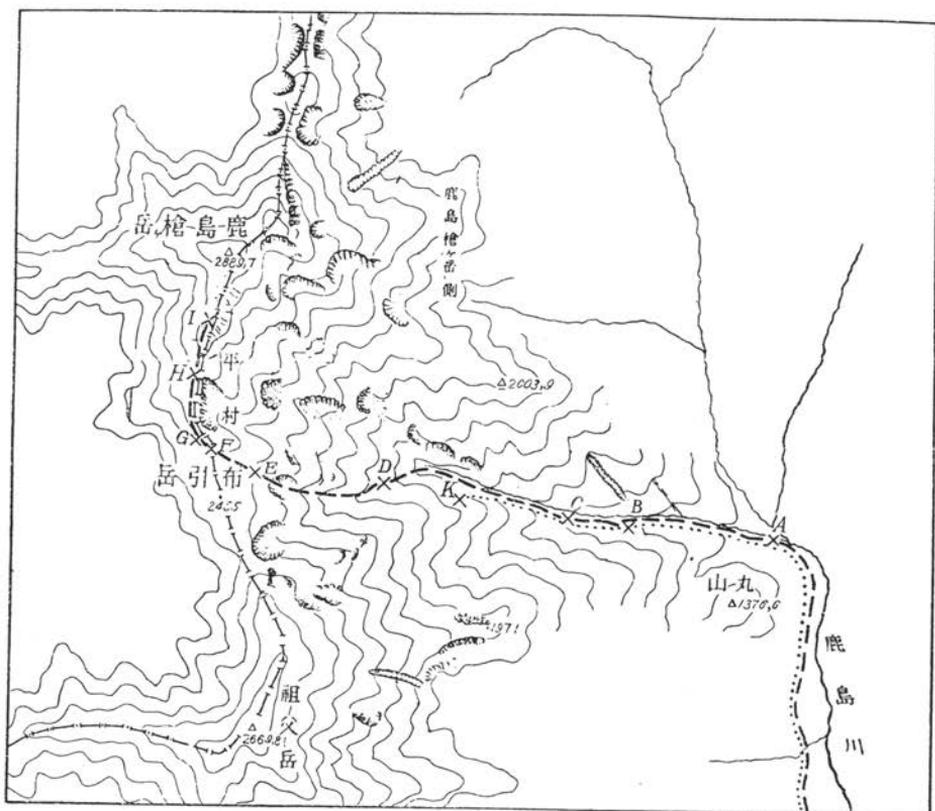
十二月二十六日。山中金次郎氏東京發、二十七日午後二時鹿島部落に到着、宮坂治作氏宅に泊る。

二十八日。山中氏のみ、丸山附近にてスキ―練習。

二十九日、小吹雪。午後三時筆者鹿島着、四時より足ならしのため、約一里スキ―平地行進を行ふ。六時歸舎。

山中氏午前八時より午後二時頃まで、丸山に於てスキ―練習。夕刻吹雪の薄層の雲の上方に、薄桃色のかすかなる。夕焼を見る。同日より行動を共にす。

十二月三十日。冷澤の積雪状況、雪崩の模様、野營地の選定旁々路を踏んで向後の行動に便なる様にと午前十時鹿島區發、十一時丸山の麓、十二時半「止り岩」(地圖にて一、二八〇米附近の谷の左岸普通春季の大なる雪崩も此の個所にて止るを以て此の名あり)着、同所にて焚火して晝飯。午後一時行動開始、谷間は積雪約五尺、スキ―にて一尺程埋る。ラッセルの苦痛を味ひつつ、更に谷の上流にさかのぼる。西股と、冷の澤との出合まで來ると、西股は真正面にベツトリと雪を付けて、爺の肩まで上つて居り、冷の澤は折れ曲つて、先は見えぬが、一七〇〇米の奥から此處までは谷全部が雪を以て被はれ、北側の斷崖が黒く露れ、所々の二三十間の長さの小ルンゼから落ちた乾燥粉雪雪崩が紡錘狀に岩壁のさには積つて居る。進むにつれ谷底の雪も、風に作用せられた、高山特有のハルシニトシュニ―が所々に混つて居る。一六〇〇米邊から一七〇〇米位までは、未だ雪崩の走つた形跡なく、谷の所々には堅きクラストの個所があり又全くの粉雪の所もあつた。午後四時一六五〇米邊より引き返す。山膚はまだ甚だしく雪崩に依つて荒されては居らず(或は雪崩があつても一昨日の雪で隠されて居たかも知れぬ)、鎌尾根の南の小急谷の如きも、僅かにゴロ(樹枝又は岩上の小雪塊が、轉落するにつれ増大



……三十日路踏を爲したる分

K、三十日の終點

———登降路を示す

A、渡河點—丸木橋あり

B、止り岩：雪崩の止る意、三十日此處にて晝飯

C、西股との出合：此所より上流全部雪に被はる、  
水無し(雪に蔽はる)

D、三十一日朝食をせる所

E、下降到スキーを用ひし所

F、スキーデボット：登高の時此所にてスキーを脱  
す、輪漕を履く

G、尾根筋：輪漕を脱ぐ

H、乗鞍の峯

I、天候惡變し引返したる地點



し徑一尺位になる雪塊球の雪崩が少々落ちた許りで、大なる雪崩は二十八日の降雪後は未だ一回も出て居らぬらしい。午後五時丸山の東側まで歸り來し時、東の空及び南天が、眞紅の夕焼に燃え、吹雪全く晴れる。治作爺に聞けば、あまり焼け過ぎて氣掛りだが、明日位は多分天氣になるだらうとの事。丸山から家まで一里の平な、暗い道を明日の事を考へ、皆興奮に燃え乍ら黙々として、歸路を急ぐ。六時歸舎。三人にて明日の事を相談す、兎に角天氣は今の所順調らしく、谷間の雪も、戸外の雪も昨日と今日の二日の風で、大分引き締り、クラストを形成した。野營は疲勞多しと考へたので、三十一日は午前三時頃に出發して、一八〇〇米の谷奥に達し、雪崩の狀況安全ならば、一舉にして鹿島槍を極めんとの心算で、次のやうな豫定を立てる。

午前三時發、四時丸山東側、六時今日晝飯せし場所、八時谷奥、十一時布引の尾根、十二時頂上。

午後一—二時スキーデボット、三時半滑降、六時歸舎（此の豫定は後で大いに狂つた）。

異狀の緊張を以て携帶品の選定を行ふ。リュックサックを處理して、前記の品目中より、天幕、飯盒を除き、砂糖、氷砂糖、バター、ビスケットの各半量、シャツ、セーターを携行、懷爐一個、コッヘル、メタ、握り飯、パン、寫眞機等主なるもの。罐詰は液體飲料たる、バイナツブル二個携行。アイゼンは、他の二人が携帶せざるに依り、行動の一致を考へて持參せぬ事に決める。午後九時明日の勞作を考へて強ひて就寢。

十二月三十一日午前二時、何時もはこんな時刻は、白河夜舟なのだが、流石緊張して居るので、自然と眼醒む。戸外は月が凄い程明る、透徹した空に凍り付いて居る。一抹の雲が天狗の峯にこびり付いて居る丈け、それも凍る月光に照らし出されて、白く映えて居る。冷い川水で顔を洗ひ、謙虛な氣持になつて、四方のかたを伏し拜む。やがて僕等の準備は出來たが飯は仲々間に合はぬ。治作の妻は山家の者にも似ず心配性で、夫の事を考へて氣にして居る所爲か用意が捗らぬ。飯を食つて戸外に出

たら三時半。家の西側の密な樹林が物凄くまでに、静寂に閉されて居る。鹿島の村を鹿島立ちとは、ひどく縁起がよい。凍る月明の中を、或る決意もて、さし／＼と鳴る寒雪を踏んで、我が故郷の父母に詫ひ乍ら敬虔な氣持で歩を運ぶ。出發が豫定より一時間遅れたためか、氣の焦りか、大きな仕事の前の興奮か、兎角足早になり過ぎる。

丸山までの道は、前日まで數回踏んで置いたので、行程は捗る。四時半丸山東側着、まだ下弦の月は中天に凍り付いて、夜は深い。凍る世界の只中に唐松其他の樹々の黒みが遠く近く、去來する。谷を西に廻ると、名に負ふ鹿島槍が月光に青くとぎ出されて、「ギョロギョロ」と姿を露はして居る。後の二人と自分は、二三町も離れた。四時四十分川を渡る。一四〇〇米邊の針葉樹林を過ぐる頃、西股の雪が月光に輝き、東の山の端が薄桃に映えて、世界は死より生へと、よみ返つて來る。夜明けも間近だ。冷の澤と西股との合流點に降り立つと、谷の奥から氷の山を撫でて來た寒風がやつて來る。面を刺す冷さに矢張岳に來たなと思はせる。谷底は昨日のシュプールのが、所々風で吹き消されて、右手の岩壁のみ冷く黒い。谷の左側の藪の蔭に身を避けて、後の友を待つ。朝食は他の二人が未だ食へ度くないと云ふので、更に行く。やがて昨日のシュプールの終點まで來て、之から愈々新雪を漕ぐわけだ。治作は輪標でもぐる事夥しい。時々待合はせる。六時半頃槍が濃い桃色に燃えて、朝の晴空にゴシツクの殿堂の様に屹立する。山の歡喜は只之のみ、自然への愛の酬ひは、之を措いて他なしとまで猛烈に、感心してしまつた。實際、今まであんな綺麗な雪の山を見た事がなかつた。併し其の物凄く迄に綺麗な色彩は、僅か十數分にして音なく消えて、灰色のいやに映えない雪の山とはなつてしまつた。あまりに激しい其の變化を、眼前に見せられた吾々は、一種の不安の念を抱かずには居れなかつた。八千米位の高空には、漣の様な淡いぼかしがやつて來た。併し治作爺が今日中は大した荒れにはなるまいとの言に、兎に角行く事にする。八時半一八〇〇米邊の谷底の、左に寄つた岩壁の下で、朝

食をやる。握り飯一個と、バイナップル鑢詰一個を開き、菜漬、鹽鮭で腹をこしらへる。この邊は盛に雪崩が走つたらしく、ディブリーが谷一杯に散亂して、其の上に新雪が薄く被つて居た。九時愈々布引右手の窪（方言にて「たて」とも云ひ尾根筋から本谷に出るまでの幅五六十米の急狭谷を指す）に取り付く。初めの中は谷幅が百米近くもあつて傾斜は強いが、ジックザックを切るには丁度よい。雪を仔細に見たが、二三日來の雪の割合に少い、強風ですつかり「クラスト」を形成して居り、陽も直接に照らないので、雪崩の心配は皆無と見たので、ぐんぐん登る。それでも腫物にでも觸る様な態度で、成る可くルンゼの中央に居る時間を、短くする様に、兩側について登る。午前十時頃、右手から合する少し小さい「クボ」との落合（多分夏はタルを形成して居るかも知れぬ）から、谷の幅が急に狭くなつた。此の岩陰にスキーをデポットして、輪漞に代へ様と思つたが、爺が「折角此所までスキーを履いて來たのだから上まで行つたらどうかと云つたので其の儘スキーで登つたが、後で考へて見ても、これからは徒らにキックタインの回数ばかり多く、急斜で、登高度が埒らぬから、此の邊が最も適當なスキーデポットだらうと思つた。二〇〇〇米邊から窪の中央に、幅一二尺深さ二三間のクレヴァスが開き、其の上を新雪が掩つて居るのに數個所出遭つて、氣味が悪かつた。之れは雪の自重で、自ら出來たもの様だ。十一時も過ぎ十二時も間近になるけれど、つい鼻先に見える尾根のゴーンシユに仲々到着しない。段々急斜になるにつれ、キックタインする毎に、厚さ七八寸の板状雪が足許から割れたがる。あれがウインドシユラップか否か確かな斷定は下せぬ。雪片が壞れてクラストの急斜の上を、カラ／＼と音立てて落ち行くのはあまり氣持のよいものでは無かつた。幸に日は照らないが、若しもこんな窪の真中で雪崩に押されたらばと考へると、氣が氣でないが、三人共朝の三時から動き通しなので、身體は綿の如く疲れ、十二時頃は一時間の登高度が一五〇米位にまで能率が減退してしまつた。雪庇の下約五十米の邊でスキーを脱ぎ、輪漞に履き代へ、少し登つて雪庇に到

着し、治作爺の努力で切り崩しにかかる。午後一時三十分遂に布引北端の肩に去る。尾根の上は雪が全く無く、此處も、祖父岳の西側も、申譯ばかりの雪が礫石の間にへばり付いて居る丈だ。風は猛烈に強い。併し劔は、立山は、別山は、何たる威容だ。殊に劔は氷にとき出され、雲高き灰色の危げな空の下に立ちほだかつて居る。猫又、毛勝も其の右方に白く連互する。あかず眺め入り度い山の景觀だが、何せ風が強くて面も得上げぬ。南の彼方には、本槍が眞黒に、其の左に前穂高は傾いて、ひどく鋭峻な山稜を追ひ下して居る。瘴惡な針の木の岩膚が間近に蟠り、蓮華は根張りが大きい。早速裸を取り外しふらつく身體を踏み堪えて二百米許りの登りにかかつたが、どうしても體が參りさうなので、葡萄パンを嚙り、バイナツブルの水をすすり、僅に元氣を回復して又出掛ける。靴は凍つて鐵の様で、足首から先は自由が利かぬ。其れが水を含んで氷つたから、石の上に来ると滑つて仕方がない。假松の上を掩つた雪は、一部は石の様に固く、又或る個所は膝まで落ち込む。二時十五分二七〇〇米の高所（土地にては乗鞍岳と云ふ）に到着、初めて鹿島槍の雄大な姿に接す、二三枚撮す。風は益々激しい。偉大な雪庇が二三間も乗り出して居る。鹿島槍は背較べを東に從へて、西に牛首の尾根を引き、悠然と灰色の空に構えて居る。此處から頂上までは夏路がはつきりわかる程雪は吹き飛ばされて居る。天候は最早や如何にしても支へ切れなくなつたものの如く、東の四阿、淺間の方も曇り始め、南の本槍、穂高の上を暗雲がかすめ飛んで居る。此の僅かの機會を捉えて頂上に行かんものをと努めたが爺は肯んぜぬ、そこで僕等二人で行く事に決めて、爺にスキューデポットに先に歸つて待つて居る様に云つて又更に鞍部に向つて下り、愈々最後の二百米許りの登りの少し手前に來た時、早や吹雪は劔の頭を掠め眞正面に此處に吹き付ける。今から頂上まで行つて還つて來るには更に一時間を要するものと思はねばならぬ。併し今は夫だけの餘裕がない。吾々の體力も亦餘裕があまり無い。全部を使ひ盡す事は考へものだ。天候の激變は情容赦もない。止むなく涙を吞んで眼前四五百米の距離に



社 ス ア ル ア  
影 撮 氏 雄 文 池 小  
岳 ケ 檜 島 鹿 の 雪 る た 見 り よ 北 上  
て て に 前 手 の 岩 り 止 下





鹿島槍の頂上を見乍ら引返す。今朝六時頃の祝福に充ちた氣持と、今の有様とは。併し何と思つても仕方が無い。二時四十分逃げる様にして輪カンジキを脱いだ所に歸着。再びカンジキを付けて倉追として、雪庇の東側に降る。信州側は全くの無風圏内で、今迄の尾根の風は夢としか思はれない。三時スキードポット。窪があまり狭く急斜なので、少しの間スキートを擔いで輪カンジキの儘で降る。越中側から飛んで来る風と雪とが頭の上を越してどん／＼東に運ばれる。二三〇〇米邊からスキードで降る。始めの内はキックタインを餘儀なくさせられる。自分は先に歸つて熱いものでも沸かす豫定で、治作爺と山中君とを残して先に滑降する。窪の中でも、本谷に出ても、雪質の變化には驚く許り。絶えず滑度が異り、衝動がやつて来る。冷の澤底に出ると、後は程よき谷間の粉雪とクルステの交錯する中に印する一本のシュブール。四時半前日の止り岩の個所着、マツチは濕つて點火出来ぬ。其の儘降りを出した、丸山から村までのあんな緩傾斜の上をも尙スキートははずむ程其の日の夕刻の雪のコンヂシヨンは又なきものであつた。五時三十五分家に歸着、ココアを沸かす。八時、山中氏と治作爺と歸つて來た。

併し何と恵まれたる事よ、幸なりし事よ、只鹿島槍の絶頂にビッケルを立て得ざりし事が一つの恨みであるが、九千尺の尾根に初めてスキートを運んだ事が一つの酬ひであつた。今日の行動の適切を缺いた部分は、狭谷の上部迄スキードで登り詰めたため、時間の浪費を招いた事、早く中岩の邊で輪カンジキに代へ、三人で交る交る踏んだなら一時間餘りは節約出来たかも知れぬ。案内がスキートを履けないため、行動を共にすることが出来ず、谷底に於ても又狭谷に於ても、兎角遅れ勝ちなので侍合はず必要上時間を徒費した事。午前十一時半頃、自分が濃厚なるバターのみを食したのが基で、氣分が悪くなり、今迄の調子でラッセルを續け得ざる様になりし事、出發に於て一時間遅れた事等で夫等の點

○御前岳、釋迦岳及酒吞童子山 竹内

を充分考へて掛つたら、樂に鹿島槍の往復は出來ると思ふ。天候には實際惠された。然らざる限りあのルンゼを登る事は普通の天氣、溫度では無謀に近いものであらう。併し實質的には完成したと何等選ぶ所なしとの喜悅を持つて居る。アイゼンの紐よ健在なれ!!

一月一日、小池歸る、大町まで治作爺同行。

一月四日、山中氏天狗に行かんとし、途中にて天候急變し、引返す。

一月五日、山中氏東京に歸る。

(終り)

## 御前岳、釋迦岳及酒吞童子山

竹 内 亮

は し が き

かつて九重の涌蓋山頂に立つた時北西遠く高原の彼方に地形の複雑した一群の山塊を望み、その中一際目立つ尖峯が八女、日田の郡境に立つ名山御前岳であることを知つて遊志切なるものがあつた。御前岳(権現岳)は海拔僅かに一二一米にすぎず、九州に於ても第二流以下の山であるけれども福岡縣下に於ては英彦山と並び稱せらるゝ名山であり、西部に續く八女の溪谷は山水の秀麗を以て知られ筑後耶馬溪の稱ある日向神岩の奇勝があり、杉檜竹の美林多く、特に御前山麓北矢部村上御側は後村上天皇の皇子にまします後征西將軍良成親王御終焉の地としてその御陵墓を存する等山水の美は歴史的哀話と相俟て宛然小吉野の觀がある。

私は本年（一九二八年）五月上旬小閑を得て久戀の八女の溪谷に入り二日に互つて福岡縣八女、大分縣日田の兩郡境にまたがる地方を跋渉し御前岳、釋迦岳（一二三一米）及酒吞童子山（一二八一米）の三山を極むることが出来た。以下その當時の見聞の一斑を記して餘白をけがすことにする。

### 一、矢部川の上流

五月五日、晴。昨夜は久留米の野草栽培家として知らるる竹田定氏の御宅に御厄介になつて深更其苦心談等に興味深く聞き入り、思はず朝寢をして正午近く竹田氏と同趣味の中村甚作氏を訪問した。氏は特にエビネ類の採集栽培に興味を有せられ、九州各地の山谷を跋渉して得られた數多い珍花の鉢で廣き客間は埋められてゐた。氏は八女郡の出身で私の行についてはいろ／＼と有益なる助言を下された。晝食の御馳走になつて竹田氏の御宅に歸り、直ちに旅装に改めて電車で福島町に至つた。そこから黒木町行の汽動車も運轉して居るのだが餘り體裁が不景氣なのに乘る氣にもなれず、折から通り合はせた乗合自動車の客となつて黒木町に至り、朝八時より一日四回出ると云ふ矢部川の最終の乗合自動車にすしづめにされて午後五時十分黒木町を出發した。

黒木町は矢部川上流に至る門戸で林産物の集散地として知らるる小邑である。自動車の發車を待つ間附近にある津江神社と云ふのに參詣したがその境内の樟樹は非常に巨大なもので旅行者の一見すべき價値がある。自動車が町を離れる邊矢部川に面した路傍に祇園社の境内にある有名な藤の古木を車中から發見した。この藤は最近天然記念物として指定された名木で傳説によれば後征西將軍良成親王御手植のもの由である。路は溪谷を縫つて進み右岸より左岸に移り、大淵部落を過ぎて暫らく行くと有名な日向神岩の奇勝にさしかかる。川をはさんで灰褐色の岩壁が高く聳え立ち、車窓から仰ぐと今にも倒れかゝりさうな無氣味な壓迫感を感じる。河床には或は巨岩磊々たる處或は一面の岩盤であ

る處或は深淵をなす處等景趣の變化中々に面白いが、右岸に注ぐ一支谷をはさむ奥日向神岩の奇峭をチラと望む邊で急に奇勝が終つてまた元の普通の溪谷の景色に移る。路は更に右峯に移りいくつもの部落をすぎ六時三十分終點の宮ノ尾に着いて直ちに唯一軒の旅舎である清水屋の客となつた。この宮ノ尾は矢部村に屬する一小部落であるが大分縣日田郡に通ずる要地に位し、矢部川上流部の中心地をなし村役場、小學校、郵便局等があり一寸した物資には事缺かない處である。宿屋も田舎としては上の部であつて食事なども相當に吟味してあつた。後庭にはツクシシヤクナゲ満開し、夜を徹して河鹿の聲がたえず山の宿らしい旅の第一夜をすごした。

久留米で前記中村氏からおきゝしたことによれば八女郡殊にこの矢部村は山幸の豊かな處で林産物の中杉材、竹材、筍の産額多く、又製茶業は八女茶の名で相當に認められて居るが、上物は一度京都に送られて宇治茶として賣出されて居るさうである。村民は概して富裕でしかも風俗淳朴だとのことであるが、自動車の乗降客なども知るも知らぬもお互に丁寧に會釋を交はす邊幾分その邊の消息がうかがはれて愉快であつた。

## 二、御前岳

五月六日、晴。午前七時宮ノ尾を出て御側川の溪谷の路を辿り約一里下御側に至り、左方の細徑を登り石段を踏んで上御側の後征西將軍良成親王の御陵墓に參拜した。御墓は大袖公園の前にし雜木しげる小丘を背にツガ、ケヤキの大樹の下に石の玉垣をめぐらし中に小土堆ありアヲキ、サカキ等が植えられ、ささやかであるがいと莊嚴な御陵である。玉垣外に制札と石標とがあつて石標には後村上天皇皇子良成親王御墓と記し、制札の柱には參拜者名簿が一冊備へられて居た。御墓の石段の下に一本の樺があつて側に故北白川宮能久親王殿下が明治二十六年五月三日御手植あらせられたことを記した

石標がたつて居る。大杣公園の由來を記す石碑によれば此の地は西征王府大杣御所の所在地である由で、前征西將軍懷良親王の御後を承けさせられた良成親王は菊池氏五條氏等の勤王の士を率ひさせられ専ら筑紫の賊徒討伐に従はせられたのであるが、南風遂にきそはずこの山間に退かせられて遂に此地に薨去あらせられたのである。その後陵域湮滅に歸したのを久留米高良山の權宮司の努力によりその御墓を發見し、明治十一年上申してその年の五月官は周圍一百四十間を御塋域と定めた由である。最近附近一帶を公園として大杣公園と名づけ櫻樹を植えて風趣を副え、小植物園を設けて御前岳登山者の參考に供する等の設備をして居る。再び下御側に戻り河原傳ひの細徑より山側の杉の造林地に入り又河原に下り、又山側をからんで少しく登つて水田の少しばかり開けた狭い平地に出た。谷が二つに分かれて居るのを頂上迄二十町と云ふ指導標のまま左にとつて行く。人家の前を通り杉林をぬけて谷川傳ひに登る。ここで左手に小徑が來り合するのを見たがこの小徑は上御側から直接通ずるもので前記御陵墓から下御側に引返さずに上御側から直接この登路に合し得ることを知つた。谷は水少く石多く兩岸の樹林も亦伐採跡地の雜木の叢林であつて荒廢した感がする。それでも木蔭にはノブキ、ヒトリシヅカ、クサヤツデ、コンギク、エゾスミレ等の深山性の草本が多く、嘗てこの邊にも美林のあつたことを僅かにしのぶことが出來た。十時三十分官林境に着く。ここからは急に新緑美事な喬木林となりシラカシ、センノキ、イタヤ、ヤマモミヂ、ブナ、ケヤキ等の中にツガが混じシキミ、ツバキ等がその下かげに生じ、落葉の間をツバキの落花が紅に彩どるあたりは中々趣が深い。急斜面を暫らく登つて尾根づたひとなる。處々に岩塊の重疊した處があつて路は中々險峻である。ツクシシヤクナゲ、ヤマグルマ等が多く岩角にはヒメスゲの軟らかな緑、ヒメミヤマスミレの可憐の白花が眼につく。少しく日かげの朽葉の堆積地にはヒトツボクロが花莖を抜き初めて居た。樹木の丈が低くなつて一しきり急な岩の多い徑を登つて十一時四十分頂上に出た。頂上は十坪許りの平地で煎餅狀の安山岩

片が一面にしきつめ中央に東面して木造トタン葺きの上屋内に木造の小祠がある。祠前には十數本の鐵のクハ形の槍が奉納してあり上屋の板壁には例によつて處せまき迄登山者のサインがしてあつた。頂上の周圍はアセビ、イヌツゲ、ベニダウダン、サラサダウダン、ガクウツギ、イハヤナギ等の藪でミヤマガンビがあると聞いて居たが遂に見つからなかつた。

頂上の眺望は中々に廣い。東に近く釋迦岳が少しく高く聳え、その左に遠く萬年山マンネンのメサ、右に遠く酒呑童子山、三國山及國見山等の連互するのが望まれた。三國、國見の背後には八方岳が怪偉の山相を盛り上げて居た。西は八女の山丘溪谷を一望しその間平家山ヒラヤが一きは高くそびえて居る。北方は筑後川の谷を距てて古所山から英彦山へ續く峯々が藍色に連つて居たが南東方の九重、南西方の阿蘇は亂雲の中にかくれてよく見えなかつた。食事をすませて午後十二時三十分釋迦岳への尾根路を辿り初めた。

### 三、釋 迦 岳

御前岳の頂上から東に下る小徑があつて指導標には「是より岩屋迄八丁、田代まで一里三町十五間」と記してある。田代とは日田郡に屬する前津江村の一部落である。しばらく小徑を下り岩角の陰を南側からんで少しく下れば小徑は幾分平坦な尾根を行く。ブナの巨木がスク／＼と立ち連なりその間にモミヂの類、ナナカマド、ヒメシヤラノキ、ミヅナラ、クマシデ、ホノノキ、クロウメモドキ、ハタウコン等が混じり、いづれも漸く芽立ち始めた嫩葉の梢を連ねて續き、その間オホカメノキの花の白色が一きわ目に立つ。小徑には落葉が厚く堆積して一步毎にカサコンと乾いた音を立てるのは何とも云へず心地よいものであつた。其の間二三の小岩角をこえて午後一時釋迦岳の尖峯の直下に辿りついた。灌木につかまりながら急坂を一氣に攀ち登り約五分の後頂上に立つた。頂上は極めて狭い岩峯で

西面した小石祠に釋迦の石像が祀つてあつた。ツクシシヤクナゲが多く、日當りのよいせいで今や花は眞盛り、實に何とも云へない美しさであつた。ここから見る御前岳は中々立派なピラミッド形で今や全山軟かな新芽の木立に包まれ實に美しい。南東に椿ヶ鼻の臺狀地を距て、渡神岳(二一五〇米)の尖峯が近く望まれる外眺望は御前岳と餘り違ひはない。二三枚のスケッチをすませて一時四十分頂上を辭し、小徑を南に向つてヒタ下りに下つた。しかしこの路は間もなく丈餘の笹に中斷されてしまつたのと、初めの豫定の椿ヶ鼻へ出る尾根ではないことに氣付いたのとで引き返へし、頂上近くから南東に走る主稜らしい尾根の喬木林下の厚い笹藪を分ち始めた。そこには小徑の痕跡さへなく、たゞめくら滅法に笹を潜つて進んだ。しばらくして笹がとぎれてヤレ／＼と思つたのも束の間で又一層厚い笹に惱まされ、やがてツクシシヤクナゲ、イヌツゲ、アセビ等の密生した一峯に辿りついたが眺望が充分に利かざアチコチと進路の選擇に時を費やし、漸く主稜の方向を發見して進んだ。やがて山火跡地を通過し更に樹林地を抜け、又右に山火跡地が接する山稜をキイチゴの刺に苦しみながら通過して三時四十分スキの多い一峯に立ち真下が椿ヶ鼻の臺狀地であることを知つて漸く前途に對する安心を得ることが出來た。しかし椿ヶ鼻に下る迄の草原の急斜面には中間に熔岩の懸崖があつて臺狀地迄下るのに可成手間取つた。

椿ヶ鼻一帯は千米内外の高臺地であつて釋迦岳と渡神岳とを連ねる尾根の最低處をなし八女郡の下御側から日田郡の前津江村大野に越える山路を通じて居る。一帶の草原地であつて夏秋の候はスキの穂が波打つ處らしいが、今は未だ草が萌え出した許りでゼンマイ、ワラビ、タチシホデ等が見られ又スキレの種類が中々に多いのを見た。

初めの豫定では渡神岳に登つて津江川の谷に下るつもりであつたが椿ヶ鼻でスキレの採集に意外の時間を費やし五時近くになつたので渡神岳行を斷念して南西の谷へ下る小徑を辿つた。草原がつきて

杉の造林地の續く急斜面を下り小流を渡つて山側を横ぎり、秋切の小部落を過ぎてひた下りに谷底に下つたが、その邊で小徑を見失ひ谷川傳ひのあるかなしかの細徑を求めて行く内いつしか谷川をはなれて山側に導かれ、やがてこちらの山側から對岸の谷底に渡す木炭運搬用の索道の處に出て初めて普通の通路が對岸にあつたことに心づき、急斜を下つて峽流の一本橋を渡り對岸の小徑に出てホット一安心した。未だ空には殘照があつたが谷底は最早夕暗が襲ひ始めて氣はあせるが、上り下りの多いこの細徑はいつ目ざす縣道に合するかの見當がつかず心細い前進をつづけた。やがて北又から宮園の部落をすぎる頃には農家には最早明るい火が入つて人々は爐邊に夕餉の團樂を始めて居るのがタマラナクねたましかつた。それに高地からは割合ツマラヌ山だとタカをくくつて見て居た渡神岳が今は高く高くその尖頂を夜の空にもたげて左手に聳え立つのが唯一途に私の氣持をイラ立たせた。がやがてはその氣力もうせてただ夢遊病者の様な歩みを谷底の一團の電燈へと向けて行つた。

やがて津江川の谷沿ひの廣い縣道に沿つた間地の部落に辿りついて橋本屋といふ宿屋に入つた時は日もトツブリ暮れた午後七時であつた。汚ない二階の一室に通されて宿料は一圓と八十錢との二通りだがいづれにするときかれて一圓の方にしてもらふことにし湯殿に案内されたが白濁りした湯が少しく残る程度なのにガツカリしたが眼をつぶつて一浴して後をよく水で流して室に歸り粗末な食事をすませた頃には幾分疲勞を回復して採集した植物の整理やノートの整理をしてる内に十二時近くになつてしまつた。トタン屋根にはいつの間にか大粒の雨の打つ音がして明日の天氣を氣にしながら寢についた。

#### 四、酒呑童子山

五月七日、曇後雨。私のとまつたこの橋本屋と云ふ宿屋は津江川の上流の鯛生金山タイオウへ物資を運ぶ荷

馬車挽の定宿なので夜中馬のいななきに夢を破られ勝ちでおかげで今朝は五時半には眼ざめてしまつた。外を見ると幸にも雨は上つて居て新緑の峽谷には朝霧が動いて刻々に山様水態を變化させて居る。今日は酒呑童子山に登らうか或は登らずに縣道を矢部村に越してしまはうかと思ひ迷ひ乍ら午前六時五十分間地を立つた。トンネルを抜けて峽谷の風趣に見とれながら行くこと約半里對岸の山腹にある堤の部落を見出した時思ひ切つて酒呑童子山に登ることに定めて川底に下り對岸に上つた。部落をはなれて瓜先上りの細徑を登るにつれて津江川の峽谷、對岸の猿駝山から釋迦岳、渡神岳、出雲岳に互る連峭が前津江の高臺を前景にして雄大に展開する。特に渡神山の尖峯は崇高そのものの姿で聳え立つのを見て昨日あの山に登らなかつたことを残念に思つた。路々開放された草原の斜面に楳木を密に立て並べ幅四尺長さ十間位の短冊形にしてその上に枯枝等を蔽つた椎茸栽培の方法を見た。この邊でも普通には椎茸栽培は林内の日かげを利用して楳木を置くのであるがここで見た方法は一寸風變りで私の興味を惹いた。

麓といふ部落から七〇〇米の同高線を横に走る小徑を平部落を経て中川内ナカカハチについたのは午前九時であつた。地圖によると中川内から酒呑童子山の頂近い肩をこえて上津江村の笹野ササノへこえる小徑があるのをたよりに頂上を極めることにきめて餘分の荷物を路傍の草かげにまとめて身輕になつて白雲の低い怪しい空模様を氣にしながら峠路を辿り始めた。極くなだらかな登りで九〇〇米附近の高さ迄杉の造林地の間に開墾地が介在し農家もポツポツ見られる。九時四十五分小さな製板所を横に見て官林境に辿りついた。官林に入れば景觀一變して實に心地のいゝ喬木林となる。なだらかな谷一杯にツガ、モミ、クマシデ、イタヤ、ヤマモミヂ、ブナなどがスク／＼と立ちならび林下にはモミヂサウ、ユキザサ、ミヤマタニソバ、ウバユリ、エゾスミレ、シコクスミレ等が一面に生じ、その間を細流が縫ふ様は實に心地がよい。特にシコクスミレの多いのには唯驚き眼を見はるのみであつた。谷をはなれて斜

面を登るとツクシヤクナゲやハイノキが現はれササも少しばかり出て来る。そして間もなく石の地藏尊の一基さびしく立つ峠の頂に辿りついた。時計を見ると中川内から約一時間を費やして居た。ここに來て反對側の山側が全く伐り拂はれて檜苗等が植えられて居るのを見た時は、最初に向ふ側にはどんな美しい森林が続くことだらうと期待が大きかつた丈にヒドクがつかりした。尾根には營林署の巡視路がつけられて居てそれを東へ登りさへすれば雑作なく山の頂上に行ける見込がついたのでルエツクサツクを峠の路傍に残して頂上に向つた。路は間もなく稍々平な尾根にかゝり、更に一寸した急斜をかけ上るとすぐ頂上であつた。路は更に東にのびて居るのを見たから東方の山麓からも登山出来るものらしい。頂といふのは五六坪の狭い平地で北側は安山岩の崖になつて居てツクシヤクナゲが多い。二等三角點の石標があるのみで祠堂一つないが、晒ののぼりに「奉寄進四十九歳の男昭和三年三月吉日」と記したのが一本立てられ、又満開のツクシヤクナゲの枝を折つて土に挿してあるのを見て、山岳そのものを神と見る日本の原始信仰の痕跡をここに見た様な氣がした。頂の眺望は中々に廣く西方に近く八方岳の怪偉な山容が群山を壓して聳え、北方には渡神岳の尖峯を右に椿ヶ鼻、釋迦岳、御前岳を中に猿駝山を左にして連峰が高く白雲の間に隱見し、東には九重の群山、南には阿蘇山が雨をふくむらしい灰色の亂雲の間に望まれた。約三十分を頂に費やして十時五十五分ここを辭し峠に引返して食事をして居ると中川内側から男二人に女一人の連中が登つて來た。ここに人が居たことは大分意外だつたらしく瞬間怪訝な顔付で私を見て居たが私から軽くアイサツの言葉をかけたのをキツカケに向ふも心易く側に尻を落着けて休んだ。三人づれの内の一人の青年は向ふの岩角にシヤクナゲの満開して居るのを見つけて尾根を上つて行つたが間もなく四尺許りで満開の花房をいくつもつけた美事なツクシヤクナゲの一株と數本の満開の枝とをたづさへて戻つて來て枝の方はすぐ傍の地藏尊に供へて禮拜して居た。やがて三人づれが峠を向ふに下るのをしほに十一時四十五分私も峠をもと

來た方向に下り始めた。路々植物の採集に時間を費やしながら官林を出たのが十二時五十分であつた。峠に休んで居る頃から少しばかり落ち始めて居た雨はとう／＼本降りになつて雨具を持たない私は中川内に行きつく頃には可成ヒドイぬれ方をしてしまつて居た。中川内で鯛生へ越す路を誤まり更に中川内の上の峠で又一度更に下の谷で一回路を迷つて思はぬ時間を費やし鯛生金山に出たのは午後三時に近かつた。この金山は外國人との共同經營で中々大規模な鑛山である。大きな製鍊工場の建物を外から見て八女郡へ越す峠道へと雨の中を急いだ。鯛生には日田からは乗合自動車を通じて居るが八女郡方面には特別に雇ふ以外には客用乗用の便は何もない。鑛山の上にあたる合瀬アヒセの部落をすぎ雨雲の去來する峠道を上へ上へと急いだ。途中近路のつもりで猿駝山の中腹の炭焼小屋に迷ひ込んだりして無駄足を踏んで峠の頂の切割を通過したのは四時三十分であつた。下りは出来る丈近路を選んで宮ノ尾に着いたのは六時であつた。最早黒木行の乗合自動車も出た後だったので再び清水屋の客となつて肌迄ぬれた服装を脱いですぐ入浴しどうやら人心地ついたので食後は又新しい氣持でザツト採集植物の整理をすませて十二時すぎ寢についた。

## 五、餘 錄

以下この紀行に關聯した二三の事項について補ひの意味で少し許り書き加へる。

### (イ) 御前岳

御前岳とは主に筑後方面で呼ばれる山名で豊後方面では主に權現山と云はれ又日本山嶽志によれば田代山とも云はれる由である。登路は筑後方面（福岡縣）からは前記の八女郡北矢部村上御側からするものだけの様であるが、日本山嶽志によれば豊後國（大分縣）日田郡前津江村大野字内代よりするものあり、又本誌十三年三號の八代氏の記事によれば頂上から前津江村田代に下つて居られる。陸地

測量部の五萬分一地形圖豆田圖幅には田代よりの登路が明記されてある。私の見聞によればこの山への登路は筑後方面からは上御側、豊後方面からは田代からするらしく登路の指導標もその兩地を連絡して建てられて居た。此の山は山容甚だ尖鋭で遠望に於て甚だ人目を惹き低い割合によく知られて居る。豊後國誌に「其峰尖鋭如削高出雲表」と記されて居るのはまことによくその實感を表はして居る。山中には植物の種類多く、位置は阿蘇水道の火山地帯を距て、九州南部山系と相對して居て地質構造上北九州に屬するにかゝはず、その植物群の構成はむしろ南方山地の型を示し阿蘇水道の火山地帯及び北九州の他の山岳と稍異なるものがあるのは頗る興味のあることである。

(ロ) 八方岳

私はこの山行に於て登山する機會はなかつたけれども終始その怪偉そのものの姿で聳え遠望に於て非常に私を引きつけたのはこの山である。位置は肥後國(熊本縣)鹿本、菊地の二郡にまたがり、山勢雄偉怪奇群山を壓して居る。

肥後國誌の記す處によれば一に筈岳(へスガ)と稱し、八面一様の觀をなし、山中猛獸多く頂には小池あり、又權現石のある處には天狗棲む由。山腹に隈部彌三郎親次のこもりたる城跡あり、天文十二年大友氏に攻略せられたること大友興廢記に見ゆる由である。

山勢北方は三國山、國見山に續いて居て北矢部村からこの二山を経て尾根傳ひに八方岳に至り得るもの様である。私は他の機會に於て國見山、三國山及び八方岳を連ぬるコースを跋涉したい希望を持つて居る。

國見山は筑後國八女郡と肥後國鹿本郡とに跨がる一〇一八米の山で、三國山はその東に連なり、筑後、肥後、豊後の交會に位置する九九四米の一峯であり、八方岳は前二峯より稍高く一〇五二米を算する。この三峯を連ぬる山稜は陸地測量部の五萬分一地形圖八方岳號によれば八〇〇米乃至一〇〇

○米に達ししかも左程險阻なコースではなさうである。久留米の中村氏によれば北矢部村宮園より國見、三國兩山への登降は一日行程として左程困難なものでなく、森林の美しいこと、植物の種類特に深山性の珍草に富むことは阿蘇の深葉山と比敵するものがあると云ふことである。深葉山は肥後、豊後の國境阿蘇大外輪中の北西の部分を含め最高點一〇〇〇米内外の高原狀の山地であるが、植物の種類豊富なこと知られて居る處である。

(二) 渡 神 岳

八方岳と共に今回の山行に於て私の注意を惹いたのはこの山である。高度一一五〇米にすぎず釋迦岳の東部に近く位置して稍々遜色があるが山形尖銳且つ崇高まことに群峯中の白眉である。豊後國誌には「峭峻蒼翠可掬」と記されて居るが更にこの崇高な感じの甚だしいことを附記したい。日本山嶽志によれば中津江村中西より登山し得ることを記してあるが、私の見る處では下御側から日田郡大野に至る山路を椿ヶ鼻に出でそこから尾根づたいに登ることが最も容易なコースの様に思ふ。又大野から椿ヶ鼻に出で同じコースを行くことも出来るわけである。

渡神岳は附近の釋迦岳、御前岳等が美しい原生林を有するに反し殆んど山頂迄杉、松の造林地であつて、山頂僅かに落葉闊葉樹林の存するのを望見し得る丈である。釋迦岳附近から望む時は、高度が稍々低いことと、原生林を缺くこととで著しく見劣りがするけれども椿ヶ鼻の一〇〇〇米未滿の高度に下れば可成崇高な高山として仰がれる。前にも記した如く津江川の左岸の高地からの遠望は最もすぐれ、釋迦御前の諸峯を壓して聳えて居る。

(三、七、二七稿)

## 雜錄

## ○春の乗鞍

黒田 初子

昭和三年五月五日、雪の乗鞍へ行く爲に、島々シマ々の電鐵に乗つた。傷がなほつて再び山へ行く私の喜びは、信濃平野の春と共に、譬へ様のない程、輝シメかしかつた。

島々シマ々から奈川ナガハ渡迄、乗合が通つて居る。この自動車路は、梓川ソウガハに沿つた非常に急な山の腹を、川から數十丈の高さの所に造つてあつて、道幅は、車が摺れちがふだけのものだ。深い深い谷の底には、水が勢よく流れ、その水は春の日に輝き、曲りくねつた川筋に突出た岩の鼻や、瀧のかかる様な急な澤を覆ふ松の間には、山櫻、梨花などが鮮かに咲いてゐた。然し、険のんな道を搖られて行

く車の中からは、こはくて、此の美しさも、泌々見てゐる勇氣は無かつた。

三年前の夏、秩父の甲武信岳コブシへ登つた歸り、梓山から、御所平迄ゴショウダイラ、トロッコをとばした時のこと、ガタリといふ音と共に、トロが線路からはづれ、リニツクサツクが投げ出されて、五十尺程下の川原へ落ちたことがある。同じ旅で、御所平から、小海へ行く途中、自動車が千曲川の吊橋から落ちさうになつたことがある。車輪が一つ、川の上に出たが、次の針金に引つかかつて、危い生命を拾つたことがある。其時のことなど思出して居る時に、同乗の友も亦自動車遭難の話をされるので、カーブの續く時には手に汗を握つて了つた。

奈川ナガハ渡からは、春光を浴び乍らゆつくりと歩き出した。此處迄來ると、道は川の近くに下りて居て、トロッコのレールが何處迄も續いてゐる。褶曲の細かい岩の間を流れる激流を眺め、梓川の本流を離れて左に折れて、前川マヘガハの谷に入つて行くと、今迄兩岸に迫つて居た急な山は、次第に開けて河原も見え出し、エメロードの美しい新芽に彩られ

た落葉松は、裾野の美を豫知させる。其の梢に止つて居た瑠璃鳥のコバルトの背は、いかにも春らしい諧調を與へてゐた。向ふ岸に緩かに落ち込んで來てゐる澤に、大きく電光形を切つて登つて行く峠路が見える。野麥街道から木曾に出る神祠峠の路ださうだ。梓川沿ひの道が雪崩で危険なので、自動車・電車が無かつた昔は、飛驒から木曾への間道として、相當に往來のあつたものだとのことである。其の頃は此の落合にある大野川の部落も繁昌したことだらうが、今は半分以上の家が兩戸も開かず、さびれてゐるのは山間の物寂しさを感じさせる。此處から谷を離れて斜にその岸を登つて行く。次第に美しくなつて行く周圍の景色に満足して、山に入るものの幸福を必々感じた。乗鞍の裾の番所が氣持よい村だといふことは、かね／＼聞かされてゐたし、村の名前も面白いと思つてゐたので、番所に近づいて行くのは、噫に聞く美しい人を見る様に樂しみであつた。村に入るには、番所原が川に洗はれて出來た急な傾斜を斜に登つて行く。

道は、未だ新芽の萌えない林の中に細くついて居て、右側のまばらな木立から、何時、乗鞍の眞白な姿がすかして見えるだらうと、一步一步待遠しく思ひ乍ら、まぶしい空を梢の間に仰ぎつつ歩いてゐた。左側はずうつと谷になだれ込んで居て、落葉松の美しい木立の立つた廣い河原の向ふには、大きなガレが望まれた。其の鼠色の荒れた岩肌も、山に來たと思はせる。道端に小さく祠つてある馬頭觀音に故無く頭が下がるのであつた。忽然と明るくなつて、愈々見えた、目を上げれば、近くの前山が僅かに残雪をつけて表はれたのだ。然し、愈々番所原に出たと喜びつつ行けば、大きな梅の木、蒼い枝の間に白い遠い山が光つた。急いで其の太い幹の立つてゐる小高い丘に上れば、前には大きな乗鞍が青い空を背景に、いくつものピークを正午の陽に輝かしてゐた。大きな山だ。番所の村は靜かにその懷に守護されてゐる様に見えた。其の姿を仰ぎつつ根元に腰を下ろして、考へるとも無く休んでゐると、ふと頭に浮んで來ることは、近頃續いて山が尊い犠牲者を要求

したことだ。あまり人が山へ山へと流行物の様に行く。近頃では冬の山にもどしどし登る。それで人の行けない山は一年中通じて無様になつて来た。又「あの山をやりました」とか、「征服した」とか言つて、如何にも山を征伐でもしたかの様に思つたり言つたりするので、山の神も、時々身を動かして、犠牲者を御とりになるのではないかしら。其の爲に、私共の大事な、ほんとに山を愛し尊んでゐた山友達の中からまで、いけにえを要求なさつたのではないか。と今時の人とも思はれない考へ方が、どうしても私の頭を去らなかつた。

午後六時半、若者に荷を負はして村を出た。往きかふ人も無く、静かな小徑を千石原・金山の方へと行つた。此の小徑は丘が丘へと波の様に續く低みを縫つて、寂しいスマレや翁草の咲いてゐる間を導いて呉れた。段々、尾根が兩方から迫つて来るあたりには、石ころの多い土地を耕やして開いた畑に、そばの枯れた莖が春の光に照らされて居た。其の間に、たぎぎをしまふらしい小屋が、梅に山側を覆はれて建つてゐたり、雪解けのうる

ほひに充ちた小川が緩やかに流れてゐたりした。岸に生えてゐる水々しい小さな草の影をうつして行く流に、恍惚と見とれて、何とはなくモネーに見せたい様な氣がした。

所々に残つて居る雪を、久振にふみながら、十分も登ると低い尾根に取りつく。そこで岩に腰をおろして休むと、弘美(案内人)の若い頬を夕陽が赤く照らした。

尾根には残雪の間から淡緑色の頭をやつと出したらばかりのフキノトウが、可愛らしく三つ四つ見えた。向側の谷を瞰下ろせば、廣いならかな雪の丘に、常盤木がまばらに立つてゐた。尾根を登つて行く道は仲々急で、時々立止つて汗をよきよき進んだが、案内はかどつて、左右の丘が段々低く見えて来た。「山の小屋」と弘美の指さす方角は、霞んで居て道の遠さを思はせるばかり。

黒木立に入つてスキーをつけた頃は、そろ／＼薄暗くなつて、只ザク／＼と雪を踏みしめる音が木の間に消えて行く。時々、縦の枝を切つてもらつて腰に敷いて一服する。一服とはいへ、煙草の

吸へない私は干果物をたべる。冬だつたら、此の黒木の枝も折れるばかりに雪が積つてゐることだらう。時折の風に吹き落される雪に幾度首を縮めて驚き逃げることであらう。寒くともあの童話風な鹿澤の三方の森の様な冬景色がなつかしい。

ここは八ヶ岳の本澤温泉の林と同じ感じだ。

山に行くと、谷も尾根も雪も風も、いつか前に旅した時のものに似てゐるなと思ふことがあつて、そんな時には同行者が、前の旅の時にも一緒だつた時は一層嬉しい。

木の根をよけつつ疲れた足で漸く尾根を二つ越した時、赤々と喜びの焔が眼に入つた。弘美が一足先へ着いて焚火をしてゐて呉れるのだ。あゝして疲れた色も見せず、何にも自分より優れたといふでもない他人の荷を負ひ、嬉しさうに山に従いて来る若者。そして骨身惜まらず働いてくれる姿を見ると、人間の持つ美しい情が泌々感じられる。

小屋はすつかり雪に埋つて、屋根が出てゐるだけである。真心そのものかと思はれる焔にすひ付けられた様に、最後の元氣を取り直して近づいて

行つた。赤々と燃ゆる焔、夕闇の襲ひ來つた雪の林、鼠色に凍りついて來た雪の面、黒々と濃く深く彩られて行く木立の群、それ等を包む静寂は、焚火の前に投出してゐる疲れた體をも、すつかり周りのものの中に溶け込ませてくれた。焔を見つめてこの嬉しい夕闇を味つてゐると、今迄靄に包まれて氣づかなかつた遠山の頂が、影繪の様に浮び出し、續いて赤い月が少しづつ頭を出し初めた。その上る足並の速さ。忽ち大きな黄色い圓板となつて空に懸る。

爐ばたでけむい目をこすり、ささやかな食事を済ますと、夜行の睡眠不足や、久振での勞働が一時にこたへ、シユラフザツクに夢中でもぐり込んで了つた。

翌朝克蘭ボンをつけ、八時に小屋を出た。雪の面はすつかり凍つて、硬い殻をかぶつた爲、スキ無しで樂に登れた。黒木の林は尙續いて、坂は益々急になつて來た。枝に覆はれた蔭は夜中にも凍らないで、ドザリと膝迄もぐらせられる事があつた。黒木も終つて、樺が出初めた頃から、傾

斜は緩やかになつて、前には惠美須岳の廣い斜面があらはれたが、乗鞍の劔ヶ峯は未だ前尾根に隠されて姿を見せ無い。其頂を早く見たさに、急な上りも心に止めず尾根の上に立てば、前は一面の雪の原であつた。遙か遠くに三つのピークが青空の中に輝いて居た。昨日番所から望んだ大斜面なのだ。あんなに美しく輝いて居た處へ來たのだ。目には遠く見えても歩けば何時の間にか行つて了ふものだ。あの頂へも、もう二時間もすれば立てるのだと思ひつつ、廣い雪野に足跡を残して、上つて行くと、ビィ〜と可愛い鳥の歌が聞える。岩燕ださうだ。静寂の大地に自分達のみと思つて居たのに、可愛い小さな生物がやはり春を楽しんでゐて、私供に呼びかけるではないか。春の歌を唱はなくてはならない。知つてる限りの雪の歌も聞かせなくては。

急な所はジクザクに、ゆるい所は足早やに、疲れば腰をおろして氣儘に上へ上へと登つて行くうちに、いつかは頂上に行けるのだ。攀ぢ登る所も無く、足を辿らす岩も無く、呑氣なものだ。時

折ふりかへると遠くの山が段々見えて來て、遂に惠美須の頂も目近に迫り、其の斜めなスカイラインの後には北アルプスの山々が望まれた。主人がスケッチをする間、リュックサックに腰かけて、槍、常念の前に聳えてゐる穂高の峯に見入つてゐた。其の岩と氷との蔭に大島さんは埋もれて了はれたのだ。この三月、青春の馳るが儘に、吹雪と冷さと戦ひながら、終に前穂高を永劫に自らの墓標として去つた人の事を思ひ、涙が思はずにじみ出た。輪カンジキをつけて先へ行く弘美に尋ねてみた。親達は山へ行つても心配しないかと。

「自分は五人兄弟の内の生残つた只一人ですから、父母が大事にして、到底一人で狩になど行かしてもらへません。獵には年上の人と行けばかりです。お客の御伴なら喜んで出してくれますが、山からの歸りがおそい時は兩親揃つて道端へ出て待つてゐるのです」と。

何處の家でも子供のことを心配してならうことなら山へ行かずにと思ふらしい。危いことはさせまいと願ふのは親心で有難いことだ。考へてみる

と山での死はさうざらにはない事だが、又或る時には如何に雪を研究し、登山の術の奥を極めても尙人間の力は運命に勝てないことがあらう。そのことも承知し、親達の心もわかりながら、危険の夏より多い冬の山へ何故行くのであらう。山の好きな者はその不思議な吸引力に打勝つことが出来ないのだ。

やがて惠美須岳と乗鞍岳との鞍部へ着いた。之から少し傾斜が急になる。そして風あたりの強い爲雪も硬く、左手は夏は崖であらうと思はれる急な斜面で、そのリッジには未だ少しの雪庇が残つてゐる。嚴冬に來たら雪庇は數丈突き出で、蒼い陰の色も物凄く。身を靜かに立止らせることも出来ない様な冷い風は、高山の盆地から吹上げて來ることだらう。今は春の風が吹いてゐるが、それでも尾根は烈しい風でスキを置いておくと飛んで行つて了ふ位。頂上の一つ手前のピークをスキードボーとして、足を拂はれさうな風を右から受けて漸く急な斜面を上ると劔ヶ峯の頂に着いた。烈風で雪が吹き飛ばされ、岩が少し出て居たが御

宮は大方埋つてゐた。祈るとも無く謙讓な氣持になつて頭を下げ、暫くして目をあげると、前に大きな山が雪を頭に頂き、長い裾をひいて鎮座してゐる。御嶽だ。少し東には木曾駒連山が波頭を泡立たして押し寄せて來る青波の様に起伏してゐる。山の上での喜と満足が申分ない程に味はれた。雪の乗鞍へ遂に來た。曾て槍ヶ岳の頂から見て驚いた立派な山。針木峠から望んだ優しい山。あの山の頂に遂に來たのだ。再び役立つ様になつた足の力。

スキをつけて風のすさまじいリッジに立てば嬉しさに胸が躍るのであつた。然し鞍部の小屋迄は足をいたはつて緩やかに轉ばぬ様に滑つた。去年の四月、白馬の頂から滑走した時の様な壯快な滑走は出來なかつたが、小屋からは足の自信もつき、出來る丈のターンをして滑つて行くと、今朝遙かに頂を望んだ急な前尾根の上に出た。ザラメ雪の上にザアーツとスキをスキッドさせて廻つたり、キンドスエプトで波の様になつてゐるクラストの上をトン／＼乗つて身體を彈ませながら滑

つた。前尾根の上の原は廣くてなだらかなので直滑走でまつしぐらに風の音を耳に感じつつ滑り下りた。弘美の姿はまだ見えなかつた程、離れて了つた。下手なスキーヤーも雪のよいに恵まれればこんな面白く滑れるものかとつくづく嬉しくなつた。下から「オー」と呼ぶ聲がする。汽車で一緒だつた一高の方々であつた。わざ／＼アザラシをはずしてスラロームを見事に描かれた。やがて其人達は山へ、私共は林の中へ「サヨナラ」の聲と共に別れて了つた。スキーの下手な私は林の中では一向にターンが出来ず、おくれ勝に大樹の間を縫つて行つた。その樹々は雪の上に斜に影を投げて、光と影との美しい調和をつくつて居た。登りに三時間を費した所をほんの僅かの間に來て了ふので名残惜しい心地がする。小屋で休んで三時頃スキーをつけた。昨夕疲れながらも焚火で勇氣づいて登つたあたりは只愉快に一瞬の内に通りぬけて、ジクザクに谷から尾根にとりついた所等も、寧ろ物足りなさを感じつつ一息に下りた。スキーで少しでも多く下ることを念じて居たが、林

の暗さが急に明るくなると同時に雪も草尾根に切られて了つた。鳥居の下から願れば右には高く劔ヶ峯が聳えてゐる。バラ色の夕陽が僅かに峯の肩に輝やき、影つた山の腹はオパールの様だ。今しがた滑つてゐた山の高さよ。思へば之から平野へ下れば又暫くは山を見ることが出来ぬのだ。此の山の稀に見る宏大な山容と、一日の内でも短かく限られたこの美しい嚴かな黄昏とを味はずに下りて了ふことは出来ない。次第に變つて行く夕方の光彩を飽かずに見とれて居た。

恍惚として坐つてゐた三人は、やがて腰をはたいて立上り、草の斜面を無言のまゝ下つた。遠く裾野の盡きる所に望まれるガレの手前に靜かに、平和に横つてゐる番所へと。

○葛野川小金澤

吉田喜久治

小金澤は小金澤山（黒嶽山）東北谿に發源する

ものである。

この澤を遡るには、中央線猿橋驛に下車するを便とする。驛から真直に甲州街道に出て、人家の稍々稠密した猿橋の町を東すること十數町にて猿橋を渡り、橋の袂より甲州街道を左に岐れて、百藏山南西麓をめぐる葛野川（七保川にても通ず）左岸の里路に入つて、下和田、大島、葛野の里落を経て葛野橋（七保橋）に依つて右岸に渡る。對岸の里落は田無瀬（林小字）と呼ばれ、七保村村役場がある。田無瀬の人家を通り抜けると奈良子川が合流する。

猿橋驛から此處迄俚稱一里半、小金澤橋迄四里半と云はれてゐる。

奈良子川を越えて、下瀬戸高地、井戸地など云ふ鄙僻な里落を過ぎると、かの麻生山が深い葛野川谷の奥に鋸齒状の山稜を南西に走らせてゐる。矢坪迄來ると、佐野峠の一角西原峠道の電光形の小徑が歴然と指點される。オモレにて對岸に大寺澤が入る。西原峠の上り口は、獨立標高點四八二米突の地點より左岸に渡り、小寺澤とアシ澤と

に挟まれたる尾根の先端に在る一軒家の背後から始まつて居る。やがて上和田に入る。大平から來る澤はクシゲ澤と呼ばれる。

丹波圖幅に於て上和田より葛野川右岸を深く遡る小徑の記號あるも、該小徑は廢道となり、現在にては上和田より吊橋に依つて左岸に渡り、竹の向の貧寒な里落を過ぎ、釜入への登路の分岐を見て小隧道を抜け出で、吊橋に依つて板小屋に達してゐる。然れども現在の道路も橋や棧道の維持費多額に上り、加ふるに最近橋が崩落して一二犠牲者を出せる等危険多き爲、以前の如く右岸に新道を開き、近く完成する。

上和田より板小屋に至る峽澗は葛野川の最も景趣の勝れたる境地である。

板小屋より數町にて製板の部落がある。猿橋驛から此處迄五時間を要する。

土室川も落口附近は遼幽なる境地をなし、落口の上流にテッポウがかけられ、分水山脈ツルネ山南麓に生ずる狼澤落口對岸小平地に數軒の人家がある。

本谷を廻るには右岸の道即ち山梨縣恩賜縣有林伐採のために開かれたる小金澤林道をとるか、或は小金澤橋を渡つて、長峯山末端土室川沿ひの小徑より分岐して八町坂の電光形の小徑を辿り、八町頭手前より分れて閻魔谷落口對岸栃平小屋に下るかするのである。

林道は百丈突餘も上を等高的に高廻りするので小金澤本流は殆ど見ることなしに、唯滔々たる激しい瀨音を耳にするばかりで、山の鼻を巡ぐつて行く。製板小屋に下る小徑の分岐點を過ぎると、小澤が入る。間も無く谷の底に小瀑を下瞰する。魚止と稱してゐる丹波圖幅葛野川の『葛』の字邊りへ注ぐ澤はシンナシ澤と呼ばれる。林道は正直に枝尾根の鼻を巡ぐつて行くので、その都度尾根を乗越して林道に出る。小澤を二つ程越えて、山鼻を一まはりする頃から、御坊山から佐野峠にかけての一帶が眼前に迫る。やがてスバノ澤を越える。『葛』と『野』の間に注入するものである。林道附近に破棄せられたる炭焼竈が二三あつた。次に『野』と『川』の中央に落つるものは閻魔谷で

ある。閻魔谷の一寸手前から小徑について水邊に下ると小金澤最奥の人家が唯一軒ある。小金澤橋より閻魔谷迄一時間弱の行程である。

シンナシ澤と謂ひ、スバノ澤と謂ひ、又閻魔谷と謂ひ、何れも丹波圖幅に水線の記入を缺くもので、水量も極く少ない。

さて本谷を河身に沿うて廻るには、林道について閻魔谷左岸の枝尾根を一周して、林道の終る所からテッポウの上手に下るのである。十一月の行に自分は閻魔谷右岸の小徑について落口に出で、廻らんとせしも、左岸をなす枝尾根の先端が深淵をなしてゐる。往路を一町餘も戻つて踏み跡について尾根に出で、急傾斜の山腹を綱を使つて鷄淵に下り、左岸削壁の上をへずり登つて瀑の上平場に達した。右岸は物凄く迄峭立してゐる。踏跡を辿つて、テッポウの所から右岸砂礫洲に下つた。砂礫洲の消える所から左岸に涉り、小澤の落つる上手より右岸に涉ると、一寸深くなつてゐる。左岸に絡んで巻き、右岸に行くと上手が激湍をなしてゐる。左岸踏み跡について巻き、水際に沿うて

へずつて行く。『川』の字附近に於て長峯山より分派する可成り顯著な枝尾根が谷を閉塞するかの如く垂下し、溪流は岩幕繞らすその裾を一周してゐる。左岸岩棚をへずつて右岸に移り、更にへずつて續けて行くと果然悪くなる。往路を引返し、適當な所から急峻な山腹に取り着き、一枚岩の垂直した壁の上をへずつて、苦闘の後尾根に達し、踏跡を辿つて水邊に下つた。本流は枝尾根先端に於て小瀑をなし、躍つて深潭に投じ、再び兩岸より押し狭められ、その間から奔出し、深い蒼碧の巨潭に渦巻き、潭一杯に沸騰させてゐる。この二つの巨潭の所から暫くの間は河中を右に涉り左に移つて行くと、又もや谷通しは悪くなるので、左岸を登り等高的にへずつて行く。幾度か河身に下らうとして、樹間を通して窺へば、溪流は藍碧の流れに白泡を立て、小瀑となり奔湍となり、隨所に深潭をなし、轟々叫音を上げて衝き落ち、全くの悪場をなして居るので如何とも致し方無くへずつて續行する。この高廻り中に對岸に小澤が瀑となつて合流せるを下瞰する、瀧澤であらう。川筋が

大分平穩になつてから岸に下つて、可なり長い間主として水際に沿うてへずつて行き、行き詰ると深い徒渉をしては對岸に移り、二回程左岸を捲いて、大樺澤落口も目睫の近くに迫る頃、再び悪場となる。左岸を登つて等高的にへずつて行くと、俄然谷は南曲して行手は高く削壁をなし、遂に前進を遮られて仕舞つた。急ぎ川底に下らんとせしも、例の如くの悪場で、餘程戻らなければ右岸に移ることは不可能である。すでに午後二時を經過し、日没近く進退谷まることを恐れて、鳩首協議の結果、遂に谷通し榮兵衛小屋行を割愛して、長峯山に登ることに決し、その儘攀ぢ登つた。一寸登ると俄然壁混りの峻險な悪場と化し、約二時間も休み無き登高を續け、辛うじて悪場を脱出し、長峯山カネツケ頭附近に達することを得た。

尙闊魔谷大樺澤間については俚人が常に小金澤の河身を避けて高廻りしてゐる小徑がある。自分の踏査せるものゝ概略を記せば、林道について闊魔谷を越し、一軒家を見下ろす地點より林道に離れて急斜面を攀ぢ、闊魔谷左岸枝尾根（丹波圖幅

に『保』の字のある尾根)に出る。踏み跡を辿つて一一〇〇米突等高線あたり迄登り、山腹を絡みながら下り、小ガレを横切つて小澤に出る。『保』と『村』の中央の澤で瀧澤である。瀧澤を越えて山腹を登り、一二八二米突獨立標高點北下約一〇〇米突の地點で一寸した平場(尾根)に達する。此處から窪一つ越えて、一二八二米突測點より分派せる西端の尾根に出で、急激に尾根末端端迄下降し、長峯山カネツケ頭南下に合流する大樺澤落口の上手迄下つた。大樺澤は水量大きく、落口の岩壁狭まつて瀑をなせる爲、直接澤について下ることとは出来ない。左岸の小尾根を絡んで本流川底に下ることを得た。これに依つて推測するに河身を通らずして本谷鏡ヶ瀑(マミヤの瀑)附近に出でること極めて容易であらう。

閻魔谷落口より大樺澤迄河通し約四時間を要し、高廻りすれば二時間弱の行程である。

大樺澤の落口を過ぐれば、本流は直ぐ瀑をなし、その上手に於ても二つ許り瀑を見せ、濃碧色の深い巨潭を湛えてゐる。御茶の水瀑と呼んでゐる。

左岸小尾根を絡んで瀑の上を捲いて猫額大の河原に下る。河原の終る所が一寸深くなつてゐるの  
で、右岸に涉り、直ぐ左岸に戻ると、小瀑をなしてゐる。其儘高廻りして水邊に下つた。一寸行くと右岸は平地に近い緩傾斜になつてゐるので、鬱蒼と茂る森林を縫ふて暢氣に行くと、河床に巨岩の蹲りを見せ、流は二分して島をなしてゐる。六人移りと呼ばれるものである。中央に岩小屋あり、露營せる形跡があつた。左岸の水際を傳うて行き、暫くして又右岸の緩傾斜地を行く。六人移りを過ぎると、上手に當つて鞆鞆の瀑音が峽澗を震動させてゐる。白草の所謂不動の瀑は、本流が北曲する地點に懸つてゐる。不動の瀑と並んで左手即ち右岸に障子澤が、これも落口が飛瀑となつて落ち込んでゐる。前述の如く右岸の山腹は非常にゆるいので、何等の不安も感ぜずに觀瀑することが出来る。

さてこの障子澤の位置については、地圖に於ける『金』字のある小澤であると、云ふてゐる人があるやうであるが、元來小金澤はあの濃密な森林

のため、霖雨の直後でさへも、水はあくまで清澄にして、さしたる増水を見ない。従つて僅々十町足らずの流程で、あれだけの水量がある筈が無い。自分は障子澤は一七七七米突三角點大樺頭北谿に生ずるものであり、地圖の『澤』の字のある澤であると信じてゐる。

瀑の下流、河中に小山の如き岩石が蟠踞してゐる。その下手を左岸に徒渉して、例に依つて木の根岩角に確保して攀ぢ登り、瀑の上に出る。この儘攀ぢれば一三二六米突の白草頭に達するのである。脚下削壁に圍まれたる底に、物凄いな唸りさへ生じて躍狂沸騰する瀑壺を覗き込んだが、しぶきの爲に様子が知れなかつた。薄氣味の悪い瀑の上をまはり、山腹を斜にへずり下つて河原に下つた。左岸に沿うてへずり、岩の鼻を二三廻ると、行き詰るので、一寸深い徒渉をして右岸に移り、高廻りをする。間もなく河がよくなるので河原に下り、直ぐに左岸を二度程絡むと、可成り大きな瀑が懸つてゐる。再び左岸を登り等高的に絡んで行く。この高廻りを終へると右岸に涉つて捲き、又

左岸を二度程捲くのである。不動の瀑から大菩薩澤（長峯山と雨澤頭より東走せるマミヤ尾根の谿間に生ずるもの）合流點迄は岸傳ひは全然無いと云ふてもよい位である。小澤を越えたと又もや岸から出てゐる岩壁に狭められ奔湍をなしてゐる。右岸を登り、外に適當な所が無いので、垂直に近い壁を下つた。確保するだけの足場も無く、指一本の手懸にも乏しい個所で、脚下は怒濤の如き狂瀾をなす激湍をなしてゐる。部分的に謂へば此處が最悪場であつた。この下つた所が砂礫洲をなし、大菩薩澤（名稱分明ならず）合流點であつた。大樺澤より約四時間を要する。

大菩薩澤は、榮兵衛小屋の傍を流れる小澤の落つる上手の瀑迄は、河通し行かれるさうである。本谷はドウの上手に於て、咆哮する二段の瀑をなしてゐる。猫谷尾根（當字）先端を絡み、第二の瀑の上に出ると、又瀑が現はれる。左岸岩壁の凹面に手懸を求めつゝ攀ぢ、瀑の上から右岸に移り、水際に沿うて大小二個所のガレを横切つた所が小さな淵となつてゐる。直ぐ上は岩が冠つて居

るので絡むことは出来ない、さりとて高廻りする  
のも臆劫なので注意すると、右岸の岩壁に丁度よ  
い鹽梅の位置に直線の割目があるので、それに手  
をかけて腰迄水に浸りながら身體を送り、一米突  
餘の小落差を上つた所に岩小屋があつた。こゝか  
ら谷通しは悪くなるので、右岸山腹に絡みついて  
登る。始めは溪流を見て行つたが、段々登つて行  
く中に、遂には瀬音さへ聞えなくなる。間も無く  
尾根に達して、少し下ると、樹間を通して瀑音が  
聞こへてくる。それを目當に横に等高的にへずつ  
て行くと、長大なガレに出たので、それについて  
ずり下つた。對岸には大瀑布が懸つてゐる。雨澤  
頭より雁ヶ腹摺に續く山稜東麓に生ずる細流を合  
せる「ミヤ澤」落口であり、絶壁をすさまじい勢で  
落下してゐる。瀑の大きさに於て不動瀑を凌ぐ程  
度のものなるも、惜しい哉境地が如何にもあらは  
である。

製板の人達は之を鏡ヶ瀑と稱し、従つて澤名も  
鏡ヶ瀑の澤で通つてゐるが、所謂猫谷の瀑が正し  
いではあるまいか。又一説には猫谷尾根先端の

瀑を指して猫谷の瀑と呼んでゐる者もある。

落口を過ぎると小瀑が連續する。第一は右岸を  
絡み、次の瀑も右岸を絡み、少し河中を行くと又  
小瀑をなす。今度は左岸を絡んで小ガレを横切  
り、岩石の狼籍とした廣い河原に出た。此廣河原  
は鏡ヶ瀑と『料』字の中間に位するもので、これ  
で本谷の悪場も一段落を告げた形である。もつとも  
小落差は相變らず連續するが、瀑と云ふ程のもの  
は全然無く、何れも容易にその右岸或は左岸を絡  
んで通過することが出来る。『料』字のある澤は眞  
木方面では大樺澤と稱してゐるやうである。其他  
右岸に入る小澤に上、下アレダシ澤の名稱を冠し  
てゐるやうだ。大峠直下に生ずる澤の合流點附近  
に於て、本谷は兩岸開けて谷幅が廣裕となり、水  
量激減し、それと反對に遠慮會釋も無く叢樹が密  
生する。門外漢には何であるか不明であるが、兎  
に角背丈の倍もある叢樹帯を分けて行くので中々  
行程は捗どらない。大峠の澤合流點上手本谷左岸  
に茅を以て造られた粗末な小屋があつた。眞木澤  
の人達が峠を越して小金澤に飛躍する足溜りて

あらうか、藁靴等取捨て、あり、冬期獵師が入澤した形跡があつた。

源流地は執拗な叢樹帯を脱すると同時に、著しく落差を増し、全流瀧となり、奔湍となり、階段をなして落走する。しぶきを浴び乍ら暢氣に絡んで行く。一二個所悪い所があつたが、高廻りする程でも無い。仰げば小金澤山（黒岳山）から雁ヶ腹摺に連互する黒木の山稜が、白霧の中に明滅する。大ヤケの大崩壊地の下迄辿り着くと、俄かに水量細つて遂に伏流となる。空澤を登り、叢樹を抜け出で、大ヤケの中央に出る。ガレは岩石の安定を許さぬ程度の急傾斜にて、よささうな箇所をへずつては登り、意外に時間を費して尾根に達し、寂寥とした仄暗い黒木立の山稜を南に辿つて、小金澤山（黒嶽山）に達することを得た。

大菩薩澤合流點より大峠の澤合流點迄約三時間、小金澤山迄約三時間を要する。

尙ほ小金澤を遡行するについての人夫であるが、同行者があり、綱でも用意して行つたならば不必要であるが若し連れるのであつたならば土室

川谷の中村時三郎を御奨めしたい。

最後に二〇一四米突三角點雨澤頭に對して小金澤山なる名稱を冠してゐる、それは地圖で見ると小金澤は扁狀溪谷をなし、何れも平等に連嶺の胸深く喰入つてゐるため、何れを以て本流と看做すかは問題であるとなし、恰も連嶺中央に位し而も最高峯である該隆起に對して小金澤山なる稱呼を與へしものならんも、本谷の歴然たる今日ちと不合理的ではあるまいか。小金澤本谷の頭即ち小金澤山であるべきで、矢張り地圖の記名通り、黒嶽山を別稱として小金澤山と呼んだ方が當を得てはいまいか。地圖で讀めば成る程最高峯ではあるが、無理にも山名を冠する程の隆起でも無いのであるから。此點については諸彦の御高教を待つ次第である。（一九二八・一一）

○雪の早池峯へ

上 關 光 三

雪の岩手山登攀に成功した盛岡銀行山岳部の  
 一ター坂本外三君の一行は本年度第二次計畫とし  
 て、岩手山と共に天然紀念物に最近入つた早池峯  
 踏破を敢行した。三月十七日の午後一時七分、上  
 盛岡發で盛岡建設事務所の厚意で建設列車に乗せ  
 て貰ひ、東京以北に無いといふ難工事の隧道のあ  
 る飛鳥着は二時半。先きを急ぐ一行はこゝで二十  
 分の休憩をとつて、直前の飛鳥山（實は無名山）  
 を一氣に越える。この邊の山容はスキを試みる  
 にはもつて來いである。區境峠着は午後四時半、  
 兜ノ明神の原生林を背に西北近く岩手の峻峰を望  
 み、西南遠き雲表には餘光に輝く鳥海山が、大宮  
 あたりから眺める富士位な景觀を呈してゐる。こ  
 れから宮古街道に出て蘆花の「寄生木」にある雁  
 邊、田代、松草を一息に、門馬の宿に着いたは六  
 時四十分。ひるの疲れに枕に通ふ閉伊川のせゝら

ぎも、峯に騒ぐ風も夢路に障らず、ぐつすり寢込  
 む。

○

十八日。天候の不安が出發を危ぶませて、延び  
 延びとなり、午前六時半に宿を出る。登山コース  
 を普通の門馬口にとつて、閉伊川を涉り御山川を  
 遡行する。垢離取場着は九時。これから檜林の密  
 林を分け攀ぢて一二〇〇米の邊りに來たとき、掌  
 大の獸の足跡を發見する。やがて一三〇〇米近く  
 とおぼしきとき、右手二〇米許りの密林中の倒木  
 の彎曲した蔭に三四歳？ほどの熊の正體を見つけ  
 る。注視すると別して驚く風もなく、極めて物靜  
 かに休養の體だ。密林の薄暗がりではあるが白い  
 地上に眞黒な怪物を發見したときは全く氣味よく  
 はなかつた。一行は直ちに反對側の左ヘコースを  
 とつて難を避け頂上へ急ぐ。この邊の積雪量は優  
 に二米を超えてゐる、路面は硬質となつて粉雪に  
 蔽はれてゐる。天氣は頗る快晴である。午前十時  
 五十分頃東方遙か連岳の盡んとする眞白な稜線の  
 蔭に蒼くくつきりと太平洋を認める。

○

密林を抜け出ると、曇る。雪は木立の枝頭に凍りついて美しい氷の花を見せてる。一五〇〇米に至ると岩は露出し加ふるに積雪が吹き飛ばされて薄いので、スキートの使用困難となり、コース側の岩陰へスキートを置き、シュタイクアンゼンを用ゐる。これから頂上に攀がるにつれて露面は氷化してピッケルの利かぬほどの堅さである。一五〇〇米から一六〇〇米に至る間は、特に岩が点在して地肌さへ露はし、イハウメ、イハヒゲは風に震ひながらほのかな青みを見せ、岩塊の凹地には、シャクナゲは早くも發芽の仕度をしてゐる。一六〇〇米にて無名の小鳥の矢のやうに飛ぶのを認める。一七〇〇米では岩塊にいてついた氷の花は一層物凄いいほどの壯麗さを示し、指先ほどの霰がひとしきり木魂を震はせながら頬を打つ。

頂上着が午後零時五十五分、氣温零下二度、豫想外の高温だつた、風は西南だが流石に強い。頂上で何物かを得やうとしたが一つの收穫もなかつた。雪に蔽はれた山頂が深い冬眠におちて高山の

威を示すほかに何物もない、たゞ一行の萬歳に和する風聲の交響樂シンフォニーそのみである。五分時の休憩に撮つた記念寫眞もどうやら怪しいやうな天候となつて来る。

○

午後一時登山のコースを逆に下山の途に就く。一氣呵成に垢離取場着は二時半、一〇〇〇米から山麓は、路面は解けてスキートの操縦が意の如くでなかつた。四時四十五分門馬着、泊る。十九日は午前六時二十分門馬出發、九時四十分飛鳥着、出發同様建設列車に乗せて貰ひ、午後五時四十三分盛岡に着、こゝに雪中早池峯登山のレコードを作つた。

(一九二八、三)

### ○車 上 談 山

八 代 準

「机上談山」は、旅に出掛もせず、疊の上で吹く山の熱である。「船上談山」は、出掛はするが甲

板上に寝そべつて、遠方から山を望んで吹き立てる熱であるから、此方がいくらか罪は軽い。「車上談山」は兎に角、山の近所迄は行くので、低山淺谷ならば、散歩位はしてみる丈の誠意はあるのだから、熱を吹いても大目に見てもらふ資格はあると思ふ。然し機關雜誌の埋草である點に於ては、「船上談山」と同様である。

歐洲大戰直後の中央歐羅巴の旅は、汽車の發着が不定な上に、坐席を得る事が中々困難で、幹線を通行する丈でも容易でなかつた、特に敵國であつた獨逸「バルカン」方面への旅は、一種の漂流を試みる様な行くなりばつたりで、食堂車はなし寢臺車もなく、一等の箱はあるが一等車に乗る様な奴は、何れ米國人か日本人か、戦時成金の奴輩であると云ふので、寒中でも暖房蒸氣を通してくれず、至る所「ネジバン」と腸詰の切身の入れてあるかん袋辨當で我慢しなければならなかつた。加ふるに各國共旅券の検査、警視廳への届出等面倒な手数が多く、國境毎の税關検査は嚴重を極め、眞に旅をするのがいやであつた。横道へ入ら

ねばならぬ山見物の旅等は中々出来なかつた。言葉の不自由な伊太利では、坐席占領のため早目に乗込んだ箱が、一汽車前の列車であつたため、眞夜中に目的地に降ろされたり、匈牙利では、乗つた箱諸共に、泰然として車庫の中に入れられたりした。然し流石に英國と瑞西とでは、汽車の旅が心持よく出来る様になつて居つたので、ひと通りの山見物をする事が出来た。

一昨々年頃又歐洲に行つて見ると、交通機關の狀態が、略戦前と同様に回復して居り、西比利亞直通の連絡列車こそまだ開けて居らなかつたが、Paris-Berlin-Riga の Continental Express も、Paris-Constantinople の Oriental Express も開通して居り、列車の發着が正確となり、食事坐席寢臺等も完備して、中央歐羅巴の旅が自由に樂になつた。山見物の旅も差支ない様である。

そこで伯林を根據地として居つた自分は、度々大陸中部に旅を試みた。或時などは當時一般投票によつて其去就を決せんとし、政治上の面白い新現象として、各國の注視を受けて居つた、Ober-

Schlesien の鐵工業・鑛山業を視察旁々、Berlin から Breslau, Oppeln を經て、Oderberg に出づ、靜に高まる雪の Carpaten を越へて Zsolna の町に至り、Tatra 山塊に源を發する Waag の谷に沿て下り、所々に残つて居る土耳其人侵入の城跡を車窓に眺め乍ら、流水に閉され寒霞に消えた Donau の岸に沿ふて、匈牙利の首都 Budapest に入り、議會や Matthias Kirche の建築に、Donau に架した美しい幾多の橋梁に、Opernhaus では歌劇の書物にも一寸見當らなす Zsidono 等と云ふ音樂に、又 Paprika-Karpfen Suppe に Tokaier の芳醇に、匈牙利氣分に浸つた事もあつた。又或時は Berlin より Dresden を經て Elbe 川に沿ひ、Sächsische Schweiz の奇勝に遊んで、Czecho の首都 Prag に入り、再び國境を越えて、奥國の首都なる、又歐洲に於ける音樂と美術の都なる Wien に遊び、Prater 公園の Haupt Allee 里餘の美しき並木道に馬車を驅り、Schönbrunn の庭園に散策を試み、或は古刹 Stephanturm の塔上より、遙に西南に雪の綿帽を被つた Schneeberg (二

〇七五米)を望み、其南麓なる會遊の Semmering の美しい景色に思を走せた事もあつた。又或年の春には、Berlin より Leipzig, Regensburg を經て、Passau から船で Donau を Linz 到下り、百花咲き亂る、Ober-Österreich の野や丘に、森林の美を賞し乍ら、Wien の定宿 Freiheit Platz の Hotel Regina に入つた事もあつた。Passau Linz 間の Donau の岸は Rhein の岸より山も大きく、河に沿て汽車の交通もなく、名所舊蹟こそ少ないが、野趣に富んで春の長閑なる川下りに應はしき遊び場である。又或秋には Berlin-Roma の F. D. Zug に乗つて、Nürnberg 迄一飛び、古城に Eisernen Frau の凄蒼なる感に打たれ、Hans Sachs の詩編を忍び、München, Salzburg を經て霜の山野を Wien に急いだ事もあつた。

Wien の北郊 Nussdorf の Löwe Brücke 上に立つて、北に Donau を見上げると、Napoleon の名を高からしめた Wagram につゞく、對岸の平野に臨んで、河の右岸には實に歐洲 Alps の最東端とも云ふべき Kaltenberg (四二八米)が迫つ

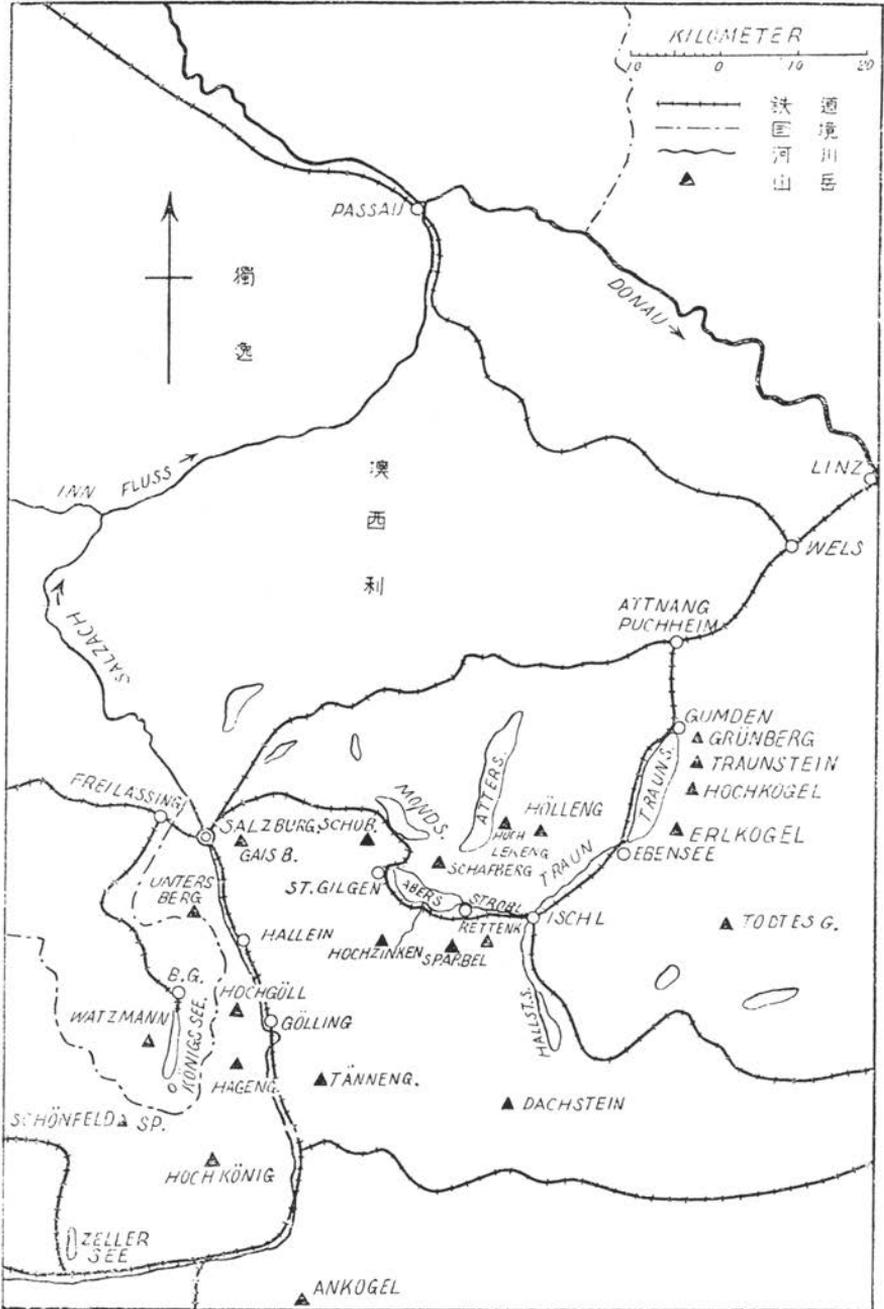
て居るのが見える。之れより西に Salzkammergut, Salzburg, Tyrol と Alps は追々と高くなり、瑞西に連なるのである。即ち Wien より西に Schneeberg (二〇七五米)、Hoerschwarb (二二七八米)、Niedere Tauern の Hoehgolling (二八六三米)、Hohe Tauern の Gross-Glockner (三七九九米)、Gross Venediger (三六六〇米)、Zillertaler Alp の Hoehfeiler (三五一三米)、Ötztaler Alp の Wildspitz (三七七四米) と連るのであるが、Tyrol の Alps の特徴は寧ろ其東南部に削成られた Dolomite の岩山にある。獨逸の國境に連るものは、標高はあまり高くないが、所謂 Salzburg Alp, Bayerische Alp であつて、獨逸人が自慢する山岳地方である。瑞西の Berneroberalp や Pennin-alp の様な所を、Alps 銀座通とするならば、此邊は差當り Alps 神樂坂通位な所であらう。此邊をうろつく人の風俗からして可なり田舎じみて居る。

「山岳」第十年二號の、故辻村伊助氏の「スキス」日記を見ると、同氏は Innsburg から Rosenheim

を経て München に出て、Salzburg に來ては何となく陰氣な町と感じ、此處で首をひねつて、Königssee や Salzkammergut を振り捨て、Zell am See に行き、Oberpinzgautal を溯つて Krimml に遊ばれた様である。成程 Alps 銀トラをやつて Café A. 1. の Mocca の様な Gross Schleckhorn 等をなめて來た同氏には、神樂坂通の Brazil の香氣では失望するのも尤であるが、番茶には又番茶の味がある、さう捨てたものでもないと思ふ思ふのである。Salzburg の Hotel Europa の二階から眺めた Untersberg の景色は、いつ來て見てもよい。Salzburg は歐洲に於ける自分の氣に入つた町の一つである。之れから辻村氏に振られた此邊の山見物の話をして見ようと思ふ。

大正十四年五月二十四日 Wien の West 停車場を發し、週日前に船を捨てた Donau の岸 Linz の町を経て、Salzburg に向つた(第一圖參照)。Linz から少し西に走つて Wels に来ると、こゝに Passau 線と Salzburg 線とが分岐する。Salzburg の方に尙少しく走ると、左手に Alps 特異

第一圖





の岩山が青く表れて来る。之れは Salzkammergut の Höllen Gebirge と Traunstein とである。やがて汽車は Attnang Puchheim に着く。停車場附近に居る人の中には、山装束に身をかためて居るのが五人三人うろついて見える。此所で Salzkammergut 線に乗換へ、電気機關車に曳かれて、Puchheim の城を右に見かへり、七八哩も南に走ると、先程見えな岩山に早くも近づく。

Gunden に來ると林の間から遙か左下に Gunden の村と Traunsee の水面を隠見する。やがて林は開けて湖畔に出る。所々に美しい Villa があつて紺碧の水とよく調和して居る。小波よする湖の對岸には、水面から直立した Traunstein (一六九一米) の、灰色の巨大な岩塊を盟主として、左に Grünberg (一〇〇四米)、右に Hochkogel (一四八三米) と Erlikogel (一五七〇米) が聳立ち、明るく感じのよい愛らしき、而も威嚴に満ちた景色が展開する。Sonnenstein の隧道をくぐる と Ebensee の村となり、長さ七哩半の Traunsee も終りとなる。右手に聳えて居るのが Höllen Ge-

birge であるが、車窓からは其最高點 Höllkogel (二八六二米) は見えなす。之れよりは Traun 川の谷を川に沿つて走り、Bad Ischl に着く。Salzkammergut 線は之れより尙も Traun 川に沿つて湖り、Dachstein (二九九六米) の麓なる Hallstättersee を迂廻して行くのである。

Bad Ischl は Traun 川と Ischl 川の落合にある、静かな小さな温泉町である。Ischl 川に臨む小高い丘上にある Hotel Bauer に宿る。Season にはまだ少し早いので客は甚だ僅かであつたが、中々よい宿である。下の Kurhaus Garten にも、まだ Cafe は出て居らず音楽もなす、町の小供が遊んで居るのみである。近所の岩鹽礦山から引てある鹽類泉と硫黄泉の温泉があるが、歐洲で温泉に浴する氣にはどうしてもなれなす、湯上りにシヤツを着てカラをつけ靴をはくのではどだい話にならん、然し近所には散歩を試みるによい場所が澤山ある。Season には可なり Fashionable な所となるちうである。

此町から Salzburg に行くには輕便鐵道がある。

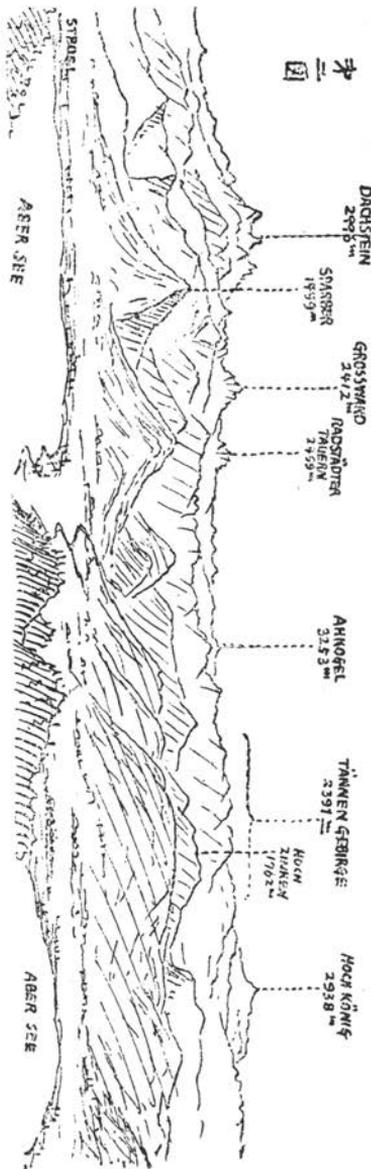
之れは又可なりきたない汽車である。Traun川を鐵橋と Viaduct とで渡つて Ischl の町を半周し隧道をくぐると、汽車は Ischl 川に沿つて西に走る。左手に聳える Rettenkogel (一七七八米) 及 Sparber (一四九九米) の裾になつて居る、美しい牧草の斜面を行く。後方には Todles Gebirge (二五一四米) の岩山を望む。Ströbl の村に來ると Abersee (= St. Wolfgang See) が始まる、之れより湖を右に見て走る。Sparber のつゞく Hoch Zinken (一七六二米) から流れ出る、Zinkenbach が湖の中程の所に流れ込み、其 Delta のために湖の幅が狭くなつて居る所に St. Wolfgang の停車所がある。此所から小船で對岸に渡つて、そこに聳て居る Schafberg (一七八〇米) と云ふのに登ることにした。此山は丁度瑞西の Vierwaldstättersee の Rigikulu の様に、四方を湖で圍まれ、其中に獨立して居る岩山である。即麓には Abersee, Attersee (= Kammersee), Mondsee, Traunsee 等が圍つて居つて、展望が甚だよろしう。麓の St. Wolfgang の村(五四五米)から頂上近く迄登山鐵道が

あるが、今は Season でないから運轉して居らなう。登山鐵道に沿つて小徑を登る。登るに従つて Abersee を瞰下する様になる。前山を右にして半周すると Mondsee が眼下に現れ來り、遠く西に Salzburg Alp の Hoher Göll, Walzmann, Untersberg 等の起伏するを望む。此邊から南望もよくなつてくるが、前山を廻つて Schafberg の頂上に登ると雄大な景色が展開する。Salzburg Alp より北のつゞく Bayern の平原は、Böhmer Wald 及 Oberösterreich の森林丘陵地帯と連り、北麓の Attersee の對岸には、Hoheleken Gebirge の崖が迫つて居つて、之に Höllen Gebirge がつゞく、其後に昨日見物して來た Traunstein が一寸頭を出す、そして其東には Todles Gebirge の Table Mountain 狀の岩山がつゞく。南望は最も雄大で、麓の Abersee より幾重かの山々を越へた彼方に、Dachstein (一九九六米) を盟主とし、右に Tannen Gebirge の連山より一際聳を立つて Hochkönig (一九二八米) を望む、實に Salzkammergut Alp の大部分を望むと云ふてもようであら

う(第二圖参照)。

此所で一寸御断りして置き度い事は、歐洲 Alps 地方には至る所、山の立派な寫眞があり、繪葉書等にしても賣つて居るので、自分の撮つた下手な寫眞は、自分の貧弱な姿で、Animate した景色

上談山「同様」スケッチ」を挿圖としたのである。只自分は此下手な「スケッチ」が、あの美しい大自然を冒瀆し、未遊の會員諸君の瞑想に臨みはせぬかと恐れるものである。  
閑話休題、St. Wolfgang から又汚い汽車で西



を、自分丈の記念に撮つて置く位が關の山で、とても人前に出せない、そして又 Hand Camera の寫眞では、廣い展望や遠い山を寫して、説明的に判然と大きく表すことは困難であるから、同じ下手なら寧ろ「スケッチ」の方がよいと思ふので、「船

に走る。St. Gilgen の村や ABERSEE はつき、汽車は山の斜面を登つて湖を右崖下に瞰下する様になる、やがて湖と別れて森林中に入り、Krotensee と云ふ小湖を過ぎて隧道をくぐると下り坂となり、Mondsee の湖畔に出る。すぐ右手に先程登つ

た Scharberg の北の斜面が、急崖をなして湖に臨んで居り、中々よき景色である。湖畔の St. Lorenz の村を過ぎて尙西に走ると、左手に聳える Schoberg (一三二八米) の裾となつて、牧草の百花咲き亂れて居る原や丘の間を行くことになる。後の方には Scharberg, Dachstein, Hellen Gebirge 等が夕日に其頂を輝かして、別れを告げるかのように見える。Eugendorf, Kallham 等の村を過ぎて Salzburg に着く。此鐵道の停車場の通りを隔てた反対側に、Salzburg の中央停車場がある。其前にある Hotel Europa に行く。いつもの二階の寢室、それにしづく風呂の化粧室から、湯上りのガウン姿で、Untersberg に對する心地は、何とも云へぬ壯快な氣持である。

Salzburg は Salzach の流をはらみ、町を圍る Kapuzinerberg (六五〇米)、Hohensalzburg (五四二米)、Mönchsberg (四八八米) 等の小高い丘によつて建てられた小さな市街で、海拔約四一〇米もある Dyhern 平原の一隅に位し、獨逸の國境近く境嶺にあつて、樂聖 Mozart の誕生地として知

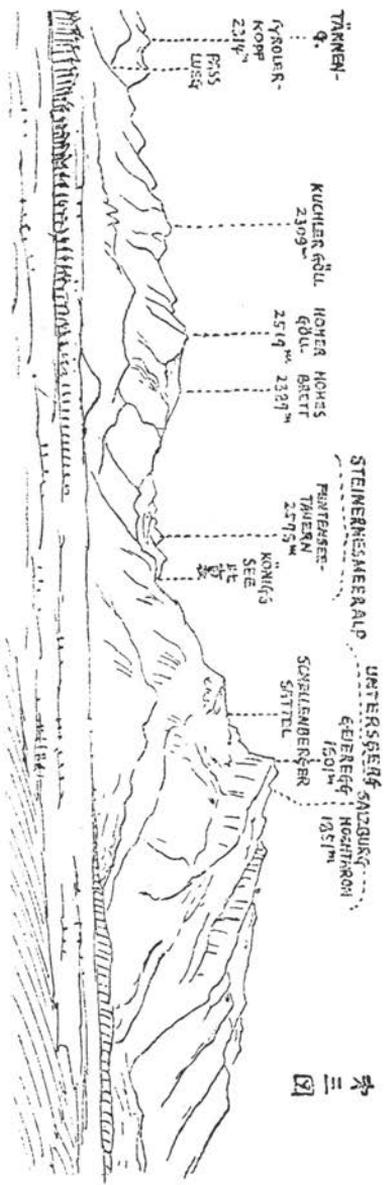
られて居る。彼が一七九一年 Wien で有名な歌劇 Zauberflöte を完成した小さな家は、今は此町に移られ Kapuzinerberg の麓に保存されて居る。Hohensalzburg 上の古城 Festung は一〇七七年に Erzbischof Gebhart が工を起したもので、海拔五四二米あり、町より一三〇米も高きので、山の展望臺として最も應はしい所である。城の Goldenen Stube の Ofen や、桃色大理石ネシン棒形の Säulen 等も建築上面白きのであらうが、吾人山男は城の上からの展望に時の移るを忘れるのである。南望は最も美しく、白雪斑なる Untersberg につゞいて、Hoher Göll (二五一九米)、Hohes Brett (二三八七米) 其間から遠く Steinerne Meer Alp の岩山が覗いて居る。之等の山々の左には Tannen Gebirge の連山が聳え、其西端に位置する Tyroler Kopf (二三二四米) が駱駝の双峰の様に高き、そして其下には Pass Luog の切れ目が微かに見える。ここでは Salzach の流が岩に激し雪を吹いて峽谷から平原へと押出して居るのである (第三圖参照)。Untersberg の右





に連なる山は追々と低下し、Lattengebirge, Sonntagshorn (一九六二米), Hoher Saufen (一八〇〇米)等を起して Bayern の平原へ消えて居る。東から北には Gaisberg (二二八六米)と Kapuzinerberg が目立つのみぞ、Salzach が遠く北へ

地より散歩地である。下からは何れも Saibahn で登れる。町の中にある佛蘭西流の小公園 Mirabell Garten で、美しい並木の下の薔薇の花壇と小噴水を前にして、静に休憩するのもよ。翌日は一週に三度しか通らなう Oriental Ex-



三 峯

Bayern の平原に流れ去るを望むのである。土地の人が最も自慢するのは、Festung につづく一哩餘の Munchsberg Promenade であらう、此山は Festung より七〇米も低いが、細長く町の西南を限り、展望もあり林に覆はれた小徑があつて、心

press の来る日であつたので、之れを利用して午後から Innsburg 迄、一飛びに走ることにした。此沿道の間々は、準備なしで来た自分には一寸手出し否足出しが出来さうにもないから、急行列車の窓から敬意を表する丈にした。

Salzburg の東を限る Kapuzinerberg を廻り、  
 olensalzburg を右に、Salzach に沿つて溯る、  
 Untersberg は走るに従つて高く仰がれ、Hallein の  
 村に來ると行手を Hoher Göll, Tannen Gebirge 等  
 の岩山で堰止められるかの様に思はせる。Gölling  
 に來ると Hoher Göll が頭上を威壓する。左から  
 Salzach に合する Tammerthal と、Salzach の本  
 流とを渡つて、Ofenauerberg の隧道に入らんと  
 する前に、Salzach の流を左に見上げると、川が此  
 所で一大屈曲をなし、大石重疊の河床を水が奔湍  
 をなし泡雪を吹いて流れ出て來る、所謂 Salzach  
 Ofen 峡谷の出口が一寸見えるのである（第四圖  
 參照）。隧道を出ると再び Salzach を渡つて川を  
 右に見、Pass Lueng と略々平行して此峡谷を行く。  
 左は Tannen Gebirge の Tyrolerkopf と Rau-  
 check (二四二八米) を連ねる巨大なる岩の絶壁、  
 右は急湍を隔て、白雪斑な Hagen Gebirge の  
 Raitlkopf (二二五一米) に迫られた眞の峡谷、Pa-  
 ss Lueng は實に一夫當萬の函谷關に比すべくであ  
 らう。Salzau を過ぎると峽はいくらか廣まる、や

がて川の左岸の小高い岩の上に、Hohen Werfen  
 の古城が其城壁にまつける蔦葛と共に、一〇七六  
 年に築かれて以來の幾多の Romance を残して、  
 寂しくそゞり立つて居るのが現はれて來る。Wer-  
 fen 驛を過ると Werfen の村が川の對岸にある  
 が、其後から Übergossene Alp の岩山が、其頂近  
 く北面に氷河を掛け、醜いまでにギザ／＼ゴツ／  
 ツした山容で車窓を壓して來る。Fritzthal を渡  
 ると右の隧道から Ennthal 鐵道がヒョッコリ出  
 て來て、本線と共に Salzach を渡り、Bischofshofen  
 村に入る。之れから先は谷が大分開けて、汽車は  
 川の左岸を走る様になる。此邊で漸く後方に Tann-  
 en Gebirge のギザ／＼した山嶺線と、右方に Tann-  
 Übergossene Alp (= Ewigeschnee Gruppe) の最高  
 峯 Hochkönig (二九三八米) を望むことが出来る。  
 前日 Schafberg の頂上から望んだ雄峯の麓近く來  
 た譯である。St. Johann の村を過ぎると川が西  
 に曲り、兩岸の山容が丸味を帯びて來る。St. Veit  
 から暫くの間川を右に見て走るが、左側に平行し  
 て追々と高く登つて行く Gasteinthal 鐵道が並ん

で走る。此鐵道が Gaststeinthal を急に南に曲ると、本線の方は又 Salzach を渡り、Gasteinerache が瀧となつて Salzach に落ち込む所を左に見る。之れより Flaike (石のガレの斜面) を避ける爲に兩三度 Salzach を千鳥掛に渡り、南から流入する Raitthal の落口に來ると、南に Breitkopf 續ぎの雪に輝く白銀の様な Spitz をチラと見る。Taxenbach の村で二つの城を車窓に見て尙西に走ると、谷は益々開け南から來る Fuschenthal を合せらる。此谷の奥に Gross Glockner の一支峰 Hoch Tenn (三三七一米) 及其西に並んだ Kitzsteinhorn (三一一〇米) の二つの金字塔が、雪の伊吹を飛ばし白皚々、觸るれば切れん許りの鋭い山嶺を聳立て、居るのを仰ぐ、實に此線で望み得る最も美しい姿の山々であらう。Bruck の村を過ぎて最後に Salzach を渡つて北に鐵道が曲り、Zeller Moos の草原を行くと、やがて Zeller See を右に見、Zell am See の村に着く。

Zeller See は海拔七四五米、二哩半に一哩位の大きさで、深さは六八米もある湖である。Zell村は

其西岸中程にある。Villa や Hotel の様子、湖畔の散歩道の並木、附近の山の姿等、景色が今迄の峡谷とは異つて、明るく軟かい感じの野趣に富んだものとなる。夏の行樂地としてはよい所らしい。先に通つて來た Bruck の村から眞西に入る Oberpinzgautal に入る鐵道は、此所から分岐して Salzach に沿ひ、Krimml 迄行くのである。Gross Venediger Gruppe の見物には此谷に入らねばなるまい。然し Zell 村のすぐ西の方にある Schmitenhöhe (一九三五米) に登ると、南は Ankogel より Gross Glockner, Gross Venediger 北は Kaiser Gebirge より Dachstein 迄も見晴らせること云ふことである。Zell に一泊して此邊に登つて見るとよかつたのであるが、汽車の都合で素通りしてしまつた。

Zeller See には Prielau の村で別れるのであるが、此邊から後を見ると第五圖の様に、Kitzsteinhorn の尖峰が美しく雪に輝いて見える。山に圍まれた盆地の草原を暫く走るが、此草原が Salzach と Saalach の分水原となつて居るので、Saalach

は Salzburg の下で Salzach に合流する。水源は甚だ近くとも、途中は全く別の谷を流れ、間に大山岳を包んで居るのも妙である。即此草原の左から来る Glemmthal が Saalach の水源である。此川に沿ひて Saalröden の村に來ると、右に Steinernes Alp の一草木なき焼け爛れた様



な岩山が展開する、あまり快感を覺ゆる山ではない。此裏は獨逸領の Königssee 及 Obersee である。昨日 Salzburg の Festung から遠望した此連山を、今裏から見て居る譯である。Schönfeldspitz (二六五一米)の尖塔を盟主とし、右後に肩の

張つた Tunienseetauern (二五七八米) が聳え、左方につゞく二千米位のギザ／＼の山も皆茶褐色の地肌を露出して居り、まるで Arabia の砂漠の山を見る様である。

Saalfelden を過ぎると鐵路は再び西に向ひ、Leogangthal に入つて行く。北に聳る Leoganger-

steinberge の最高峰は、Mittelhorn (二七九四米) であるが、此連山も前者に似た岩山で、あまり快感的ではないが、いくらかましである。汽車は此谷を溯つて、昔 Tyrol の邊防として防壘を設けてあつたと云ふ Griesson 峠(八五九米)を越え、

Saalach と Innfluss との分水嶺になつて居る Hochfilzen (九六二米)の村に達する。

これより汽車は急勾配で下り、Fieberbrunn, St. Johann in Tyrol 等の村を過ぐる。此時西北に Kaiser Gebirge の Hoch Kaiser Spitz (二五四四米)が見える、肩のいかつた雪斑の岩山で、頂に近く小さい氷河が輝いて居る、あまり姿のよい山ではなす。St. Johann から線路は南に向ひ、Kizbüchel の町を一周して又西に向き直り、Kinshberg の村迄少し登りとなる。そこから又下りとなつて Brixenthal に沿うて行く、やがて左から来る Windautal を渡るために、大U字曲線を畫いて彼岸に越す。下の方から登つて来る汽車は氣息奄々、蟲が這ひ登つて来る様に見える。Hopfgarten を過ぎて尙も下ると、林に覆はれた岩の峽流 Brixenthaler Klause に沿ひ、Itler の古城が右の林間岩の上に現れ、Wögel に來ると初めて Innthal に出た事になる。獨領の Rosenheim から來る線路を合せ、Innfluss に沿ひて西南に走る、Jenbach で北に Achensee 行の鐵道、

南に Zillertal 入りの鐵道が分岐する。Kellerjoch (二三四四米)が南に聳えて居るが、夕暮近くなのであまりはつきりしなす。Hall の町を過ぎて Innsburg につた時は、既に燈火がついて居た。

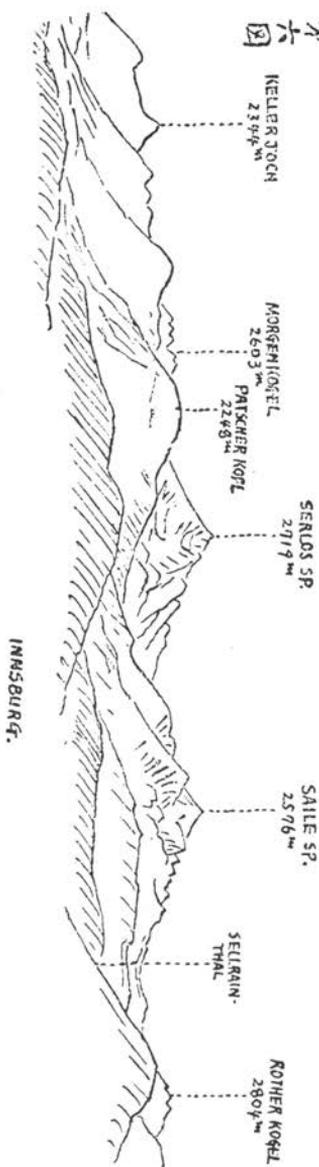
停車所筋向ひの Hotel Tyrol に宿を取る。此町は Tyrol 第一の都會であり、此宿は此町の一流であると案内記にも出て居るが、此夜、非常に小さい蜘蛛の子の様な南京蟲數足に襲はれて閉口した。室も立派で寢具も清潔であつたが、此奴が居つては零である。其後此町の大學に留學した事のある醫者の友人に聞た所によると、此町には此蟲が中々蔓延して居るとのことであつた。

翌日は此町の南にある、山の展望臺 Iselberg (七四六米)に行つて見た。町の北に障壁の様に聳えて居る、二千數百米の石灰岩の雪斑なる山、Brandjoch, Fraunhit, Hafelkar, Rumerjoch, Gross Solstein 等を望むので、辻村氏の「スキス」日記にも遊ばれた様に書てある。町の博物館から植物園に行く、高山植物が六百種から集めてあると云ふ

が、小生の中學植物、馳け出し高山植物の知識では落第するより外ない。Franzisk Kirche から Rennweg の美事な並木道を通じて、Hofgarten に入り、Innfluss の岸に沿うて Hungerberg 登山鐵道の停車所に行く、此鐵道は Saibahn といふ坂になつた鐵橋を川に架し、直ちに對岸の山の斜

の繁つた Iselberg それから正面には雪に覆はれた姿のような二つの金字塔、右にあるのが Sailespitz (= Nockspitz = Kalkkogel 二五七六米)、左のが Serlosspitz (= Waldraispitz 二七一九米)で、其左に圓い頭の Patscher Koh (二二四八米)がつゞき、其後から Morgenkogel (二六〇三米)の雪の

中 途 図



面に登つて行く。今朝 Iselberg から望んだ山々の裾に、中段の様になつて見えた Höttinger Plateau の一部にある Hungerberg 迄登るのである。上には所々に展望の茶店や別荘がある。南の方目の下は Innfluss と Innsburg の町、其向ふに樹

峰が一寸覗く、それから幾座かの山を連ねた其左に、昨日仰いだ Kellerjoch の鞍形の嶺を望む、Sailespitz の右には Rotherkogel (二二四八米)が著しく、Innthal の上流に幾重かの山々を望むのである(第六圖参照)。

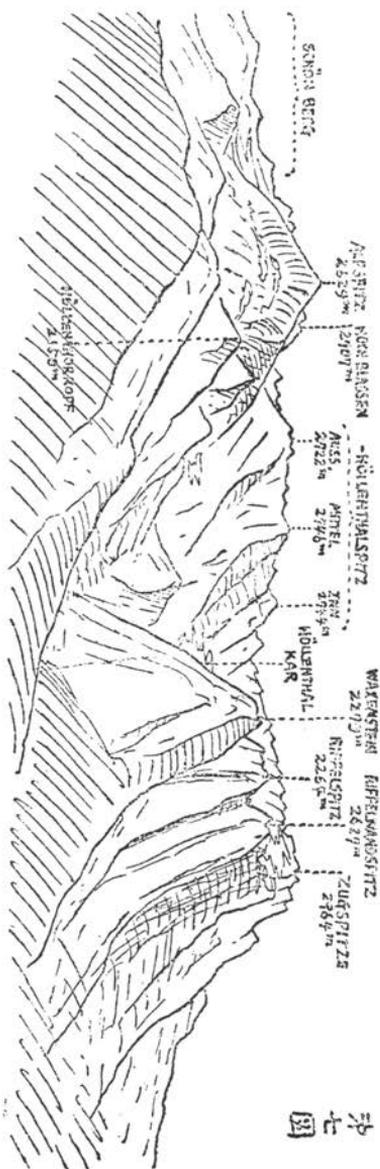
見晴しの茶店で Cafe をすゝつて展望を恣にし、附近を散歩して町に降りた。町の店頭は Tyrol 流の登山具が目につく。町をうろつく若者の中には、茶褐色の鞆皮で作つた Lederne Wachs に、胸に雪割草の花を縫箔したツボン吊りを掛け、足のふくらはぎ丈の Stutzen をして、毛もくじやらの膝小僧を出し、靴をじか履きにし、雪やけのした赤い顔に雉の羽根をさした Jägerhut をのせ、パイプを啣へ乍ら緑色の上衣を無造作に引掛けた、見るからに岩から岩へ走りさうな猛烈な奴が二人三人と居るのが目につく、瑞西の盛り場で見掛る登山姿と異り、大分に野趣があつて面白い。町を見まはつた所で、要するに宿の食堂が最も上等らしいから歸つて夕食をした。往年伊太利の汽車で南京攻にあつて以來、常に中央歐羅巴の旅には用意して居つた蚤取粉で土手を築いて、其夜は安眠した、後で女中共が黄色人種の寝た床はリネン迄黄色になると云ふ結論をした事であらう。

翌朝は緩くり出掛け、山越して獨領 München 迄行く事にした。電氣機關車に曳かれて Inns-

burg の停車所を出發し、Innfluss を渡つて北の山裾へつき、川に沿うて追々と高く登つて行く、やがて Höhenberg と Kirchberg が川に臨んで、岩の絶壁をなして居る Martinswand の上に出る。Inn の流が絶壁の直下足元を洗つて居る、Ober-inthal の全景と對岸の山々を車窓に眺め乍ら、絶壁の上を西に走る、Ehebach の裂け目を渡る時に、直下に Zirl の村を瞰下する、之れより追々と山中に入り、Leithen, Reith 等の村を過ぎて Wildsee と云ふ小さな湖の畔まで登つて行く、そして木挽小屋の澤山ある Seefeld の村（一一七六米）に着く。高原性の打開けた所で、Inn と Isar 流域の分水となつて居る。此度は Raubach の流に沿うて北へ下ることになる。山から押出された砂で荒れて居る盆地を過ぎると、行手に獨塊の國境となつて居る Karwandel Gebirge の赤褐色の岩山が現れ、其南から Isar の流が出て来る。暫くして此連山の西端の麓にある Scharnitz の村に着く。一八〇五年に佛蘭西兵のために破壊された防壘が、村の入口に崖にこびりついた様になつて

残つて居る。此村が獨塊の國境となるので、旅券と税關の検査がある。之れから先はいよゝ獨逸となるのである。Isarに沿ひ Karwandel Gebirgeを右に、Wetersteinwandの連山を左に見て、Mittenwaldに下る。やがて西北に打開けた高原性

開け行手に Waxensteinの尖塔の様な岩山が現れる、そして間もなく Garmischと Partenkirchen兩村の中間にある停車所につき、電気機關車は此所で普通の機關車と交代する。此邊から Wetersteinの連山を見ると、左に Wetersteinwand (二



第七圖

の輕井澤の様な感じの山裾を走る、水の干た Schmalsee 及 Wagenbrechsee 等の小湖を右に見て、汽車は暫く西に向つて走る、此邊から獨逸國境の Weterstein Gebirgeの全容を望む様になる。唐檜や樺の茂つた谷間に下りて少し走ると、林が

四八三米) Dreihörspitzen (二六三四米) Seehauskoppe (二四〇〇米)、それから第七圖の様に、雪斑なる Alpispitz (二六二九米)が、Kar 状の崖を圍らした美しい金字形の峰頭を高く聳立て、右の方へ蹄鐵形に Hoch Blasen (二七〇七米) Höllen

thal Spitze の三峰、そして獨逸に於ける最高峰である Zugspitz (二九六四米) を最右翼として、手前の方へ岩の削壁 Riffelwandspitz (二六二七米) Riffelspitz (二二六四米) 及 Waxenstein (二二七九米) を連ねて居る。Waxenstein の如きは全く一本の Obelisk の様な岩であるから、雪は只岩の皺に宿るのみで、灰色の凄々岩肌を現して立つて居る。蹄鐵の中には Höllenthal Kar の積雪が白銀の如く輝く、そして Höllenthal の谷が此方に向て開かれて居る。Zugspitz の裏に當る方には、Schneeferner 二八〇〇米位の峰が連り、大きな Schneeferner Kar を抱て居るのであるが、此方向からは見えなす。新聞で見ると最近 Zugspitz の右裏の方から其頂上迄登山索道 Seilbahn が出来たと云ふ、然し可なり恐ろしい宙乗りだらうである。

Garmisch Partenkirchen は輕井澤と云つた様な所で、夏の避暑、冬の Ski には相當に繁昌する所であるが、今は賑つて居ない、今夜中に München に行けばよすのであるから、夕方まで此

村で遊び、Hotel Bellevue に行つて Café をすゝり一休みする。夕刻の汽車で北に向ふ。右に Eckenberg (一七七九米) Krottenkopf (二〇六六米)、左に Kramer (一九八二米) を見て山とはお別れとなり、Bayern の平原に出る。Oberau の村を過ると濕原となり、Murau 村に来ると左に Staffelsee を見る。Alps の山盡きて Bayern の平原となる山裾に、夕雲重疊の其間から、斜陽が五色の光芒を投げて、湖面に銀波を漂はして居る景色は捨て難いものであつた。やがて Würmseel (= Starnbergersee) の湖畔を走り、暗くなつてから München に着いた、そして次の日には久しぶりで伯林の我家に寝る事になつた。

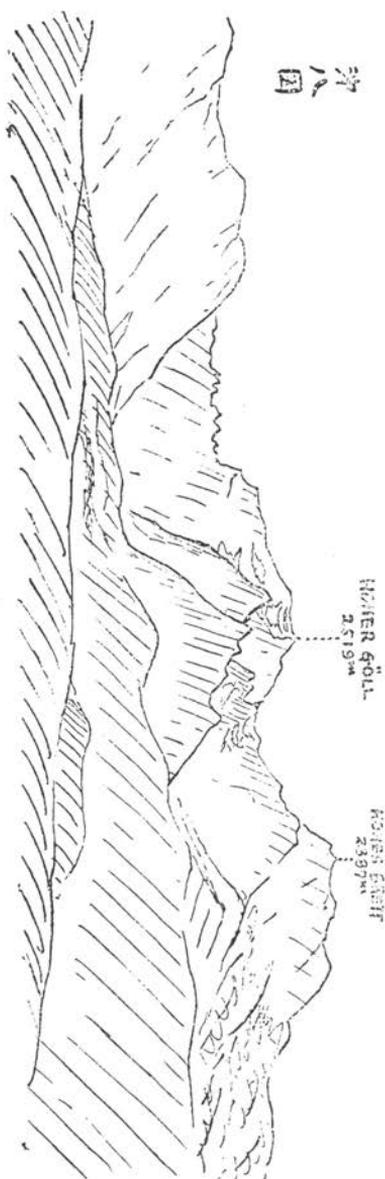
冬の Königsee が見たくなつたので、大正十四年十二月五日 Berlin-Roma F. D. Zug で伯林を發し、途中 Halle へ Nürnberg に停車した丈で、夕刻には既に München の客となつた。翌朝は猛烈な吹雪で咫尺を辨ぜざる有様、温度は攝氏零下二十度に降り、耳や手足が痛い位である、吹雪のために Salzburg 行の汽車が出ない。冬の獨

逸は南に行くに従つて寒くなる、つまり大陸的になる、Gail Stream の御蔭はえらいものである、北緯五十一度半の倫敦の冬が、東京の冬より温暖で、Nord Cap や Spitzbergen の南西側には人が住めると云ふのだからたゞしいものである。亞米利加で一才 Florida の Key West と Cuba の間を土手で堰止めて見たら、北歐の人達がどんな顔をするか、やつて見たいと思ふ事がよくある。閑話休題、汽車は二時間遅れ徐行で兎に角出發した。吹雪の息の間に信號を見て走るのであるから遅々たるものである。Rosenheim を過ぎる頃より吹雪が漸く収まりいくらか明るくなつた。Inntal を渡り Simm See を右に見て、Prien の村に來ると左に野が開け、少し下つて遙かに Chiemsee を望む。水面は一面に雪に覆はれ Fraueninsel の美しい木立も眞白に雪でかき消されて居る。右の方には追々南獨の Alps が見えて來る、湖の南を一周し Traunstein の町を過つて Freilassing 村の停車所に着た。此所で Berichsgaden 行の汽車に乗換るのであるが、到着が遅れて居るので連

絡する筈の列車がでてしまつて居らない。Berichsgaden 方面行の客が十五六人あるので、驛長が氣を利かして臨時列車を出す事にしてくれたが、其列車と云ふのが驚く勿れ、機關車と四等の箱一つ丈である、一等の客も三等の客も皆之れにぶち込まれた、小生も生れて初めて四等と云ふ箱に乗つた、有蓋貨車に數個の窓をあけ、周圍に板の腰掛二三脚を置き、中央にきたない石炭ストーブが一個置てある、客の大半は立ちん坊で、自らストーブに石炭をくべて暖を採るのである、走るとつれて身體中の骨の關節が皆ゆるむ、舌をかまぬ様にめつたに話等は出來ない、それでも Freilassing から Saalach の流に沿ひ、右に Högelberg を、左に Salzburg の Gaisberg 及 Untersberg を望み乍ら走る。やがて Reichenhall に着く。此町は Untersberg と Hochstaufen (一七七三米) との間に挟まれ、Saalach に臨んで建てられた、避暑地として賑ふ場所、近所には岩鹽の礦山が澤山ある。乗客の多くは此所で下車した。Reichenhall を出發すると Saalach の谷の奥に

Reiter Alp (一九七〇米)の峯を一寸覗く、町を半周して汽車は Lattengraben (一七三七米)の裾を走り、Untersberg との間の谷を進んで、此兩山の鞍部となつて居る Hallthurn の村(六九〇米)迄登り、後は少し下り気味となる、そして Salzburg

行する。森の間に点在する Hotel や Villa の色瓦も雪に埋もれ、褐色灰色の岩壁と森の緑の外は點色もない一面の銀世界である。此谷から望んだ Untersberg は、Napoleon 帽の様な形に見え、Salzburg から見えぬ其最高峯 Berchtesgaden



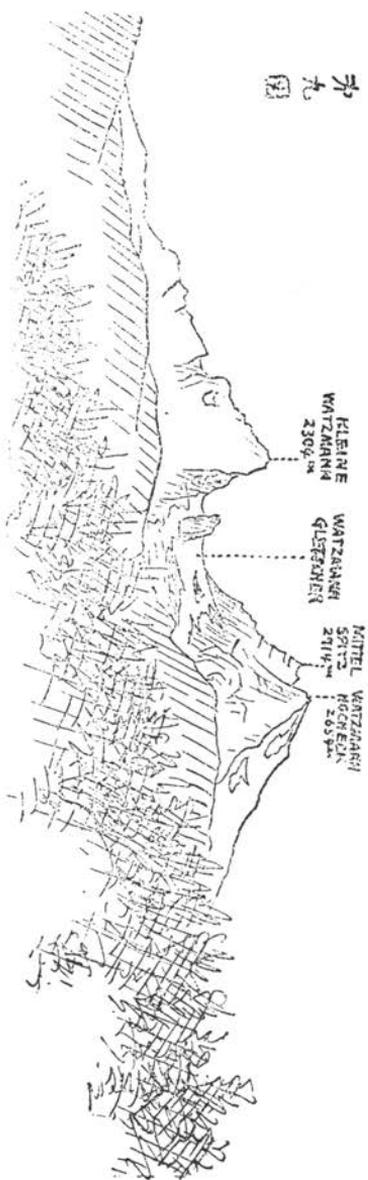
から云々と Untersberg の丁度裏になつて居る Berchtesgaden の村に着く、此線の終點である。雪は満山を埋めて居るが、山中に入つた爲か風がなく、平地の München あたりよりは遙に溫暖である。雪橋を馬に曳かせ Ski をはいた連中が通

Hochthron (一九七三米)が仰がれる。此村から Untersberg の東を廻つて Salzburg に行く輕便鐵道があり、又 Königssee 迄登る電車がある。此電車の途中停車所 Schönan を下りて、右手の方村の後にある丘に登つて見ると、Salzburg か

と見た Hoher Göll や Hohes Brett が、東の方に  
間近に望める、岩の急崖には雪斑の皺を出して居  
るが、他は一面の白皚々である(第八圖参照)。南  
の方には Königsee の西岸に迫つて居る Walz-  
mann (二七二四米)が、Watzmann Gletscher を

が通るので割に固まつて居り、Königsee 迄登る  
のもあまり困難ではない。  
Königsee は獨逸に於ける最も美しい湖である  
と云はれて居る。Watzmann 及 Steinernes Meer Alp  
と Hagen Gebirge との間の峽谷に湛えた長六ハ

第九圖

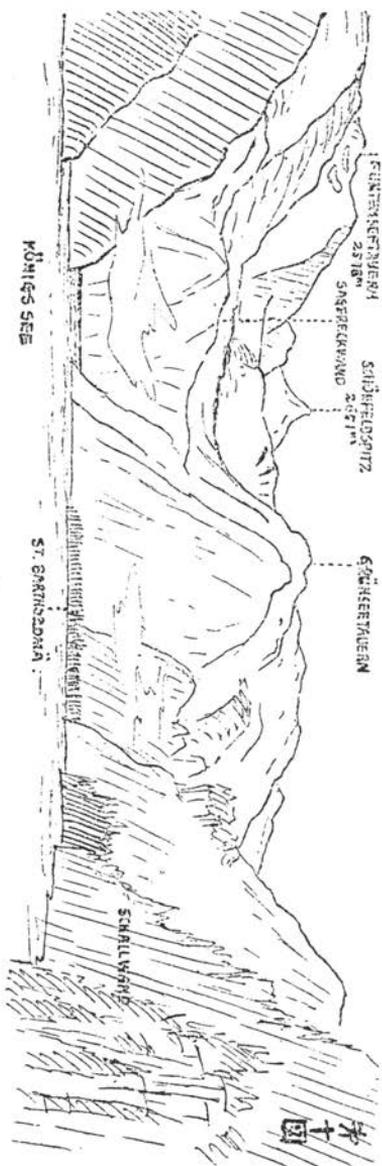


抱いた大裂罅を此方に向けM字形の峰頭を擡げ  
て、雪に覆はれた森林の前山 Grünstein (一三〇  
四米)の上から覗いて居る(第九圖参照)。Königs-  
see から下りて来る Skier は、男女取ませ面白  
さうにスイ〜と這つて行く。道は大勢の Skier

哩、幅一哩三分程の山湖で、水面の標高は海拔六  
〇二米であるが、最深部は約一九〇米もあり、湖  
岸から直立して居る山は水面上二千米に達す。山  
が迫つて居るから水は澄んで居るが暗緑色を呈し  
凄味のある湖である。湖尻の Hotel Schiffmeister

の前は、湖面が氷結して居り、其上で十數人が箒で雲上の雪を拂ひ清め乍ら、南爪大の重錘を幾つとなく迂らせて攻め合ふ遊 Eischiessen をやつて居る。湖の左岸を小徑を求めて進む。湖畔の小高い岩の森の中に建てられた Villa Beust の前を

Nerwilkel と云ふ地點に来る、雪を被り枝を垂れて居る針葉樹の間から湖の全景が見える。正面即南に湖の極まる所は Sagerckwand の崖で、其上に此春 Saalfelden から望んだ Steinerseealp の最高峯 Schonfeldspitz (二六五一米) の尖



通ると、湖の中に Christlieger Insel と云ふ小島がある、之れより先即南の方は湖面が氷結して居ない。林に蔽はれた急崖の中腹につけられた小徑は、雪が深いので、ともすると迂らさうだ。やがて岸が曲つて湖の幅が廣くなり、岬の様になつた

塔が現れ、左には肩の張つた Funtenseelauern (二五七八米)、右には Grünseelauern が聳立つて居る。夕方近いので湖面は既に薄暗く、崖の中腹に棚引いた雲も灰色に見え、満山白雪の峰頭は夕陽を受けて蔷薇色に輝き、Abend Glühens の美し

はとても自分の拙筆にはつくせぬものであつた(第十圖参照)。Sagereckwand と湖の左岸に迫つて居る Golzen Alp の間を左に登れば、斷崖で圍まれた藥研の底の様な所に Obersee と云ふ小湖があり、其峡谷から Steinernesmeer Alp と Hagen Gebirge との間を連ねて居る Taufelhörner (二二七一米) の双峰を仰ぐと云ふことである。湖の左岸は Gotzen Alp 及 Kesselbach, Königsbach 等の掛つて居る約八〇〇米の赤褐色の崖が迫つて居り、右の岸には Grünsectauern につゞいて、丁度其下邊に見える St. Bartholomäi の森がある、そこには Bayern 王家の獵舎があり、王家に關する Romance が傳へられて居る。それから Watzmann の裾が湖に臨む Schallwand の直立した崖となり、丁度 Malerwinkel の對岸になる所には、地獄の針の山かと思はれる Falkenstein がそそり立つて居る、此岩の下で昔多勢の巡禮が難船のため溺死したと云はれて居る。

Malerwinkel から尙湖岸を傳つて Königsbach 近く迄行つて見たが、追々暗くなつて來るし、雪

の崖道を夜になつて歸るのは危険であるから引返すことにした、朝の吹雪は此湖でゆるりと遊ぶことを妨げた。Schiffmeister で宿るつもりで Cafe を飲み乍ら時間表をしらべると、Salzburg 迄行かれなうなので、急に思ひ直し、電車で Berchtesgaden に下り、村の燈火と雪あかりの中を汽車の停車所に行き、今度は四等車の難もなく、Reichenhall, Freilassing を過ぎて Salzburg に着いた。奥國に入つたのであるから旅券と税關の検査があつて停車所を飛出し、例の Hotel Europa に入り二階の室を取つた。

翌朝は晴やかな雪の晨で Untersberg は厚化粧で自分を迎へてくれた。今朝も Innsburg から Wien に行く汽車が一時間も延着した、見れば列車の屋根から窓、車輛の縁の下迄一面の雪である、Salzach の谷はひどく吹雪であつた事を物語つて居る。Wien に又々行つて見たが、Wien の冬は Berlin より寒く、Burgtheater や Opernhaus で芝居見物でもするのが寒らしのぎにはよ、一週間程滞在した後 Passau 經由 Berlin

へ歸つた。

「車上談山」もこれで終りとする。此話に出て来る山に就ての詳細は、Baedeker's Eastern Alpsの案内記にもくわしく出て居るから参照されたい、尙山の標高は諸參考を計算尺で米突に換算したものであるから數米の誤差はあるかも知れない。(終)

### ○房總半島の山

高畑棟材

はしがき

梅澤さんが亡くなられる少し前の或日のこと、自分は房總の山に就て同氏と、しんみり語合つたことがある。

「ほ、房總の山に足を入れましたか——。あまり緩る／＼登るので私もね、ことに依つたら道を間違へたのではないか知らんと思ひ乍ら歩いてゐるうちに、ひよつこり頂上へ來て了つたのでせう、

全くおや／＼と思ひましたよ。嶺岡山ミネツカはほんとうに暢氣な山ですね。さうかと思へば、めづらしく山骨稜々たる伊豫ヶ岳のやうなのがあつたりしましてね」。梅澤さんのあの巧みな座談ぶりを今尙はつきりと覚えてゐる。

房總半島。其處には目立つて高い山も、また深い谷もないしするから、今日では一般の登山者からは全く忘れられて了つた貌である。

山といつても實は丘陵に過ぎないのであるから上總では鹿野山(三五二・二米)、安房では嶺岡山中の二ツ山(四〇三・九米)が最も高い位のもの、而も總房の國境を走る鋸山から清澄山への連脈中には、三五〇米以上のものがたつた一座より無いと云つたやうな状態であるにも拘らず、夫等の山を武相方面から望見して、可なり高く思へるのは、前面に洋々たる海を控へてゐるお蔭でもあらうか。

然し憊うした低い山々は低いなりに、氣が置けぬとか、のんびりしてゐるとかいふ興趣がある故、若し再遊の機會を得たならば、今度は鋸、清

澄を繋ぐ尾根傳ひ。嶺岡山脈そぞろあるき。或はまた元清澄と清澄との間の上總側に展開されてゐる筒森、奥山等の小深い樹林などを、氣儘氣隨に歩き廻つてみたいものと希つてゐる。

自分は今殆ど一昔も前の古い「旅の手帳」を繰ひろげつゝ、朧げな記憶を辿つて貧しいこの文を草した。一種の夢物語のつもりで通讀願へれば幸甚である。

唯惜しい事には、先頃房總内岸の或地點が新たに要塞地帯に編入された結果、従來坊間に現はれてゐた陸測五萬の、那古、北條の二圖は何時の間にやら姿を隠して了ひ、また鹿野山圖は一般に頒布されてこそ居れ、圖上の大部分は餘白になつてゐるので、この方面を遊行するに當つては少からぬ不便を感じるが事國防に關する以上は、また寔にやむを得ぬ次第である。

清澄山—鹿野山・鬼涙山—鋸山—富山・  
伊豫ヶ岳

八月二十五日。一行三名。暢氣な草鞋の旅は清澄山上からはじまる。

戸外は濛々たる霧の海。少々氣を腐らしてゐると小梅屋の主人が、「あなたがたはお若いに似ず良く御信心なさるで、なあに直さに一天四海すつかりと晴れましょが」とお世辭をふり撒く。早發ちの朝は心身がすが／＼しくて實に快い。清澄寺に參詣してから妙見山の高みに登り、農大演習林の瑞々しい黒木立を眺める。足元には稍々木深い二間川の谷が迂曲しつゝ、天津町の方へと走つてゐる。濱育ちのAとBを相手に、俄仕込の方言交りで無駄つ話をしてゐると、思はぬ木蔭から小娘が二人、各々身に餘るやうな木炭の大俵を背負つて、ほい／＼と登つてきた。がつしりした體軀、潮焦けのした丸顔。だが遠に年頃の娘だ。素朴な中にも觸らば滾れん許りの愛嬌は、全身に漲つてゐる。偶と長塚節の『炭焼の娘』を思出す。「大澤行川の嫁子にならば花のお江戸で乞食する」と低い聲で謡つて聞かせたといふお秋さんといふ娘も亦、あんな風な素朴な娘だつたのではあるまいかなどと想像してみる。

この法華經の靈域に遊ぶこと時餘。愈々國境(と

いふと頗る大袈裟に聞こえるが)を超えて鹿野山へ志す。

先づ農大派出所附近の樹林を縫ひつゝ、少し行つてから本道を離れて左の岐路に入り、三四六、五米の峯頭に立つと、見渡す渺茫たる大洋の彼方から旭日が悠々と昇つてきた。

樹々の垣間見に、右手の黒木山は元清澄山(三四三・四米)であらうか。また其左方遙かに光つてゐるのは鹿野山であらうか。眼前の小かな山谷の向ふには、昔から嶺岡牧場(東牧、西牧)で名高い嶺岡山脈が、逶邐として起伏してゐる。一體この半島の山々は總てが低い小柄なもの許りなので、高山深谷の趣は更に味へぬがその代り如何にも、のんびりとした柔かな感じを豊富に受けることができる。そしてこの清澄から元清澄へかけての山は、上總へ向つては小櫃川、笹川、小糸川など、また安房の海に向つては二間川、松崎川などを流下してゐるが、夫等の源流を育くむ筒森、奥山の二官林には瑞々しい樹木が生茂つてゐるので、可なり好い印象を受けることができる。

本道に戻つてから四方木の谷へ下る。

小櫃川上流の浅い谷の底につけられた一髪の街道。草山をめぐり樹林を穿つて、てく／＼と歩き行く身は何時の間にやら、安房から上總へと移されてゐるのであつた。黄和田畑の人家を見る迄に既に幾つの隧道を潜つたことか。唯有る百姓家の背戸に作られた西瓜畑、恰度食べ頃なのがごろごろしてゐるのを見て、渴した咽喉をぐびつかせ乍ら、食指大いに動いたのは自分許りではあるまい。石尊山(三四七・二米)の位置を確かめる遑もなく、道は左寄りに迂曲して懸て釜生にくる。地圖(大多喜)を見ても判る通り、此邊から小櫃川の川幅は次第に廣くなるが、源流地のあの樹木に掩はれたうるほひのある景況は再びと見られなくなる。源流地附近の谷々は浅い乍らも眞實に佳かつた。顧る清澄の黒木立、それも亦靈山に相應しいものとして宜かつた。案外によく整つてゐる恁うした風物に親しみの情を寄せ乍ら、小長い道を辿り辿つて久留里町市場に達したのは午後四時頃にもあつたらうか。中食を途中のどの邊の村で済

したかは忘れて了つた。唯この町で駄菓子を澤山仕入れた事だけはよく覚えてゐる。町の中程で左折し小櫃川を渡つてから、鹿野山への一筋道は緩るやかな登りとなつた。行手には鹿野の裏山が立はだかつてゐる。手も付けられないやうに小皺をよせてゐるのが、彼の有名な九十九谷の一廓であらう。

市宿の人家を後ろに少し行くと左右から木立が押迫り道が徐ろに爪先登るとともに、夕べを告げてゐる蝸の涼しい鳴音が全く降るやうだ。願う來し方の山谷。小櫃川の川沿ひ村は如何にも平和さうに炊煙を揚げてゐた。

たはかれの比、鹿野山上に着いた一行は、上町の丸屋といふに草鞋を脱いだ。そして其夜は珍らしくも、天井から吊下げられた古洋燈のもとで、まどらかな夢を結んだのである。

八月二十六日。よく／＼寝入つたとみえて、目を覺せば七時過。朝餉を濟し草鞋の紐を結んでから、いざ出發といふ出鼻を小雨に叩かれてすつか

り考へてしまふ。儘よけふ一日の御滞在だ、との腹も定まり元の座敷に戻る。

午後退屈紛れに寶物拜觀にでかける。左甚五郎建之とかいふ門を潜り、事務所へ行つて案内を乞ふ。どうぞこちらへと説明役に立つたは、よぼよぼの老人。

「抑々鹿野山カシサシヤ神野寺は推古天皇の御宇、聖徳太子の草創にましまして——」ときた。AとBは神妙に聽いてゐる。此方はいろ／＼懐中の都合もあるので雨しよぼの空間許り氣にしてゐたため、折角の説明もとんと耳に入らぬ。廻廊に立つて呆やり雲行を眺めてゐると、老人何を感じたか、「これがはあ左甚五郎一刀彫りの白蛇でござい」と左甚五郎の四字に思切り力を入れて、自棄に大きなしがれ聲を張揚げる。直ぐ其尾に附いて「あい／＼左様でござい」と合槌を打つてゐるAも中々人が悪い。

境内の老杉に飭する鑿々たる大鼓の音に送られて宿に歸ると間もなく、沛然たる豪雨が襲つてきた。部屋で横になつてゐると店の方で、宿の小倅

が丸出しの方言で恚う嗚鳴つてゐた。

「阿母よ雨がおんもりおつちやいて來たぜ」

八月二十七日。ほのくゝに起る。薄れゆく月の光を引取つて、晨けの明星がにこくゝしてゐるのは、けふ一日の好晴疑ひなしとの瑞兆にてもあらうか。AとBを促して白鳥神社（白鳥祠）への石磴をのぼる。三百級の石磴を半ばにも到らずして「おりや、もう駄目だ」と青息吐いてゐるBを宥め賺かして、漸くに登りきる。社には日本武尊を祀つてあつた。

神社にいとまを告げてから九十九谷の見晴臺に行つてみる。眼の下には九十九谷、稍々遠くに鋸から清澄へかけての低い國境山脈、或はまた左に遠く清澄附近の黒木山を瞰る。日本全土に足跡洽ねからざるはなしとかいふ、某旅行業者の言を藉りると、この九十九谷の紛糾は日本には餘り類例のない稀らしいシンださうである。

「どうだい素晴らしいぢやないか。日本では爰より他には滅多に拜めぬシンださうだぜ」といへば、

弱蟲のBが萬事吞込顔に成る程ねと感心してゐたが、果して判つたのやら判らぬのやら。

鹿野山頂（△三五二・二米）の草むらに立つと遙かに海を隔てて富岳をはじめ、關八州の名だたる峯巒が一眸の間に集まる。この曠々とした景を眺めて思はず歡聲を揚げたのは、A Bの二人のみではなかつた。

高尾といひ、大岳といひ、扇山といひ、三峠といふ。東京近傍には眺望の優れた山は可なりに多い。そして夫等の孰れもが各々の特徴を發揮してゐるが、鹿野や鋸のやうに前面に洋々たる海を控へての展望はさう澤山は獲られないせいか、可なり強い印象となつて腦裡深く刻みつけられてゐるのである。

草山を繞り廻つてなだらかな山道を、のんびりと歩く一行。詠めもせぬに俳句のひとつも捻りたくなる。聽て日本武尊が鬼（蠻賊）を退治されたと云ふ口碑の遺る、鬼涙山（鬼泪山）の夏草を掻き分けてから、歩は一步と下り氣味になり、田や畑を縫つて駒場、更和の人家を後ろにすると間もな

く湊村に出た。小癩な田舎犬に吠立てられつゝ、湊川を渡ると立派な國道が現れるが、人通りが煩さいので主として濱傳ひに金谷を目指す。

湊から金谷へかけての海岸は中々佳い景色に恵まれてゐる。慥か大町桂月が『關東の山水』で推賞してゐたかに記憶する。

さんざめく磯の松風。渦を巻く綠玉潮。かじめ探ると磯岩を跳びあるく海女。沖にはエーホー、エーホーと八挺船の漁船。大うねりのどんと磯つ所、斷崖絶壁の根には白沫がばつと散る。

恙うした移りゆく歩々の景を見返りがちに國道へ出る。砂塵の舞ふが儘なる日向みち。幾つもの隧道を送迎してゐるうちに、竟に金谷の漁村に來た。いち早く眼を惹くのは、海中からいきなり峙立つてゐる明鐘ヶ崎。岩骨稜々たる鋸山の怪奇な姿。一行は金谷川を渡つてから石切場へ向ふ。危い小徑をよち／＼辿つて懸て頂上へ。

十州一覽臺の休茶屋で涼を容れつゝ一文菓子で頬張る。見れば富士天城を後ろに白塗の汽船が悠悠と大洋へ出てゆくと。觀音崎はすぐ眼の

前。浦賀海峽を隔てて見る豆相の、曾遊の山々も懐しかった。

「城ヶ島には利久鼠の雨が降つてゐないな」と啣つはAの莫迦、Bが「この青天井を見ろやい」と呶鳴れば茶屋のお神さんまでが、きゃつきゃと笑ふ。ところが此のお神さん頗るの御難物、爰で迂闊に寫眞器を引張り出してバチリとやらうものなら、さつそくに其筋とやらへ密告されるやうな。密告されるといふからには、何うせ碌な筋ではあるまい。

三二八・四米の峯への岩尾根傳ひ(?)は二人の反對に遭つて中止、そのくせ例の石の五百羅漢さま訪問には二つ返事だ。おのれにやう似た顔の石佛を探し當て小兒のやうに喜ぶ三人。四角竹や龜石の在る小庭から眺めた鬼ヶ崎、小濱浦、太房岬(太武岬)や洲ノ崎に取圍れた長汀曲浦は、何時も乍ら中々佳い景色だ。勝山沖に在る浮島を洒落て形容すれば、「宛然青鼈の海上に浮けるが如し」とでも云はうか。

眼の下には今宵自分らの埒となるべき保田町の

屋根々々が、春ける夕陽を沿ひて、きら／＼と輝いてゐた。

八月二十八日。起床すれば、日は正に三竿と云つた有様。何だ彼だと氣忙しく身仕舞し乍ら偶と見ると、弱蟲のBが矢でも鐵砲でも持つて來いと云つた調子で大いに力んでゐる。まさか氣が狂つたのであるまいが、多少は心配にもなるので訊いてみると、「ゆふべ爰の女將さんから鯉の生膽を貰つて嚙んだせいか急に元氣が出て來たんだ」と嘯いてゐる。人聞きは宜いが實は奴め、けふ一日で旅程を終るものだから、急に元氣づいて來たに違ひあるまいと思ふと可笑しくなる。

海沿ひの國道をとぼ／＼と行く。沖には黒木を冠つた浮島がぼつかりと。

佐久間川を渡り、勝山町の加知山に來ると國道は急に海岸から遠ざかり、暫くは田隴に沿つてゆく。飯坂（エイサカ）で國道を捨てて左折し、川沿ひの街道を東方へ向つて行くと共に愈々久戀（トミサン）の富山、伊豫ヶ岳は目睫の間に迫つてきた。一里程で富山の北麓

に位する西ノ澤の人家に到る。唯有る農家の軒先をかすめてから漸くに爪先登りとなるのであるが、其昔馬琴が彼の里見八犬傳に書いたやうな「息吻あへずよぢ登り」ゆく險路もなければ、「わたしもあへず推倒され石に頭をうち碎かれ骸もとどめず成にけり」と云つた様な恐ろしい早川も見當らず、至つて暢氣な登りであるから、如何なる足弱も樂々頂上できること疑ひなしであらう。

頂上は二つに分れてゐる。茅葺の斜面を之曲し盡して先づ左手の黒木立に入る。これは觀音山といはれ觀音堂がある。堂守の老爺に茶を請ひ、鐘樓のもとで握飯の包をひらく。爺さん此の富山の御厄介になつてゐ乍ら、八犬傳については何も知らなかつた。少し峯傳ひして金比羅山へ行く。安房郡の大半を雙眸に收め得る三角點（三四八米）附近での眺望は、相等に佳いものではあるが鹿野、鋸等を歩いて來た眼には、少々もの足らぬ。然しこの富山は三方に海を繞らせて孤立してゐるせいか、舟人の好目標となつてゐると聞けば、成る程と首肯できぬではない。北方に兀立してゐる伊豫

ヶ岳は道に良い山だと思つた。

往路を街道まで戻り、川上部落でまた街道から離れて伊豫ヶ岳の麓へ分入る。海岸地方の低山としては中々立流な山容を示してゐるので、一行は多少の好奇心も手傳ひ、その急斜面のヤブを正面攻撃しつゝ、竟に頂上に達したが、例によつて襟首や手足等を散々に引搔れそれに汗が滲込んだりして頗るみじめな思ひをした。

爰で記憶は偶と甦り大正三年の夏にまで遡る。ぢり／＼と灼きつける、七月の太陽を背にしつゝ、このヤブをがさ／＼搔分けた時の三人（沼井兄、私、私の弟）の辛い思出。後年従兄の沼井兄が「ヤブの思ひ出（？）」といふ一文を帝國大學新聞に寄せた折、それに慥か此の伊豫ヶ岳での經驗も出てゐたやうに記憶する。そして孰れも若い學生であつた其當時の三人が、親達の叱言もものかはと皆期せずして今日のやうな、山岳禮讀者となつたのは、必然か偶然か。考へてみれば洵に不思議な運命のいたづらである。

偕て正面から仰ぐと木立の少ない此の草山も、

山蔭には緩つたりした徑が蜿つてゐるし、溪流を差挟んで杉の植林も行届き、頂上近くには數本の松が亭々と聳えてゐるのである。

頂上三角點（三三五・二米）からの眺望は頗る佳い。鋸山から右へぐん／＼延びてゐるのは、三一四・三米の峯、横根峠、津守山（三三〇米）、三四六・五米の峯等の低い國境山脈。眼の前にぼこんと盛上つてゐる富山は申すに及ばず、嶺岡山の二ツ山の黒木立も、爰からは全く手に取るやうだ。大日本地誌其他の文獻によつて豫め知るを得た此の半島に於ける名山の幾つかは、孰れを夫れと判じかねる程、四周には低い山なみがく／＼と湧返つてゐるのであつた。

偶と見ると足元の急崖に、大きな岩の瘤が突出てゐた。崖縁と岩との間隙（距離）およそ四尺。少し勇氣を出せば難なく跳移れさうに思はれる。後生の好い人は必ず無事に跳戻つて來られると、里人が云つてたのは此の岩のことであらう。

山を下りて再び元の街道へ。飯坂で國道を突切つてから市部瀬へ。市部瀬の人家を過ぎ、左に天

魔ヶ臺を見上げつゝ、岩井袋の海岸に出てから、岩礁のあちこちを跳びあるいて、とこぶし、あわび等を漁る。澄きつた潮の底には、ぶだひやべらがひら／＼と泳廻つてゐた。

斯くして身邊が漸く仄暗くなつてきた頃、自分達は久戀の山々に左様ならを告げて、磯くさい加知山の街に入つたのである。

(大正八年八月遊行・昭和三年二月稿)

# 雜報

雜報 ○阿蘇山の爆發 ○靜商生徒愛鷹山中で凍死 ○舊象の齒牙發掘

一三八

## ○阿蘇山の爆發

【熊本特電】数日前から鳴動と共に盛んにヨナを降らして活動をはじめた阿蘇山は二十日午後二時半頃大音響を發して爆發し、物凄い噴煙をあげ大石のやうな熔岩を噴出して遠雷の如き地鳴りを發して活動し、遠く久住連峰、宮崎地方までヨナを降らしてゐる、夜にいたりては火柱天に沖し付近住民は戦々兢兢としてゐる。

熊本測候所では所員を派遣して調査せしめた結果明治三十年來の爆發で、今のところ人畜に被害はなく付近一帶の温泉にも支障を認めない由である。(昭和三年十二月二十三日東京朝日新聞)

【熊本電話】二十二日熊本縣阿蘇郡宮地町附近を中心とし、阿蘇山麓一帯にかけて午前四時五十七分から十時五分迄九回に互り地震があつた、其の多くは水平動であつたが熊本測候所員の談によると、

阿蘇山は昨夜來鳴動を伴ひ、活動を始めて火煙天に沖し、山麓一帯は降灰甚しく熊本市方面まで達した、今回の地震は同山の活動が震源となつて居るらしい。(十二月二十三日國民新聞)

【熊本電話】大活動を始めてゐる阿蘇山は二十二日正午から噴煙猛烈を加へ黒煙濛々と物凄い光景を呈し、相變らず盛に熔岩を噴出し壯觀を極めて居るが、二十一日調査のため登山した熊本測候

所日淺技手の談によれば、山上火口壁は危険で近づけないので可なり遠い所から觀測したが、火口から黒煙濛々と立上る内に三十秒乃至五分間おきに凄じい音響と共に大きな熔岩を噴出し、時々大砲の如き大音響を發して大地が崩されるかと思はれる位である。黒煙に交つて噴出される熔岩は夜に居るにおよんで火花を打あけるやうに連続的に火の玉が上り、火口に落ちる熔岩と噴出される熔岩は空中でボン／＼と音を立て、炸裂し、言語に絶する奇觀を呈して居るが今の所火口壁一帯は危険であるがその他は危険はない。(十二月二十三日東京朝日新聞)

## ○靜商生徒愛鷹山中で凍死

【沼津電話】富士山麓愛鷹山山中で行方不明となつた縣立靜岡商業五年生田代美治(二一)は引續き捜査の結果六日午前十一時二十五分同山中位牌ヶ岳の東方駿東郡富岡村字下和田送山雜木林中に凍死してゐたのを發見した。(昭和四年一月七日東京朝日新聞)

## ○舊象の齒牙發掘

栃木縣安蘇郡葛生町附近一帯は、古生代の石灰岩から成つてゐるのでセメント材料として採掘してゐる、昨秋發掘しゆくうち奥行き三間、間口二間位、黒褐色の粘土で埋まつた洞穴と思はれる箇所に突當り、中から多數の哺乳類の化石が現れたが、惜しいかな人夫達にその大部分は捨てられた。これを見た同事業を經營してゐる川谷善太郎氏は、残つてゐた骨のやうなものを數箇東大工

學部應用化學のセメントを研究してゐる永井彰一助教の下に送つて來たので、永井氏はこれを理學部地質學教室の佐伯四郎氏に示し佐伯氏が鑑定の結果驚くべし、この數個の骨は太古に棲息してゐた「舊象」の白齒二個と牙二個の珍化石である事が判明、佐伯氏は得難い好資料を得たので大喜びて目下詳細鑑定中である、右化石の白齒は六寸位ホラ貝位の大きさ、牙は直徑一寸長さ八寸位の大きさのもので新生代のものであるから米國地質學者アーサー・ボリック氏の計算によれば、今より約三百萬年前のもので、當時棲息してゐたステゴドンと呼び、舊象の化石の一種との事である。しかも同地方は古生代の地層から成つて、新生代の地層の存在など夢にも思はれてゐなかつたのをこの化石の出現によりかつて被つてゐた新生代の地層が何かの變動によりすつかり除かれた際棲息してゐたステゴドンが洞穴に避難したまゝ化石となつたもの、古地理學上一大發見をしたわけである。(一月八日國民新聞)

○雪の乗鞍岳遭難

昭和四年一月四日、前代議士畔田明、松本高校教授井上増次郎、東京帝大生宮川要の三氏が案内者大和由松を伴ひ、吹雪を冒して乗鞍岳の頂上に向ひたる儘行方不明となり、附近登山組合及青年團等の大捜索となり、生死の程を氣遣はれたが、四日を過ぎたる一月七日に至りて、一行無事に飛驒側に下つたとの報に接した。一行孰れも多少の凍傷を受けたけれども、生命に別條がなかつたのは全く僥倖であつたといはなければならぬ。畔田氏は其顛末を婦人公論二月號の紙上に發表してゐる。夫に據ると、一行は防

寒具、食糧等は下方の冷泉小屋に残し置き、持ち合せの僅のチーズ罐詰と干葡萄とを携へたるまゝ、一月四日午後零時四十分吹雪と濃霧とを衝いて肩の小屋を出發し、乗鞍の頂上に向つた。そして兎に角頂上には立つたが、衣服はバリ／＼に氷結し、睫毛も目も凍りつきさうな寒さで、加ふるに猛烈なる吹雪は更に勢を増し、明に危険の身に迫るを感じたが、此時は既に方向を失して肩の小屋に歸る道が分らなくなつたのであつた。

そこで先づ密林地帯に避難して寒氣を防ぎ、吹雪の晴れ間を待つことにして、權現池と思はれる方向を辿つて下山の途についた。スキーの代りにアイゼンを着けてゐたので、四五尺の積雪を踏み抜くと首まで落ち込んでしまふ。疲れた兩腕で夫を引上げてやることはお互に言ひやうもない苦しさであつた。之を幾度か繰り返してゐる中に夕暮となり、幸に密林地帯に續く凹みに岩陰を發見して一夜を過すことにした。

もう食物は殆んど残つてゐなかつた。火を起さうとして一時間もかゝつて漸く焚火が出来たと喜んだのも束の間で、底の雪が溶けて火は深く落ち込んでしまつた。それで四人とも互に名を呼びながらまんじりともせず夜を明した。

一月五日の朝は空も晴れて、双眼鏡で覗くと雪の道と小屋らしいものが見えた、之に力を得て四人は岩陰を離れ、昨日と同じやうに雪の中を這ひ、泳ぎ、沈みながら苦しい歩みを續けて行くことと断崖の上に出た。大木が倒れて橋のやうになつてゐるので其を渡つて下ることを得た、宮川氏は足を滑らして下に落ちたが、適度な積雪の爲に微傷も負はなかつたのは不幸中の幸であつた。かく

て四人はめい／＼の名を呼びながら前進を続けたが、同じ林、同じ谷の間ばかりで、歩いても／＼も道らしいものや小屋らしいものが目に入らぬ、又日が暮れかけて来た。運よく井上氏が大木の根の所にかなり大きい洞穴が開いてゐるのを発見し、雪を掻き出して中に這入った。ひしと迫ってくる飢の方は如何ともし難いが、これで吹き降らしの雪の中に立ち明す寒さからは救はれる。

食物はもう無い。苦心して焚火はするが雪解の水ですぐ消えかかる。それよりも危ないのは睡眠だ、互に替り合つて若し居眠りを始める者があれば名を呼び激しく體をゆすぶつて起こすことにする。そして夜が明けて復た雪の上を這ひ出した時は、眠る事を防ぎ合ふよりはまたこの方がいくらか愉快であるか知れないと思つた。

一月六日の午後になつて、雪に埋つてゐる木の梢も次第に高くなり、傾斜もゆるくなつたと思ふと、暫くして「卜傳岩」の立札前に到着した。信州方面に下る積りて飛騨側へ下つた事を始めて知つた。兎に角再生の希望に燃えて一行代る／＼ラッセルを務め、午後五時半舊平金鑛山を経て、吉川製作所へ辿り着き、無住てはあるが人の住んだことのある家の中で、疲れ切つた足を投げ出して焚火に暖を取りながら夜を明した。常に元氣で一行を力づけてゐた井上氏はその夜からげつたりと倒れてしまつた。

斯くて七日の朝スキーの巧みな宮川氏と大和案内者がそこらの木で手製のスキーを作り、それに乘つて岐阜縣大野郡丹生川村岩井字澤上へ到着したのであつたといふ。眞に幸運な人達であつた。

## ○會員通信

△前略。今夏は珍らしき悪天候続きにて山行には全く困却致しました、七月は十四日上野發夜行で薬師から槍への旅に發ちました、第一日大多和泊、第二日は有峰を経て眞川小舎泊、第三日より雨天となり眞川小舎三泊、上ノ岳小舎四泊といふ、昨夏の烏帽子小舎滞在にも勝るロドイ目に浜ひました、併し一週間も小舎に滞在して呑氣にして居られるのも學生時代たる今年だけだと思ふと何だか悲しい氣になりました。

そして豫定より一週間遅れて二十七日に上高地に参りましたがこゝには又あの雨を一週間も上高地で頑張つた仲間が多勢居たのには驚きました。今年の上高地は全く御話になりません、よく云へば民衆化したと云ふのでせう。併し穂高や霞澤の一日の長い登攀から歸つて直ぐ食堂で洋食や鰻井(尤も之は罐詰のですが)が食へるのも悪くもないです、併し少くとも私等は夏は再び上高地に行く氣はありません。

八月二十二日東京發で早月川―小窓―劍澤―黒部別山―クラノスケ澤―平の小舎―東澤―赤岳―野口五郎―烏帽子を廻つて下山した。この旅は天氣もよく非常に愉快な谷の旅でした。美しい小窓の雪溪、險惡なクラノスケ澤、黒部別山の眺望、樂な美しい而も歸の多い東澤等は何より深い印象を残しました。そして歸りがけに大町から四ツ家に出て鏡温泉に一泊、翌日白馬を廻つて九月四日歸京しました。(九月十八日田中菅雄)

△昭和三年度に於ける本校山岳部の活動状況を簡單にお知らせ申します。

元來が中等程度の學校の山岳部のことはあり、年々校友會から部費として支出して貰へる金は二百五十圓しかありません。而も、三日以上に亙る登山は、夏期休暇を待たなければ遂行出来ませんので、總體としての活動は左程花々しいと言ふ譯には参りませんが、中學校の山岳部としては、決して他に比して遜色ない様出來得る限りの活動をする積りであります。

登山としては、夏季登山が無論本體でありますから、その以前、即第一學期中の、週末を利用して部員を附近の山に引率するのは、皆足の練習であります。夏季登山に参加するものへは、此足ならし行軍を延長行程として二十里以上に亙るやうすゝめて居ります。勿論行軍と申しましても皆平地を歩くだけでなく、大部分は謂はゞ小登山であります。

本年度に於ける、此種の登山は、越捨山と四阿山でありました。前者は、一日歸り、登り下り行程約五里、後者は土曜から日曜へかけて一泊登山、行程約十三里であります。此二回の登山に参加したものは合計百五十名に上りました。此二回に加へて、他に一度平地行軍、一泊、行程十二里と言ふのを行つて六十名を參加させましたので夏山の準備は充分に出来ました。

夏山は、六班の計畫を立てましたが、山岳部より支出する經費、引率者の都合等の爲、ハツ岳登山班を中止し、左の五班を出しました。

第一、白馬方面。本校山岳部の白馬コースは一般の人と異なつ

て、四ツ家から自馬籠温泉に上り、一泊、籠の雲溪を攀ぢて杓子を通過し、白馬に至り、更に大池に延し、引き返して白馬泊り、習日下山歸校と言ふのであります。參加者十名。四日間。

第二、燕、槍、穂高方面。部としての穂高は初めてでありました。丁度天氣の良くない時でしたので、槍までは問題ではないのですが、穂高は一寸どうかと思ひました處太した降りもなく無事縦走しました。殺生から上高地清水屋までの所要時間は十三時間半でした。尤も八名の人員で案内一名だったので手間はとれました。此班は又上高地一泊の上、機に登つて歸りました。六日間(但し雨天の爲中房温泉二泊)。小生引率しました。

第三、乗鞍、燒方面。此班はひどく雨にたゞられた班でしたが豫定通りのコースはやりました。只白骨に三泊も餘儀なくされた爲四日の所が六日に延びました。

以上の三班は全部七月二十一日發でありました。皆二十六日迄には無事歸校しました。それから、本市に本校主催の野球大會がありましたので、山岳部は一週間活動を中止し、順次又左の二班を出しました。

第四、富士及富士五湖方面。これは、幾分遊覽の意味を含めた班で、よく下級生が参加します。校長、教頭も參加しました。所が、雨天と風の爲に富士の山頂も極め得ず、五湖も僅に二湖を見ただけで歸りました。参加人員十名、只行軍の練習になつただけで、富士の姿を見ることがすら出来ずに終つた失敗班です。五日間。

第五、南アルプス赤石方面。この班は本校としては初めてであり

ました。小生と、も一人、本校山岳部の重鎮、博物擔任の佐藤教諭の二人がリーダーとなつて生徒五名を引率しました。八月八日から十三日まで、好天氣に恵まれて愉快な登山でした。最初の豫定では、赤石から、荒川、悪澤(東)を極め、高山裏に露營をして鹽見に出る考でしたが、具合を悪くした生徒があつた爲、荒川、悪澤まで行つただけで、鹽見へは延しませんでした。例の大倉喜七郎氏が登山されて、その爲に甲州側の構島から赤石の大小寺平まで、千枚谷の方から悪澤、荒川によつて来るもの、奥西河内澤によつて大倉小屋(本年度新設)にぬけるもの、赤石澤方面から百間平の方面へ廻つて出るもの、の三登山線が開拓されて非常に便利になりました。此點大倉男に感謝しながら歩いてきました。尤も私共は信州口の大河原から登つたのです。幸に雨があまりませんでしたので、往復とも小沢川の徒渉は非常にらくでした。日程は全部で六日間。南アルプス方面は、北アルプスの様に小屋の設備がないせいか、費用は案外に輕少で済みました。序ながら前記五班各々の費用を生徒一人當りて申上りますと(勿論案内、旅館茶代等は部の負擔)

第一班、十二回。 第二班、十六回。 第三班、十四回。

第四班、十五回。 第五班、十八回。

でありました。雨の爲一日の延期をしても約三回超過するだけで、登山としては、流石、信州にゐるだけ輕便に行ける譯です。夏の活動は大體右の如くでありました。

第二學期には、妙高、淺間に各々一泊登山をすることに成つて居り、その後はスキーに全力を集中する筈であります。昨年度は、

スキーの數を増して、やつと二十臺揃へて各方面に練習に便しました。今春三月には、四名の者が四阿山にスキー登山を試みましたが、今年度も決行したいと考へて居ります。今年度の活動は大體こんな具合です。尙益々發展したい考で居ります。

幸に本部皆様の御奮闘を祈つて居ります。(九月六日長野中學校山岳部代表秋山敏)

△別宮、渡邊、冠三名大山村の工夫を連れ八月二十二日午前十時千垣を後にしてその日は立山温泉に泊り翌二十三日平の小屋に出でそれから御山澤の落口より下流の日電の小屋に泊り二十四日は赤澤と内藏の助澤との落口の中間にある立山寄りの闊いた礫に泊り丁度一日後れて出發せる岩永君と落ち合ひ二十五日には内藏の助澤鳴澤新越澤の落口を経て大へずり手前の黒部別山中央部の窪地に泊り立山側を岩壁を横ぎつて黒部別山澤より下のタル澤の落口を経て十字峽まで下らんとせしも黒部別山澤落口附近の雪の状態悪しく且つ日電歩道の開鑿の爲ハツパによつて左岸の岩壁を破壊しつゝあるを開き下廊下を斷念して、上廊下溯行と約變し二十六日には新越澤落口前の泊り場から内藏の助澤落口を経て平に戻り更に東澤まで溯行してその落口に野營し二十七日には口元のタル澤(中々險惡なる岩場あり)廊下澤を経てスコウ澤の下手のよき礫に泊り二十八日には愈々上廊下(若しこれを奥廊下、中廊下と分けるとすれば中廊下)の最も岩壁の狭迫峻高なる部分はスコウ澤落口より薬師頂上のカールより出づる金作澤の落口迄約十五町に一日を費やしロープヒトンを用ひ殆ど川身のみ溯り金作澤の落口に野營二十九日この附近殘雪非常に多く直ちに薬師下の廊

下に下れざるを以て東信道を暫く辿り又礮川身に降り、立石を経て上廊下を通過し藥師澤の出合に泊り三十日天候險惡陰風の模様なるを以て、源流地溯行の旅程を捨て藥師澤を上り太郎兵衛平を越へ有峰に一泊三十一日和田川を下りて千垣に出て一日歸京致し候。

大正十三年に雨の爲果さなかつた中廊下の深谷を今年は殆ど文字通りの谷渉りをしてその岩壁の雄渾江水の清麗を味ひ黒部の立派さを讃嘆致し候このやうな立派な溪谷は日本中の溪谷界のよい處を束れて持つて來ても比較出来るものは減多にあるまいと思ひ候。(九月四日、別宮、岩永、渡邊、冠)

△前略。去る五日東京出發、谷村にて會員大江明正君を誘ひ青木ヶ原を経て長尾峠に達し精進口を登りて吉田口五合目に出て、更に小御岳御庭、奥庭を探り、尋て吉田口六合目より須走口三合目に出て小富士を通過して山中湖畔に下り候。山中至つて靜寂にて氣分頗る宜ろしく夏月の富士とは同日の談に無之候。明日は針樵の林を探りてより吉田に出づる豫定に候。(九月十日山中湖畔にて武田生)

△十月九日飯田町發の終列軍にて同行二名と奥秩父へ参りました。第一日は蕪崎下車、中尾迄自動車にて参り夫より増富を経て金峰山中腹の里宮の椽の下にて一夜を明し翌朝は富士見平よりアマドリ澤を下り瑞崎山へ登攀しました。山頂は一帶に岩石にて掩はれ其間に紅葉が美しく彩つて非常に絶景でした。上下二時間にて歸着。其日は金峯、鐵山、朝日を経て荒川源頭で野營しました。が天幕が無い上に甚しき寒さの爲に一夜をまんじりともせず明し

て仕舞ひました。第三日は奥千丈(二六〇〇米)と國師を経て大嶽山奥院の尾根を下つて京之澤小屋泊。此日は小屋へ正午頃着いたので半日を休養に過しました。翌日は大嶽山への尾根から黒金乾徳二山に登る豫定の所、大嶽山への道を見誤り長い間山腹をかちんで二〇二八米の地點へ出てしまひ、遂に乾徳行きを失敗に終りました。山中にて炭燒きに尋れし處二〇二八米の地點をヒツコミと云ひ、黒金山からヒツコミに至る尾根を石塔尾根、ヒツコミから芹澤へ至る尾根を鼻戸尾根と稱し、芹澤へ落ちる小澤を久久保澤、大嶽山より赤ノ浦に落ちる澤をコブテ澤と稱するとの事です。尙ほ地圖上にある上萩原鐵泉は十年前に無くなつて居り、その下の成澤の所に湯苗田温泉といふのが出來て居ります。(川崎吉藏)

△拜啓。陳者去る三四日の連休に霧の旅會員鶴岡君と共に甲斐駒ヶ岳に登山仕候。柳澤にて御存知の水石春吉氏を連れ、暴風中を屏風小屋迄登り其日は其處に一泊、翌四日は三十日に反し稀に見る快晴にて七條の小舎迄は無難なりしも、それより上は結氷に閉されてカンジキの用意無かりし小生等は、一個のビツケルが頼りにて四時間四十分と云ふ思はぬ時間を要し頂上に達し申候、眺望に不足無く實に愉快に有之候、下山は再び柳澤に出て五日朝歸京仕候。(十一月六日野口末延)

△我が越後の紅葉郷を探りつゝ二十三日赤湯へ入り數日滞在。毎日茸の御馳走にあづかりぬます。館主山口昌次氏と貴下の話も出て餅や餅を思ひ出します白もコログツテぬます、阿々。この紅葉大觀は或點に於ては黒部峽を凌駕します。

△紅葉狩の遊子途に足をすべらせて三國峯を越え、法師温泉に浸

りました、嶺上から法師まで約一里に互つた紅葉美は意外の壯觀  
てしたが、唯稍々單調の嫌がありました。谷口梨花氏も數日前に  
來られたさうです。(昭三、一〇、二八法師長壽館にて大平晟)

△拜啓。二日夜折柄の風雨を物ともせず上野發午後十一時十分の  
列車にて出發下仁田着三日午前三時半。稻含神社に參詣して岩尾  
根傳ひに赤久繩へと進んだのです。鮎川を圍む數多き隆起の登降  
に氣を腐らせ、一直線に赤久繩山へと鮎川の溪へ猛烈な激流りを  
敢行して山頂を極め、鹽澤川に降り萬湯泊。翌朝生利より西御荷  
鉾に登り、投石峠、小梨峠を経て午後四時十分吉井發の列車にて  
歸宅致しました。連日好晴に恵まれ久方振りによい氣分になりま  
した。(十一月五日神谷恭)

△今春三月下旬、朝日山から強盜峠(雁道峠)の縦走を企て、無  
生野から膝を没する残雪を踏んで、秋山盛里兩村界尾根の一千メ  
ートルの地點に辿り付いたが、里人に聞かされた通りの深い雪  
に、とうとう朝日山を斷念し尾根を西北に雞鶴峠に出て、盛里村  
に降り富士電鐵で大月から歸京しました。此の失敗忘れがたく同  
行者も同じく會員の山田多市君と二人、去月二十七日の夜九時鳥  
澤驛發、折柄十三日の月が亂雲の隙を洩れて燈火も要らず、頗る  
暢氣に小笹澤について十時四十五分アナシ峠頂上に立ちました。  
空は全く晴れて冴えた月光の下に、峯は燻し銀のやうに輝く美し  
さ。

無生野から二十五分程澤を登つた處の炭燒小屋に、淺い眠をと  
りました。此處では既に炭を燒かぬとみえ、かまどの中は湯り附  
近には貧弱な生木の外、燃料らしいものもなく可成りな冷氣を

覺えました。タンノ入山から朝日山附近の紅葉は眞盛りで、夜明  
の寒氣と共に、私達の眠い眼を豁然と開いてくれました。早朝の  
快晴に引きかへ折悪しく時雨模様、朝日山頂から初めて見る大群  
加入道が頭を雲に蔽はれてはゐましたが、殆んど全容を現はして、  
深く食ひ込んだ谷が眼を惹きました。眼下に展けた道志川の谷は  
案外淺いのやゝ失望しました。尾根を東に傳ひ出して、暫くす  
ると加入道の西に、ムツクリと盛り上げた畦ケ丸の不思議な山容  
を見ました。綺麗な草原を十時三十四分ワラビタ、キ三角點(一  
二五・七・三米)。三角櫓もまだシツカリと立つてゐました。雲が斷  
れて強烈な晚秋の陽が照り出したので晴れるかと思つたが、又一  
面の霧に巻かれ遂には雨がやつて來ました。快晴ならば此の附近  
は、相當豊富な展望を得られる筈なのに遺憾でした。

一〇四八米三角點に達したのが二時四分、此の頃は酷い雨にな  
り、全く見通しは利かず尾根を暫く東に走つて後、南に降るべき  
を三角點から少し離れただけで、南に降りたので何時か一〇四八  
の八の字の直下即ち南へ道志川へ落ちる尾根を降りつゝあるのに  
氣附いたが、止むを得ず道志の谷へ降る覺悟で其儘敷の中をたゞ  
南へ南へと押し分けて、約二時間後、久保から強盜峠への路を分  
岐した山道に泳ぎ出ました。路を峠にとつて登り、阿寺澤に薄暮  
着、農家に火を乞ふて濡れた服を乾し、再び雨の中を上野原に出  
て終列車で歸京しました。朝日と一〇四八米三角點間は、一ヶ所  
茹つてはあるが、笹の深い處がある外、跡迹はほんのかすか乍ら  
も隆起も少なくて晴れてゐたら展望も相當にあり、愉快に歩けま  
せう。(昭和三、十一、十四、木村久太郎)

△前略。先便にて一寸申上げましたが十一月日光より山王峠を越え川俣温泉泊、十一日は引馬峠を経て檜枝岐に参りました。引馬峠は一寸雪がありまあ峠としてはいい感じを興へて呉れました。十二日は雪がチラ／＼舞ふ様な天気で檜枝岐に滞在、十三日はいい天気ではなかつたのでしたが會津駒に登りました。雪は千二百米附近からあり頂上附近は二尺から三尺位で例の草地は一面いゝスロープをなして急にスキーが戀しくなりました又頂上から眺めた魚沼駒、銀山より遠く飯豊山塊の飽く迄白い姿には全く感激の聲を發しました、越後の山々に引かへ日光連山は白根に漸く雪線を見るのみで他は眞黒な姿をしてゐるのが一寸面白い對象でした十四日は沼山峠を越して尾瀬長蔵小屋に一泊、平地には雪なく燧も雪は非常に僅かでした、十五日は昨夜からの風雨を冒して三平峠を越して鎌田に出て一泊、十六日は鎌田より沼田まで自動車の厄介になり沼田から汽車で水上（鹿野澤）まで行つて谷川温泉に一泊、十七日夕刻歸京致しました、谷川温泉も汽車が通じて便利がよくなつた爲か、沼田、高崎、遠くは東京邊りから遊びの客が大分來る様になつて山ノ湯の面影は漸次失はれて行く様に思はれます。

今度の一週間の香氣な山旅の中で印象に残つたのは會津駒よりの美しい眺めとそれにも増して檜枝岐の純朴なる人達の事でした、丸居の人達は皆實に感じがよく又長岡の薬の行商人とも泊り合はせ、檜枝岐の三日が最も印象が深かつた様でした。（十一月十九日田中菅雄）

# 會 報

## ○第四十一回小集會

九月二十九日午後六時半より赤坂三會堂に於て藤島幹事司會の下に第四十一回小集會を開催し、左の講演ありたり。

一、遠山川西澤を溯る 會員 黒田 正夫氏  
 信州飯田より便船を利用して天龍川を和田に下りそれより遠山川を溯り、西澤渡より西澤を経て聖岳に登り、歸途は北又川を下る豫定なりしも今夏の雨に難まされ、再び聖平より遠山川に下り、小川路峠を飯田に越え歸京されたる約十日間の旅程にして、人烟稀なる桃源郷より幽邃極りなき深潭を溯りゆく山旅の愉快なりし思出を、獨特の雅趣愛すべきスケッチ十數枚を示して語られたり。

一、白萩川池ノ谷を溯る 會員 長谷川孝一氏  
 劍岳登路として最後まで残されたる池ノ谷を溯り、斷崖を攀ちて池ノ谷大瀑の壯觀を探り、引返

して山稜を三ノ窓に出で劍岳に登られたる旅行談にして、知られざる幽窟の神祕は大いに興趣をそそるものありたり。詳細は本號所載の兩氏の記文に就て知られたし。

當日の來會者は、會員外を合せて三十二名なりき、十時散會。

## ○會務報告

昭和三年六月二十三日午後五時半、赤坂三會堂に於て幹事會開催左記の件決議す。

一、從來入會申込者の詮衡は、年四回開催の幹事會にて之を行ふこととなり居りしも、斯くては不便少なからず、或は入會申込者を失望せしむることある可きを以て、申込者あり次第回覽の便法を執り、必要なる場合に限りて合議詮衡すること。

終つて入會申込者の詮衡を行ふ。

昭和三年九月二十九日午後五時半、赤坂溜池三會堂に於て幹事會開催。

一、十一月に大會を開き、麻生武治氏に講演を依頼すること

(藤島幹事提案)

を議決し、入會申込者の詮衡を行ふ。

昭和三年十一月二十四日午後五時より、赤坂溜池三會堂に於て幹事會を開き、左の件を協議す。

一、二十五周年記念として山岳寫眞帖發行の件、但し詳細に就ては更に相談すること。

終りて入會者申込者に就て詮衡す。

出席幹事、別宮、藤島、冠、木暮、槻、島山、高頭。

### ○本會規則拔萃 (大正十三年九月改正)

第二條 本會ハ山岳ニ關スル研究ヲナスヲ以テ目的トス

第三條 本會ハ第二條ノ主旨ニ基キ機關雜誌「山岳」ヲ發行ス、又時宜ニヨリ別ニ臨時又ハ定時ノ出版物ヲ發刊スルコトアルベシ

第四條 本會ハ毎年大會及ビ小集會ヲ開ク

第五條 本會ハ會長ヲ戴カズ幹事若干名ヲ置キテ一切ノ會務ヲ處理セシム

第十條 本會會員ヲ別チテ正會員及ビ名譽會員トス、名譽會員ハ幹事會ノ決議ニヨリテ推薦セラル、モノトス

第十一條 正會員タラント欲スル者ハ會員三名ノ紹介ヲ以テ住所、姓名、年齢及ビ職業ヲ記シタル申込書ヲ事務所ニ送付スベシ、但シ紹介者ノ一名ハ本會評議員タルヲ要ス (入會申込用紙ハ事務所ニ備付ケアリ)

第十二條 入會ノ許可ハ幹事會ノ決議ニヨルモノトス

第十三條 入會許可ノ通知ニ接シタル者ハ直ニ入會金五圓ニ會費ヲ添ヘ拂込マルベシ

第十四條 正會員ハ會費年金六圓ヲ毎年二月末日迄ニ納付スベキモノトス

第十五條 正會員ニシテ一時ニ金百圓以上ヲ納付シタル者ハ爾後會員籍ヲ有スル間ハ會費納付ノ義務ナキモノトス

### ○投稿規定

一、會員は勿論會員以外の何人も投稿隨意のこと。

一、用紙は半紙半枚大、天地左右をあげ、毎紙片面のみに字體明瞭に認め、各行二十二字詰とし、毎紙同一行数のこと。(原稿用紙は事務所へ申越次第直に送ります)

一、。、。〔〕等は各一字畫宛とし、行を更むる時は一字下げのこと。

一、地名には片假名を振り、漢字不明にして當字をなす時はその旨を括弧内に明記されたきこと。

一、スケッチは複製の際誤記、脱漏等の虞あるを以て換め本誌面に適せる大きさに調整ありたきこと。(但し其儘直に寫眞版に附し得るものは大き隨意)。

一、原稿は左記宛御送附のこと

東京市本郷區駒込蓬萊町三一 「山岳」編輯所

尚ほ編輯に關する用件は總て前記宛御照會のこと。

〔山岳圖書紹介「其他は紙面の都合に依り、五月下旬發行の豫定なる第三號に譲る」〕。

昭和四年三月二十八日印刷  
昭和四年三月三十一日發行

【定價金貳圓】

編輯兼發行者

新潟縣三島郡深才村深澤

高頭仁兵衛

印刷者

東京市神田區美土代町二丁目一番地

島連太郎

發行所

東京市芝區高輪南町三十番地

日本山岳會

振替口座東京四八二九番

印刷所

東京市神田區美土代町二丁目一番地

三秀舍

東京市神田區表神保町

發賣所

東京堂

山岳第二十二年總目錄 (昭和元年度)

本欄

劍岳新登路とハツ峯	渡邊 漸	一頁	通シ頁
野川を廻りて大朝日岳へ	吉澤 一郎	一 二八	27
開聞岳	竹内 亮	一 三九	39
仙人澤入り	冠松 次郎	二 一	111
黒部川	沼井 鐵太郎	二 三二	142
双六谷から黒部川へ	冠松 次郎	二 八八	198
黒部川より立山川への旅	岩永 信雄	二 一一二	233
開聞岳及球磨溪	大平 晟	三 一	374
十二ヶ岳と鬼ヶ岳	沼井 鐵太郎	三 一八	321
温泉嶽	大平 晟	三 三六	333

圖版

○劍澤から見たハツ峯。劍澤の小澤から見た劍岳○池ノ平から見たハツ峯○野川キリタチ澤の小屋。五本檜の前方峯に登る途中から袖朝日及ヨコフツツケノ澤を望む○北海道鴛泊ベシ岬から見た利尻山。利尻島ベシ岬から鴛泊港を下瞰す○利尻島鴛泊から見た利尻山及ボン山。禮文島香深港沖から見た利尻山○禮文島桃岩北

面と西海岸の一部○レブンウスキサウ。禮文島二並山の南面(以上第一號)

○上流より見たる棒小屋澤と劍澤との合流點○新嶺溫泉○百貫山の岩壁と黒部川。猿飛附近○祖母谷落合附近。仕合ヒ谷落口より夫婦岩を見る○オリヲ谷の合流點附近より奥嶺山を仰ぐ。アノ原附近の黒部川○東谷落合附近。東谷の落口より黒部川下流を望む○劍澤、黒部川、棒小屋澤合流點の上流○棒小屋澤落合下の黒部川。下廊下の廣河原○下廊下のタルより下流に仙人山を仰ぐ。下廊下の廣河原より見たる仙人山○下廊下にて上流に岩小屋澤岳の支脈を望む。岩小屋澤岳支脈突端の赤壁○無名澤附近の絶壁○岩小屋澤岳支脈二〇六七米三角點附近より見たる立山。ハシゴ谷附近より見たる劍岳○黒部別山澤と無名澤との間○黒部別山澤附近より赤澤岳を望む。野營地より見たる黒部別山澤附近の岩壁○黒部別山のオホタガピンと岩小屋澤岳支脈の突端。下廊下の徒渉點と大屏風岩。○大ヘズリより上流を見る。大ヘズリより下流を見る。○岩小屋澤岳支脈二〇六七米三角點附近より見たる黒部別山と劍岳。新越澤落口附近より大ヘズリと黒部別山を望む○棒小屋澤無名澤間のヘズリ。新越澤右岸の壁。劍澤落口。新越澤落口。新越澤落口附近。同上○下より仰げる内蔵ノ助澤。内蔵ノ助澤より立山本峯を望む○内蔵ノ助澤落口附近の壁。内蔵ノ助澤上流より立山本峯。内蔵ノ助澤手前より黒部別山を望む。内蔵ノ助澤落口。内蔵ノ助澤落口附近より黒部川上流を望む。内蔵ノ助澤

山

岳

落口附近より赤澤岳を望む。○内蔵ノ助澤の上流。御山澤○仙人

澤に至る途中の棧道。シジミ坂の梯子。オホタテガビン附近の黒

部川。オホタテガビン附近より黒部川下流を見る。内蔵ノ助澤落

口の黒部川。御前澤落口○双六谷五景○双六谷廣河原附近。双六

谷の奥抜戸○五郎乗越より見たる笠ヶ岳。双六谷奥抜戸附近の廊

下○五郎澤。上廊下立石の上手。上廊下の入口○赤牛岳側より落

る瀑の澤。薬師岳カールの澤の落口。薬師岳下中央部の上廊下。

木挽澤落口附近の黒部川。薬師岳下の上廊下。奥のタル澤。○赤牛

岳中腹より見たる薬師岳。薬師岳下よりスゴウ乗越を望む。立石

の岩小屋。上廊下立石の上手。五郎澤落口より太郎兵衛平を望

む。上廊下立石の上手。○薬師澤の合流點。水蝕されたる上廊下

の壁○小スバリ澤附近より木挽山を望む。新越澤手前の架橋。新

越澤落口附近。新越澤落口下手の黒部川。オホタテガビン附近の

黒部川。バンバ島。(以上第二號)

○球磨川網場の瀬○段和山より北に十二ヶ岳を見る○段和山より

北西に鬼ヶ岳を見る○温泉岳(其一)○温泉岳(其二)○段和山より

北々東に御坂山塊の主脈を望む○故名譽會員志賀重昂氏。(以上第

三號)

スケッチ及地圖

○劔澤小屋より見たる源治郎尾根第一峰 ○源治郎尾根第一峰より見たる第二峰 ○別山尾根より見たる源治郎尾根 ○ハツ峰概念圖。

(以上第一號)

○立山東面と黒部川の下廊下(地圖石版三色刷)(第二號)

雜 錄

○不邦に於ける雪崩の方言 ○利尻禮文島見附雜錄 ○南九州の旅 ○大正十五年十月ばかり親風旅行しけるときよめる ○鳥首峠と武甲山の間に就て

第一號自 五一 至 九七 97

○黒部川概観 ○積雪期の黒部川 ○春の黒部川 ○黒部川探勝の經過

○黒部峡谷案内繪圖の誤を正す。

第二號自 一四六 至 一八四 266

○鎗ヶ峰登遊雜記 ○第二回修正版地形圖「山中湖」に就て ○赤石荒川其他に就て、○「御坂山塊」に就ての補遺 ○富士山雜記。

第三號自 一五五 至 三〇三 363

雜 報

○ウィツカー探險隊の成功 ○會員通信

第一號自 一九八 至 二〇四 104

○阿蘇山の爆發 ○燒岳の降灰 ○臺灣山岳會 ○早池峯登山路 ○飛騨山脈彙報 ○會員通信

○指導標新設○登山路新設○清水越隧道に千古の冷水○松原湖畔から珍植物を發見○圖書紹介○會員通信

第二號自一八五 295  
至一八九 299

第三號自九一 394  
至九五 398

會報

○第十九回大會記事○第三十四回小集會記事○會費値上に就て○新入會員紹介○會員章再交附○會員の訃報○會務報告○交換及寄贈圖書目○本會規則拔萃○投稿規定

第一號自一〇五 105  
至一一〇 110

○第三十五回小集會記事○會務報告○交換及寄贈圖書目○本會規則拔萃

第二號自一九〇 300  
至一九三 303

○第三十六回小集會記事○小島鳥水氏歡迎晚餐會○名譽會員志賀重昂氏の訃○新入會員紹介○會員章再交附○會務報告○交換及寄贈圖書目○本會規則拔萃○投稿規定

第三號自一九六 399  
至二〇二 405

附錄

○山岳第十九年總目錄○山岳二十年總目錄(以上第三號)



中央氣象臺長  
理學博士 岡田武松 著 (新刊)

# 氣象學講話

定價二圓五十錢  
送料書留廿七錢  
菊判三四六頁  
別刷圖版八圖  
クロース裝函入

此書物は特に氣象學を専門に修めやうとするのではないが、自家專攻の學科の補助として、斯學を一通り心得て置かうと思ふ方の參考書となり、且つまた農事、水産、工業、航海、航空、衛生等氣象學の知識を多分に要する業務に従事する人士の參考書となる様に編纂したものである。それ故に内容は出来るだけ普通の項目を選び之を平易に記述してあるが、然し學問的にも決して淺薄なものではないつもりである。兎も角も一讀して現代の氣象の要領だけは會得せらるゝ様にと心掛けた筈であるが、果して著者が企てた様にうまい具合に出來上つてゐるや否やは、是は炯眼なる讀者諸君の批評に任せる。(著者)

## 雲を攪む話

藤原 咲平 著  
四六判 四〇〇頁  
定價二圓二十錢  
送料書留十八錢

## 日本アルプス登山案内

矢澤米三郎 河野齡藏 著  
定價一圓八十錢  
送料書留十八錢  
小型 三二四頁

## 高山研究

河野齡藏 著  
定價二圓八十錢  
送料書留二十七錢  
菊判 二一〇頁

## 上高地

矢澤米三郎 著  
定價二圓二十錢  
送料書留六十八錢  
別刷插畫六十三圖

岩波書店

東京 神保町  
神保町  
南

振替 東京 二六二 〇四二  
電話 九段 一〇一 八〇九

# 山岳特別號殘本販賣

## 奧上州號

山岳第十六年第三號

本欄及雜錄二百十二頁

圖版十 插畫二十五

定價 金貳圓五拾錢 稅八錢

## 奧羽號

第一 山岳第二十年第三號

(殘本極僅少)

本欄及雜錄百七十五頁

圖版十四

定價 金貳圓 稅八錢

## 奧羽號

第二 山岳第二十二年第一號

本欄及雜錄百八十六頁

圖版七十三

定價 金貳圓五拾錢 稅八錢

## 黑部號

山岳二十一年第二號

本欄及雜錄百八十四頁

圖版三十一 地圖一

定價 金貳圓五拾錢 稅八錢

右孰れも少數の殘本あり御用の節は左記に御註文被下度候(御照會は往復葉書又は返信切手附にて願ひます)

東京市芝區高輪南町三〇

健全書店

振替口座東京三二〇五二番

# 山岳

自第一  
年至第二十年

# 總目錄



# 山岳 自第一至第二十年 總目錄

(自明治三十九年度至大正十四年度)

## 山岳第一年總目錄 (明治三十九年度)

表紙 (色刷) 武内 桂舟氏筆

### 本欄

山岳の成因に就て	小川 琢治	一	通シ頁
高根の雪	山崎 直方	一	五
湖沼研究の趣味	田中 阿歌麿	一	一四
赤石山の記	小島 烏水	一	一八
飯豊山行	石川 光春	一	三五
女貌山と太郎山	城 數馬	一	三三
信州八ヶ嶽	河田 黙	一	四七
塔ヶ嶽	高野 鷹藏	一	五八
女子霧ヶ峰登山記	久保田 柿村舍	一	七九
乗鞍岳採集記	川崎 義令	一	八九
妙高紀行	大 平 辰	一	一〇二
赤蓮の一角	五百城 文哉	一	二五
尾瀬紀行	武田 久吉	一	二九
北海道の火山	神保 小虎	一	一
樺太の山	志賀 重昂	一	七

新高山紀行(一)	尾崎 白水	二	一〇
利尻山と其植物	牧野 富太郎	二	二五
愛鷹山と天城、八丁ノ池	高野 鷹藏	二	三〇
甲州八ヶ嶽	武田 久吉	二	三〇
白馬籠城記	河田 久吉	二	三九
白馬籠城記	武田 久吉	二	三九
白馬岳及鐘ヶ嶽	志村 烏嶺	二	四四
那須山と大峠越	梅澤 親行	二	八〇
日光より南會津への山越	白井 光太郎	二	八五
仙元嶺と鐘乳洞	梅澤 親光	二	九五
御嶽採集記	川崎 義令	二	一〇五
守門嶽ニ登ル記	大 平 辰	二	一〇
鞍掛山に遊ぶの記	高 頭 式	二	二九
富士紀行	小林 すすむ子	二	三四
駿州田代山奥横断記	荻野 晋松	三	一
甲州鳳凰山と地蔵岳	辻本 満丸	三	一八
燕岳及大天井	志村 烏嶺	三	二九
徳本峠と槍ヶ岳	河 邨 白水	三	三五
笠ヶ岳燧岳穂高岳紀行	林 並 木	三	四〇
白馬籠城記	河田 久吉	三	四三
高山植物の學術的研究	武田 久吉	三	四三
	志賀 重昂	三	七一

○山岳第一年總目錄

湖沼研究の一例としての箱根芦ノ湖

中越探山紀行

苗場山紀行

新高山紀行(二)

初登山(岩鷲登山記)

圖 版

田中阿歌磨	三	七五
大平 晟	三	八六
桑原 源一	三	一〇八
尾崎 白水	三	一一三
野口幽香子	三	一一三

○白馬山腹の大雪溪○赤沼ヶ原より太郎山を望む○本澤より箕冠嶽の爆裂口を望む○乗鞍山嶺の神祠。乗鞍山頂東死者追悼の標木○戰場ヶ原にて見たる男體山(男體山頂の一點。男體山絶嶺(以上第一號)

○利尻島利尻山○沼津方面の山腹より見たる愛鷹山。天城山八丁の池附近の残雪○松川内川の合流點より白馬連山を遠望す○白馬嶽白馬尻附近より大雪溪を望む○白馬嶽離山附近より鑓ヶ嶽背面を望む○信州御嶽三の池。御嶽八合目金剛童子より繼母岳を望む(以上第二號)

○赤石山絶嶺(正しくは赤石山絶嶺より奥西河内岳を望めるもの)○地蔵岳より鳳凰山を望む。鳳凰山中御室の舊景○梓川に臨める燒岳○白馬尻より白馬岳を望む○杓子中腹より白馬岳を望む○八ヶ岳の小天狗(以上第三號)

○日本アルプス横斷豫想圖(第三號)

地 圖

刷 込 圖

○Grosslochner ○飯豊山里程略圖○戸隠五地藏の峰より南方を望む○真鶴遂より北に相模灣を距て、大山並に塔ヶ嶽の連脈を遠望す○玄倉村より富士山を望む○山神峠の途上より富士山を望む○山神峠より西南を眺む○丹青山頂より西南方を望む○丹青山頂より東北に女峰の西裏を望む○ハトマチ峠途上より西に笠科山を望む○尾瀬沼尻より西々南に至佛山を望む○尾瀬沼畔より北々西に燧ヶ嶽を望む○志津より見たる大真子(以上第一號)

○フクヤマより小島を見る ○クマイシとクドーとの間より大島を見る○サツボロよりエニワ岳を見る ○シリキシナイよりエサン岳を見る○西南に向つてエサン岳の噴汽を見る ○オシヤマンへの邊よりコマガ岳を見る ○西北に向つてコマガ岳上部の噴汽を見る○ハコダテよりコマガ岳を見る ○タルマイよりタルマイ岳を望む(ウス岳の平面圖、噴汽及北側觀)○ウス岳を東南より見たる圖○小泉村より北に八ヶ嶽を望む(富士見停車場附近より八ヶ嶽を望む)○戸隠五地藏より白馬連山を望む○日原鐘乳洞略圖(以上第二號)

○田代山奥横斷略圖○日野春附近より望める鳳凰山頂○有明山の中腹より燕岳を望む○北方より見たる大天井○島々より槍ヶ岳に至る略圖○鎗岳、穂高山附近臆測圖○白馬山上の小屋○改築後の小屋○白馬小屋前より鑓ヶ岳及杓子岳を望む○ちやうのすけさう○芦ノ湖略圖○ミカブリ岳の頂上より南方に八ヶ岳の連峰を望む○諏訪郡泉野村より東方に八ヶ嶽及び「ニイシ」岳を望む(以上第三號)

雜 錄

○白馬山と北城村細野區の將來 ○白馬山腹の大雪溪 ○「日本山嶽志」と其増補改訂に就て ○登山の新人連れ ○アルプス山中一萬三千尺以上の秀峰 ○アルプの意義 ○高山植物圖幅 ○Hard Book for Japan 第七版 ○石飯 ○新高登山の別働隊及び其糧食 ○南北安曇槍ヶ岳 ○日本山嶽志 ○高山蝶 ○落機山中一萬呎以上の高峰 ○山民語

以上第一號 自一三九  
至一五四

○千島群島の山嶽研究に就て ○登山の導者養成に就きて ○登山の文書 ○山岳會の設立地 ○再び落機山中の高峰に就て ○ヒマラヤの意義 ○御嶽の小草 ○山岳の名稱を冒せる植物 ○日本植物景觀日光植物 ○高山に於ける植物の保護 ○登山の携帶品 ○新高山探檢順路の高度及び氣温 ○新高山登山の準備と携帶品

以上第二號 自一三〇  
至一五二

○余の日本アルプス登山談 ○日本アルプスと其登路に就きて ○日本アルプスに一萬尺の高峰果して幾座あるか ○富士登山と明石女子師範學校職員の責任 ○富士山表口新道案内 ○高天ヶ原の入浴 ○日本一の三大瀑布 ○八ヶ嶽の登路 ○八ヶ嶽小荒間口に就て ○大江山登山記 ○高山植物研究の材料

以上第三號 自一三二  
至一七一

雜 報

○蝦夷富士登山會彙報 ○淺間山の鳴動 ○駒ヶ嶽噴火原因調査 ○駒ヶ嶽鳴動 ○日本博物學同志會の探鳥旅行

以上第一號 自一五四  
至一五五

○ヴェスヴァキアス山の噴火 ○八丈島沖の噴煙 ○本年の富士初登山 ○淺間山の鳴動及び晩雪 ○近江富士の水晶 ○富士山の夏裝

以上第二號 自一五二  
至一五七

○富士山登山の新道 ○富士山下の本栖湖及白糸瀧乾涸せんとす ○新高山一部の大森林伐らる ○阿蘇の新噴火口 ○五百城文哉氏の逝去 ○雪先づ白し高山の一角 ○白馬山通信 ○本年の登山凍死者 ○赤石登山會 ○書東一則

以上第三號 自一七八  
至一七二

會 報

○本會の成立 ○本誌の表紙 ○お願ひ ○會費に就て ○會員氏名 ○山岳會規則 ○會告 ○投稿規定

以上第一號 自一五六  
至一六五

○二支部の設立 ○會員動靜 ○會員氏名 ○山岳會規則

以上第二號 自一五七  
至一六三

○山岳熱漸く高からんとす ○本會と文學家諸氏 ○本會規則第四條

○會費と會員名簿○會員の本年の登山報○本年の白馬山と佐藤工學士の厚意○本號所載圖版○お知らせ○本會への寄贈書籍○會員計報○會員氏名

以上第三號至一七八

附 錄

○加賀の鞍ヶ嶽(高頭式)○飛信界の乗鞍ヶ嶽(高頭式)○日光三山がけ(武田久吉)(以上第一號)  
○日本山嶽志第一増補(添附)  
第二號、第三號

山岳第二年總目錄 (明治四十年度)

表紙 (色刷) 小杉 未醒氏筆

本 欄

日本アルプスの南半 小島 烏水 一  
白峯北岳登攀記 伊達 九郎 一  
秋の金峰山 高松 誠 二六  
武州御嶽山及び大嶽山より 高野 鷹藏 一  
大菩薩嶺を越えて甲州鹽山 梅澤 親光 一  
に至るの記 佐藤 順一 一  
寒中富士登山記附登山餘談 小久保 融 一  
日光諸山登攀記 小泉 信三 一

蓮華山及針木嶺	大平 晟	一	101
白馬岳及鐘ヶ嶽	志村 鳥嶺	一	104
白馬岳越中方面の降路	川島 祿郎	一	105
白根山遊記	坪谷 水哉	一	106
霧島登山	手島 漂泊	一	109
大和吉野より大臺原、釋迦岳、彌山、山上岳を経て再び吉野に出づる記	白井 光太郎	一	110
甲州國司嶽紀行	荻野 普松	二	117
赤石登攀記	高橋 誠一郎	二	123
根尾紀行	永田 鄰山	二	124
赤城山に登る記	三宅 一郎	二	126
飯綱山	志村 鳥嶺	二	128
新高山紀行(三)	尾崎 白水	二	130
函嶺の駒ヶ岳	城 接 碧	二	136
七州の二高山	M T 生	二	139
越中立山の偉觀	大平 晟	二	140
甲斐山岳の形態美	小島 烏水	三	141
鳳凰山第二回登山記	辻本 満丸	三	142
白崩山に向ふの記	島山 梯成	三	143
宮田より木曾駒ヶ岳に登る	梅澤 親光	三	144
加賀白山の表山登り	西川 丈助	三	146
新高山紀行(四)	大平 晟	三	149
伊吹山	尾崎 白水	三	150
	川崎 義令	三	151

觀天逆鋒記  
奥の富士

西内 金吾 三 一三五  
志村 烏嶺 三 一三三

圖 版

○常念山脈より槍ヶ嶽を望む○白峰北嶽の絶嶺○金峰山頂上。金峰嶺山の廢趾○杓子嶽より立山の劔ヶ嶽を望む○白根山頂上の光景。白根山噴火口より澁峠遠望(以上第一號)

○赤石山(正しくは小澁川廣河原附近より上方を望む)○阿蘇舊火口の最外壁。阿蘇噴火口○トンデン池を隔て、飯綱山を望む。飯綱の大原より飯綱山を望む○越中立山より祖父ヶ岳を望む(正しくは越中立山より蓮華岳、スバリ岳、針木岳及び七倉岳を望む)○立山室堂及び雄山(正しくは立山)全景(以上第二號)

○種高山の殘雪(三色版)○鳳凰山頂の地藏佛、大日岩)○地藏岳○新高山全景(以上第三號)

繪圖及圖表

○大和國大臺原山上略圖(第二號)  
○日本山岳高度表(第三號)

刷込圖

○野呂川の谷笥○白峰山附近略圖○御室前より金峰の絶嶺を望む○御室の略圖○金峰山頂上藏王權現○五丈石の尖端○八王子郊外淺川畔より西北に御嶽山大嶽山並に御前山を望む○七代瀧降口より御嶽山及び大嶽山を望む○大嶽山絶嶺○大嶽山上より南方を望

む○大嶽山頂より西南に富士山を望む○武州大嶽山頂より東北の方雲煙渺茫の外に日光諸山を望む○大嶽山上より認む○大菩薩嶺途上より初鹿野山遠望○赤澤の瀧○鹽山より金峰山を見る○東京市中より遙に見たる武州御嶽山及び大嶽山並に御前山○東京市中より大菩薩嶺を遠望す○白木綿の脚絆とカンジキ○雪面を下る略圖○針ヶ岳附近の殘雪○針木嶺途の斷崖を下る○白馬山腹のオホイタドリ○糸魚川より白馬岳に至る里程概念圖○白根山噴火口○天の逆矛(以上第一號)

○大臺原名古屋谷松浦北海翁追悼碑の圖○八大龍王堂○シホカラ谷小字元小屋谷小屋の圖○大臺原山上指掌圖○國司嶽登路略圖○國司嶽奥の院○國司嶽絶頂より西を望む○赤石山嶺の便松○赤城山大沼○蕨湖畔より駒ヶ岳を眺む○箱根駒ヶ岳頂上の展望○立山頂上の一角○白馬山上より立山及白山を望む(以上第二號)

○甲斐國圖○甲斐山脈概念圖○大河原小澁橋上より赤石山を望む○マツターホーン○槍ヶ岳○サンダクブーより觀たるヒマラヤ山○甲州湯島温泉新湯より白峰山遠望○鳳凰山附近臆測圖○甲州サネ原より駒ヶ嶽及鞍掛山を望む○鳳凰山精進の瀑○鳳凰山頂より地藏岳及富士山を望む○鳳凰山頂より白峰三山を望む○鳳凰山頂より仙丈岳を望む○地藏岳頂より西北を望む○高遠城趾より木曾駒岳を望む○高遠公園より前岳を望む○三石より白崩山を望む○仙丈岳○木曾駒ヶ岳より八ヶ岳及南アルプスの諸山を望む○駒岡小屋より寶劍岳を望む○伊吹山附近略圖○北面より遠望したる赤石山系(以上第三號)

雜 錄

○嶮嶮といふことに就て○北陸三山跋渉感 ○東駒ヶ岳と白崩山とは同物か將又異物か○信州の箕冠岳○戸隠裏山の寶丹小屋○日光山大地震大洪水大火日記○直線美と曲線美 ○聽泉書屋雜記○新刊批評○高山植物に關する新著

以上第一號自一四五  
至一七〇

○日本アルプスなる名稱を飛驒山脈に限る說に不同意○北海道第一高山の命名に付て○白崩岳駒ヶ岳異同辨○「高い山」の事より敢て良地圖の速成を望む○日本山岳高度表について○筆の儘○山岳圖書批評○登山用心録○木曾鐵道

以上第二號自一一八  
至一三九

○口給穂高山殘雪寫生の旅行談及所感 ○北面より遠望したる赤石山系○白崩山に就て○槍ヶ岳の標高○薩摩輪遊記の一節○山水趣味○外國人の日本山岳名稱考○日本山岳にクラの名稱多き理由○越捨山田毎の月○筆の儘○武田山梨縣知事の書翰○山岳圖書批評

以上第三號自一三九  
至一六三

雜 報

○山階宮妃殿下の筑波御登山○屋久島宮の浦岳○山の松○諏訪湖の水滑○白馬岳の植物益々殘賊せらる ○淺間山の噴煙○二島二火山の噴火○鴨綠江の森林○本邦諸高山の初雪○臺灣の泥土噴出○臺灣中央山脈の探檢○大屯山の雪○羊蹄山附近の深雪○北海道の

俚俗妖怪山

第一號自一七  
至一七八

○去年登山者の死亡數及婦人登山者の増加 ○米國婦人のアンデス登山○信州木曾の御料林○長白山○韓國の水晶山○智利カスエルヒュアピ山の噴火○大仕掛なる淺間登山○富士山の晩雪○噴火せる伊太利火山

以上第二號自一三五  
至一四〇

○數字の富士山○二萬三千四百呎に登る ○伯耆大山の牛市場○相州大山の登山者○アルプス登山の少女○赤岳會○富士の山容變ず○三郡山鳴動○札幌山岳地の降雪○淺間山の鳴動○富士山の初雪○富士山頂本冬期の最低溫度○本邦高山郵便局○長野中學校の登山熱

以上第三號自一六四  
至一八九

會 報

○新刊寄贈○會費に就き○投稿規定

以上第一號自一七  
至一八九

○會員動靜○「登高自單」の投書○讀者日 ○本號コロタイブ圖版解説 ○新入會員氏名○山岳會規則○會告○投稿規定

第二號自一四一  
至一四七

○空中語○會員登山報○寫眞の御惠贈を願ふ ○餘白を借りて○日

本山岳高度表○新入會員○寄贈書目

第三號自一七〇  
至一七九

附 録

- 日本山岳志第一増補(添附)(第一號)
- 北海道の火山(神保小虎)○詩三章(松谷)○日本アルプスの南半(小島烏水)(以上第二號)

山岳第三年總目錄 (明治四十一年度)

表級 (色刷) 大下 藤次郎氏筆

本 欄

奥の富士	志村 烏嶺	一
羽後富士烏海山	山本 巖坊	一
二荒のおちげ	高野 鷹藏	一
青梅街道より竹森山を越して秩父街道に出づる記	西山 南洋	一
白崩山に登り胸ヶ岳を降る	鳥山 梯成	一
黒部川及高瀬川旅行記	梅澤 親光	一
白馬岳植物採集案内	井野 英一	一
加賀白山の裏山降り	小川 樂魚叟	一
	大平 晨	一
		九

○山岳第三年總目錄

彦山の裏道

日本アルプス縦走記

日光女観山専女山を越えて帝釋山に到るの記

伯耆大山行

水曾御嶽行

不二山に拒まるゝの記

秩父山紀行

由布登山記

秩父の一角

天龍川を下る記

湖沼研究の一例としての箱根蘆の湖

北海道の火山

飯豊山

越中小笠山

槍ヶ嶽の嶺

秩父の一角

新高山紀行(五)

白峰山脈の記

圖 版

○越後方面より見たる白馬岳の絶頂○志津の太郎山。小真子の尖影○古賀谷より金精山を遠望す○黒部川の籠渡し。黒部の豁谷○

手島 漂泊	一	一〇八
志村 烏嶺	二	一
北澤 基幸	二	一九
塚本 樂山	二	七
久留島 徹一	二	三
小泉 信三	二	五
田邊 乙葉	二	三
後藤 鶴水	二	六
河田 親光	二	七
梅澤 親光	二	七
荻野 香松	二	七
田中 阿歌麿	二	六
神保 小虎	三	一
大平 辰	三	一六
辻本 満丸	三	四
榎谷 紫峯	三	五
河田 親光	三	九
尾崎 白水	三	七
小島 烏水	三	八〇

## 山

## 岳

立山絶頂より劔峯及び連華群峯を望む(以上第一號)

○槍ヶ岳と穂高山正しくは槍ヶ岳より南に大喰岳、穂高群峯、乗鞍岳及御岳を望む○日本アルプスの連嶺○女貌の劔ヶ峯。唐澤の小屋○御嶽賽の河原より頂上を望む○御嶽山より仙元峠を望む。横瀬より仰ぎたる武甲山。霧降道より望める女貌、赤薙兩山。飛騨國高山町より硫黄岳の噴煙を望む。御嶽神社後より武甲山絶嶺を望む(以上第二號)

○蘆安方面地藏岳腹霧燒の小舎より望める間岳及び農鳥山○槍ヶ岳の大雪溪○燒岳噴火孔○田代池の燒岳○立山龍王岳と槍ヶ岳(以上第三號)

## スケッチ

○槍ヶ岳の南望○槍ヶ岳より立山を望む(第三號)

## 刷込圖

○岩手山頂上附近より不動平を望む○岩手山頂上○岩手山絶頂より見たる早池峯○岩手山大地獄姥倉岳○千俵石の附近より舊岩手火口を望む○岩手神社○越羽の誤か後方面より烏海山の西北方面を望む○白糸の瀧○烏海山遙拜所より東方新山を望む○丹青山北側より大眞子山の遠望○男體の北面○志津禪定小屋○志津のおんげさん○白根火山略圖○日光山誌に載せたる白根山○奥白根○白根山嶺の一角○奥白根より見たる淺間山、武尊山、庚申山、高原山、榛名山、飯豊山○白根山絶頂の東望○西多摩郡那珂島村附近より大嶽山を望む○丹波山落合間にて竹森山を望む○仙丈岳を望

む○七合目邊より仙丈、白峯の諸山を望む○白崩山頂の三角標點、觀世音と人○駒ヶ岳頂上より望める仙丈岳、間の岳、北岳、地藏岳、富士山、鳳凰山○摩利支天より見たる頂上○駒ヶ岳附近臆淵圖○黒部の小屋○東澤の溪流○室堂附近より望める白山の御前岳○彦山の頂上(以上第一號)

○槍ヶ岳より笠岳を望む○殺生禁斷の石○御助水附近より白樺金剛童子邊及び前山を望む○日光小間附近より霧降瀧上の邊を望む○帝釋山頂○御嶽九合目附近より見たる乗鞍、ヤリ其他○八合の小屋○藤谷淵の一大奇岩○大達原の隘道○三峯山下登龍橋○荒川橋と武甲山○鍾乳洞の入口○仙元峠連脈の高峰○仙元峠の頂上○天龍川下り略圖○全世界最初の山岳會が初めて生れ出でたる家○圓山木の所謂噴煙の圖○陳列室の一部(以上第二號)

○ヌタツカウシベ○ソラチ川上流よりオプタテシケを望む○アカン川筋よりメアカンを見る○西に向てメアカンを見る○クシロよりオアカンを見る○南四十五度東に向てリシリを見る○南に向てモヨロを見る○モヨロ火山○ナイホノ湖よりアトサ山を見る○アリモイの邊よりテルプを見る○南三十五度南(東又は西の誤なる可し)に向てシヤシヨウシを見る○ベツトブよりテルプを見る○アトサ山の南よりシトカブを見る○南三十度西に向てシトカブ火山を見る○エトロフ島アトサ火山○オンネモイよりエエンホヌブリの諸峯を見る○越後口御田原より望める飯豊本山○西岳より望める大日岳○小笠山より大笠岳を越て淨土山及龍王岳を望む○槍ヶ岳劔ヶ峯○坊主小舎より常念岳、二俣ノ赤岳○槍ヶ岳絶嶺より笠岳、白山○本社近くより雲取の連脈を見る○奥宮道より兩神山を

望む○奥宮道の鐵梯( )笹子峠以西より見たる白峯三山○精進附近より見たる雪の白峯三山○蝶ヶ岳左肩の殘雪○富士の農男○甲府より見たる農鳥山及び間の岳○甲府より見たる農鳥山及び間の岳○富士山頂より西望したる白峯赤石兩山脈の諸山○北方より見たる白峯北岳東面の峭壁○劍山の頂下にて發見せし槍身○劍山の絶頂にて發見せし錫杖の頭○常念山○燒失前の金峰山御室○故荻野音松君(以上第三號)

雜 錄

○世界に於ける山岳會の全數○山岳の位置○出羽探山所感○八甲田山、岩木山、岩手山登山案内及び其主要植物○赤石山果して赤岳より望み得るか○甲州駒ヶ嶽に籠れる行者の迷信○八ヶ岳山上の神佛○飛驒乗鞍岳岩井谷の登路に就て○玉鏡に映じたる富士山○九州高山の高度○女子登山熱と危險豫防○登山用心録○日本山岳案内記は如何に編輯すべきや○外國の新聞雜誌に見えたる山岳記事彙輯○山岳記事集覽○山岳圖書批評

以上第一號自一五三  
至一五五

○「大日本名山高山見立相撰」について○日光山岳雜談○全世界最初の山岳會が初めて生れ出てたる家○前號に對する疑○地圖の信じうべき程度○彌次雜談○東北吟壇○外國の新聞雜誌に見えたる山岳記事彙輯○山岳記事集覽○正誤一束○山岳圖書批評

以上第二號自一三一  
至一四九

○劍ヶ峰の最初登山者○越中劍岳先登記○立山雜談○日本北アル

プス中央部横斷の旅行談○甲州仙丈岳と奥仙丈岳附白峯の新登路○八ヶ岳山上の禁札○金峰山御室及駒ヶ岳屏風岩小舎の燒失○硫黃岳登山○劍山を見ざりし記○十和田湖談○震災豫防課査會に望む○飛驒叢書の出版○山岳寫眞と松本市保里寫眞館○山岳圖書批評○荻野音松君を憶ふ

雜 報

以上第三號自一一二  
至一五〇

○飛驒國硫黃岳の記○乗鞍岳の新室堂○阿蘇山の噴火○高山植物園○臺灣中央山脈横斷の成功○天城山中の大蜥蜴○相摸津久井郡の噴煙山岳○長白山會の設立

以上第一號自一五六  
至一七二

○燒岳探檢隊の中止○褐色の雪と紅い雪○富士山麓の颯風○全山悉く大理石○津久井團山木の所謂噴煙山嶽○噴火口と思ひしは風穴○日光及飛驒諸山の晩雪

以上第二號自一五〇  
至一五八

○本年の富士初登山○富士山と最高齡者○富士山の最低温度○富士登山の道○飛驒山脈の晩雪○外人の淺間登山談○淺間山質況踏査○淺間山は何時破裂するか(中禪寺湖中に包める秘密)○筑波山上の紀念圖書館○燒岳の話○箱根初花の瀧○岩手山登山會○大山石尊の秋祭○蝦夷富士の大火○臺灣山岳の鳴動○高山植物界會の流行○投書一束○北海道高山の初雪

以上第三號自一六一  
至一六二

會報

○山岳會大會豫告○會員登山報○雜件一束○本會長野支部建設されんとす○本紙の表紙○本會事務所の移轉○會員名簿附録○新入會員○寄贈書目

以上第一號自一七二  
至一七五

○山岳會第一大會の記○役員改選○本誌遅刊の理由及び其他○本號所載圖版○新入會員氏名

以上第二號自一五九  
至一七四

○特別會員荻野晋松氏逝く○會員登山報○雜件一束○會員登山の通信を望む○新入會員○寄贈書目

以上第三號自一六二  
至一六七

附録

○會員名簿(添附)(第一號)  
○大日本名山高山見立相撰(第二號)

山岳第四年總目錄

(明治四十二年度)

表紙

(色刷)

丸山 晚霞氏筆

本欄

上高地の記	高野 鷹藏	1
燒嶽噴火口に臨む記	北尾 録之助	19
小矢部川上流より越中挂、 飛騨加須良を経て白山地獄、 谷附近の秋色を採る記	石崎 光瑤	31
石鏡登山記	多田 香晴	43
羽後の森吉山	山本 巖坊	55
羽前の三山	大平 晟	66
日本河川志(一)	高頭 式	77
木曾御嶽	志村 烏嶺	143
赤城機名の残雪	岩佐 定一	152
烏海山	大平 晟	160
岩鷲登山記	千葉 草水	172
越中國醫王山に遊ぶ記	石崎 光瑤	178
日本河川志(二)	高頭 式	188
白峰北岳へ登る記	野尻 正英	278
三峰川の上流	河田 黙	310
金峰山から國司嶽	田中 富彌	322
祖父ヶ岳の二日	辻本 満丸	326
日本河川志(三)	高頭 式	335
阿波國劍山並に高越山登山記	多田 香晴	339
妙高登山の記	山中 鉦太郎	361
山民の生活	柳田 國男	368

## 圖 版

○燒嶽及梓川(三色版)○田代池。穂高山と河童橋○燒岳火口壁噴煙○蒲田谷より仰げる穂高の一角○白山裏山白水の瀑○信越國境五龍岳(以上第一號)

○間の嶽(白峰)の半腹より農鳥山、間の嶽(赤石)、惡深嶽、赤石山及び其他の諸峰を望む○信州木崎湖。雪の大沼○順王山より人形山を望む○富士裾野及び側火山(十里木附近)(以上第二號)

○白峰三山○祖父ヶ岳絶頂○祖父ヶ岳より望める鹿島槍ヶ岳○前岳より望める甲州駒ヶ岳及鋸岳。廣河原附近より荒川岳の絶頂を望む○鹿島槍ヶ岳より西南方展望○大黒岳(以上第三號)

## スケッチ

○燒嶽火口壁の展望(第二號)

## 刷込圖

○河童橋○河童淵(橋か)より穂高を望む○宮川の池○上高地温泉と燒岳○大野川村舎○北壁西部○南壁の東部○噴火口内に見取圖○小矢部川上流の寫生○白水附近の寫生集○夜明より石鏡山一ノ鎖二ノ鎖を見る○石鏡山頂○西條より石鏡山を見る○志津より見たる月山○豊前中津より展望せる山岳○梓川上流より蝶ヶ嶽を望む(以上第一號)

○赤城黒檜山○鳥海本社後より仰ぐ新山絶頂の景○湯野濱に於ける鳥海山遠望○夕日の片富士○さんちやが瀧○山中麓ヶ峯の絶頂

○賢王山頂の展望○中尾峠の頂○北壁より舊噴火口を隔て、南壁を望む○上條嘉門次○嘉門次小屋○椋前山頂新噴出のドーム形峯

○椋前山頂○支笏湖畔より見たる椋前山○後面より見たる椋前山○諏訪湖の太古遺跡略圖○矢ノ根石と石器○陳列室の光況二圖○柳田氏の講演○赤石楔狀地○落合村より南方釜無川下流を望む○唐松峠より東望○上伊那郡中野原より赤石山系(以上第二號)

○芦安の湯宿○芦安村清水方所藏百五十年前の古圖に現れし風凰山附近○五葉根の小屋より望みたる白峯間の岳の殘雪○五葉根の小屋より望みたる白峯農鳥山の殘雪○廣河原の小屋○白峯北岳の中腹より望みたる奥仙丈岳○中腹より見たる北岳六山塊○大樺の池○白根北ヶ岳登山圖○白峯山附近明細圖○三峯川上流地圖○小瀬戸の湯場○仙丈岳絶頂○三峯川上流より仙丈岳の一角を望む○根子坂よりの眺望○祖父ヶ岳の「種蒔き爺さん」○籠川の溪谷○小剣山○絶頂近きにあり○妙高山○杖立峠より南西を望む○淺間火坑の横断面○火坑の縦断面○顯微鏡にて見たる噴出物○新火山湧起前の椋前山噴火口○新火山湧起後の椋前山噴火口○諏訪湖四十一一年一の御渡(以上第三號)

## 雜 錄

○余が陳列品に就て○日本北アルプス縦走の記○日本北アルプス中央部横斷の旅行談○常念嶽烏川の登路に就て○諏訪方面よりの立科山○風凰山にて採集せる植物の目錄○信濃植物採集略記○鋸山の運命○ハサミ岩○山岳寫眞と其器械○山岳寫眞の名家○山岳圖書批評

山

○登山の意義○山の名○裾野なる名稱に就て○燒岳○乘鞍の堂守と穂高の仙人○信州高原落葉松の色彩○登山者の便祕と下痢○信濃湖水の深度○横嶽登攀遊草○本州中央山岳地氣溫表○白馬嶺植物採集記○日本アルプス探検者諸君に○越中劍嶽先登者に就て○屋久島八重嶽について○日本山嶽志跋

以上第一號自一九八 123  
 以上第二號自五四 216  
 以上第三號自一〇〇 377  
 以上第四號自一〇四 394

雜報

○燒嶽の噴煙及降灰○大鷲の標本○去年の富士登山○火山學者の來朝○淺間山の噴煙○新高山の探檢○臺灣中央山脈の探檢○有明山中の大猪○木曾山中の鐵道○阿蘇山上の天幕生活○駒ヶ岳の噴煙

以上第一號自一二九 138  
 以上第二號自一三六 138

○椋前山の噴火諸報○信州燒嶽の噴煙益々熾○武州御嶽山大祭登山者○南極の大活火山○ベンク博士講演○淺間火山大鳴動○富士山上天拜所○英國軍醫雪中登山○鐵道開業哩程○比律賓の火山破裂○勘察加探檢隊の報告○諏訪湖底の太古遺跡○淺間山郵便局○

富士山の晩雪○高山植物保護願○導者松澤菊一郎の死

以上第二號自一九五 237  
 以上第三號自一一三 265

○淺間山噴煙記○淺間山噴火坑内に下る○淺間噴火口の探檢二番槍○木曾駒ヶ岳の山開き○燒岳噴煙記○ドイツに於ける山中人命救護に關する會議○今年の富士山○椋前山噴出詳況○諏訪湖の秘密○新に發見されし日本最深の湖○古代諏訪湖上生活に就て○日本北アルプスの初雪○高山植物取締○輕氣球のアルプス横斷○高山登攀のレコード○北海道大雪山登攀記○北海道第一高山の初雪

以上第一號自一八 395  
 以上第二號自一四六 423

會報

○山岳會有志晩餐會○西内金吾氏逝く○本號附錄○「山岳」殘本發賣○本會事務所の移轉○會費未納の諸君に○振替貯金口座加入○山岳會第二大會○雜一束○新入會員○轉居及退會者

以上第一號自一三七 137  
 以上第二號自一四一 141

○本會名稱の改正○會員章の制定○第二回山岳會記念繪ハガキ僅少殘部發賣○會費未拂込の會員諸君に告ぐ○「山岳」の殘本發賣に就きて○「山岳」御注文御斷り○飛驒山岳會の成立○會員通信○第二回山岳會有志晩餐會○内外交換雜誌○寄贈書目○前號正誤○新入會員 山岳會第二大會の記

以上第二號自一一三 265  
 以上第三號自一三五 277

○飛驒高山町に開かれたる山林家大會○來年初號の「山岳」及び山

岳



山

硫黃岳笠ヶ嶽登山記	古瀬鶴之助	三	四〇	508
木曾駒ヶ嶽	鶴殿 正雄	三	四三	515
火山の探險と其研究	吉川 純三郎	三	五	524
陸中駒ヶ岳に登る記	千葉 悦彌	三	八	566
日本北アルプス風景論	小島 烏水	三	一〇三	572

英文

My Swiss and Japanese Mountaineering. Rev. Walter Weston (第一號)  
 Eight years of travel and exploration in the Japanese Alps. Rev. Walter Weston (第二號)

圖版

○富士の折立より見たる劍岳○ウォルター・ウェストン氏肖像と筆跡○薬師岳頂上。立山温泉場○有峯村社の駒犬。有峯村○上ノ岳。薬師峠○劍岳頂上の南望○劍岳の頂上。雪窟の登攀○劍岳の大雪窟○劍岳の絶巔○難越より大蓮華山を望む○黒藏川吊橋○総羽岳より槍ヶ岳を望む○槍ヶ岳の北東望○総羽岳より常念岳を望む○白山地獄谷大雪溪。白川村遠山氏の居宅○駒ヶ岳の農ヶ池○六萬平の夕雲。カザハナの森林○新澤峠より悪澤岳及赤石山を望む○悪澤岳の頂上。第三露营地より悪澤岳を望む○北方より見たる赤石山○赤石山頂上○白頭山の森林。白頭山頂上南方一角○白頭山龍王潭(以上第一號)  
 ○針木越の行路。黒部川の龍渡○佐良々々越。立山室堂の内部○

赤石山中腹より北方を望む○五龍岳附近より望める立山○杓子岳○日野春より見たる冬の駒ヶ岳○木曾駒ヶ岳天狗岩○駒ヶ岳本岳より中岳被劍岳及空木岳を望む○第三回大會寫眞(以上第二號)  
 ○大黒岳と五龍岳○槍ヶ岳山脈より望める雲の海(以上第三號)  
 スケッチ

○赤石山頂より北望○赤石山頂上より南望○愛鷹山越前岳より日本南アルプスを望む○翁島附近より見たる磐梯山。猪苗代附近より見たる磐梯山(以上第一號)  
 ○駒ヶ岳○一二五〇米の地點より駒ヶ岳連脈。駒ヶ岳絶巔。駒ヶ岳最高點より見たるハヶ嶽(以上第二號)  
 ○冬季信州武石峠より望める日本アルプス略圖(添附)○五龍岳最高點。五龍中腹より。八方池。唐澤池。唐松岳○五龍岳最高點より。唐松岳最高點より。八方岳絶巔。牛首岳(以上第三號)

地圖

○赤石山系一部臆測圖○磐梯山略圖○穂高岳附近踏測圖(以上第一號)  
 ○白峰山脈臆測圖(第二號)

刷込圖

○有峰附近略圖○有峰見取圖○大蓮華山越中方面略圖○槍ヶ岳絶巔より穂高岳を望む○大天井岳絶巔より穂高岳を望む○熊澤大峯より北方駒ヶ岳連山を望む○西側より見たる仙丈岳頂上○赤石山

の一行〇惡澤岳を見る〇長山峯の西南高地より西南を望む〇同上  
 (一)〇同上(三)〇神武城の南方より白頭山等を望む〇同上(二)〇  
 同上(三)〇白頭山龍王潭平面圖〇白頭山登路圖〇木曾駒ヶ岳より  
 赤石山系を望む〇淺間噴火當時寫生圖〇淺間降灰地域圖(以上第  
 一號)

〇日向より黒帽子岳を眺む〇上川根村之圖〇テカリの殘雪〇大無  
 間山より東北望〇大無間山頂より樵山を望む〇マミノオより大無  
 間を望む〇高越山附近圖〇脇町より見たる高越山〇阿波郡市場附  
 近より見たる高越山及種穂山(以上第二號)

〇五龍岳附近臆測概圖〇五龍岳中腹より〇駒岳頂上附近臆測圖  
 (以上第三號)

雜 錄

〇間の岳より北〇北アルプス南部山嶺高度に就きて〇槍ヶ岳及び  
 穂高山間の山稜横斷記〇ハリノ木峠〇高山に産するイヌナツナの  
 種類に就て〇傾斜面の見え方に就て〇信州長野に於ける山岳畫展  
 覽會〇世界の山岳會及山岳雜誌〇海外山岳叢報

以上第一號 自二四五 245  
 至二七九 279

〇木曾駒ヶ岳の雜記〇丹澤山の登路に就いて〇常念山塊山上の所感  
 〇山草美觀〇山岳曆のこと〇圖版の解説を望みて〇婦人のアンデ  
 ス山跋涉〇四方山話〇山岳圖書批評

以上第二號 自一九四 406  
 至一二八 410

〇口繪説明〇山岳地の迷信を餘り多く破壊する勿れ〇爺々岳及羅

白岳を見る〇朝日岳登山案内〇白馬岳の夫賃金と好案内者〇木  
 曾駒ヶ岳に就て〇鳳凰山所産ホウワウシヤジン〇鳳凰山及地藏岳に  
 就て〇白根附近細圖の辯解〇赤石の荒川岳に就て〇冬山の色〇  
 信州高原の秋〇高山地圖の速成を望む〇「飛騨案内」と「淺間山」  
 の出版〇マテルホルン雪中登山紀行〇日本アルプスと甲州人

以上第三號 自一二五 693  
 至一六〇 693

雜 報

〇白山山麓中登山者の行踪不明〇淺間山噴煙記〇諸高山の初雪〇  
 燒岳と外國人〇甲州金峰山奥宮の燒失〇河口湖排水工事〇新高山  
 測量完成〇新高山頂の氣象〇雪中の大和高峰登山

以上第一號 自二一八 380  
 至二九八 398

〇木曾路案内〇中央東線の開通及び其名所案内記〇木曾は五十分  
 一線〇今後の中央線〇駒ヶ根の活躍〇燒岳の噴煙〇甲信の諸山岳  
 と慧星〇諏訪湖の御神渡り〇諏訪郡の十大線路〇小田原電鐵擴張  
 計畫〇信州各地名勝の存否〇燒岳の火坑擴大〇北安の降登と降霜  
 〇木曾御岳登山者の爲め〇淺間山の降雪〇臺灣中央山脈横斷〇野  
 麥街道變更希望〇富士山の大雪〇富士山の降雪〇工兵の富士登山  
 〇富嶽初登山者〇エトナ火山叢報

以上第二號 自一二九 441  
 至一四二 464

〇有珠岳の噴火〇富士山の暴風雨〇高層氣象觀測〇淺間山噴煙記  
 〇草津輕便鐵道〇八ヶ岳に降雪〇八ヶ岳にて凍死〇木曾駒ヶ岳の

山開き○御岳の登山者○御岳郵便局○御岳銅像建設○英人の燒岳探檢、噴煙黒黄色に變ず○悲し峠開鑿の議○慘憺たる燒岳

以上第三號自一六一 630  
至一八四 632

會報

○御断はり○本會第三大會○名譽會員推薦○名譽會員ウオルター・ウエストン氏略歴及び自傳○會員消息○ウエストン氏の登山談○表紙解説○四松庵の山岳會晚餐會○四松庵雜記○會員名簿○「山岳」の讀典に就きて○日本「アルプス」第一卷及び「高山深谷」第一輯○Correspondence ○新入會者紹介○本會所藏圖書借覽に就きて○本會所藏圖書目錄(其一)○丸山晚霞氏の作畫頒布に就きて

以上第一號自二九九 299  
至三一 311

○山岳會第三大會の記○前號の寫眞に就て○會員登山消息○飛驒山岳會設立趣意

以上第二號自一四三 436  
至一五四 466

○本會幹事の改選と新任○會員登山報○書柬及びハガキ○會員計報○大北聰彦氏の奇禍○第五回有志晚餐會○「高山深谷」第二輯の發行○新入會員○本號の插畫○「高山深谷」第一輯印畫説明

以上第三號自一八五 633  
至二〇七 676

附錄

○會員名簿○「山岳」第四年總目錄○地質調査所發行地圖目錄(以

上第一號)

山岳第六年總目錄 (明治四十四年度)

表紙(色刷)(第一、二、三號) 茨木猪之吉氏筆  
タイトルページ 同 氏筆

本欄

後立山連峯縱斷記	三枝 威之助	1
越中アルプス縱斷記(上)	中村 清太郎	32
高瀬入り	辻村 伊助	55
春の白山	石崎 光瑞	79
淺間山	小林 房太郎	101
十文字峠を越え信州梓山より甲武信、三寶、金峰の三山に登る記	南日 重治	110
第一回「アルプス」山横斷飛行(譯)	福尾 昇	116
歐洲アルプス越へ	加賀 正太郎	124
稀有の高山鳥「やいろつぐみ」	内田 清之助	144
マクカリ岳	大平 辰	235
雨の早池峯山	千葉 悦彌	249

栗山の秋 須田 正雄 二 三三 257

四阿山に躋る記 山邊 好一 二 五〇 274

石堂山筑ヶ峯縦走記 笠井 高三郎 二 K1 285

南九州の三名山 岩佐 定一 二 九2 303

日本アルプスと既往の水河 辻村 太郎 三 一 399

白馬岳より祖母谷温泉へ 高野 鷹藏 三 二 419

鞍掛山、烏帽子岳、鋸岳を 星 忠芳 三 三 429

經て駒ヶ岳に登る記 吉永 虎馬 三 四 442

祖谷山入り 南方 楠熊 三 五 456

祖國山川森林の荒廢 大橋 良一 三 九 489

火山の地形 小島 烏水 三 一〇 514

日本アルプスと萬年雪の關係

圖 版

○やいろつぐみ(三色版)○祖父ヶ岳より西南の展望○岩小屋深岳  
絶頂より北々東を望む○大スバリ岳より針木岳を望む○扇澤の雪  
溪。新越乗越の野營。スバリ乗越より針木峠並に蓮華岳を望む。  
針木岳附近の残雪。温谷峠より望める 赤牛岳。越中澤岳附近より  
五色ヶ原を隔て、立山連峯を望む。五色ヶ原の残雪○奥大嵩山よ  
り越中澤岳を超えて薬師連嶺を望む○高瀬上流のナラ林。葛の湯  
○高瀬の溪谷○薄化粧せる駒ヶ岳連峯○雲取山頂より甲武信及國  
司岳を望む○歐洲アルプス十一景○ベルグリの小舎よりシユレツ  
クホルンを望む。コンコルディア・ブラツツよりグロッサ・アレツ  
チ氷河及びエツギス・ホルンを望む○メンヒより見たるユンクフ

ラウ○故山川戈登氏の小照と其書簡(以上第一號)

○名譽會員志賀重昂氏肖像○赤城山大沼○尻別河岸より見たるマ  
クカリ岳。俱知安村より望めるマクカリ岳○川尻浦より開闢岳を  
望む。櫻島御岳火口壁○徳本峠より望める穂高岳○鳥海山ブナの  
天然林○劍岳○第四回大會寫眞(以上第二號)

○白馬岳の展望○仙丈岳の「カール」○鋸岳絶頂。烏帽子岳より  
鋸岳を望む○春の穂高岳○冬枯の霞岳。徳本峠雪の穂高山○歐洲  
アルプス山「サアカス」の群衆○氷河截断面。氷河の層理。氷河の  
擦痕ある岩石(其一、其二)○故大下藤次郎氏肖像○各地の登山報  
(以上第三號)

スケッチ

○鹿島槍ヶ岳頂上の南望○小スバリ岳より越中アルプスを望む○  
雨後白水瀧。湯の谷の残雪(以上第一號)

○Hoehnlkees より見たる Hahner 群峯。信州方面より見たる  
立山連峯(以上第三號)

地 圖

○日本北アルプス一部臆測圖(添附)(第一號)  
○飛驒山系に於ける氷河分布略圖(第三號)

刷 込 圖

○鹿島槍ヶ岳絶頂より望める日本南アルプス○岩小屋深岳よりの  
鹿島槍ヶ岳○五色ヶ原○奥大嵩山より越中澤岳を隔て、黒部五郎

岳及笠ヶ岳を望む ○奥大高頂上より ○越中深岳麓より ○エレバス  
 火山 ○淺間火山 ○第二火口原より火口丘及屏風岩の外輪山を望む  
 ○飛行機アルプス横断略圖 ○ベルクリーの小屋見取圖 ○ユンク  
 ラウ連峯略圖 (以上第一號)

○金田峠絶頂より下野岩代國境の連山遠望 ○大日向附近より四阿  
 山を望む ○四阿山絶頂臆測圖 (以上第二號)

○鹿島槍ヶ岳のカアルと堆石 ○立山連峯地形略圖 ○烏帽子岳より  
 望める薬師嶽頂のカール ○立山頂上より南東に五郎岳南の大カ  
 ルと堆石とを望む ○鞍掛山方面駒ヶ岳登路概念圖 ○伊豆大島 ○大  
 陸水河の型。山嶽水河の型 (以上第三號)

雜 錄

○野呂、田代兩川の分水嶺につきて ○初雪後の木曾駒ヶ岳登山 ○  
 赤石坂岩 ○澁峠 ○津輕富士若木山の話 ○山人の物語 ○新發見の高  
 山蝶其他に就て ○本誌五月の第一號所載剣岳登山の記事に就て ○  
 岩石の保護 ○「高山深谷」第一輯を咏ず ○クック博士のマッキン  
 レイ登山詐偽露顯 ○世界の山岳會及山岳雜誌 (二) ○山岳圖書批評 ○  
 圖版説明

以上第一號 自一四九 149  
 至一九六 196

○山岳の位置名稱のことより ○各地の標高のことより ○寒暖計測  
 高法 ○白峯山脈臆測圖に就きて ○穂高岳につきて ○錫杖ヶ岳に就  
 て ○赤城登山記 ○山岳林と樹と松 ○山岳村民の生活 ○越中剣岳最  
 初の登山者に就きて ○鯉野山、五龍山及び後立山 ○机上談山 ○富  
 士山の昔の圖畫及び書籍 ○山岳圖書批評

以上第二號 自一八五 185  
 至一二七 127

○野呂、田代分水嶺問題 ○山岳語彙編纂に就て ○四國の山岳語彙  
 ○兩飾山、燒山、赤倉山に關する資料 ○木曾山脈の風越山に就て  
 の疑問 ○「錫杖ヶ岳に就て」を讀みて ○白馬岳の名 ○本年白馬岳の  
 登山人數 ○滑稽なる山名の轉化 ○長野縣の高山植物保護 ○雲の  
 アルプス ○墨西哥火山の傳説 ○アルプスの最高峯モンブラン高熱の  
 ため低うせらる ○昨年の歐洲アルプス登山者死亡數 ○登攀山岳最  
 高點の競争紛議 ○全世界最高の停車場 ○山物語り ○机上談山 ○本  
 號挿圖「白馬岳の展望」に就て ○日本アルプス一部臆測圖正誤 ○旅  
 日記より ○山岳圖書批評

以上第三號 自一四六 146  
 至一八六 186

雜 報

○諸高山の初雪 ○御岳山觀測所 ○信州燒岳の噴煙 ○飛越輕鐵の計  
 畫 ○悲況に陥れる高根銅山 ○大島の三原山鳴動す ○富士山遊園及  
 其他 ○メン博士來朝 ○外人の富士雪中登山四組 ○諏訪湖の解氷 ○  
 非律賓の噴火 ○有珠山噴火の結果 ○淺間神社登錄申請 ○淺間山噴  
 煙彙報 ○大森博士の觀たる淺間山

以上第一號 自一九七 197  
 至二二六 226

○各地の雪と霜 ○淺間山鳴動錄 ○燒岳大噴火 ○全國鐵泉調査方針  
 ○大山の春祭 ○富士身延輕鐵の計畫 ○御岳街道の改修 ○伊吹山の  
 毒草 ○阪谷男大に名勝古蹟の保存を論ず ○信州各湖の魚族繁殖

以上第二號 自一二八 362  
 自一四三 377  
 ○淺間山噴火大慘事○燒岳噴煙記○赤石登山は危險○武石嶺に雪降る○諸高山の晩雪と融雪○日本アルプス研究。諸高山の初雪○御岳及淺間山頂の兩局

以上第三號 自一八七 595  
 自一九七 605

會報

○第六回有志晩餐會○會員計報○山川戈登君を憶ふ○魚住影雄君近く○會員登山報○はがき便り○表紙畫の説明○日本山岳會第四大會開會○會員名簿○新入會員○會員退會○寄附雜誌及書籍

以上第一號 自二二七 234  
 自二三四 234

○名譽會員推薦○名譽會員志賀重昂氏 ○本會第四大會の記○山岳寫眞展覽會開催○第七回有志晩餐會○會員登山報 ○海洋展覽會を觀る○新入會者○轉居改姓○受領圖書報告

以上第二號 自一四四 378  
 自一六四 393

○名譽會員ウォルター・ウェストン氏來る ○名譽會員ウォルター・ウェストン氏講演會豫告 ○來年開會のオリムピア競技會よりの招待○大下藤次郎氏逝く○日本山岳會山岳寫眞展覽會○「高山深谷」第三輯發行の計畫○會員諸君に御通知 ○會員登山報○第八回有志晩餐會記事○大阪の有志晩餐會○信濃山岳研究會の記 ○名古屋の愛山會○新入會員氏名○退會改名及び除名者○寄附書目

附錄

○會員名簿(添附)○山岳第五年總目錄(第一號)

以上第三號 自一九六 596  
 自二一三 611

山岳第七年總目錄(明治四十五年度)

表紙(色刷)(第一、二、三號) 中村清太郎氏筆  
 タイトルページ(同) 茨木猪之吉氏筆

本欄

甲斐駒ヶ岳山脈縱斷記	辻本 滿丸	一	1
地藏岳及鳳凰山	鶴殿 正雄	一	19
百年前の富士登山記	笠間 亨	一	32
俗ヶ岳登攀記	吉澤 庄作	一	55
祖母谷道	冠 松次郎	一	63
森林濫伐と山川の荒廢	南方 熊楠	一	71
燧ヶ岳に登る記	關口 泰	一	87
越中アルプス縱斷記(下)	中村 清太郎	二	101
五龍、鹿島槍間の縱走	中村 孝二郎	二	213
後立山山脈峰傳ひの記	榎谷 徹藏	二	238

山

岳

磐梯山と吾妻山 傳説及舊記に現れたる赤城山	大平 辰	二	六	278
山岳寫眞(一)	關口 泰	二	100	290
山の形に就て	高野 鷹藏	二	114	307
高山植物に就きて	山崎 直方	三	1	374
山岳寫眞(二)	志村 烏嶺	三	14	390
羽後田代山登山記	高野 應藏	三	21	415
小無間山と大無間山、駿州 田代よりの登路	泉 茂家	三	26	431
甲斐駒ヶ岳及仙丈ヶ岳登山記	關口 泰	三	28	437
神河内と常念山脈	大槻 禎郎	三	40	443
	辻村 伊助	三	41	455

圖 版

○春の山(池田附近より祖父岳及鹿島槍ヶ岳を望む)○朝興岳より見たる駒ヶ岳○北澤の小屋○鳳凰山塊。袋澤の頭より朝興岳を望む○北岳の絶頂と甲州駒ヶ岳。北岳より望みし間の岳。農島山及赤石山系○烏帽子岳(以上第一號)

○樂師岳のカール○樂師岳頂上○岩井谷の頭より東南を望む。カベガ原より望める黒部五郎岳○黒部五郎岳より黒岳及赤牛岳を望む。黒部五郎岳より笠ヶ岳を望む○黒部五郎岳○五龍岳中腹より見たる鹿島槍ヶ岳。蓮華岳より立山劍岳を望む○赤城山(以上第二號)

○晴空の富士(三色版)○うらじろきんばい。高山植物播種發芽状態○山の影(穂高岳の倒影)○雪のくま(徳本峠の春)○電光と夕立の富士(北嶺)○丘陵。峽谷○森(以上第三號)

スケッチ

○燒岳北方火口壁一部より蒲田谷源頭を望む。信飛越境上の群嶺(第二號)

地 圖

○白峰山脈臆測圖(第三號)

刷 込 圖

○駒ヶ岳山脈概念圖○水俣源流一部臆測圖○不動澤・濁澤源流臆測圖(以上第一號)

○樂師ヶ岳の東北面○黒部五郎岳頂上より南望○黒部五郎岳頂上より南アルプスを望む○赤石山北方の山稜より北アルプス遠望○飯綱山頂上附近より北アルプスを望む(以上第二號)

○瑞西ミーンテン山○氷蝕作用のみの山○氷河作用を受けつゝある山○氷河作用を受けた山○甲斐國全圖○山梨縣新圖○甲斐國全圖(以上第三號)

雜 錄

○白峰三山に就いて○「白峰三山に就いて」の異議○信州の甲斐境の一部○甲斐駒山脈の鞍掛、烏帽子、鋸及び其の他二三の峰に就て○甲斐駒の新登路○仙丈岳のカールに就ての正誤○白峰及び仙丈岳の登山談○北アルプス瑣談○山の名稱に就て○四國山岳表○四國の山名の一研究○アルプス自動車の旅○机上談山○危険なる

登山

以上第一號自一〇五 105  
 〇「白峯三山に就て」の異議を讀む(一)〇白峯附近につきて〇高瀬  
 川天上澤に就て〇榎谷氏の割物岳赤手岳に就て〇机上談山〇續机  
 上談山 178

以上第二號自一二七 317  
 至一六三 323

〇「白峯三山に就いて」の異議を讀む(二)〇白峯山名の改稱に就  
 て〇日本南アルプス南半登山雜談〇北アルプス瑣談に就て〇鉢伏  
 山に就て〇赤城山と尾瀬沼〇信州駒ヶ岳、御岳、白山の良地圖出  
 版さる〇山民の暴狀〇愛鷹山の土鼠おつ立〇白峰山脈臆測圖解説

以上第三號自一六六 489  
 至一六一 534

雜報

〇大島三原山の噴火〇淺間山模型〇火山觀測所〇御岳輕便鐵道〇  
 淺間御岳兩局の郵便〇燒岳降灰と蠶繭〇戸隠北街道開通〇山に關  
 する傳説〇諸高山の初雪〇瑞西國タギニス高山療養所

以上第一號自一七九 179  
 至一八四 184

以上第二號自一六四 354  
 至一七四 365

〇燒ヶ岳の質狀〇福島王瀧間電鐵〇駒ヶ岳撮影隊〇木曾の御岳山  
 〇淺間危險告知〇富士山の近況〇初夏の降雪〇諸高山の晩雪と融

〇山岳第七年總目錄

雪

以上第三號自一六二 535  
 至一六八 541

會報

〇ウェストン氏日本アルプス講演會〇第九回有志晩餐會記事〇會  
 員増田吾助君逝く〇會員通信〇會員名簿〇御詫び〇新入會者

以上第一號自一八五 185  
 至一九〇 190

〇本會第五大會の記〇日本鳥學會の設立〇會員逝去〇會員登山報  
 〇希望〇新入會員

以上第二號自一七六 205  
 至一八三 273

〇本會幹事の改選と新任〇會員登山報〇英國より〇第十回有志晚  
 餐會記事〇「高山深谷」第四輯の發行〇會員逝去〇參考圖書の寄贈  
 〇寄贈交換圖書〇新入會員〇退會、除名〇本號の挿繪に就いて

以上第三號自一六九 524  
 至一八二 525

附錄

〇會員名簿(添附)〇山岳第六年總目錄(第一號)  
 〇日本山名錄初稿(一)〇宮川水源派行大臺ヶ原山登山記(第三號)



# 山岳第八年總目錄 (大正二年度)

表紙 (色刷) (第一、二、三號)  
 タイトルページ (同)  
 石崎 光瑤氏筆  
 茨木猪之吉氏筆

## 本 欄

山岳崇拜論	小島 鳥水	一	1
スキー富士登山に關する報告	鶴見 宜信	一	25
ヌタブカムシユベ山	大 平 晟	一	42
劍山に登るの記	古 家 實 三	一	58
鋸岳の最高峰	小島 鳥水	一	70
白峯山脈の南半	中村 清太郎	一	92
大井川奥山の旅	中村 清太郎	一	215
穂高山南稜跋渉記	鶴殿 正雄	一	102
赤城山の冬	關 口 泰	一	117
登山の準備	高野 鷹藏	一	111
繪畫の題材として山岳の出現	小島 鳥水	一	111
歐洲アルプス旅行と其感想	丸山 晚霞	一	177
隠れたる山嶽研究家	牧 量 雅	一	451
白峰連嶺縱斷記	青柳 安茂	一	463
赤石嶽の麓	前澤 淵月	一	490
八ヶ嶽	別所 梅之助	一	512
信州駒ヶ嶽遊難始末	上伊那教育會	一	518

山陰の名山奇峽	古 家 實 三	三	639
丹 澤 山	武 田 久 吉	三	652
春から秋まで	關 口 泰	三	662

## 圖 版

○氷雪のママアホーン○基督の説教せるシナイ山頂(以上第一號)  
 ○冬の大洞○冬の赤城山○氷結した赤城大沼(以上第二號)  
 ○冬の八ヶ嶽(編笠岳所望)○扇澤岳の西側より大バミを隔て、立山連山を見る。大河原より見たる赤石山○駒ヶ岳本岳より寶劍岳及空木岳を望む。駒ヶ岳將基頭より御岳を望む○夏の赤城○赤城山秋の大沼。高原の落ち葉○三河鳳來寺山。信州淺間山○葛飾北齋飛騨つりばし。二木長嘯飛騨吊橋圖。飛騨籠渡(以上第三號)

## ス ケ ッ チ

○駿州大日峠より雪の大井川奥山を望む○大崩山より望める聖岳。上河内岳附近より望める穴ヶ岳及千挺木山○大井川谷最奥の村田代○硯村本村の一部○穴ヶ岳より望める白峯連山○穴ヶ岳より望める赤石岳(以上第一號)  
 ○東京郊外池袋より望める秩父群山○大ヨキ松次郎小屋○澤の木○聖岳頂上の朝○聖岳より赤石山を望む

## 地 圖

○大井川奥山地圖(第二號)

刷込圖

○姿見池より仰げる大雪山○筑ヶ岳附近臆測略圖（以上第一號）  
 ○ユンクフラウ○瑞西山築者○穂高岳概略圖○駒込富士みやげ○  
 大山參詣○駿河臺所望惡澤岳（以上第二號）

雜錄

○日本アルプスに果して雪線なきか○白峰各座の名稱に就て○鋸  
 岳と釜無山脈○御前山塊○割物岳及び不動畑澤岳に就て○吾妻山  
 と磐梯山○伯州大山○茶白岳と旭岳○木曾駒ヶ岳の植物○登山の  
 折々○机上談山

以上第一號 自一三一 121  
 至一七五 175

○鳳凰山塊に就て○鋸岳白崩岳及其他の二三ヶ條○鋸岳附近の甲  
 信境○穂高群峰の稱呼につきて○山名につきて○地名につきて○  
 仙丈岳のカールに就て○駒込富士詣○千圻離と大山參詣○甲州山  
 村の三升樹○陸地測量部繪ヶ岳附近及飛騨全部の地圖を出版す○  
 一高山岳會の成立○机上談山○間違ひ○秩父山岳の記文○東京よ  
 り見ゆる山のこと○「瑞西風景論」の作者ジョン・ラボック先生を吊  
 ぶ○立山、白馬岳、黒部の地圖出版さる○挿入の地圖に就き○追言  
 以上第二號 自一六六 260  
 至二一三 217

○高山に於ける寒暑の激變と空氣の稀薄と及び山岳病○甲斐駒附  
 近に就て○越中鯉耐岳に就き○再び北アルプス瑣談に就て○山岳  
 地の曇氣樓○謡曲に現はれたる山岳○後立山山脈旅行談○御座石

湯より鳳凰山へ○登山者の注意○山岳畫漫評○机上談山○甲州山  
 村の三升樹の記事に就て

以上第三號 自一二二 572  
 至一七一 621

雜報

○淺間山の記○雪中の御岳登山○スキー彙報○富士山から眞逆落  
 以上第一號 自一七六 176  
 至一九八 198

○淺間山の記○白峰山村の生活難○蕨華嶽鳴動○諸高山の晩雪及  
 び融雪

以上第二號 自二一四 428  
 至二二〇 434

○駒ヶ岳の慘事○御嶽山○淺間山○燒岳の狀況○鐵道院登山案内  
 ○白峰の秋雪

以上第三號 自一七二 620  
 至一七九 629

會報

○會員諸君に第五（六の誤）回本會大會の御通知○第十一回有志  
 晚餐會の記○第十二回有志晚餐會豫告○會員登山報○會員逝去○  
 「高山深谷」第四輯豫約者諸君に告ぐ○會員諸君に○名簿と總目錄  
 と挿畫○新入會者

以上第一號 自一九九 189  
 至二〇四 204

○日本山岳會第六大會の記○會員登山報○信州山岳研究會○「高

山深谷「第五輯に就て」○志村氏「千山萬岳」稿成る○「山岳」發刊遅延に就て○新入會者

以上第二號 自二二一 452  
至二三六 452

○英國大使ジェームス・ブライス氏より本會への口信○英國前山岳會頭フレッシュフィールド氏來る○伊太利山岳會の五十年祝賀○會員青木忠次郎氏の逝去○本會幹事の外遊○三高山岳會に本會幹事の派出○京阪神日本山岳會々員有志晚餐會○第十二回有志晚餐會○「高山深谷」第五輯の發行○一高山岳會團體旅行概況○三高山岳會主催講演會○東京地質學會にける飛驒山脈の地質及び氷河作用に就ての講演 ○山梨山岳會設立○會員登山報○新入會員○退會者○除名者

以上第三號 自一八〇 630  
至二〇二 632

附 録

○日本山名錄初稿(一)○山岳第七年總目錄○會員名簿(別冊) (以上第一號)  
○風景畫家歌川廣重傳(小島烏水) (第三號)

山岳第九年總目錄 (大正三年度)

表紙 (色刷) 第一號  
第二號  
第三號

平福百穂氏筆  
茨木猪之吉氏筆  
K・S 生氏筆

タイトルページ (第一、二、三號)

茨木猪之吉氏筆

本 欄

三峯川昇り	梅澤 苦瓠	1	1
黒部方面より劔岳を 經て立山に至る記	吉澤 庄作	2	93
鍋岳縦走記	鷗殿 正雄	1	115
山に對して	別所梅之助	1	122
耶馬溪を跋涉して裏道 より彦山に登る	古家 實三	1	137
白馬岳(蓮華温泉方面)	市村 塘	1	145
山地に於けるオートクロー ム撮影に就いて	加藤 精一	1	153
秩父の奥山	木暮理太郎	1	235
豊後の双子火山及び内海の風光	石田 義雄	1	272
雪の日本アルプス越え	八木 是峯	1	280
雪の金剛山	橋本欽四郎	1	291
樽前 岳	大 平 晟	1	300
妙高の秋色	小野塚進次郎	1	310
鳳凰山縦走記	小佐野 迢々	1	320
上高地風景保護論	小島 烏水	1	324
山吹日記	關口 泰	1	329
登山者の地質學素養	神保 小虎	1	344
秋晴から初冬へ	野尻 抱影	1	447
奈良田のヒロ河内より	冠 松 次郎	1	459
白峰三山に登る			

野呂川の山と谷	小島 榮	三	三〇	416
甲信武國境縱斷	小佐野 迢々	三	六	524
雙六谷探検記	中野 善太郎	三	八	534
縫ヶ岳大黒縦走記	吉澤 庄作	三	一〇	551
晩秋の立山	石崎 光瑤	三	一三〇	568

圖 版

○甲州烏帽子岳より南方の展望○北岳中腹より仙丈岳を望む。荒川岳より見たる朝の小河内岳。白峯山麓の密林○惡澤岳と魚無河内岳の鞍部より北方を望む。小澁川の谿谷より見たる荒川岳。曙光を受けたる劍岳と漣倉岳○小黑部の雪溪及絶崖。小黑部の終點「劍澤の大窓」○立山阿彌陀ヶ原。立山の室堂と別山。淨土山より劍岳を望む○小黑部谷アナ倉落合の飛瀑。劍岳北方の一角に於ける一行。劍澤露營地（以上第一號）

○上高地の夏○梓山の旅舎白木屋。多摩川の上流。梓山村の遠望○三峯山登龍橋。浦上（山の誤）川○冬の嘉門治小屋○温泉湯附近より種高山を望む。○徳本峠下牛番小屋。温泉湯と焼岳○雪の金剛山表訓寺と長安寺○梅花藻○千社札の數々○英國山岳會に關する刷物（以上第二號）

○立山谿谷の新雪○曇るゝ前（白馬岳より杓子岳縫ヶ岳を望む）○日本山岳會關西大會々場○第七回大會々場の内外（以上第三號）

スケッチ

○東京愛宕塔上より望める大井川奥山（第一號）

○山梨縣東八代郡金川原より見たる白峯山脈（第二號）○双六谷高波橋（第三號）

地 圖

飛騨國双六谷流域概念圖（第三號）

刷 込 圖

○小淵澤より甲斐ヶ根○三峯川黒川の落合より鋸岳を望む○市野瀬附近より荒川岳○鋸岳附近臆測圖（以上第一號）

○掌中甲斐國繪圖○甲斐國繪圖○甲斐四郡繪圖並村々高附○富士の豆蔲小僧（以上第二號）

○大石の車地藏○風凰山地藏佛○オーカンベの池より見たる北岳○半天神より西望○凌雲閣上より○駿河臺より（以上第三號）

雜 錄

○「東京より見ゆる山」の補遺○再び東京から見ゆる山に就き○甲府平原地より日本北アルプスの觀望○鋸岳につきて○「冬の八ヶ岳」に就て○青木湯の移轉○雪中富士登山報○雪艇富士登山報告○机上談山○圖書批評

第一號 自一六一 161  
至一九八 198

○佛國山岳會を訪ふ○「白峰三山に就いて」の異議を讀む○間の岳に現出する農鳥に就て○登山記念の千社札○八ヶ岳森林の大伐採○甲斐の口碑と傳説○尾根といふ語○富士山の豆蔲小僧○山梨山岳會講演會○茅ヶ嶽登山○甲府平原地より見たる槍、常念、後立

山の三山脈○登山法私見○飛騨高山の年中行事 ○本誌に用ゐたる紙に就て(蝶耶)

第二號 自一三七 371  
至一八六 420

○フレッシュフィールド氏の日本山岳旅行記(一)○高瀬谷の鐵砲流し○「甲信武國境縦斷」を読む○山岳のクラ及びヲネの語原に就て○大井川上流の流量○「飛騨遺乗合府」を読む○本誌插圖「立山谿谷の新雪」解説

以上第三號 自一二八 574  
至一四三 539

雜報

○淺間と燒岳○蓮華嶽の鳴動○嚴寒の御嶽登山 ○河野氏新植物發見○金剛山視察談○金剛山の測量

以上第一號 自一九九 199  
至二〇四 204

○諸高山の融雪○妙高山大崩壊○剎科山の祇園祭 ○御嶽初登山の外人○御嶽山開き○淺間記

以上第二號 自一八七 421  
至一九一 425

○山岳會展覽會○夜の山岳會○各山雪降る ○駒ヶ岳道路視察○赤石登山

以上第三號 自一四四 590  
至一四七 593

會報

○第七回大會の延期○中村清太郎氏の繪畫展覽會 ○第七回大會開

催に就て會員諸君に乞ふ○會員登山報 ○希望○會員名簿 ○新入會者○退會者○會員名簿訂正 ○歌川廣重傳に就きて

以上第一號 自二〇五 205  
至二〇九 209

○第七回大會期日の確定○關西の山岳講演及び陳列會 ○英國山岳會寫眞展覽會○英國山岳會六月例会 ○英國山岳會に於ける本會員辻村、近藤二氏招待晚餐會 ○英國山岳會に於ける本會員近藤氏の講演 ○飛騨高山の山岳講演會 ○會員登山報 ○會員諸君に ○新入會員 ○圖版説明

以上第二號 自一九二 426  
至二〇二 436

○本會幹事の改選 ○辻村近藤兩氏遭難に就て會員諸君に謝す ○會員辻村、近藤兩氏の歐洲アルプスに於ける遭難に就て ○會員小林浪三郎氏の卒去 ○「高山深谷」第六輯の發行 ○第七回大會の記 ○第七回大會出品目錄 ○關西大會の記 ○會員登山報 ○三高山岳會の近況 ○會員諸君に ○本誌の發行の遅れたる言ひわけ ○新入會員 ○退會者 ○寄贈及交換書目

以上第三號 自一四八 504  
至一七七 523

附錄

○日本山名錄初稿(三) ○會員名簿 (別冊) (第一號)  
○日本山名錄初稿(四) (第二號)  
○飛騨双六谷(小島烏水) (第三號)

山岳第十年總目錄 (大正四年度)

表紙 (色刷) (第一、二、三號) 茨木猪之吉氏筆

本欄

櫻島火山の話	佐藤 傳藏	—	1
臺灣の山岳	野呂 寧	—	11
白頭山に登る	杉本 良	—	31
晩春の高原より	大霜 徳治郎	—	40
雪の武石峠	別所 梅之助	—	49
武奈ヶ岳	水上 森太郎	—	57
近江國打見山と蓬萊山を極むるの記	中原 繁之助	—	68
わが郷國の山々	古家 實三	—	74
日本山岳史料(一)	高 頭 式	—	88
山岳と哲學的精神(哲學上より見たる山岳の印象)	鹿子木 具信	—	96
スウイス日記	辻村 伊助	—	107
阿寒岳と阿寒湖	大 平 晟	—	321
劍ヶ岳登山記	冠 松 次郎	—	338
赤石を横断して	可知 治夫	—	354
スウイス日記(二)	辻村 伊助	—	367
平ヶ岳登攀記	高 頭 義明	—	523
赤石岳から鹽見岳まで	小倉 伸吉	—	539

東俣より鹽見岳に登る記 守島 伍郎 三三 515  
 蒲田谷より穂高登山 中野 善太郎 三三 550  
 燧ヶ岳より飯豊山まで 志村 烏嶺 三三 561  
 淺間山の初冬 冠 松 次郎 三三 573  
 伊吹山雪中登山 越 馬 境 三三 578  
 南湖大山方面探險記 野呂 寧 三三 598  
 スウイス日記 辻村 伊助 三三 599

英文

Akashisan H. E. Dannt (第三號)

圖版

○臺灣中央山脈○白頭山に登る○プリュームリスアルプ○ロッター  
 ルザッタルよりフィンシュテラールホルンを望む○エンクフラウ  
 ヨッホよりアレッチ氷河を望む○エンクフラウヨッホよりエンクフ  
 ラウ(右)及びロッターホルン(左)を望む○テルスカペルレ  
 より仰げるウルネルアルペン○ルガノ(サンロレンツォとモンテ  
 プレ)○ボンテトレイザ○大阪市に於ける關西大會の景況  
 (以上第一號)

○五龍岳よりの眺望○立山別山カールを距て、別山と劍岳を望む  
 ○赤石山麓の森林。赤石澤の上流。小澁川赤石山登山口。小澁温  
 泉○コモ○ウンテルスルツバッハタール○セガンテイニ美術館○  
 オーベルピンツガウの汽車の窓より○クークロツケ(ウエーゼン)  
 ○ウエーゼンよりケレルニシュを望む○ウアーレンゼーの落ち口

山

(以上第二號)

○枝折峠の半腹より駒ヶ岳(魚沼)を望む ○駒ヶ岳(魚沼)の絶巖より中ノ嶽を望む。大湯村より駒ヶ岳(魚沼)を望む。駒ヶ岳(會津)の頂上より燧岳を望む。平ヶ岳の頂上より鶴ヶ岳を望む。平ヶ岳の絶巖より駒、中、兔の三岳を望む ○平ヶ岳の一頂より絶巖を望む ○シユトラールエックの小屋 ○小屋よりフィンシユテラールホルンを望む ○ガツケの絶壁とグロースシユレックホルン ○グロースシユレックホルン頂上よりウエツテルホルンを眺る ○グロースシユレックホルンの西望 (以上第三號)

スケッチ

○浅間山より男體山まで (第一號)

地圖

○臺灣山川分布圖 ○新高山 (以上第一號)

○登山地圖第一輯 劔岳 (添附) (第二號)

○穂高登路圖 (第三號)

刷込圖

○リギより望めるベルネルアルベン ○赤城山登路案内里程 ○比叡山より見たる白山 ○同上より御嶽 (以上第一號)  
○藏王山 (第三號)

雜錄

○女學生と登山 ○甲斐駒山脈に就て ○赤城登山道案内 ○奥仙丈岳に就て ○甲斐北國壺山脈に就て ○鷲尾談山 ○信州駒ヶ岳通信 ○比叡山より見たる白山と御嶽 ○新高山 ○日本アルプス(短歌十九首) ○大正二年八月旅中の歌 ○四國山名の讀み方に就て ○信州より甲州へ ○一萬尺を超ゆる臺灣の高山 ○六甲山の峽谷 ○山岳の聯想 ○再び「東京より見ゆる山」の補遺 ○新案の金カンジキ ○各地の山岳會彙報(一)

以上第一號 自一九七 197  
至二八二 282

○自然觀察の二方面を論じて 山岳觀に及ぶ ○富岳は臺灣の南湖大山より高し ○北越山岳の記事と「山見立大角力」に就いて ○乾徳山 ○鹽見岳登山記 ○ガイドの事ども ○山岳の效用 ○机上談山 ○登山地圖に就いて ○各地の山岳會彙報(二)

以上第二號 自九九 419  
至一四七 467

○日本アルプス踏破團體を率ゐて得たる感想 ○傾斜角の感じられ方及山岳と雲霧との關係に就て ○前の篇に答へて ○藏王山 ○ハヶ嶽 ○山岳雜話 ○汽車の窓より ○各地の山岳會彙報(三)

以上第三號 自一三三 655  
至一七二 694

雜報

○火山の煙 ○駒ヶ岳の白骨 ○諸高山の初雪 ○日本一の高山發見されん ○米國の大探檢家來る ○大和アルプスの踏破 ○婦人の登山 ○

登山圖○燒岳登山の流行○山岳旅行顧問開始○霧島山噴火の虚報  
○百尺低し○霧島山の逆針又盜よる

以上第一號 自二八三 283  
至二九六 296

○雪白き高山の一角○鳥海登山○燒岳の噴火○名物の嘉門治を訪  
ふ

以上第二號 自一四八 148  
至一五五 155

○雪中登山○初雪○登山者の氣焔○一日半で大阪から富士山往復  
○京の山岳趣味○團體と登山研究○京都二中健兒の比叡登山競争  
○山のローマンス○御嶽山の通信數○燒岳爆發の農事關係○吉野  
群峰

以上第三號 自一七三 173  
至一九五 195

會 報

○登山案内者改善の一方○第八回大會の記○關西大會の記○各  
地の山岳會○幹事小島久太氏の渡米○會員逝去○故加藤鐵之助君  
○會員登山報○登山用具一式の製作販賣○會員諸君の爲め登山用  
具の割引○會員濱名金子兩氏アイヌアックスを頒たんとす○會員  
名簿配布○新入會者

以上第一號 自二九七 297  
至三二〇 320

○「高山深谷」第七輯發行○會員に圖書分典○名古屋に於ける有志  
晚餐會○第十三回有志晚餐會○會員通信○本誌發行の遅れたる言  
ひわけ○新入會者○退會者

○山岳第十一年總目錄

以上第二號 自一五六 156  
至一六六 166

○第九回本會大會豫告○第十四回有志晚餐會記事○第十五回有志  
晚餐會○名古屋の第二回有志晚餐會○今村氏送別及京都有志晚餐  
會○奈良市に於ける山岳講演會○會員通信○會員に由りて成る近  
刊○白馬岳案内丸山廣太郎死す○新入會者

以上第三號 自一九六 196  
至二〇六 206

附 録

○會員名簿(別冊)(第一號)  
○黒部川奥の山旅(前編)(木暮理太郎)(第二號)

山岳第十一年總目錄 (大正五年度)

表紙(色刷)(第一、二、三號) 富田 溪仙氏筆

本 欄

秩父の旅	南日 重治	1
奥秩父の山旅日記	木暮理太郎	38
三峰より白岩及雲取越え	辻本 満丸	82
甲武信岳と奥千丈岳	森 喬	92
武蔵通志(山岳篇)	河田 照	100
岩井谷と薬師ヶ岳	冠松次郎	268

山

尾瀬の事ども(附至佛山)	沼井鐵太郎	二	17	281
日光遊行雜記	武田久吉	二	16	292
霧島の山々	明石國助	二	17	312
槍ヶ岳から日本海まで	田部重治	二	16	324
スウイス日記	辻村伊助	二	13	347
黒部川奥の山旅(中編)	木暮理太郎	二	13	399
武尊山	日高信六郎	三	1	521
槍より穂高へ	伴野清	三	11	531
霧ヶ峯と鎌ヶ池及八島ヶ池	武田久吉	三	11	551
千挺木山	守島伍郎	三	13	562
布哇キラウエヤ火山を見るの記	國府精一	三	13	573
秋信	冠松次郎	三	13	584
雪の恵那山へ	長谷川悒峰	三	11	601
大雪山登山記	小泉秀雄	三	11	608
高山植物檢索便覧	武田久吉	三	13	614

圖版

○白岩三角點より和名倉山(白石山)を超えて甲武信岳を望む○雲取山頂より大洞山を望む○三峰奥宮より雲取及白岩の二山を望む○一五二三米の峰より南方に白岩山を望む○ウキンパーが下山の途中見たる幻影○クロツ・セイラー・カレルの肖像(以上第一號)  
○山に登る三人○エリオットウエンクリよりフィンシュテールホルンを望む○シュレックホルンのクローアール○遭難の後○ヒルナルフィンゲンよりニーセンを望む○トウーネルセーの夕○プリユ

ームリスアルプホルン○エッシンセー○女學生の登山振り(以上第二號)

○武尊山より見たる燧、至佛、平ヶ岳、武尊山頂上。劍ヶ峯より見たる武尊山○穂高岳○蕨師岳の肩より槍ヶ岳穂高岳遠望○シルビヤ山頂。大剱尖山頂の奇巖。南投社シカヤウ社より見たるシルビヤ山  
○Arabis Alpinaとタッタサウ○雪の伊吹山○ミチノクコザクラとカッコウサウ○トガクシシヨウマとシラネアフリヒ(以上第三號)

スケッチ

○雲取山頂より西望○ウキンパーの手束(第一號)  
○三窓の雪溪○長次郎澤にて○つるぎ澤にて(以上第二號)  
○八島ヶ池採集綠藻圖○東京市及近郊所望二千米以上山岳高度表  
○シラタマノキ果實、種子等(以上第三號)

地圖

○旭岳火山登山要圖(第三號)

刷込圖

○四阿山○八十三山○苗場山○皇海山○奥白根噴火圖(以上第二號)

○東京市近郊より遠望したる武尊山○八島ヶ池○旭川市街より見たる大雪火山彙並に其附近の概念圖○旭岳火山の西南麓なる藤根小屋より旭岳の地獄谷爆裂火口を見る○旭岳の中腹より中央高山連峯を見る○旭岳火山の爆裂火口壁より東南方に石狩山脈を見る

岳

(以上第三號)

雜 錄

○奥秩父の登山に關する注意 ○笛吹川の上流(東澤と西澤) ○秩父の印象 ○秩父旅行の思ひ出 ○武奈岳の裏山道に就て ○劍岳に就て ○ハヒマツの生長の割合 ○燒岳山麓の原生林保護 ○穗高の三山説に就て ○雲に對する疑問 ○山腹傾斜地の濕氣に就て ○再び前の篇に答へて ○I, Amateur の科學 ○新著紹介

以上第一號 自一二九 126  
至一八五 185

○淺間山より男體山まで ○嘉陵記行 ○遭難記 ○秩父遭難に就て ○秩父遭難の原因 ○山案内者に對する批難に就て所感 ○立山温泉の新設備 ○伊藤徳之助君へ ○圖書紹介 ○各地の山岳會彙報

以上第二號 自一七〇 174  
至二四四 208

○後立山は鹿島槍ヶ岳に非ざる乎 ○ハケ岳の北 ○相州蛭ヶ岳 ○東京市内所望の山岳高度表に就て ○黒部峡谷の春 ○しらたまのき ○日本の山地に見るオダマキの種類 ○臺灣の高山 ○管沼なる名稱に就て ○山中の傳説 ○空と雲 ○机上談山 ○信越線附近スキー練習地の主なるものに就て ○白馬詠草 ○大正五年七月はかり越中國立山にのぼりけるときによめる ○圖書紹介 ○各地の山岳會彙報

以上第三號 自一三六 138  
至二二〇 240

雜 報

○山岳第十一年總目錄

○東久通宮殿下日本アルプスを御踏破あらせらる ○秩父の慘事 ○秩父の慘事餘録 ○落合海軍屬の死

以上第一號 自一八六 188  
至二一三 213

○燒岳と淺間山 ○御嶽山 ○ハケ岳の高山植物採取と取締 ○赤城山中の遭難 ○涼榻閣話

以上第二號 自二四五 209  
至二五〇 214

○中學生行方不明となる ○寒中淺間登山 ○マラソン登山を耻ぢよ ○天下の名山大臺原山の破壊せられんことを惜みて志士仁人に檄す ○比叡山の天幕村訪問記 ○山の傳説 ○山へ山へ ○乘馬富士登山 ○女學生の登山熱狂なり ○白馬山雪深し ○小黒部鐵山に郵便局 ○武甲山中の慘事 ○日本アルプス山岳戰記 ○谷間へ墜落して慘死を遂ぐ

以上第三號 自二二一 241  
至二四一 261

會 報

○日本山岳會第九大會の記 ○名古屋の有志晚餐會 ○名古屋の山岳會 ○神戸講演會の記 ○第十六會有志晚餐會記事 ○會員芝川又之助君の死を悼む ○會員登山報 ○編輯係より ○寄贈 ○新入會者 ○退會除名者

以上第一號 自一一四 214  
至一三四 234

○信濃鐵道割引乗車券發賣の事 ○山岳寫真展覽會 ○會員登山報 ○高山深谷「第八輯の豫約募集」 ○第九回大會豫告 ○編輯係より ○新

入會者

以上第二號 自二五一  
至二五六 250

○幹事の改選と新任○第十回大會の記○名古屋に於ける山岳講演會○豊橋市に於ける山岳講演會○横濱市に於ける山岳展覽講演會○會員登山報○「登山の注意」の頒布○寄附二件○會員の著作○會員石崎光彦氏印度より歸る○幹事中村清太郎會員加賀正太郎兩氏の外遊○高頭高野兩幹事慰勞會記事○雜誌の遅るゝ言ひわけ

附 録

以上第三號 自二四二  
至二五八 762  
778

○日本に於ける氷河問題(大關久五郎)○マッターホルン最初の登攀に就て(岩村圓)○會員名簿(別冊)○山岳第十年總目錄(以上第一號)

山岳第十二年總目錄 (大正六年度)

表紙(色刷) 第一號  
第二、三號

中村 清太郎氏筆  
茨木 猪之吉氏筆

本 欄

黒部峡谷の語 中村 清太郎 一  
火打山と焼山 大島 永明 一  
田 中 黨 一 三 22

霞澤岳に登る

白馬岳より越中小川温泉に出るの記

山の生ひ立ち

高山植物の研究

北海道中央高地の地學的研究(豫報)

中村 直男 一 25

鈴木 益三 一 26

辻村 太郎 一 25

武田 久吉 一 27

小泉 秀雄 二・三 1 205

圖 版

○雪溪仰望(小黑部大窓)○峡谷に臨む山(黒部谷より百貫山を仰ぐ)○峡谷の底(黒部川鐘釣上流の一部)○高谷野地の東隅より其一部と霧に蔽はれたる火打火山を望む○ほていらん(秩父十文字峠産)(以上第一號)

スケッチ

○あかもの(第一號)

地 圖

○樺太、北海道、本州地質地形系統比較關係圖○北海道山脈明細圖○北海道の地學的成立圖○北海道中央高地地方地質圖○北海道中央高地地方地形詳圖(添附)(以上第二・三號)

刷 込 圖

○火打火山附近概念圖○笹ヶ峰牧場入口長助の小舎より(以上第一號)

雜 錄

○登山者の徳義○飛驒山脈と鐵曲○ハケ峰の斷裂に就て○サリク  
 の二三の性質○ほていらん○甲州七面山の「御神木」と「萬壽草」  
 ○劍ヶ岳伊折方面の登路案内○根石岳の登路○針木峠の林道○黒  
 部谷の射撃演習○雪の南アルプス觀望臺としての伊豆修禪寺○大  
 隅高隈山登山談○黒姫山傳説○科學と詩○山岳氣分○立山詠草○  
 嘉門治を憶ふ○大町登山案内者組合の設立○机上談山○各地山岳  
 會彙報○圖書紹介○山岳彙報

雜 報

○東久邇宮殿下白馬岳御登山○燕岳登山者斃る○上高地の害蟲○  
 單身前穂高の檢を攀づ○白馬岳雜記○御嶽山雜記○東西婦人記者  
 の穂高登リ○雷鳥の祟り○岳の雪

會 報

○第十一回大會預告○山岳畫展覽會に就て作家及び所藏家に○會  
 員登山報○第十八回有志晚餐會記事○第一回在演會員有志晚餐會  
 ○秋田縣小坂町に於ける山岳講演會○學習院輔仁會山岳幻燈會○  
 外人會員交歡會○上條嘉門治の死○會員名簿○大正六年寄贈及交  
 換圖書○圖版解説○投稿規定

以上第一號自一〇九 109  
 至一七九 179

以上第一號自一八〇 180  
 至一九一 191

○山岳第十三年總目錄

○日本山岳會小集會の開設○第十一回日本山岳會大會の記○山岳  
 畫展覽會出品者諸君及び同會の爲め厚意と便宜を附與せられたる  
 諸君に感謝す○第十九回日本山岳會有志晚餐會○第二回及び第三  
 回在演會員有志晚餐會○名古屋に於ける第三回山岳講演會○小田  
 原中學校に於ける山岳幻燈講演會○慶應義塾山岳會○東京基督教  
 青年會體育部山岳講演會○山形山岳研究會○「高山深谷」第九輯發  
 行期について○名譽會員ウェストン氏の近業○會員消息○山岳彙  
 報○新入會者

以上第一號自一九二 192  
 至二〇三 203

山岳第十三年總目錄 (大正七年度)

表紙 (第一、二、三號) 中村清太郎氏圖案

本 欄

劍越え	冠松次郎	1	1
日光山の瀑布	武田久吉	19	17
御前屏風紀行	沼井鐵太郎	1	39
八峰のギョッパ	山口末次郎	1	52
「だうだん」の惠那山	朝輝記太留	1	141
	西園寺蓑公	11	141

山

岳

ハイランド	辻村 伊助	二	三	152
信州岩管山	辻本 満丸	三	一	287
九州の山々	八代 準	三	11	297
丹澤山塊	戸澤 英一	三	六	324
駒岳仙丈岳及鳳凰山塊	藤島 敏男	三	六	324
雁ヶ腹摺考	柳 直次郎	三	三	335
	武田 久吉	三	三	353

圖 版

○空瀑。玉篋瀑。丁子瀑。大瀑。胎内の瀑。裏見瀑の舊態○枯澤の瀑。七瀑。唐瀑。慈観の瀑の舊態○刈田岳。賽の河原西望。雁戸山。熊野岳○八峰つゞきのキレット。八峯のキレット○槍ヶ岳より見たる穂高山。槍ヶ岳の頂上。常念山脈より見たる槍ヶ岳。霞澤岳より見たる穂高山。二ノ俣小屋より穂高山を見る○烏帽子山稜。赤岳。越中澤の雪橋。高瀬川道。黒岳。唐澤岳（以下第一號）○ロホナガール頂上の東望○ロホナガールの積石○ロホナガールのサーカス○ディール川の水源地○ケールンゴルム山脈の一部○カーランダー・クレリー附近○ペン・レデイ（以上第二號）○岩管山頂より裏岩管を望む。西方の山麓より望める岩管山及び裏岩管山○岩管山登路の一部平穩堰沿岸の闊葉樹林。南面の鞍部ノッキリより仰げる岩管山嶺。東館北麓底清水の小屋場より岩管山及び裏岩管山。岩管山梯子澤の二重瀑○小佛峠の舊觀。和田峠より速行峰及鉄山を望む（以上第三號）

刷 込 圖

○雲龍の瀑（第一號）  
○刈羽郡千谷澤村の一丘上より八石山を望む○新發田より見たる二王子岳○新發田より見たる五頭山○平林村保呂羽神社より○平林より見たる要害山○村上臥牛山より見たる光兎山○千谷澤村より黒姫山を望む○神納村小田より望む（以上第二號）  
○佐野峠より西望（第三號）

雜 錄

○山の物理學○山の物理學補遺○原口林學士の「赤石白峯山脈縱横記」を讀む○高山植物雜記○登山案内者○火男火賣○近江國山岳登路表○落合海軍屬死體發見の顛末

以上第一號 自一〇 至一〇 110  
○立山東面の登山路に就て○大日岳、早乙女岳、奥大日岳登路○高山植物雜記○J'Amateurの科學○丹澤山塊○仙丈岳より顯見岳まで○我邦最初の登山鐵道○山ばなし○登山案内者○山岳彙報  
以上第二號 自一七 至一七 214  
○日光湯川の小瀧○白崩山の古道に就て○北相の一角○机上談山○高山植物雜記○山岳彙報○登山案内者  
以上第三號 自一七四 至一七四 360  
自一三〇 至一三〇 416

雜 報

○朝融王白馬へ○白馬山今年の初登山○加賀の白山山麓より○上

高地温泉場より○今年の富士山の物價○大和高峰山の昨今○伯耆の大山登り○日本アルプス北部の登山道○今夏の霧島○中房温泉より○槍ヶ岳を中心とする登山路○海拔八千尺の冠帽峰○日本アルプスの露天學校○アルプス學會近く設立されん○上高地○山を秘めよ○山に行く心○山嶽美保護施設○種蒔爺○登山には酸素袋

○藏王山の慘事

以上第一號 自一〇一 至一一五 111 125

第二號 自一二六 至一四〇 264 278

○富士登山の魁○日本アルプス初登山○燕常念方面先登登山一行無事下山す○日本アルプスに石室を十箇所新設提案○山上の物價○伊吹山頂の觀測所

以上第三號 自一三一 至一三六 417 422

會 報

○本會々則一部變更○第一回本會小集會○神奈川縣廳、横浜市役所主催山岳講演會○上智大學山岳講演會○會員通信○福地信世氏の來狀○立山劍岳附近五萬分一模型圖頒布○外國文欄の創設○新入會者

以上第一號 自一二六 至一四〇 126 140

○第十二回大會豫告○第三回小集會○第二十回有志晚餐會○會員通信○星忠芳君逝く○木本光三郎氏逝く○寺崎廣業氏逝く○會務報告○寄贈圖書○本會規則拔萃

○山岳第十四年總目錄

以上第二號 自一四一 至一四八 277 286

○本會規則の改正○第十二回大會記事○第四回小集會○第二十一回有志晚餐會○大阪に於ける山の會○信濃山岳會と日本アルプス會成立○登山消息○會務報告○會員諸君に

以上第三號 自一三七 至一四〇 423 440

附 錄 (英文欄)

○ In Alpland (Yamakaze) ○ Peak and Ridge Climbing in the Japanese Alps (W. H. Edwin) ○ From Yariatake to Hodaka by peak and ridge (W. H. M. Walton) ○ Cameos (Blue Dragon-Fly) ○ News from members. (以上第一號)

○ Kamikochi to Nakabusa (T. H. R. Shaw) ○ Gakidake (J. G. S. Gausden) ○ A Crack with Kamonji (Blue Dragon-Fly)

○ Of the origin of the term "The Japanese Alps" (W. Weston) (以上第二號)

○ A fortnight on the Kurobe (O. White) ○ Off the beaten track (A. G. Hearne) ○ Scrambles in the Southern Japanese Alps (Blue Dragon-Fly) (以上第三號)

山岳第十四年總目錄 (大正八年度)

表紙 (第一、二、三號)

中村 清太郎氏圖案

本欄

山

岳

信州笠ヶ岳と横手山 辻本 満丸 一 一  
九州旅日記の中より 吉岡 八二郎 一 10  
白砂登山記 森 高信六郎 一 34  
山嶽諸相 辻村 太一郎 一 44  
高瀬川湯俣より上河内に出る記 濱谷 泰次郎 一 143  
雪の乗鞍岳 小野 隆義 一 166  
春の上河内 板倉 勝宣 一 163  
針木峠を経て剗岳に登る 村瀨 圭 一 169  
石狩川上流の旅日記より 竹内 亮 一 184  
吉野川水源地大臺ヶ原山北麓 宮田 琴治 一 275  
黒部の秋 廣瀬 壽雄 一 304  
高處の氣象現象に就て 藤原 咲平 一 324

圖版

○萬座峠より望める笠ヶ岳。笠ヶ岳頂上の神洞。澁温泉寺附近よりの東南望。硯川附近より望める横手山。硯川附近より見たる笠ヶ岳○澁峠の山道より望める笠ヶ岳。白根山より上信國境の山脈を距て、笠ヶ岳及坊平山を望む。白根山水釜を距て、横手山を望む。澁峠西端約二千米の地點より望める笠ヶ岳及小笠○野反池東北岸より辨天山遠望。ネンバ坂より南望。辨天山八間山の鞍部より北に野反池を望む。野反地南端より北望。同上 (以上第一號)  
○湯俣水俣の出合○碓黄澤乗越より西北望。湯俣に於ける湯の花

○大岳山頂より望める御前山。御前山の神洞。御前山より望める大岳山 (以上第二號)  
○大臺ヶ原山嶺牛石ヶ原。大臺原山中中の瀑。大臺原山嶺正木ヶ原○刈田岳頂上より御釜を望む。五月の御前岳。御前岳賽の噴上部の一溪より水引入道を見む○會津駒ヶ岳中腹より望める燧ヶ岳。同上稍上部より燧ヶ岳。大津岐峠。景鶴山を望む。會津駒ヶ岳中腹より同山の一支峰を見む (以上第三號)

別込圖

○熊の湯と山本老人父子○辨天山三角點より西に横手山及び池の塔山を望む○辨天山三角點より北微東を望む (三八頁のもの訂正)  
○辨天山三角點より西北に大高山を望む (以上第一號)  
○石狩上流の一部略圖○チトカニウシ岳の頂上○ニセイカウシペ○ニセイカウシペの一角より石狩山脈を望む○ヌタクカムシユペの東側中腹より東方及北東方を望む (其一、二、三)○ソウウンベツ右岸の高臺よりヌタクカムシユベの東面を望む○ニセイカウシペ及トイマルクシユベツ山○ニセイカウシペ附近概略圖 (以上第二號)  
○吉野川水源地附近略圖 (第三號)

雜錄

○神戸岩と御前山○一二山湖の名稱○コンバの意義○四阿山上州方面の登路○萬田山阜考○伊豆の大室山○登山案内者○山岳圖書批評

以上第一號自 八五  
至 一九 85  
119

○神戸岩と御前山○天然林保護に就て○鎌鶴峠○初冬の赤城山○  
鷹見ヶ嶽なる名稱に就て○地形圖に就て○二合平坂○山の讃歌○  
机上談山○諸高山の登山人員に就て

以上第二號 自七〇 211  
至一一五 217

○仙臺附近の山々○焼山より丹澤山地縦走○會津胸ヶ岳○岩菅山  
に關する一二件○登山案内者○山嶽圖書批評

以上第三號 自一五六 321  
至一〇六 320

雜報

○立山頂上の氣象觀測○北アルプスの湖沼調査○石室十ヶ所位置  
決定○阿蘇山噴火○伊豆大島三原山噴火○燒岳噴火○砲兵中尉行  
方不明となる○富士山の初雪○雪來る○會員通信

第一號 自一一〇 120  
至一二八 128

○天然記念物保存○爺岳石室竣工○岩菅岩室閉鎖○四高山岳會  
山岳寫眞頒布○會員通信

以上第二號 自一一六 218  
至一二四 216

○今年は岳に雪が少ない○燒山噴煙○高瀬川の水色變ず○白骨温  
泉震災○有明口及奈川口の人夫賃と物價○登高行○會員通信

以上第三號 自一〇七 381  
至一一一 385

會報

○山岳第十四年總目錄

○事務所の移轉○小集會規定の變更○會員章の變更○會員章貸與  
及び再貸與規定○不在會員規定○會費拂込に關する注意○會費の  
改算に就て○第五回小集會記事○第六回小集會記事○幹事改選に  
就て○會務報告○會員の訃報○退會者○會籍削除○交換及び寄贈圖  
書目○會員名簿○規則の正誤○本會規則拔萃並に投稿規定

以上第一號 自一二九 129  
至一四二 142

○新會員章に就て○會員章番號割當につきて○會員名簿○入會申  
込者及び紹介者に告ぐ○會費領收報告に就て○第七回小集會記事  
○萬國山岳六會○會務報告○交換及び寄贈圖書○本會規則拔萃○  
投稿規定○第十三回大會豫告

以上第二號 自一二五 267  
至一三二 274

○團體の入會に關する規定○會員章の引換に就て○會費拂込に就  
て○第八回小集會記事○會務報告○會員名簿の訂正及追加○退會  
者○死亡○會籍削除○無效會員章番號○交換及び寄贈圖書○本會  
規則拔萃○投稿規定○第十回小集會豫告

以上第三號 自一一二 386  
至一一八 392

附錄 (英文編)

○Scrambles in the Japanese Alps (Blue Dragon-Fly) ○First  
aid in the mountains (Dr. Paravicini) (以上第一號)  
○The climbing Season in the Alps (From "Spectator")  
(以上第二號)

○Scrambles in the Southern Japanese Alps (Blue Dragon-Flly) (以上第三號)  
 ○會員名簿 (第二號)

山岳第十五年總目錄 (大正九年度)

表紙 (第一、二、三號)

中村清太郎氏圖案

本欄

多摩川相模川の分水山脈	武田久吉	一	1
大町より下廊下へ	沼井鐵太郎	一	24
大武川より三峰川まで	柳直次郎	一	71
西澤、國師岳、東澤	冠松次郎	二	126
臺灣中央山脈横斷記	濱谷泰次郎	二	133
秩父行	田部重治	二	153
三峠山	又木周夫	二	162
甲谷陀より金剛賢土及サンダクフへ	石崎光瑤	三	230
冬の鈴谷山	六鹿一彦	三	247
瓜哇メラバブ登山記	武田信	三	261

圖版

○黒部川 (御前澤の合流點附近) ○黒部川 (御前澤と御山澤との

間) ○間の岳北方の高所より北望 (以上第一號)  
 ○濁水溪の上流 ○尾上駐在町より見たる能高山。花蓮港木瓜溪 ○西方より見たる三峠山最高峰 ○三峠山の最高峰 (以上第二號)  
 ○トンケル附近溪流の結水 ○サンダクフ附近の樹水 ○北より望める鈴谷山主峰。山麓より望める鈴谷山 ○長次郎谷の雪溪。蓮華岳中腹より針木岳及スバリ岳を望む。針木岳より立山、別山、劔岳を望む。劔岳頂上附近 ○間の岳雪田より北岳を望む (以上第三號)

刷込圖

○多摩相模二川の分水山脈略圖 ○大菩薩峠東南の峰より東望 ○百蔵山頂より大室山及麻生山を望む ○百蔵山の中腹より扇山の西面を望む ○岩殿山東腹より望める扇山及び百蔵山 ○黒部川 ○グスバルテンホーンのアプト ○Panorama from Wildstrubel (以上第一號)  
 ○日月潭石印社 ○萬代橋 ○三峠登山口の達磨石 ○大曲り附近より仰げる三峠山の山峰 ○鳳凰山頂の地藏佛 ○シェレンベルグ氏の肖像 (以上第二號)  
 ○雉鶴姫媛連王神社 ○樟前附近略圖 ○樟前山頂上の圓頂丘 (一九二〇年七月二十五日所見、一九一七年七月十三日所見) (以上第三號)

雜錄

○大門山 ○七倉岳と不動堀澤岳 ○河の右岸在岸に就て

以上第一號自一九七 97  
 至一〇六 106

○丹澤山塊に關する資料○釜澤行○河岸の左右と河堰の内外及雲の表裏○黒部峡谷の步道○コロラド州内の高峯○登山案内者

以上第二號 自五三 172  
至九四 213

○雜鶴峠追記○檜前山の近況及支笏湖○森林とスキーと冬の登山  
○女子劍岳登山記

以上第三號 自五六 225  
至九一 320

雜報

○檜前山爆發す○富士登山者三名行衛不明○富士山の強風雨○白山登山者暴風雨中遭難○會員通信

以上第一號 自一〇七 107  
至一一二 112

○朝香宮殿下御登山○上高地の大荒れ○霧島山上に大競艇所○小倉村登山口○山小屋閉鎖期○各高山の登山者○北海道の初雪○富士の初雪○大阪高商山岳會○會員通信

以上第二號 自一九五 214  
至一〇四 223

○槍岳新登山路○淺間登山道改造○北海道山信○淺間山爆發○淺間山爆發調査○淺間山噴出物の研究○淺間復爆發○臺灣の初雪○會員通信

以上第三號 自一九二 321  
至一一三 342

會報

○第十三回大會記事○第九回小集會記事○會務報告○會員の住所移轉○新入會者○會員の訃報○無效會員章番號○會籍削除○交換及び寄贈圖書○本會規則拔萃○投稿規定

以上第一號 自一一三 113  
至一一九 119

○本會規則の變更○本會規則の變更に就て○警告○第十回小集會記事○會務報告○新入會員○交換及寄贈圖書○本會規則○投稿規定

以上第二號 自一〇五 224  
至一一〇 229

○第十一回小集會記事○第十二回小集會記事○會務報告○新入會員○會員章新番號○會員住所移轉○退會者及び死亡者○交換及寄贈圖書○本會規則拔萃○投稿規定○第十四回大會豫告

以上第三號 自一一四 313  
至一二〇 319

附錄 (英文欄)

○In the playground of Europe (W. Weston) (第一號)  
○Scrambles in the Southern Japanese Alps (Blue Dragon-Fly) (第二號)  
○The mountain of the mist (W. H. M. Walton) (第三號)

山岳第十六年總目錄 (大正十年度)

表紙 (第一、二號)

茨木猪之吉氏筆

本欄

山と日本人と	別所梅之助	一	一
春の飛騨山脈越え	廣瀨壽雄	一	17
下廬下の記	冠松次郎	一	43
スキー登山術	六鹿一彦	二	114
白髮山登山記	吉永虎馬	二	145
冬の赤城山へ	黒田幸雄	二	150
上越境の山旅	藤島敏男	三	194
皇海山紀行	森喬	三	194
晩春の神流川上流へ	木暮理太郎	三	213
秋の鬼怒沼	高畑棟材	三	227
春の山旅	木暮理太郎	三	250
秋の四阿山	藤島敏男	三	269
黒岩山を探る	鶴殿正雄	三	280
利根川水源地の山	沼井鐵太郎	三	289
	木暮理太郎	三	306

圖版

○地藏岳三角點より白峰三山を望む ○切合附近より望める大日岳。地藏山頂より飯豊本山、草履塚、種蒔山等を望む ○種蒔より

飯豊本山及草履塚を望む。御秘所の下段。飯豊山頂より御西方面を望む (以上第一號)

○中山峠への道にて ○黒橋より中山への道 ○中山峠傍近 ○高見石より西北望 ○高見石より白駒ノ池。新雪の峯ノ河原 (以上第二號)  
○矢場より見たる仙ノ倉山と萬太郎山 ○三國山より大源太山及仙ノ倉山を望む ○谷川村附近の丘上より谷川富士を望む ○皇海山三角點より見たる西峰及武尊山 ○鬼怒沼より燧及袴腰の二山を望む。鬼怒沼より南東望 ○寺小屋の峰より岩菅山を望む ○北より仰げる赤石山 ○野反池 ○越後深山より荒澤、兎、丹後の三山を望む ○利根川水源をなせる大殘雪を隔て、中、駒、小兎の諸山を望む (以上第三號)

刷込圖

○茶白山より見たる美ヶ原 ○白駒ノ池北畔より西南望 (以上第二號)  
○皇海山三角點より南に袈裟丸連山を望む ○南より見たる御山 ○濱平村 ○戰場ヶ原より見たる温泉岳 ○北より見たる燕巢山 ○四阿山頂の小洞 ○延湯より見たる四阿山 ○利根川口 ○タデンリノセンと大淵 ○上ノ原より見たる笠ヶ岳 ○上ノ原より西北を望む ○上ノ原より見たる柄深山 ○上ノ原より正北に小澤岳を望む ○本谷山より見たる越後澤山 ○正保圖 (利根川水源附近) ○利根川水源の殘雪 ○平ヶ岳頂上より見たるススケ峰、至佛山と笠ヶ岳及武尊山 ○尾瀨ヶ原 ○南方より望める笠ヶ岳 ○笠ヶ岳東面中腹の雪溪 ○笠ヶ岳東面中腹より布引及天ヶ立を望む ○笠ヶ岳頂上三角點より最高

點の隆起〇二〇三七米の地點より四阿山頂〇白砂川と笠松橋〇藤原より武尊山への登路略圖〇武尊川裏見瀑 (以上第三號)

雜 錄

〇飯豐御秘所の下段〇立山と劍岳に就て〇高山薈類雜記 〇山岳林の趣味的方面〇恩若峰と源次郎岳〇鼯鼠談山〇岩菅山の登路〇日本アルプス雜詠〇アルプス歌卷〇山岳圖書批評

以上第一號自 六七 97  
至 九七

〇玉川溪谷の案内者に就て〇茨ヶ原〇日本百富士考〇十和田湖に遊びける時に〇高見石と白駒の池〇甲斐駒ヶ岳の新登路

以上第二號自 四七 160  
至 六四 177

〇寶川を溯りて笠ヶ岳に登る〇四阿山に就て〇花敷温泉より四萬へ〇利根川上流地方の方言二三〇古圖の信じて得べき程度〇庚申山と阿世湯峠〇藤原と武尊山への登路〇上州の古圖と山名〇玉原越

以上第三號自 一六八 261  
至 二二二 405

雜 報

〇林道六萬間〇日本アルプス公園地〇淺間山爆發〇夏期日本アルプスの氣温〇登高行〇廣島山岳同好會〇奈川日本年の人夫賃及物價〇モンブランの頂上崩る〇エヴェレスト山深檢險〇會員通信

以上第一號自 九八 98  
至 一〇七 107

〇淺間山の爆發〇檜前山の火噴火〇里流山の爆發〇越中山岳會成

る〇新刊書紹介〇會員通信

以上第二號自 六五 178  
至 七五 188

〇淺間山爆發〇四阿山で小學生の遭難〇上越線に東洋一の大隧道〇會員通信

以上第三號自 二一三 406  
至 二二〇 413

會 報

〇第十三回小集會記事〇第十四回大會記事〇第十四回小集會記事〇會務報告〇新入會員〇會員住所移轉〇退會及死亡者〇無效會員章番號〇交換及寄贈圖書〇本會規則拔萃〇投稿規定

以上第一號自 一〇八 108  
至 一一三 113

〇第十五回小集會記事〇第十六回小集會記事〇會務報告〇本會規則改訂〇交換及寄贈圖書〇會員名簿〇本會規則〇投稿規定

以上第二號自 七六 189  
至 八〇 193

〇第十七回小集會記事〇第十五回大會記事〇第十八回小集會記事〇第十九回小集會記事〇幹事改選〇大正十二年度會費の拂込に就て〇會務報告〇會員の計報〇退會者〇交換及寄贈圖書目〇本會規則拔萃〇投稿規定

以上第三號自 二二二 414  
至 二三一 424

附 錄 (英文欄)

〇Sketch of the Mountain-Range of Japan (N. Takato) (第

二號)

○ Summaries of the Principal articles in the Japanese Part.

(第三號)

○會員名簿(綴込)(第二號)

### 山岳第十七年總目錄 (大正十一年度)

#### 本欄

神流川雜記	吉岡 八二郎	一	1
南國の山	武田 信	一	10
北上山地の旅	沼井 鐵太郎	一	31
三月の劔岳	船田 三郎	二	123
スノードン	八代 準	二	133
黒部別山と内蔵之助平	沼井 鐵太郎	二	141
阿蘇・九重・由布を巡登して	竹内 亮	二	149
聲梯 山	吉岡 八二郎	二	162
樽前火山薬の地形及植物景觀	竹内 亮	三	204
西洋紀行	書上 喜太郎	三	242
錫ヶ岳	黒田 正夫	三	250
雪の上ノ岳	榎谷 徹藏	三	264

#### 圖版

○高山植物(ハヶ岳) ○立山室堂より見たる別山 ○ブレバンより

見たるモン・ブランの連嶂 ○瓜哇スンペン山 ○瓜哇シンドロー山 (以上第一號)

○立山室堂 ○五ノ越より見たる劔岳 ○梯子谷の雪溪 ○御前澤 ○九重山北麓の樺野及涌蓋山。久住山頂より東望 (以上第二號)

○樽前山東峯 ○樽前山新出山最高點とフツプシヌプリ。東方の外輪山頂より新出山を望む ○樽前山中腹より見たるフツプシヌプリ。

東峯最高點より中央火口丘を隔て、西峯を望む ○白果累々たるシラタマノキ。オホツツ空澤の上流 ○ウチンマンネンヌスキ。イハヒ

ゲ ○上ノ岳北方尾根より見たる黒岳。上ノ岳尾根の樹氷狀凍雪 ○上ノ岳頂下より黒部川水源を望む (以上第三號)

#### 刷込圖

○開聞岳 ○Chunda R. ○Gold Mt. ○Adams Peak ○Jebel Haggier ○Jebel Am Birka ○Jebel Kharaz ○Jebel Man-hali ○Jebel Wadi Lahama ○Jebel Sarbal ○Jebel Katherina ○Jebel Gharib ○Madara ○Stromboli ○Mt. Rotondo ○Cerro Mulhacén ○Sierra Buñones ○Mt. Foia (以上第一號)

○阿蘇高嶽 ○久住、星生、三股の諸山 ○遠望したる久住山群 (以上第二號)

○フツプシヌプリ山頂より樽前山を望む ○フツプシヌプリの北面 (以上第三號)

#### 雜錄

○船上談山○平民詩に現れたる山岳趣味○有峰のこと○白馬大雲溪○瓜哇登山の感想○山岳及山湖と國立公園

以上第一號自 六〇  
至 九六 96

○藥師岳の新登路○丘陵山岳及アルプスの範圍○白馬岳遭難記○沼尻及野尻に就て○高山蘚類雜記

以上第二號自 五〇  
至 六二 172  
184

○長白山に就て○大井川の荒廢○屋久島行の板倉勝宣君を想ふ○第三回エヴェレスト山遠征○デッチョウ茶屋の一夜

以上第三號自 九八  
至 一二八 301  
331

雜報

○常念坊の由來○長村角間の岩窟から大發見○槍の絶嶺から二高生墜死す○三原山鳴動爆發○樽前山の火爆發○北海道の駒ヶ岳大爆發○登山新路○新に縣道となつた大きな登山路○山の物價○山岳圖書紹介○會員通信

以上第一號自 九七  
至 一一〇 110

○關東地方大地震○相州大山の山海嘯○富士山を踏査に○ハケ岳に大龜裂○燒岳の噴煙増加○登山案内組合○山岳圖書紹介○會員通信

以上第二號自 六三  
至 七一 165  
193

○頸城アルプスの登山路完成○避難小屋と觀賞地をアルプスに設

置○黒部の門戸を開く峡谷鐵道○南アルプスへ行衛不明となる○伊藤氏の映畫隊大成功○榛名山麓の御料林○英國の探檢隊今年もエ峯登山を決行○大鳴動の後噴煙猛烈○十七の火山活動○會員通信

以上第三號自 一二九  
至 一三三 336

會報

○第二十回小集會記事○第二十一回小集會記事○本會事務所の移轉に就て○會費拂込に對する注意○會務報告○會員の訃報○退會者○交換及寄贈圖書目○本會規則拔萃○投稿規定

以上第一號自 一一一  
至 一二二 111  
122

○第十六會大會記事○第二十二回小集會記事○會員章再貸與○本會規則改訂○會務報告○英文欄中止○會員の訃報○交換及寄贈圖書目○會告○本會規則拔萃○投稿規定

以上第二號自 七二  
至 八二 191  
203

○臨時茶話會○第二十三回小集會記事○會務報告○名譽會員城數馬氏の訃報○本會規則拔萃○投稿規定

以上第三號自 一三四  
至 一三八 337  
341

附錄

○英文欄(三頁)(第一號)  
○山岳第十一年乃至第十六年總目錄(第三號)

# 山岳第十八年總目錄 (大正十二年度)

## 本欄

冬から春への槍ヶ岳	船田 三郎	一	一
霧立越	吉岡 八二郎	一	九
冬の靈仙山	榎谷 徹藏	一	一六
球磨川より緑川へ	竹内 亮	一	三三
北海道に於ける積雪期の登山	加納 一郎	二	一
御坂山塊	沼井 鐵太郎	二	一九
春の燒山と火打山	冠 松次郎	二	二六
陸奥の山水	別所 梅之助	二	四八
九重火山群と祖母山	竹内 亮	三	一
苗場山・雜魚川、大沼池	戸澤 英一	三	三三
レニア山に登る	國府 特一	三	三六
針木岳冬季登山	船田 三郎	三	五八
			245

## 圖版

○燕小屋附近より見たる槍ヶ岳○春の槍澤○春の槍ヶ岳○國見山頂より北東望。樫木村○郡村誌の一部 (以上第一號)

○三月の鉢盛山○三峠山○三峠山より見たる釋迦ヶ岳と黒岳○三峠山より見たる節刀ヶ岳と十二ヶ岳○薬師岳と真川○燒山との鞍部より見たる火打山 (以上第二號)

○星生山頂より久住山を望む。九重硫黄嶺山○祖母山頂附近北西

側のアプローチ。合頭山腹より涌蓋山を望む○苗場山頂上。三國山より見たる苗場山と神樂峰○南方より見たるレニア山頂の雪田とニスクオリイ氷河○立山頂上より後立山山脈を望む○加々森山。信濃國境青崩峠 (以上第三號)

## 刷込圖

○市房山○國見岳○比留賀嶽 (第一號)

○涌蓋山頂より見たる九重火山群のアロバト○尾平路の上部より見たる祖母山頂 (第三號)

## 雜錄

○比留賀嶽○奈良井附近の山○山旅のノートから○可惜「郡村誌」の燒失○城ヶ尾行○澤と谷

以上第一號自 四九 49  
 以上第二號自 七九 79

○觀望臺としての荒船山及其附近○丹澤山の近況と眺望○黒部川瑣談○雁戸山○マロリー氏を悼む

以上第二號自 六五 151  
 以上第三號自 八九 198

○「多摩川相模川の分水山脈」について○朝鮮金剛山の山火事について○遠山附近○遠山奇談に就て○三峠山の岩登りに就て○雨雪の生成を何と見る

以上第三號自 一〇一 261  
 290

雜報

○燒ヶ岳大爆發○羚羊の滋養防止○秩父宮殿下立山御登山○京阪神在住日本山岳會員小集會○八高山岳部夏季計畫○一高旅行部山岳旅行日程

以上第一號自 八〇 八四 86

○南アルプスに小屋建設○各地高山の初雪○千島の大噴火○山岳圖書紹介○會員通信

以上第二號自 九〇 九四 133

○富士登山鐵道○高山植物採取取締○淺間山活動を始む○淺間の大噴煙○第三回エヴェレスト山探檢概略○山岳圖書紹介○會員通信

以上第三號自 一〇一 一〇二 291 299

會報

○第十七回大會記事○第二十四回小集會記事○交換寄贈圖書目○本會規則拔萃○投稿規定

以上第一號自 八五 八九 88

○第二十五回小集會記事○日本山岳會有志晚餐會○特別手數料取扱廢止○本會規則の一部削除○會務報告○會員の死亡○住所不明の會員○英國地學協會及山岳會よりの招待○交換及寄贈書目○本會規則拔萃○投稿規定

○第二十六回小集會記事○退會者○交換及寄贈圖書目○本會規則拔萃○投稿規定

以上第二號自 一〇〇 一〇〇 189

附錄

○山岳第十七年總目錄(第一號)  
○會員名簿(別冊)(第二號)

山岳第十九年總目錄(大正十三年度)

本欄

尾瀨再探記	武田久吉	1	1
尾瀨をめぐるて	館脇操	1	25
尾瀨沼へ	岡山俊雄	1	81
秋の尾瀨	藤島敏男	1	101
朝鮮金剛山	大平晟	1	138
五月の山旅	藤島敏男	1	281
赤石岳の想出	前澤政雄	3	309
五月の赤石岳	鹽川三千勝	3	322
三月の藥師岳へ	田部正太郎	3	334

## 圖 版

○長藏小屋より景鶴山の遠望。上岩兩國界より尾瀬沼東岸の濕原を隔て、燧ヶ岳を仰ぐ○尾瀬沼東岸の濕原に於けるネズコとオホシラビソ。尾瀬東岸森林内の下生○大江川右岸の乾燥したる濕原の周邊と之に接する森林。雹害を受けたるコバイケイサウ○焼山峠途上の笹原に侵入せるタウヒの若木○大江川右岸の乾燥したる濕原○淺湖濕原の一部とその西縁の森林。沼上より見たる淺湖濕原○尾瀬沼北岸の濕原と森林。尾瀬沼北岸の濕原と森林の接觸點に於てシロシヤクナギとアシと混生する状態○追出し附近より見たる沼尻方面。尾瀬沼北岸の小濕原とそれに續く密林○ナデツクボ左岸の森林と濕原の一部。沼野の先驅をなすフトキの群落とそれを圍むクロバナロウゲ○燧ヶ岳中腹より下瞰せる尾瀬沼尻。噴火口を隔て、仰げる燧ヶ岳の二峰粗當○燧ヶ岳西麓を周るブナ林とその周圍のタウヒ。燧ヶ岳西麓を周るブナ林とその周圍のサウシカンバ○會津駒ヶ岳最高點。會津駒ヶ岳山上のチンケルマ○會津駒ヶ岳より燧、笠科、至佛、景鶴山を望む。會津駒ヶ岳より三つ岩を望む。會津駒ヶ岳より見たる中門岳○沼尻川中流と左岸の森林。沼尻川源頭○只見川の上流。只見川平滑の瀧○只見川三丈瀑○尾瀬原の東端より望める至佛山。至佛山中腹より尾瀬原を隔て、燧、大津岐、駒、中門岳を望む○尾瀬原の一部。尾瀬の一部○大堀川右岸のシラカンバとカラマツサウ、ヤチヤナギ○ホムロカハホネ。ホロムイサウ○至佛山頂上よりススケ峯、平ヶ岳、兎岳、中ノ岳等を望む。會津駒ヶ岳頂上の一部○ハロマツとハナゴケ。

至佛山頂の灌木林○ミヤマウスユキサウ。カニツリノガリヤス○黒岩山中のオホシラビソの密林。黒岩山中のヲサバケサ○鬼怒沼濕原のハナゴケ。鬼怒沼の一部○鬼怒沼濕原に於て。鬼怒沼濕原内に小丘をなすオホスキゴケ○湯の湖畔より仰げる笈岩○湯渚下より見たる男體山○尾瀬原より見たる五月の景鶴山（以上第一號）

○内金剛長安寺。内金剛望軍臺附近○内金剛萬瀑洞噴雪潭。外金剛玉流溪の一部○内金剛萬瀑洞眞珠潭。外金剛仰止臺附近○海金剛其一及其二○外金剛九龍瀑。外金剛萬物相三仙巖○外金剛玉流溪連珠潭。外金剛萬物相遠望（以上第二號）

○守門山東頂直下より前守門を望む。淺草岳東腹○守門山東頂○守門山腹より淺草岳及鬼面山を望む。守門山頂の北面○上横田附近の只見川。手前御神樂より絶巖を望む○大聖寺平より見たる西河内岳○赤石山頂より惡澤、農島、間の岳、魚無河内岳、鹽見岳及仙丈岳を望む○赤石山頂より聖岳及上河内岳を望む○上の岳頂下より藥師岳の一部と赤牛岳を望む。上の岳頂下より見たる黒岳○タウヤクリンダウ。センブリ（以上第三號）

## 地 圖

○金剛山略圖（第二號）

## 雜 錄

○尾瀬に關する傳説○尾瀬の怪談其他○高山植物雜記○尾瀬雜談○尾瀬沼の四季

○神懸山○朝鮮金剛山の施設に就て

以上第一號自一三四 114  
至一三〇 130

以上第二號自一二一 268  
至一三四 271

○地名の變遷○山旅のノートから○高山植物雜誌○琵琶池と大沼池○山岳漫言

以上第三號自六六 346  
至九三 373

雜報

○奥穂高に避難小屋○蝶ヶ岳から槍ヶ岳へ道路開鑿○淺間山の植物研究○化石湖發見○灰まじりの雪○灰色の雪の染色體○會員通信

以上第一號自一三一 131  
至一三四 134

○アルプス登山道路○秩父宮三峰御登山○ローガン山征服○會員通信

以上第二號自一三五 272  
至一三八 275

○燒岳の噴火○金峰の雪で遭難○日本アルプス新登山道○會員通信

以上第三號自九四 374  
至一二一 382

會報

○第二十七回小集會記事○會務報告○退會者○本會規則拔萃○投稿規定

以上第一號自一三五 135  
至一三八 138

○第十八回大會記事○第二十八回小集會記事○楨幹事のロッキン登山○會務報告○交換及寄贈圖書目○本會規則拔萃

以上第二號自一三九 276  
至一四三 280

○第二十九回小集會記事○第三十回小集會記事○幹事改選○會費滯納に就て○臨時大會記事○會務報告○梅澤親光君の訃○會員の訃○退會者○交換及寄贈圖書目○本會規則拔萃○投稿規定

以上第三號自一四三 383  
至一四四 391

山岳第二十年總目錄 (大正十四年度)

本欄

多摩秩父行	田島勝太郎	一	一
川乗山と其附近	神谷 恭	一	49
仙元峠附近	武田 久吉	一	61
多摩郡の山川	(群村認抄録)	一	75
霧島山	大平 成	一	222
九重山麓の黒岳	竹内 亮	一	251
日川溪谷の濫伐と保護運動	武田 久吉	二	259

山

岳

飯豐山	沼井鐵太郎	三	一	332
大井澤川を廻り出谷川を経て東岳朝日岳に至る記	中田伸直 板岡奈志保 河田篤	三	三	309
船形山	佐々保雄	三	五	397
飯豊山に登る	武田久吉	三	七	403
冬の朝日岳	沼井鐵太郎	三	九	424

圖版

○甲武信岳より八ヶ岳及小川山を望む。甲武信岳より見たる三寶山○三寶山の森林。甲武信岳の森林○金峰山より見たるミツガキ山○千丈頭より金峯山及朝日岳を望む○千丈頭より見たる甲武信岳及三寶山○飛龍山より白岩山及雲取山を望む○タラヒゴヤ附近より川乘山及舟井戸山を望む。タラヒゴヤより舟井戸、大田和、高指山及御前山を望む○スダレ東北面の樹林。天目峯より望める西谷山とスダレ○仙元峠より三ツドツケ及雲取山方面。仙元峠頂上と蕎麥粒山の西南面○蕎麥粒山絶頂より仙元峠頂上、瀧谷山方面。日向澤頭より蕎麥粒山、瀧谷山、芋木ノドツケ方面を望む○冠岩附近より三ツドツケ、スダレ、大平山の北面を望む。冠岩附近より蕎麥粒山と仙元峠の北面を望む○蕎麥粒山絶頂。日向澤頭より長尾ノ丸、樺ノ折山、高水山等を望む○惣岳山北背の木立。横巻尾根北端より仙元峠頂上と蕎麥粒山を望む○日向澤峯より南に川苔山を望む。横巻尾根北端より川苔山を望む○足毛谷の岩峯。桂谷の落ち口○廣河原谷の平。棚澤附近より仰げる高指山及焼多亡山○樺ノ折。澤井惣岳山頂より石茸石山、黒山及樺ノ折レ山を

望む○吊し橋より下流を見る。大丹波川吊し橋の淵○側面より見たる獅子口巖。獅子口巖の正面○笠山の肩より見たる白石峠、川木澤の頭及丸山。劔ノ峰より川木澤ノ頭、大野峠及丸山を望む○劔ノ峯より堂平山及笠山を望む。大野峠ノ頭より高篠峠、川木澤ノ頭及堂平山を望む○シラビソ。オホシラビソ○シラビソの枝。オホシラビソの枝○オホシラビソの懸果。オホシラビソの獨立樹○西御荷鉾山頂の不動尊石像。道祖神峠より西に東西御荷鉾山を望む○南より見たる乾徳山。裏より見たる乾徳山○淺間峠頂上。乾徳山頂上○天狗山より望める小倉山。木賊峠より瑞麟山を望む(以上第一號)

○レンゲイハヤナギ○ネモトシヤクナギ○シラタマノキとゴセンタチバナ○シラネアフリ(以上第二號)

○越後口飯豊川の不動瀑。會津口御澤附近に於ける大白布川○御手洗池より北西を望む。御四岳北側の大雪山○大日岳より見たる御四岳と池の平。大日岳より西南に三角點の峯を望む○飯豊山神社より西を望む○鋸目尾根の一八一一米の峯附近より御四岳を望む。同上より西に地紙山、石コロミ澤ノ頭及烏帽子岳を望む○烏帽子岳東側より西北を望む。玉川溪谷の長者原部落○大井澤川南俣落合より障子ヶ岳を望む。イツラより望める以東岳○大烏池。寒江山の南面○相模山附近。大朝日岳山腹より北を望む○小朝日岳より大朝日岳を望む。小朝日岳より西朝日岳西望○チングルマの大群落。果實を着けたチングルマ○イハイテウ等に混生せるハクサンイチゲ等。ヨツバシホガマとミヤマキンボウゲ○ウサギギクとミヤマリンダウ。ミヤマウスユキサウ○中ツルより見たる鳥谷

原山。朝日侯と黒俣澤との合流點 (以上第三號)

地圖

○臺灣橫斷水準測量要圖 (第二號)

刷込圖

○桶岩より西北を望む (第一號)

○九重火山麓の黒岳○七ツ森略圖○仙臺市愛宕山より見たる七ツ森火山群見取圖 (以上第二號)

雜錄

○多摩川水源山脈に就きて○小倉山○秩父笠山より丸山へ○高山植物雜記○琴川を遡りて奥千丈岳へ○兩神、父不見、西御荷鉢○乾徳山から黒金山へ○瑞牆山○川上の天狗山

以上第一號 自一五九 159  
至二一〇 210

○紅葉の金城山と清津峽○牛奥山の脈ノ腹摺に就て○籠川谷大澤小舎を中心として○山旅のノートから○登山の効果とその活用○七ツ森○高山植物雜記○臺灣花蓮港埔里間の水準測量に就て

以上第二號 自四六 46  
至九八 98

○飯豊山の開基と變遷○船形山行のノートより○三面より化穴山大鳥池方面へ○シラブと霧氷○日影大平ての事○三面の事ども

以上第三號 自一三二 132  
至一七五 175

雜報

○マウナ、ロアの大噴火○大菩薩連山の伐木○會員通信

以上第一號 自二一一 211  
至二一四 214

○十勝岳硫黃山の大爆發○十勝岳爆發○十勝岳の爆發被害○會員通信

以上第二號 自九九 99  
至一〇七 107

○宮様の御登山○阿蘇山及椽前山噴煙○山にての遭難者○山岳圖書紹介○會員通信

以上第三號 自一七六 176  
至一八一 181

會報

○第三十一回小集會記事○本會大會の期日變更に就て○有志晚餐會○會務報告○會員の計報○退會者○交換及寄贈書目○本會規則拔萃○投稿規定

以上第一號 自二一五 215  
至二二一 221

○第三十二回小集會記事○會務報告○交換及寄贈圖書目○本會規則拔萃

以上第二號 自一〇八 108  
至一一〇 110

○第三十三回小集會記事○退會者○會員の計報○吉野玉雄氏の遭難○會務報告○交換及寄贈圖書目

以上第三號 自一八二 182  
至一八五 185

附錄

○多摩郡の山川項目索引 (第一號)  
○山岳第十八年總目錄 (第二號)  
○會員名簿 (別冊) (第三號)





The Journal of the Japanese Alpine Club

# SANGAKU

Vol. XXIII

1929

No. 2